

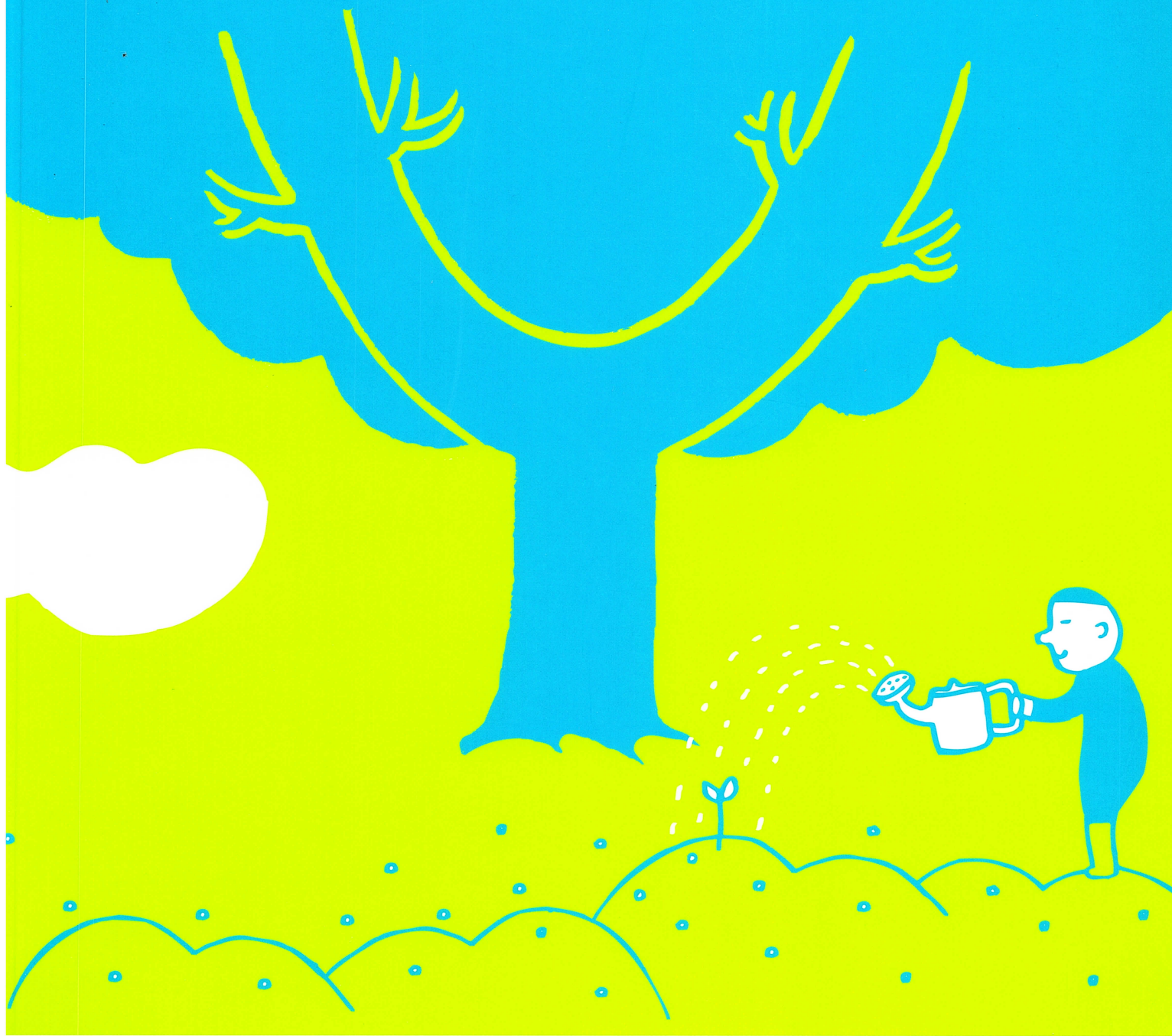
# ワイズ読本

みんなて育てていく。

少しずつ、少しずつ…。

続けていくことが

大きな実りとなるんだ。



*“To acknowledge the duty accompanies every right”*

「強い義務感を持とう 義務はすべての権利に伴う」

ワイズメンズクラブ国際協会東日本区・西日本区





フ  
イ  
ズ  
読  
本

# 目 次

発刊に寄せて .....	東日本区理事 清水 弘 一 .....	7	
	西日本区理事 佐藤 典子 .....	8	
	日本YMCA同盟総主事 山田 公平 .....	9	
1	ワイズ国際の現況 .....	青木 一 芳 .....	11
2	ある地方都市におけるワイズ活動 .....	池谷 淳 .....	12
3	私にとってYMCAとは.....	井之上 温 代 .....	14
4	世代を超えて伝えたいこと .....	今井 鎮 雄 .....	16
5	ワイズメンズクラブが生き続けるために .....	岡本 尚 男 .....	19
6	高齢社会におけるワイズメンズクラブのEMC .....	小山 正 直 .....	25
7	今の課題 ワイズとメネット .....	金原 道 子 .....	26
8	奉仕クラブの基本的問題について .....	小堀 憲 助 .....	27
9	新しく生まれ変わろうー変化への挑戦ー .....	澤田 賢 司 .....	33
10	ワイズの真髄をたずねてー語りつづける入会式辞ー .....	鈴木 功 男 .....	35
11	ワイズの本質とは .....	鈴木 誠 也 .....	50
12	ワイズメンはYMCAの一株株主 .....	仙洞田 安 宏 .....	51
13	ワイズとは何か。どこに向かうのか。 .....	竹内 敏 朗 .....	53
14	アウトサイダー .....	全 大 連 .....	54
15	ワイズとクリスチャニティー .....	長井 潤 .....	58
16	もっと外へ！ もっと光を！ .....	中田 靖 泰 .....	60
17	ワイズメンズクラブとワイズメンに求められるもの ー奈良傳が伝えたかったことと私の願いー .....	奈良 信 .....	62
18	今の課題 ワイズとユース .....	西村 隆 夫 .....	72
19	YMCA・ワイズファミリーの一員としてのユース .....	橋崎 頼 子 .....	74
20	ワイズとメネット .....	藤井 祥 子 .....	76
21	ウエルネス概論 .....	堀内 浩 二 .....	77
22	ワイズメンズクラブの特質 ー仏教と他の奉仕クラブとの対比においてー .....	森田 恵 三 .....	80
23	体験的「YMCAとワイズの協働」論 .....	守田 富 男 .....	85
24	両親がワイズメンであったことが、自分の人生にどのような影響を与えたか .....	山口 貴 也 .....	88
25	ワイズのユース事業を考える .....	吉田 明 弘 .....	90
26	アジア・世界のYMCAの組織と日本のYMCA .....	日本YMCA同盟 .....	94
27	日本のYMCAと、そのチャレンジ .....	日本YMCA同盟 .....	97
28	歴代日本区理事座談会から .....		99
29	100人に聞いたワイズ入会の動機 .....		104
	「ワイズ必携」2001年版 総目次 .....		110
	編集後記 .....		112
	表紙の言葉 .....		114

# テーマ別目次 (□内の数字は本文の表示)

## 【ワイズメンズクラブ全般】

- 5 ワイズメンズクラブが生き続けるために  
岡本尚男…19
- 8 奉仕クラブの基本的問題について  
小堀憲助…27
- 10 ワイズの真髓をたずねてー語りつづける入会式辞ー  
鈴木功男…35
- 11 ワイズの本質とは  
鈴木誠也…50
- 13 ワイズとは何か。どこに向かうのか。  
竹内敏朗…53
- 14 アウトサイダー  
全大連…54
- 17 ワイズメンズクラブとワイズメンに求められるもの  
ー奈良傳が伝えたかったことと私の願いー  
奈良信…62
- 22 ワイズメンズクラブの特質  
ー仏教と他の奉仕クラブとの対比においてー  
森田恵三…80

## 【クラブライフ】

- 5 ワイズメンズクラブが生き続けるために  
岡本尚男…19
- 8 奉仕クラブの基本的問題について  
小堀憲助…27
- 9 新しく生まれ変わろうー変化への挑戦ー  
澤田賢司…33
- 16 もっと外へ！ もっと光を！  
中田靖泰…60

## 【例会】

- 5 ワイズメンズクラブが生き続けるために  
岡本尚男…19
- 9 新しく生まれ変わろうー変化への挑戦ー  
澤田賢司…33
- 11 ワイズの本質とは  
鈴木誠也…50
- 13 ワイズとは何か。どこに向かうのか。  
竹内敏朗…53

## 【奉仕】

- 3 私にとってYMCAとは……  
井之上温代…14
- 8 奉仕クラブの基本的問題について  
小堀憲助…27
- 11 ワイズの本質とは  
鈴木誠也…50
- 14 アウトサイダー  
全大連…54
- 22 ワイズメンズクラブの特質  
ー仏教と他の奉仕クラブとの対比においてー  
森田恵三…80

## 【EMC】

- 3 私にとってYMCAとは……  
井之上温代…14
- 5 ワイズメンズクラブが生き続けるために  
岡本尚男…19
- 6 高齢社会におけるワイズメンズクラブのEMC  
小山正直…25
- 9 新しく生まれ変わろうー変化への挑戦ー  
澤田賢司…33
- 23 体験的「YMCAとワイズの協働」論  
守田富男…85
- 24 両親がワイズメンであったことが、自分の人生に  
どのような影響を与えたか  
山口貴也…88

## 【YMCA】

- 2 ある地方都市におけるワイズ活動  
池谷淳…12
- 3 私にとってYMCAとは……  
井之上温代…14
- 4 世代を超えて伝えたいこと  
今井鎮雄…16
- 5 ワイズメンズクラブが生き続けるために  
岡本尚男…19
- 9 新しく生まれ変わろうー変化への挑戦ー  
澤田賢司…33
- 10 ワイズの真髓をたずねてー語りつづける入会式辞ー  
鈴木功男…35
- 12 ワイズメンはYMCAの一株株主  
仙洞田安宏…51

- 17 ワイズメンズクラブとワイズメンに求められるもの  
— 奈良傳が伝えたかったことと私の願い —  
奈良 信…62
- 18 今の課題 ワイズとユース 西村 隆夫…72
- 22 ワイズメンズクラブの特質  
— 仏教と他の奉仕クラブとの対比において —  
森田 恵三…80
- 23 体験的「YMCAとワイズの協働」論  
守田 富男…85
- 24 両親がワイズメンであったことが、自分の人生に  
どのような影響を与えたか 山口 貴也…88
- 25 ワイズのユース事業を考える 吉田 明弘…90
- 26 アジア・世界のYMCAの組織と日本のYMCA  
日本YMCA同盟…94
- 27 日本のYMCAと、そのチャレンジ  
日本YMCA同盟…97

### 【クリスチャニティー】

- 5 ワイズメンズクラブが生き続けるために  
岡本 尚男…19
- 10 ワイズの真髄をたずねて — 語りつづける入会式辞 —  
鈴木 功男…35
- 14 アウトサイダー 全 大連…54
- 15 ワイズとクリスチャニティー 長井 潤…58
- 17 ワイズメンズクラブとワイズメンに求められるもの  
— 奈良傳が伝えたかったことと私の願い —  
奈良 信…62
- 22 ワイズメンズクラブの特質  
— 仏教と他の奉仕クラブとの対比において —  
森田 恵三…80
- 26 アジア・世界のYMCAの組織と日本のYMCA  
日本YMCA同盟…94
- 27 日本のYMCAと、そのチャレンジ  
日本YMCA同盟…97

### 【高齢化】

- 2 ある地方都市におけるワイズ活動  
池谷 淳…12
- 5 ワイズメンズクラブが生き続けるために  
岡本 尚男…19
- 6 高齢社会におけるワイズメンズクラブのEMC  
小山 正直…25
- 21 ウエルネス概論 堀内 浩二…77

### 【ウエルネス】

- 5 ワイズメンズクラブが生き続けるために  
岡本 尚男…19
- 21 ウエルネス概論 堀内 浩二…77

### 【メネット】

- 5 ワイズメンズクラブが生き続けるために  
岡本 尚男…19
- 7 今の課題 ワイズとメネット 金原 道子…26
- 20 ワイズとメネット 藤井 祥子…76
- 22 ワイズメンズクラブの特質  
— 仏教と他の奉仕クラブとの対比において —  
森田 恵三…80

### 【ユース】

- 3 私にとってYMCAとは…… 井之上 温代…14
- 5 ワイズメンズクラブが生き続けるために  
岡本 尚男…19
- 18 今の課題 ワイズとユース 西村 隆夫…72
- 19 YMCA・ワイズファミリーの一員としてのユース  
橋崎 頼子…74
- 23 体験的「YMCAとワイズの協働」論  
守田 富男…85
- 24 両親がワイズメンであったことが、自分の人生に  
どのような影響を与えたか 山口 貴也…88
- 25 ワイズのユース事業を考える 吉田 明弘…90

### 【世界のワイズ】

- 1 ワイズ国際の現況 青木 一芳…11
- 13 ワイズとは何か。どこに向かうのか。  
竹内 敏朗…53
- 17 ワイズメンズクラブとワイズメンに求められるもの  
— 奈良傳が伝えたかったことと私の願い —  
奈良 信…62
- 18 今の課題 ワイズとユース 西村 隆夫…72

## 発刊に寄せて

東日本区理事 清水 弘 一

『ワイズ必携』が『ワイズ読本』と名を改め、内容もスタイルも大幅に変わりました。2001年12月、西日本区ワイズアカデミー委員会が主管となり『ワイズ必携』が発刊されてから7年、私達は、ワイズとは何か、YMCAとは何か、などと疑問に感じ思い悩んだとき、リーダートレーニングの教材として、ときには自らの研鑽のツールのひとつとして親しみ、利用してきました。

両区に分かれて10年が経過した2年前、西日本区より改訂版を作制したいので共同でお誘いを受け、喜んで東西両区合同の編集委員会を立ち上げ進めてきました。さまざまなワイズに関する文献やマニュアルなどがあるなかで、それぞれが異なる人生経験や立場を超えて、ワイズメンという同じ目線でワイズやYMCAの歴史を振り返り未来を語ることは本当にすばらしいことであり、そこにはワイズの誇りと希望が満ち溢れています。この読本の発刊に際し、お忙しい中を執筆いただいた皆さま、貴重な資料を提供してくださいました皆さま、そして編集に携わっていただきました東西両区、YMCAの編集委員の皆さまに、心からの御礼を申し上げます。

折しも本年度、日本に初めてのワイズメンズクラブが設立されて80年を迎えました。

2010年横浜国際大会のホストや2008年12月より施行される、YMCAの公益法人制度改革を契機として、両区は大きなプロジェクトを鋭意推進中であり更なる発展を目指しています。

東・西日本区に分割された1997年に「日本ワイズメン運動70年史」が創刊されましたが、元日本区名誉理事・鈴木謙介氏は序のなかでこう述べています。「今年、日本ワイズは二つのRegionを発足させた。東西に分かれるが、その心は一つである。このむつかしい時期に求められるのは、革新と躍進である。関係する人々の火の玉の如き熱情はさめることを知らない。……」改めて先輩の言葉を噛みしめ引継ぎ、そして新たな目標に向かって果敢に挑戦してまいりましょう。

継続は力と申します。この読本が読みたい、読みたくなる冊子としてすべてのワイズメン、メネット、ユースの皆さん、YMCAの皆さんに親しまれ、そしてみんなに育てられ実を結ぶこと、今後のワイズ運動の発展に繋がることを願って止みません。

## 発刊に寄せて

西日本区理事 佐藤典子

『ワイズ必携』の発刊から7年が経過いたしました。私はワイズのみならず何かに行き詰った折々に、『ワイズ必携』を開いてまいりました。諸先輩が築いてこられたワイズの歴史の中で、その皆様の経験が生かされた素晴らしい本だと思います。今年度、理事として各クラブの現況を把握していく中で、奉仕クラブのあり方、例会の持ち方、メンバー相互の思いやりなど多くの疑問に遭遇いたしました。そして、ワイズメンズクラブはどうあるべきかが問われる今、新たに『ワイズ読本』が発刊されました。

社会奉仕クラブであるワイズメンズクラブで最も大切なことは、親睦を源とする活発な奉仕活動からリーダーシップを生み出す自己研鑽ではないでしょうか。小堀憲助氏は、ワイズメンズクラブに集うメンバーは社会における地位も立場も離れて総て平等であると、また倫理性の裏打ちのある人の和は自由競争の世界においても最も強く勝利するともおっしゃっています。私の理事主題、「思いやりを持ってワイズライフを！一わかし合いは微笑みをもってー」も、平等な人の和として優しさのあふれたクラブを思い描いて決めさせていただきました。私達にとりまして「希望の灯」となる言葉がたくさん詰まっている『ワイズ読本』ではないでしょうか。

ワイズメンズクラブの綱領と目的に「イエス・キリストの教えに基づき」とあります。このことが、再三にわたって理解しづらいと言われていています。私は熊本YMCAの野外リーダーとして活動していた経験から、人間愛としてのイエス・キリストの教えを学ぶことができました。そして、ワイズに入会したとき、宗教とは別のものとしてクリスチャンティーを理解することができました。それは人類愛を実際の行動に移すよう心掛けることを意味しているのかもしれませんが。

ワイズの草創期に中心的な役割を果たしたポール・ウィリアム・アレキサンダーは、ワイズの理念を明確に残しています。今回の読本でもそれに触れることができます。ぜひ、ワイズメンズクラブを設立した思いをお読み下さい。

1997年7月1日、日本区は東日本区と西日本区に分割されました。その後、一時期会員が増えましたが、ここ数年会員の減少が続いております。なぜ一度入会したメンバーがワイズを去って行ったのでしょうか。また、YMCAとワイズメンズクラブとの協働は？といったさまざまな疑問を解決してくれるのが『ワイズ読本』だと思います。

この度は内容をさらに充実させ、ほとんどが新しくなっております。奉仕クラブのあり方、楽しい例会には多くの人が集まる、楽しい例会とは何か、メンバーと接するときの思いやりと心遣いなど壁にぶつかったときにはこの本を開いてみましょう。そして、それはワイズにとどまらず私達が社会人としてどのように生きていくのか、何かの答えが見つかる手助けになると信じています。

この発刊にあたり執筆いただいた皆様、冊子の編集にご尽力いただきました皆様にお礼申し上げます。皆様がお手元に置かれご活用いただくことが、何よりの感謝だと思います。

## 発刊に寄せて

日本YMCA同盟総主事 山田公平

『ワイズ読本』の編集、執筆に携わった方々に心よりお礼を申し上げます。本当にご苦勞様でした。これらの執筆をされた人達が、ワイズに加わり、その喜びや友を得たことについて様々な体験や立場から伝えようとしていることが感じられます。この中には、参加すること、一人ひとりが主役になること、他のワイズメンと交わること、部や区の大会に参加して分かること、そしてYMCAを支えることへの意味などが書かれています。一人ひとりの思いや喜びがワイズの次なる展開をもたらしてきたというワイズの歴史を感じることができました。

YMCAのスタッフとしてこれを読んだ時、YMCAを支えようとしている人達がこれほどいるということに大変励まされます。YMCAのスタッフとして、連絡主事・担当主事をしているとき、単にYMCAの行事・イベントを伝えていただけではなかったかと反省させられました。もっともっとYMCAの日常の働きとその成果を伝えるようにしないといけないと思いました。YMCAのスタッフは、YMCAとワイズのパイプ役という意識でしたが、ワイズの一メンバーとして、そのワイズの運営のあり方にも、もっとリーダーシップを担っていくことが大切であると思いました。

ワイズに入る人達のきっかけは様々ですが、元YMCAのリーダー、元メンバーやその親……というようにYMCAとのかかわりやその体験の楽しさから誘われて入ってくる人も多くいます。私達YMCAのスタッフがYMCAの働きをとおしてワイズ増強にも寄与しなければという思いを強めました。

人の成長を目指して行動する、それがYMCAとワイズの共通した願いであります。そんなことを感じさせてくれたこの読本は、ワイズやYMCAを理解する上で役立ちます。執筆してくださった方々、編集された方々、そしてこれを生み出す推進役の方々、ありがとうございました。



国際協会の組織は、刻々と変わっている。  
現時点におけるワイズ国際の状況と方向性のレポート。

# 1 ワイズ国際の現況

千葉クラブ 青木 一 芳

ワイズメンズクラブは世界の72ヵ国に存在し、総数は1,604クラブ、総会員数は30,300人です(2008年6月末現在)。全クラブが平等な立場で加盟して国際協会を形作っています。その平等性はたとえば毎冬の次期国際会長の選挙に際し、どのクラブも1票を投じる権利があることに表されています(ただし会員数が15人に満たないクラブは「5人以上でちゃんと活動しているので投票に参加したい」と区理事を通じ国際協会に申し出て、承認されなくてははいけません)。

世界のワイズ運動を企画立案する国際議会は、毎年7月か8月に開かれます。その議員は21人で、大陸別のエリア(地域)と呼ばれる8つの選挙区に、エリア内の会員数を基にして議員定数が割り振られています。現行のエリアは次のとおり。

エ リ ア	国数	クラブ数	会員数	議員数
アフリカ	15	58	493	1
ア ジ ア	14	480	10,162	7
カ ナ ダ	1	25	431	1
欧 州	21	313	6,654	4
イ ン ド	4	542	9,730	5
中 南 米	14	46	591	1
南太平洋	2	17	313	1
米 国	1	123	1,926	1

会員数と議員数は比例していません。それは、どのエリアにも最低1議席を与え、残りをドント方式で配分するからです。その人数割りも、過去2年間の統計を基にするので、最近会員が急増したインドエリアはまだ定数が見直しの途上です。なおインドエリアにはインドのほかバーレーン・クウェート・アラブ首長国連邦が含まれます。中南米は正式にはラテンアメリカ・カリブ海エリアと称し

ますが、近くカリブ海の国々は(英語圏なので)カナダエリアに移る運びです。南太平洋は豪州・ソロモン諸島の2国です。しにせのニュージーランドからはクラブが消滅してしまいました。YMCAのほうではこの2国はすでにアジアに合流して「アジア・太平洋同盟」に属しています。劣勢といえばワイズの始祖である米国でも会員数の減少が著しく、1議席エリアになってしまいました。

最近の15年余で着実にクラブ拡張を果たしているのは欧州です。冷戦後の1990年代、ノルウェーのワイズメンが北極海沿いに地続きのロシアに入り、北から南へ東へとクラブを作っていました。同様の働きかけがスウェーデンからポーランドへ、デンマークからチェコ等へ、フィンランドからエストニアへ、と昔のバイキングさながらに拡張レースが展開されました。勢いは今も続いています。地理上はウラル山脈が欧州とアジアの境ですが、ロシアのワイズは山脈を越えて東進し、ついにノルウェー区から独立して2003年にロシア区が誕生しました(所属は欧州エリア)。

アジアエリア内では、韓国の5つの区の会員数合計が5,850人、次いで日本が東西両区で2,800人、と日韓両国がエリア全体の会員数の85%を占めます(数字は2007年度末概数)。残りがいずれも会員が数百人の台湾区、南東アジア区(香港・シンガポール・マレーシア・タイ他)、フィリピン区、スリランカ区です。これらの区はいわば少数精鋭で、会員の中には社会の指導的階層の人も多いので、少数の割にはワイズの名は市民の間によく知られています。

3大エリアのもう一つ、インドは今まで度々会員が急増したり急減したりして、国際ワイズの中では特異な存在でした。しかしこの国が国際社会の場で存在感を着実に増している状況を見ると、ワイズの勢いも

これからは安定していくだろうと予想されます。

最近の動きとして2つのことが挙げられます。一つは国際議会レベルの話です。「弱小」エリア選出の議員から、エリア間の議席配分法を変えるなり、議員総数を減らすなりして「強大」エリアの影響力を薄めようとの提議がありました。これは論議の末、現状を維持することで決着しました。しかし、数の力で物事を押すのはワイズの精神にもとることですから、大エリアは常に広い目を持ち、国際全体の調和と発展を図らねばなりません。なお、上述のように、インドエリアが中東に進出、欧州エリアがシベリアに拡張、と従来のエリア境界は見直しを迫られています。

もう一つはアジア内のエリア再編の議論です。その震源は韓国内のワイズの拡張パワーにあります。韓国一国でエリアになる規模があるのだから、かつてインドがアジアエリアから独立したように韓国エリアを立ち上げようという主張です。これ

に対し、今はまだ政治情勢から国際協会に加盟できない中国本土のワイズメンを想定して、韓・中・タイなどの大陸アジアエリアと、日・台湾・比・シンガポール・スリランカなどの大洋アジアエリアとを創るのはどうかという案が出されています。大洋には豪州なども視野に入ります。いずれ国際議会で研究・審議し、決着することになりましょう。

## プロフィール

青木 一芳 (あおき かずよし)

1972年 千葉クラブチャーターメンバーとして入会

1976年 日本区世界展望事業主任

1985年 第31代日本区理事

1987年 国際議員

1988年 アジア地域会長

1994年 国際会長

1996年 国際エンダウメントファンド管財委員(10年間)

国際機関誌ワイズメンズワールド編集委員と日本語版編集長を山川一郎(姫路グローバル)と交互に務めている。

国際社会も地域社会においても混迷の度は深い。  
人と人の繋がりも薄れた。だからこそ、ワイズメンが……。

## 2 ある地方都市におけるワイズ活動

下田クラブ 池谷 淳

### ワイズを地域に知らしめるための提案

私達東日本区富士山部の11のクラブではYMCAの施設(建物)を持つクラブは、熱海、沼津、伊東、御殿場の4クラブしかなく、メンバーの大多数は青少年時代YMCAによる活動に参加した経験を持ちません。先進クラブの熱海、伊東クラブなどのEMC活動はキリスト教やYMCAによるかわりもなく、次代を担う青少年の育成と地域社会に対する貢献をテーマにして進められてきました。その指導理念は隣人愛と人道主義を基本に、育成していく組織としてワイズメンズクラブが結成され

てきました。

伊豆地方では、青年会議所で出会った仲間達は40歳で卒業すると、ロータリークラブか、ライオンズクラブに加入するのが通常のパターンでした。その中にワイズメンズクラブへの道を開いていったのが1970年代でした。

そのためワイズメンズクラブの社会的な認知度を高めるための活動には大変に苦労しました。地域にキリスト教会もYMCAも無い地方都市では難行の活動でした。富士山部には地域社会に認知をしてもらうための、クラブの地域特性を生かしたユニークな活動が多々ありました。

障がい児支援の活動も単なる施設訪問や寄付行為の資金援助だけではなく、障がい児と一緒に作業を進める協働の作業、海浜清掃、公園整備の植樹、観光イベントに使う花の風車づくりといった事業を推進してきました。彼らと協働で行なうことで、彼らの人格を尊重し、信頼の輪を広げ、街で顔を合わせると互いに、声を掛け合える、挨拶まで出来る子ども達に育ちました。隣人愛が真実であれば心が開くことを彼らから教えられました。

コミュニティサービスとしての活動は市民全体を参加させる方向から、三島クラブの名所めぐりウォーキングや伊東クラブや熱海クラブの小学生のドッジボール大会、富士クラブの全国高校女子サッカー大会、下田クラブの日米国際筏のり競争など、部をあげての数多い企画イベントが展開されてきました。

## 崩壊した地域のつなぎ手として

若いメンバーが活躍していた1980年代からの、富士山部のワイズメンズクラブの行動は特殊性に富んだユニークな活動で、その役割は市民に十分理解されてきたものと信じております。

バブル崩壊以後、低迷する観光業の煽りを受け、元気を喪失した地域経済の中からの新たなメンバー拡大は必死の事業となりました。

21世紀に入り急激に現れた少子高齢化の現象は地方都市によっては深刻な限界集落を抱えての新たな社会現象が発生してきました。

65歳以上の高齢者が50%を越す集落では地域のコミュニティを保持することは難しくなりました。移住できない高齢者は姥捨て山のような悲惨な生活を強いられていくのが目先に現れてきました。若者が働く場所の無い地方都市にはこの構造が顕著になってきました。

老壮青のバランスのよい調和が地域社会を構成することは理解していますが、物理的にバランスが崩れた社会ではその修復、保全に苦しみます。

現今の悲しい親子関係、家庭内暴力、兄弟間の反目・軋轢、金銭至上主義の阿修羅と化した下克上の世の中で、救えるものは心の安寧であります。それは人間に対する信頼と隣人愛、人間愛以外にはありません。

今なお白川郷に残っているとされる「結い」

という部落を守る掟があります。その掟とは白川で生きる人達が大自然の猛威の中で生き残るための知恵として大家族制度を作り、その巨大棲家を作る約束事が援助を受けた家ごとに保存されています。記録されてきた約束事は人足の数から、寄付された品物、屋根葺束の数から縄の量まで克明に書かれた台帳が基本となり、40年、50年毎に村人相互に屋根替えをするときの指針となっています。大作業だけでなく、冠婚葬祭の行事も村人全員で行ってきたことが記録されているようです。

地域を守る相互扶助の精神も20世紀の半ばにほとんどが喪失してしまいました。私達の過ごした20世紀は人類にとって如何なる意味があったのか疑問が残る世紀でありました。利便性と効率性を追求するために人類が求めた手段は、大量殺戮による民族支配と自然環境を人間本位に破壊した世紀ではなかったのかと思います。

子ども達には貧しさを教えない見せ掛けの豊かさ、苦労の汗を感じさせない利便性、人間を機械と組織の奴隷と化させた効率至上主義、その見せ掛けの文化生活の中で人類が失った心の安寧は計り知れません。

16世紀から20世紀半ばまでは自然と調和し、共生しながら、自然の輪廻に生かされる一筋の論理がありました。神から先達に、先達から長に、長から司に、司から民へ自然の輪廻が示す倫理の真髓を受け渡してきました。この心のバトンが見えなくなった21世紀に生きるワイズメンに課せられた課題は重大だと思えます。

金銭消費経済で塗り替えられた相互扶助による隣人愛をもう一度、私達のCS事業の中で見直していかなければならないと思えます。人間には一旦緩急あれば全員でことに当たる性があります。そのときの判断には心頭滅却する勇気もあります。人間の持つ性善説を信じ、隣人愛の精神で人間主義の原点を守り、地域再生のボランティアとして出来ることを着実に消化していくことが肝要だと思えます。数少ない選ばれたYMCAをワイズのもつ英知と経験で導き協働の作業を重ねることで、失われつつある地域社会のモラルと良き伝統を保持していく活動を持続することを願っております。

## 環境問題に取り組むワイズへの期待

超少子高齢化時代といわれる21世紀の日本は、

介護士や看護師を東南アジアからの人達で補おうとしております。宗教も国民性も異なるこの人達を英国のように囲い込むか、フランスのように国民に同化させるのか、出稼ぎ移民の課題も新たな社会不安に石を投ずることになります。安定は衰退を生むとはいえ走りながら激変する社会の構造変化に対応できる、超少子高齢化時代のYMCAとワイズの役割を時代の変化の中で認識し、日本の地域社会に貢献していかなければなりません。厳しい道ではありますが、生きることによって約束された試練と思い、先人の積み上げた良き伝統を持続できる協働の道標を見つけたいものです。

深刻な地球温暖化のための施策が、京都議定書で語られて久しいが、いまだ温室効果ガス大排出国アメリカ、ロシアの規制もままならず、低開発

国という名の下に安住している中国、インドの排出量を見るに、ワイズメンズクラブの国際事業で荒地への植林事業を採択し国際的な共通の事業として行動できる日を願っております。

「ストップ・ザ・エイズ」と同じ視点で採択しても21世紀の課題として論じられると思います。ぜひ私達の願い、心に緑を地球に緑を埋め尽くしたいものです。

### プロフィール

池谷 淳 (いけたに きよし)

1980年 下田クラブチャーターメンバーとして入会  
2001年 富士山部部長

ときにはワイズと自分、YMCAと自分のかかわりを振り返っては？  
そこに感謝と展望が生まれる。

## 3 私にとってYMCAとは……

滋賀蒲生野クラブ 井之上 温 代

### YMCAが好き！

そこは「風の谷キャンプ場」……。

元気で途切れることがない楽しそうな歓声、池ではカヌーに興ずる子ども、木立の中を探検する子ども達、みんなの笑顔が平和で素晴らしい。世界中の「子ども達の笑顔」はいつの時代も変わらない。世界のどんなにひどい状況の中でも子ども達の瞳は夢を持って輝いている。彼らを見ると親として一人の大人として、大きな責任を感じないわけにはいられない。ワイズメンとしてYMCAとかかわるようになって特にその思いは強くなってきた。

滋賀YMCAの長い歴史は、近江兄弟社を抜きにしては語れず、知れば知るほど興味の湧くもので

ある。私は子どもの時から「近江兄弟社=YMCA」という感覚でいた。自分自身も「英会話教室」で学び、その友はワイズメンにもなってくれたし、私の子ども達も諸キャンプでお世話になった。リーダー達の優しい頼もしい姿が思い出される。

YMCAというところのように「野外キャンプ」が直ぐ浮かぶ。滋賀YMCAでは、ワイズメンズクラブとの協働がうまくいっている。びわこ部内7クラブの協働事業である。クラブそれぞれに特色がありパワーの大きさも違う。それぞれのクラブが出来うる範囲で知恵を出し合い、いい関係を築いている。

たとえば、わが蒲生野クラブは、このキャンプ場で消費するタマネギ1000個を寄贈している。種から蒔いて育て収穫したものである。汗を流す真正銘のYMCAサービス事業は、メンバーにいい

影響・充実感を与えYMCAでも好評のようである。

残念なことだが現代の世相は、子ども達にとって必ずしも健全であるとは言えないようで、この時代に生きている子ども達の未来を考えると、申し訳ない気持ちになってくるのは私だけだろうか。夏の野外プログラムなどにキャンセル待ちが出るほどの盛況な年が続いているのはなぜだろう？今の社会を不安視する姿(特に教育)の現れではないかと複雑な思いである。

## 頼りがいのあるワイズメンになりたい！

われわれは、知り合いをワイズメンズクラブに誘う時、「YMCAをサポートしているクラブ」というフレーズをよく使う。本当は、ほんの少ししかお役に立っていないのに、いかにも大きな顔をして言っているのではないかと考えるときがある。YMCAから見ても同じことが言えるかもしれない。このような不安を解消するには、ワイズメンズクラブがしっかりと活動が出来なくてはならない。そのためには、メンバーの確保・増強が大変重要になってくる。

全国のYMCAの状況もさまざまであるが、昨今元気がなくなっているYMCAをサポートしているクラブは、共に元気を失っているように思える。このような時こそワイズメンズクラブがしっかりと活動しなくてはならない。YMCAオンリーの活動だけではなく、地域奉仕事業が加わると新しい展開が出来る。奉仕のコラボレーション化が大切だと思う。

しかしワイズメンズクラブのメンバーの高齢化が進み、サポートしようにもままならないのが現状である。クラブの若返りが必須条件であるのはいうまでもなく努力しなくてはならない。人には、「限られた命」しかないが、クラブは永遠に残すことが出来る。クラブ内での引継ぎがしっかりとされ、メンバー増強が計れてこそ「永遠」という生命を得ることが出来る。

YMCA理解も大切である。分かっているようでそうでもない。YMCAの活動を理解するとワイズとしての活動の仕方も変わってくるのではないだろうか。YMCAの事業を考えるとまず頭に浮かぶのがなんといっても阪神淡路大震災のことである。ワイズメンズクラブの働きもすごかったと記憶している。現在もYMCAではたくさんの国際プロジェクト・国内プロジェクトがあり情報を得ることが出

来る。こうしたYMCAの活動がもっと社会にアピールされるべきで、ワイズにも同じことが言える。

## YMCA = ワイズメンズクラブでありたい未来

自分自身がEMC(メンバー増強事業)にかかわっていることから、ワイズメンズクラブがもっと力を備えてYMCAから本当に頼られる存在になりたいと思う。

一昔前、「ワイズ6000」が提唱された。つまり、ワイズメンズクラブにとってもYMCAにとっても一番大切なのは「数」のパワーが必要であり、かつ資質のいいメンバーが求められる。そのために「生涯学習の場」として、私はワイズメンズクラブとかかわれたことに感謝している。

## 私達の使命は

未来に対して、今、何をすべきかを考えるとき、若者達にワイズメンズクラブとYMCAの精神をいかにして伝え、託していくかということである。

2007年に「ワイズユースクラブ」が誕生した。YMCAリーダー、ワイズメンの子どもなどにも入会して欲しい。この「ワイズユースクラブ」をワイズメンズクラブがサポートして、時には同じプログラムを協働することで、ワイズメンズクラブとYMCAの精神を理解した若者達が社会に羽ばたき、世の為人の為に働き、自分らしく生き生きと働く姿を想像すると心が豊かになる。

その為には、東西のワイズメンズクラブやYMCAのネットワークを有効に活用できる、仕組み作りが必要ではなからうか。YMCAがいま求められている「公益性」に相応しい働き場となり得る可能性を秘めている。

「もったいない」という言葉が日本のみならず世界でも脚光を浴びている現在、すぐにでもやるべきことをやらずに、淋しい未来を迎えるのはもったいない。

せっかく「縁」あって多くの良き人と出会い、共に活動しているクラブが衰退していくようでは残念である。もったいない結果にならないように、日々コツコツと「輝く未来」の姿を夢見ながら生涯学習の場として、ワイズメンズクラブとYMCAに楽しくかかわりながら、「ワイズユースクラブ」

を継続的に支援できる力のあるクラブ作りが私達のもう一つの使命ではなからうか。

いつの日にか、かつて「ワイズユースクラブ」で縁のあった人達の一人でも、ワイズメンズクラブに入会したらという夢も必要であろうし、その時にもしっかりと生き続けているクラブの屋台骨を作っておくのは、今かかわっているワイズメン達の、もう一つの使命であり、そのことがYMCAのた

めに働くことにも通じるのであると思う。

#### プロフィール

井之上温代 (いのうえ あつよ)

1990年 滋賀蒲生野クラブチャーターメンバーとして入会  
2006年 西日本区EMC事業主任  
2006年～ 西日本区2000推進チーム  
2007年 西日本区リーダーシップ開発委員長

今、私達に求められているのは、「人に寄り添って生きる」ということではないだろうか。

## 4 世代を超えて伝えたいこと

神戸YMCA顧問 今井 鎮 雄

### YMCAの誕生

1844年、ロンドンで12人の青年によって始められたYMCAは、もっとも古い青年運動として知られている。産業革命のあとを受けた当時のヨーロッパ社会は、蒸気機関車や水力発電の利用などによって次第にその構造を変え、人々の労働力を結集するための都市が生まれつつあった。それまで農村で働いていた次男、三男を中心とする労働者は都市へと移動し、多くの資源や機械力とともに、労働力として集約していく時代を迎えたのである。

そのように都市に集まった多くの青年の中に、洋服生地を扱う問屋で働くYMCAの創立者、ジョージ・ウィリアムズとその仲間がいた。若者の多くは、慣れない都会の生活の中で自らの行く道を十分に察知することができなかった。グローバリゼーションが進み情報化が進んだ近代化の中の青年と同様に、焦燥感と、夢を持ち得ない日々の中で、何をすることが重要で、何を探索することが必要かを問うこともなく、日々の生活を送っていた。

ある日、ジョージ・ウィリアムズはロンドンのある教会の門をくぐり、牧師が青年達に問う声を

聞いた。「快樂への道は大きな道を歩むようなものである。楽な道であり、安易な道だが、結果は墮落につながる道である。他の道は細く険しい道で、その道を歩むためには己を振り返り、自己を見つめ、その行く手にあるものに希望と勇気を持って進まねばならない。狭く険しいその道こそ、その人の行く手に希望を与える。日々楽しいが滅びに至る道を行くか、たとえ苦しくても神に従って苦難の道を選んで栄光に至る道を歩もうとするのか。この決意をするのは今であり、諸君はそのどちらも選ぶ自由を神から与えられている。決めるのは、あなたがたなのだ」という説教であった。ジョージ・ウィリアムズはこのことを深く考え、楽な、しかし日々の目標のない大道を歩むより、狭くとも希望に至る道を歩むことを決心した。同じ決心をした青年12人は、自分達が教派を超えて集まっていることに気付き、このグループに「YMCA」という名をつけた。

### YMCA運動のひろがり

この小さなエピソードは、同じように人生を大

切なものと同様に真剣に考えて狭い道を行くことを模索していた各国の青年の間に波紋となって広がっていった。当時パリにあった「貧しき者の友なる集い」というグループは、ウィリアムズとの何度かの文通の結果、「貧しい者と共に生きるわれわれとロンドンのYMCAとは、根底においてその意識と働きを一にしている」と考え、連絡をとりあって共に支え合うことを決めた。ドイツでも、都会へ出てきた青年の中に日々の欲望にまみれた都会の生活からの脱出を願うグループがあり、時代を背景とした青年の悩みを共に担おうと、大きな友情の輪の中に入ってきた。

同じ1844年、産業革命が顕著な形で進んでいた英国では、力の弱い労働者が自らの生活を守るために、生活費を節約しようとロッチデールという小さな町に生活協同組合の組織が生まれ、続いてマンチェスターでは労働組合、あるいは婦人運動などが澎湃として起こってきた。経済の組織化が資本を生み、資本家が労働力としての労働者を圧迫するという過程は、やがて新たな資本主義社会を生み出していくが、その合間にこれら若者達がそれぞれに時代を深く反省し、人間が生きるとはどういうことかと考え、団結し、友情を支え合う組織を自ら生み出したことは、青年のもっとも青年たるゆえんであろう。

## パリ基準の策定

そして1855年にはパリで9ヵ国、38YMCAが集まり、第1回世界YMCA大会を開催している。のちに赤十字を創立するアンリ・デュナンも、スイスのYMCAの代表としてパリ・ベシス(パリ基準)の基礎案の策定に加わっている。

パリ基準は、二つの課題を中心にしている。

イエス・キリストの精神が広く青年の間に活かされるよう努力をする。

第二に、その他の事柄についてはそれがどんなに重要なことであっても、YMCA間の友好的な関係を損なうものであってはならない。すなわち、私達は主イエスがその生涯を通して証されたように、神とそれに従ったイエスを師と仰ぎながら、互いに寄り添い、決意を固くし、助け合って行く文化をつくらねばならないということである。

この第二こそ、パリの青年達の「貧しき者の友

なる集い」の延長であり、アンリ・デュナンの説いた愛と奉仕の赤十字の思想につながるものと考えられる。他者との寄り添いの中で生きる根拠がわれわれの社会を創る基本であることが、1855年、すでに明示されているのである。

## 戦争の世紀へ突入

産業社会が導いた新たな資本主義社会は人間の欲望を反映して、人間の欲望を満足させるためにどうあるべきかという経済学を発展させた。部落が部落を襲う水争いの原理から、国と国が争い、負けた国の労働力も土地も勝者の側に移管されるという現実をたびたび繰り返す、そのたびに人々は何が本当の自由か、何が本当に人の尊厳を認め合うことなのかと、心の底で深く問うことになった。それは次々に戦争が続く時代として、私達がよく知る時代でもある。

こうした中で第一次世界大戦が起こり、戦う人々の口実は“War to end All Wars”、諸々の戦いを終わらせるための戦いであり、その正当性を認めさせようとした。大戦後、軍縮会議が生まれ、それぞれの国の兵力が削減され、国際連盟が組織され、各国間の問題は連盟の中で語り合って解決するという相互理解のための会談の場が設けられた。

しかし世界は次の戦争、第二次世界大戦を起こすことになる。この戦争を人々は「帝国主義と民主主義の戦い」と呼んだ。覇権を中心とし、戦争によって他国を占領し、それぞれの民族国家に勝利をもたらすのか、あるいは自由と人間の尊厳を尊重し、人々に光をもたらすのかを問おうとしたのである。

## 国際連合の誕生

共に生きる世界とは何か。戦争に勝った側も負けた側も、共に生きることの大切さを痛切に感じ、世界の国々は自分達がかつて植民地化した領土をそれぞれの民族に再び返すことを約束した。国際連盟の弱点が考え直されて「国際連合」が生まれ、互いの文化や科学、教育が尊重されるようにとユネスコが、世界の子どものために世界の人々が分かち合おうとユニセフの組織などが生まれたのも、そのためである。

1948年、世界人権宣言が出され、1950年に国連総会で「人権デー」が設定され、世界で記念行事が行われることが承認された。人々はこのように新たな世界を作ることを新たな人間の問題を考える大事な機会にした。しかし、歴史と科学はその事柄を超えて、20世紀の終わりに新しい問題を提起してきた。グローバル化と情報化という二つの波は、新しい時代の枠組みの中であらためてさまざまな問題を提起してきた。

20世紀は科学技術の驚異的發展の時代であり、ニーズがグローバル化を促進する時代でもあった。広島・長崎に落とされたような核爆弾は、いつでも地球を破壊することができるし、近年の地球温暖化現象は、地球を砂漠化させるのは時間の問題だとわれわれに知らせている。科学技術の進歩が人間社会を非人間化し、子ども達のコミュニケーション・ツールが携帯に変わる時代、それこそが現代といわれる時代であろう。

## 21世紀の課題—人間性の回復

「20世紀は人間の欲望を多少満足させることは出来たが、人間の幸福を高めるにはいたらなかった」。2002年、京都で開かれた公共哲学会議で大方の学者の感想であったと聞く。

これは、人間の尊厳、自立を認め合う人間性の回復こそが21世紀の課題でなくてはならないことを意味している。「人間を問う時代」を失いかけたときに、再び160余年前に思いをいたし、「あなたは誰か、そして私は」と問い直す作業が必要ではないかと思うが、いかがであろう。非人間化するグローバル化の中で人間が互いに寄り添い、いたわり合うために、神に創られた人間としての尊厳を互いに認め合うことの出来る人間を、神は要求していることを考えたい。

マザー・テレサの「死を待つ人々の家」に、道端で死に瀕していた孤独な一老女が引き取られた。彼女は、修道女達に囲まれ、白いベッドの上で清潔な病衣にくるまれているのに気付く、体を洗ってくれたこの人達は私を人間として認めてくれたという思いをもって、「ありがとう」と手を合わせて亡くなったという。「私達はそのためにここで働いているのです。どれほど貧しく、人から顧みられなくても、一人の人間が神から与えられた命と

人格を持った人間として生きていくことが許される、そのような人間同士の関係こそ、現代にもっとも必要」と述べられたマザー・テレサの言葉を忘れることはできない。

孤独の中で、自分のことしか気がつかず、自分の尊厳すら忘れ去りがちな21世紀という時代にあって、YMCAに連なる私達に望まれているのは、「人と寄り添って生きる」という人間性の回復を図ることではないだろうか。

## プロフィール

### 今井 鎮雄 (いまい しずお)

1946年 神戸ワイズメンズクラブ入会(1991年より休会)  
1948年 神戸YMCA奉職  
1963年~1984年 神戸YMCA総主事  
1984年 神戸YMCA顧問  
(社福)神戸市社会福祉協議会理事長  
兵庫県青少年愛護審議会会長  
(財)PHD協会理事長  
(財)兵庫県青少年本部顧問





## 5 ワイズメンズクラブが生き続けるために

京都キャピタルクラブ 岡本尚男

### はじめに

YMCAであれビジネスであれいつの時代でも共通の課題は、常に地域社会の要望に沿った、今様にいえば「顧客のニーズ」に合っているかが問われます。もし地域社会から必要とされていなかったら、ビジネスでは売りたい商品やサービスは売れません。一般的社会奉仕クラブの一つである「ワイズメンズクラブ」も同様です。

それに付加すれば、そのビジネスをしている会社や店の設立目的と理念が問われ、そこにかかわるトップから関係者の倫理観の在りようまでが問われます。その意味では、ワイズメンズクラブの理念、目的は国際憲法に定められ、その「すべてを承認する」と「宣誓」して入会した人達によって、本来は運営されていなければなりません。

しかし、新しい人が何年にもわたって入会せず、クラブ内の親睦が図られないままに年月を経た結果、クラブ活動が活力を失い、解散に至るクラブには、そのようになる「何か」があります。その理由の一つに「少子高齢化」をあげているだけでは、解決の糸口は見出せません。時代が変わろうとも生き続けている「YMCA」や「老舗」といわれる「店」には、自分の知恵と責任のうえで、まさに「<sup>あらの</sup>荒野」を歩んで生き続けていることを、どのように評価したらよいのでしょうか。

私達に必要なことは、この現実から学ぶことです。社会から支持されるだけの価値のある働きを実行するだけなのです。その意味では、ワイズメンズクラブのことを十分に学ばないままのリーダーシップによるクラブ運営は、クラブのなかに会員の学びと鍛えるプログラムがなく、惰性に流された運営を行った結果としての現実が散見されます。前述したワイズメンズクラブの国際憲法によるク

ラブの使命と目的が十分に理解されていることを前提に、その問題点と対策について私見を述べます。

### 1. 「YMCAに忠誠を尽くす」とは

「YMCAの活動を支援する」ことが十分に理解されているのでしょうか。ワイズメンとしての第一歩は「YMCA会員」になることから始まります。

支援するには経済的支援とお手伝いがあります。また、職業上知り得た情報がYMCAにとって大切なプログラムとなることもあります。YMCAだけで無理ならばクラブで、あるいは部単位や数クラブによる支援で可能なこともあります。それでも駄目ならば、クラブとしての地域活動や他の団体との連携としても考えられます。そのことが地域のニーズを拾い上げたことになります。これが、結果としてのYMCA支援であり、ワイズメンズクラブの価値を高めることにつながります。

### 2. 「正義を追求する」とは

「一党一派に偏らない正義を追求する」意味がよく理解されているのでしょうか。

最近では政治家になるワイズメンも増えてきました。ワイズメンズクラブで世の為人の為に働くことの哲学を学び、そのことを政治の世界で生かしたいと心から願うワイズメンの政治家、またはその志のある若者を支援することも大切ではないでしょうか。

かつての社会問題の根底には極度の「貧困」と「飢餓」がありました。今は、国際的な視点で「日本の国」は「どのような正義を、どのようにして堅持する国」となるのかが問われています。ワイズメンズクラブの世界でも同じことがいえます。

この時に、拠って立つ理念と目的はワイズメンズクラブの憲法や目的に置き換えればよいわけです。ワイズメンズクラブにかかわる政治家は党派を超えて結束し、会員は彼らを支援し働かせるのです。

また、会員すべてにいえることは、自分の世界に戻った時には「一党一派に偏らない正義を追求する」ことの意味を、自分の世界に置きかえて考え抜き、いまできる「正義」に基づいた哲学をもって、世の為人の為になるビジネスや働きを実行します。ワイズメンはこのために、毎月の例会に出席しているのであります。これらのことが、クラブの価値を高めます。

### 3. 「イエス・キリストの教え」をどのように理解するか

ワイズメンズクラブでよくいわれる「キリスト教理解」が「キリスト教」といわれたために、「キリスト教の強要」と受け取られている面があります。しかし、「イエス・キリストの教えに基づき」と、国際憲法はワイズメンの行動指針を明確に示していますが、「キリスト教」とは書かれていません。

むしろ「イエスさんという人が、神による意思を戴して行動した、短い生涯の数々の働き」がその弟子達によって記録され、聖書となって残されました。私達はそのことを参考にして、自分は何をもって「正義」とし、何を「不正義」とするのかという、等身大の自分を映す鏡として、素直に説教を聴き、聖句を読み、聖書を「教養書」として紐解くことが大切です。このことによって、いわれなき「不正義」に対しては身を挺してでも抗議し、戦う勇気が与えられるのではないのでしょうか。

また、自分の世界に戻った時には、場合によっては事業の「経営指針」の参考になり、地域活動における「行動指針」の参考にもなり、家庭における子供や夫婦の在りようの参考にもなり得ます。

「イエス・キリストの教え」が、大方の日本人が知らず知らずのうちに持っている「草木国土悉皆成仏」という、鎌倉仏教を基にした宗教観や自分と異なる宗教観であったとしても、それらと擦り合わせることによって、おおらかで奥深い人生観の醸成に役立つと思います。

その意味で、これをキリスト教布教の一環ととらえるのは、あまりにも偏狭な考えではないでしょ

うか。「イエス・キリストの生き様に学ぶ」という謙虚さが、ワイズメンの資質を高め、結果としてワイズメンズクラブの価値を高めます。ワイズメンはワイズメンズクラブに入会したことによる、副次的なこととして、自分以外の人や社会に対する視野が広くなり、クラブ活動の視点もふれません。

### 4. 仲良くする

「健全な交友関係」を築くことの努力が必要です。クラブの一義的な存在理由は、多くの人と出会い仲良くなることです。クラブはそのための場所を会員に担保し、必要なプログラムを用意しなければなりません。社交クラブといわれる一面を大切にすることをおろそかにしてはならないのです。それ故にクラブとしては安定した人数が必要なのです。有益な社交クラブであることが、ワイズメンズクラブの価値を高める一方、会員の人格も問われます。

だから、会員は積極的に新しい友人作りに励むためにクラブ内だけに留まらず、他クラブ、区大会、アジア地域大会、国際大会などにも積極的に参加する努力が必要なのです。お金も時間もかかりますが、身の丈にあった範囲で世の中へ出て行き、見識を広め、人格の陶冶をはかるのです。忘れてならないのは家族も含めた交流を心掛けることです。クラブの中だけでは、井の中の蛙になるだけで、本当の意味でのクラブのメリットは享受できません。クラブは「自分に対する投資の場」と考えることも大切なのです。

### 5. 自分が主役になる

ワイズメンズクラブで学ばされる哲学ともいえる、理念や使命をもとに、自分の世界に戻り、一人で働く覚悟が大切です。自分が主役になるのです。

クラブ活動は、ある意味では日常生活の中の、非日常的な部分でもあることを自覚して、己の拠って立つ場所で一生懸命に働く。「ワイズメンは働く人であり、理想主義者である」といわれるゆえんです。自分がかかわるYMCA、職場、家族、地域、業界などの人達を大切に思い、その人達のために骨身惜しまず「働く人」になるのです。その活動の中で起こる、悩み、苦しみなどの相談相手はクラブの中にいます。知恵や手助けをしてくれるワ

イズメンが必ずいます。要は自分が、周囲の人が放っておけないような熱意と誠意が感じられる「人」になるのです。

人は人の中でこそ「人」となり、ワイズメンは「ワイズメンズクラブの中でこそ本当のワイズメンになる」のです。クラブの凄さを実感する瞬間があるでしょう。そして、ワイズメンズクラブの価値を高める広告塔として「働く」のです。

## 6. メネット

メネットをどのように理解するかということです。基本的には、ワイズメンズクラブは男性社会の考えからスタートしているということが大切な一点です。国際憲法は「女性」の存在を、1974年から認めています。その後、時代の要請に応えるように、女性の存在が大きくなり世界ではいろいろな形態のクラブがありますが、日本のワイズメンズクラブとしての参考意見をまとめます。

大阪クラブは発足当初からメネットを同伴で例会に出席することになっていました。封建的な思想が色濃くあった時代において夫婦同伴で、常に例会出席というのはそれぞれの家庭の状況によって、違っていたことは容易に想像できます。そのような時代にあって女性の存在を大切に扱うような決まりがあったことは、先進的なクラブであったことには間違いはありません。先人の先見の明がありました。

翻って、現在は社会状況も意識もかわり、独身の女性会員や経営者の女性も増えてきたことで、メネットの立場、存在をどのように理解したらよいかという点で、微妙な隘路に入り込んでしまいました。

かたや、メネット自身の意思を無視してメネットをメンバーとすることで、クラブとしての最低限の人数合わせによって、クラブ存立の体裁を整えようとする姑息な動きも看過できません。むしろ、これはクラブ衰退の兆候と心得るべきであり、女性に対しても失礼なことで、その対極にある夫婦会員とは一線を画すべきでしょう。

また、ワイズメンズクラブにおける「メネット」の立場が、女性会員と比較して権利と義務の点から明確にされていないことも、何かと議論のもとになってきました。これまでは「メネットはメンの応援団」「メネットは小さくて可愛い人」「夫を支え、子供を育てて家庭を守る」とされ、表舞台に出

ずに、裏から支えるという役割が、暗黙のうちに了解されていた時代が続き、いわば男性の優しい理解の上に成り立っていたのが、「メネット会」でした。

また、「メネット主任」(西日本区。東日本区はメネット委員長)の存在が事態を解りにくくさせました。区費を支払わないのに、なぜメネットだけが「主任」としての役割があるのかという素朴な疑問に対しては明確な回答がありません。世界の潮流としては女性だけのクラブも承認されているし、女性の視点からの、よいクラブ活動をしていることは事実ですが、女性に配偶者がある場合、その配偶者への対応が出来ていないという問題も包含しています。

一方、今までのように「メネットの立場のままでよし」とするメネットもメンバーもいます。その点では一人ひとりの違いがあるわけですから、夫が勝手にワイズメンになったから勝手にメネットにされて不愉快だという女性もいるし、西日本区では「メネット会」という会の運営に対するアレルギーがあり、クラブではメネット会長のなり手がなく、クラブ会長がメネット連絡員になり、部では主査のなり手がなく男性の主査もでてきました。

クラブ発足当時には予期していなかった時代の変化に、組織が対応していないのが現状といえましょう。東日本区のメネットへの対応もひとつの見識ですが、どのように整合性のある組織にするのかは、これからの議論に期待したいところです。

## 7. ユース

「命は有限であるが組織は無限である」といわれるように、組織を維持するための困難さは言語に絶するものがあります。跡継ぎの問題です。その跡継ぎの力量によっては、組織は発展もしますし衰退もします。ワイズメンズクラブも同様です。常に新しい人を入会させる一方、会員の子弟に対する働きかけも大切です。

YMCAにかかわるリーダーや子ども達に対しても同様ですが、「ユース」への働きかけが希薄です。会員の意識には自分の子どもに対する、大切なかわりの場がクラブやYMCAのプログラムの中にもあることの、認識が薄いように思われます。

クラブは「社交の場」であることは、先にも触れましたがそこは「家族ぐるみの社交の場」でもあるという視点がないように思います。「国を治め

る人は、家庭を治めなければならない」という言葉もあります。家庭の重要な構成者である「ユース」を、メネット任せにせず積極的に子育てにかかわる機会として、クラブに用意されている「ユースプログラム」に関心を寄せてほしいのです。

以上のことを、ベースに会員数の減少に対する具体的な提言をまとめてみます。

### (1) 出席率の重要性

例会の重要性については、すでに述べましたが出席率も問題です。健全な交友関係を望もうにも、出席者が少なればどうにもならないし、社交クラブとしての価値も相対的にさがります。また、誰もが人を誘いたくなるような、めりはりのあるプログラムも大切です。お互いに思いやりにあふれた態度で例会が終始するように心掛け、人格の交流と学びのひとときであるような紳士淑女としてのプライドを大切にしたいものです。

その意味では出席率90%以上を目標にしたいものです。欠席者に対してはメイキャップ制度を活用します。例会を欠席した会員にはその会員のスポンサーや役員が同道してでも、他クラブなどを訪問して交流の手助けをします。このことが、クラブに対する帰属意識を高め、退会者の歯止めに役立ちます。絶え間ない会員への働きかけとかわりを深めることで、「一人ひとりの会員を大切に」という、クラブ文化の醸成に繋がり、会員にとって「良いクラブに入会した」という満足感となり、新しい人への働きかけの原動力となります。

このこと自体がクラブの価値を高めます。

### (2) 研修制度の確立

定期的な研修会の開催が必要です。研修プログラムに工夫をして、クラブ・部レベルの研修会を活発にしたいものです。まずはクラブ内の現状を把握し、会員のニーズを汲み上げて、粘り強く毎年続けます。区で開催している研修会は、良い見本になるでしょう。部長と会長のリーダーシップが絶対に必要です。東日本区のLT委員会・西日本区のLD委員会のサポートも欠かせません。

「老舗」といわれる店は、常に従業員の躰をしています。参考に値することであり、クラブの価値を高める要素でもあります。「奉仕」を「ボランティア

ア」と訳し、いまは後者の言葉が日本語として定着してきました。しかし、その「ボランティアの心」の学びがない人が問題を起こしがちです。人を育てる機能が無い組織は早晩崩壊します。

その「心の教育」を受けたワイズメンの働きは、クラブの評価をいやがうえにも高めるでしょう。

### (3) 会員構成

東日本区定款第3条第4項と西日本区定款代3条第5項に、ワイズメンとなり得る人の職業分野の構成が明確にされています。

その意図するところは、異なった職業人が持つ業界の事柄や現況、物事の考え方などが、異なった職業の会員にとっては有益な情報ともなり得る場合もあり、YMCAが行うプログラムの参考ともなり得るからです。

一方、そのためにこそ、その業界におけるより高い能力と実力を備えた極く限られた良質の人を選んでくるという観点から、一業種に偏らないという点がポイントとなります。

しかし、職業をリタイアした世代の受け皿としては、かつての職業を参考にした、会員構成が必要でしょう。その経験と人脈はその人の自己実現にも役立つし、地域活動の原動力になり得る可能性を秘め、YMCAのプログラムとしての公益性にもつながり、クラブの価値を高める地域活動の一つとなるでしょう。

### (4) 会員の資質

会員に相応しい人物は、一概にはいえませんが一定の収入があり、心身共に健康で明るく、活動的で家庭が円満であり、人格も問われます。家庭生活と経済が安定していなければ、本当に世の為人の為に「ボランティア」はできません。とりわけワイズメンとしての「ボランティア」には「目に見えない力」と「目に見える力」が必要です。ワイズメンズクラブの入会式文に、その思いが凝縮されています。

### (5) 新会員確保の方策

人員確保のためには戦略としての「会員確保ビジョン」が必要です。公益性のある地域活動が、地域から認められ、一人ひとりの会員が奉仕クラブの会員としてのプライドを持ち、「奉仕の心」を大切

にして日常的に相応しい行動をしていることが、普段の広報活動です。YMCA支援にもつながります。

クラブ紹介のリーフレットを配布するだけでは効果はうすいのです。クラブ活動に使命と情熱を持つリーダーが、率先して会員増強に取り組むプロジェクトを構築するのです。かつてのワイズメンの子弟への働きかけも、方策でしょう。

いわゆる、企業の売上を上げるための知恵と行動計画に基づいた行動に通じるものです。跡継ぎになる人を増やすことに通じます。人を増やす努力を怠ったクラブはいづれ衰退します。「人の来ない家は滅びる」という格言があるように、クラブも同じです。客がこない商売は立ち行かないのと同じです。常に多くの人が入り出ること、有益な情報が集まり会員の人格形成に大きな影響力を与え、クラブを輝かせるでしょう。

#### (6) クラブ診断制度の提案

それぞれのクラブには歴史と特色があります。しかし、東西に分割されたワイズメンズクラブの現状は、かつての勢いを失いつつあります。そこで「クラブ診断制度(仮称)」の設置の提案です。存続が懸念されるクラブへのアドバイザー制度です。東日本区のLT委員会・西日本区のLD委員会の役割であり、EMC事業委員会の出番でもありましょう。

患者一人ひとりとは症状も違えば、生活環境も違うので、診断も治療方法も異なるのと同じように、問題クラブには異なった原因による結果が出ているに過ぎません。クラブに寄り添って問題点を見つけ出し、手助けをする。部長の出番でもあるし、部長のキャビネットの活躍の場であり、ひいてはかかわった役員との研鑽と自分のクラブの問題点と対処方法も見えてくるでしょう。

そのための東日本区のLT委員、西日本区のLD委員の人材養成には、かつてトップとして活躍した理事、区役員などの経験者から相応しい人を選任してはどうでしょう。神輿の上に乗る指揮を取った人には、担いでくれた人への恩返しとしての義務と責任があります。それは、組織を活性化させ、世の為人の為に尽くす人を育てる使命があることを、自覚する必要があります。役が終わったからクラブを辞めるという方もありますが、一会員の退会とはその影響力が違います。組織としての費用対効果の点からも大きなマイナスとなります。

役員就任式文にある「役が人を選ぶ」ことの重みが希薄になってはいないか？ 役員は役が終わってからが本当の役員になるのであって、その役に相応しい「人」となるのだと思います。

#### (7) 少子高齢化の時代への対応

「少子高齢化」を会員が増やせない理由にしないことです。日本の人口比率の議論と足元の問題の議論とを混同しないことです。身近に若者がいないわけではなく、若者がすべてでもありません。65歳以上を統計上、高齢者と呼んでいるだけで、若者も高齢者も一人ひとりを見れば千差万別です。時代が動いているだけなのです。むしろ自分のクラブは魅力のあるクラブなのか、売物になるサービスがあるのか、強みがあるのか、クラブ内の点検から始めましょう。

そのうえで、クラブ内で十分に話し合って会員が満足できるプログラムを推進し、手応えと自信をつけることから始めましょう。

#### (8) 他クラブから学ぶこと

出席率の高いクラブを訪問し、ノウハウを学びましょう。繁盛している「老舗」にはそれなりの魅力があるのと同じように、活気のあるクラブにはそれなりのサービスと力があります。自分のクラブに不足しているものは、真似をすることから始めましょう。クラブの雰囲気が変わることでしょう。

#### (9) ゲストスピーカーには工夫

社会で地道に人の為に働いている人を、ゲストスピーカーとして招待し、入会のきっかけにしましょう。そのような人はすでにそれなりの人脈とネットワークを持っています。有力な会員候補者でもあり、紹介者ともなり得る可能性があります。

一方、会員のためになる話題をとりあげたり、時には会員による「その人の人生を語る」などはクラブ内の親睦にも役立ちます。

#### (10) ウエルネスの考えを導入

「ウエルネス」を基本にした活動が必要です。心身共に健康でなければボランティア活動は不可能です。かつて、日本区時代には「ウエルネス運動」が活発でした。「心身ともに健康な状態」とはどのような「状態」をいうのかを学び、その心をもつ

てプログラムを立ち上げ、会員が実践し社会に広げるのです。

今、社会で予防医学の観点から喧伝されている「メタボリック シンドローム」も、普段の生活習慣の結果です。長野県が1945年代から地域ぐるみで取組んだ予防医療が、全国一の平均寿命・最低の医療費・高齢者就業率として実を結んでいます。これは「ウエルネス」の実践例であり、YMCAと共に取組むに価値のあるプログラムとなる可能性があります。その結果、健やかな、その人らしい人生が送れるのです。ワイズメンズクラブの価値も高まります。

「ウエルネス」について学ぶに必要な参考資料や人材は、ワイズメンズクラブにもYMCAにもあります。

### (1) ネットを大切に

ネットのことがアキレス腱になっています。共通理解のための議論を重ねる時でしょう。時代にそぐわない、その場しのぎの言い逃れではなく、明快で日本的な解釈が必要です。根本的には男性だけの考えに則って作られた制度に、馴染まないだけなのです。

また、日本の文化に男女の在り方についての暗黙の役割みたいなものが、それぞれの夫婦生活に陰をおとしています。会員としての女性の立場と「ネット」としての女性の立場は明確ですが、「ネット会」を運営することについて、クラブによってその時々によつてどのように対応するのが問われています。

育児に追われている人、教育に追われている人、時間的にゆとりのない仕事についている人、外に出たがらない人、会員が女性同士の交流に協力的でない、など「ネット会」の運営に困難はつきまといますが、必要なリーダーシップがないためにつまづいているだけだと思います。

どのような運営がよいのかが問題で、ネットの存在を厄介者扱いにすることは、国際憲法にも抵触しますし、本来のワイズメンズクラブの先見性に水を差すことになります。他の奉仕クラブが女性だけのクラブや女性会員を認めるように規則を見直したことを見れば、ワイズメンズクラブの持つ度量の広さと先人の先見性がわかります。知恵を出して共生の時代に相応しい「ネット」の居場所を確保することでしょう。ネット同士の

交流から、子育ての苦労や家庭料理の共有と知恵の伝承も可能でしょう。時代が求めている子育てのワイズ版ともなるでしょう。家族ぐるみの付き合いが始まってもおかしくありません。

前述した「クラブ診断制度(仮称)」の活用も期待できます。

### (2) ユースを大切に

最近、15歳～30歳までの若者のクラブ「Y3-(Y's, YMCA, YOUTHの頭文字の合成語)」が誕生しました。次代を担う若者は私達の希望の星です。会員の子弟も家族の一員として、両親の愛情を一身に受けて育てることは大切ですが、多くの仲間との交流は良き社会人となるためには欠かせません。感受性の豊かな時代に、そのような交流の場が、クラブの中にもあることを広報し、子供をもつ会員も関心を寄せて、世界へはばたく機会を与えることもワイズメンになったメリットでもあります。

また、YMCAにかかわる対象者にもそのことを広報して、将来の日本を背負う国際人に育てる夢を共有したいものです。クラブか部単位で、対象になる若者を集めて、面倒を見るような制度を考える時代です。少子高齢化の時代に、若者にも高齢者にも「夢」を与えるに相応しいプログラムとなるでしょう。

YMCAサービス、ユース担当の部署があるのは、そのような観点からの事業を期待されてのことです。ワイズメンズクラブ、YMCAの公益性のあるプログラムともなり得る可能性があります。

以上、12項目について、具体的に述べました。出来ることから取り組み実践することが、クラブの存続と活性化につながり、ワイズメンズクラブが地域社会における存在感を増し、会員増強に資することを期待します。

## プロフィール

### 岡本 尚男 (おかもと たかお)

1971年 京都パレスクラブチャーターメンバーとして入会  
1983年 京都キャピタルクラブにチャーターメンバーとして移籍  
1986年 日本区書記  
1988年 第58回京都国際大会(書記・広報委員)  
1994年 第40代日本区理事  
1999年 第18回アジア地域大会プログラム委員長  
1996年～2003年 ワイズアカデミー委員長

60歳から70歳にワイズ団塊の世代が存在している。  
それぞれが自分よりも5歳下をターゲットに会員獲得を目指したい。

## 6 高齡社会におけるワイズメンズクラブのEMC

東京まちだクラブ 小山正直

今や、日本の75歳以上の高齡者(いわゆる長寿高齡者)は総人口の10%を超えたとされます。

こうした社会の高齡化の進捗の中で、ワイズメンズクラブの会員の高齡化も進んでいます。東日本区の各年度のロースターから集計した全体の平均年齢をみても、1997年7月、東日本区発足時は54.4歳(57クラブ、1,246人)が、5年後の2002年7月は57.9歳(57クラブ、1,124人)、10年後の2007年7月には60.8歳(65クラブ、1,111人)へと推移しています。

この10年の間に東日本区では、12クラブが新たにチャーターし若いメンバーも加わりましたが、この間に3クラブが解散し、1クラブは同じ部内のクラブと合併したのでクラブ数の純増は8クラブであり、メンバー数は156人の減員となりました。この間の平均年齢の推移はと見ると10年の間に6.4歳上昇しています。

ここで幾つかのクラブについて検証してみると、1931年にチャーターの東京クラブ(東新部)は、90歳代を筆頭に80歳代、70歳代のベテランが長年のワイズ経験でクラブに貢献していますが、50歳代、60歳代の働き盛りの会員も多く、会員35人の平均年齢は65.9歳で、バランスのよい年齢構成が維持されています。また、他の各部の先達的存在の歴史を持つクラブでも、会員数30人以上のクラブにおいては同様の構成がみられますが、会員数の減少した古参クラブは、働き盛りの年代が減って平均年齢は上昇しています。

ここ数年、社会全般に、戦後第1期のベビーブームといわれる年代の人達が企業勤めの定年退職の時期となり、次なる人生への転機を迎えています。この人達を自陣営に取り込もうと色々なNPOや市民活動グループが勧誘の方策を講じていますが、ワイズメンズクラブとしてもこの時流の外で傍観をしてはられません。現に幾つかのクラブで、こ

の世代の新会員を迎え、本人も新たな生きがいを見つけ、クラブも活力が蘇っている例があります。

EMCはワイズ組織の不変のテーマですが、高齡化の急進する社会の中で、このテーマの具体化に全クラブが取り組み、5年先、10年先を見つめて、クラブの中核となる人材を呼び込んで行かなくてはなりません。このEMCの実践例として1959年にチャーターした東京江東クラブ(関東東部)が挙げられます。即ち、チャーター後50年近くになる同クラブの平均年齢は現在52.8歳です。10年前には51.6歳であり、この10年間の平均年齢の上昇は1.2歳で、現在も40歳代、50歳代が多数活躍しています。同クラブは、チャーター15年後と同30年後に、核になる会員を割譲して子クラブを作りながら、自クラブへは30~40歳代の新しいメンバーを導入して会員数を保持してきました。新会員の勧誘は、年代があまり開いた間柄ではなかなか話が繋がらず、せいぜい5歳くらいの開きが限度で、5歳刻みに働きかけの輪を広げるのがよさそうです。

定年退職を迎えるのは男性だけではありません。社会の第一線で活躍していた女性、あるいは子育てが終わって生活に余裕のできた女性も次なる活動場所を探しています。ワイズのメネットもメンバーとしてクラブライフに参画した人、しようとしている人も多く見受けられます。また、メンバーに先立たれたメネットもメンバーとなってクラブ活動を継続しているケースも多々見られます。女性は概して男性より社交的で人の輪を繋ぎ広げるのがうまく、クラブの潤滑剤になりますから大いに勧誘したいものです。

若いときからYMCAにかかわり、また、ワイズに貢献してきたつわもの達は、高齡者とはいえども元気者です。この元気老人の集まるクラブを、若い世代のエネルギーで活性化し、女性会員で和

やかな雰囲気とし、まさに、若いも若きも、男も女も集うバランスのよい構成のクラブにリニューアルして、全員が生産者として、お客さん(消費者)ではない働き人として、みんなでクラブライフを満喫して行きたいものです。

## プロフィール

### 小山 正直 (おやま まさなお)

1983年 東京山手クラブに入会  
1991年 東京まちだクラブにチャーターメンバーとして移籍  
1995年 南東部部長  
1997年 東日本区国内担当事業主任(2期)  
2002年 第6代東日本区理事  
2005年 東日本区監事  
2007年 東日本区組織検討委員長

ワイズメネットの活動を振り返り、曲がり角にあるメネット活動を身近な視点で考える。

## 7 今の課題 ワイズとメネット

仙台青葉城クラブメネット 金原道子

約35年前、主人が仙台ワイズメンズクラブに入会し、当然のようにメネットとして何も分らないまま登録され、先輩メネットさんから月に1回の例会時、都合が良ければお茶出しの手伝いをするようにと言われたのがワイズにかかわる最初でした。子育て最中の年齢でしたので夜、家を空けることはなかなか大変でした。

1975年熱海にて国際大会があり、来日する外国のメネットさん達にあげるお土産作りが全国のメネットに依頼があり、そのお手伝いをし、また大会に来られた外国人をホームステイさせて交流を深めました。しかしワイズメンズクラブを理解するには、なかなか至りませんでした。

毎年の日本区大会に出来るだけ参加し、皆様と顔見知りになり、また来年お逢い出来ますようにと思うようになりました。これは、アジア地域大会、国際大会も今回はあの方は参加しているかしらと思いつつ、何時の間にか、ワイズメンズクラブを理解していったように思います。今思えば人と人との出会いが新鮮で、とても楽しかったから続いているのかもしれない。

さて、ワイズとメネットの関係ですが、私が入会してから随分変わってきて、メンのサポート役だけでなく独自に活動する組織ができて、日本区は勿論、アジアや国際協会にも代表者としてメネットを送り出すことができ、素晴らしい能力のあるメネットさんが沢山いること、また男性と同じ立場、条件でワイズの活動ができる女性も増えてきていると思います。

このウィメンとして登録されている方は、各クラブによって色々だと思いますが、クラブの人数が少ないので奥様もメンバーとして登録しているケース、またご主人がワイズに入らず奥様が会員になられているケース、ご主人様が亡くなってメネットがウィメンになる場合、そのままメネットとして活動している方もおられると思います。

今、若い会員の奥様はメネットではありませんが、なかなか会員としての活動には参加してもらえません。どうしても女性会員の協力をいただくようになります。メネット会費も出してメネットの奉仕活動を一緒にしてくれます。クラブの会長は出来ないけれどメネット会長を引き受けてくれたメ



ンバーもいます。

メンバーとして女性会員の入会によりメネットも当たり前のように例会に出席するようになりました。そのことによってメネットもワイズの理解が深まり、スムーズに協力し合えるようになったと思います。

年に1回開催される仙台青葉城クラブの「メネットの月」も今年で20回目となりました。ゲストスピーカーの選択や交渉、例会の司会進行なども含めて、1回も欠けることなくメネットナイトを開催できたのも、メネットが例会にいつも出席してきたからだと思います。お楽しみの家族会だけでなく、子育てが終ったメネットをぜひ例会に誘うメンであって欲しいものです。

「メネットは親交を深め、自己啓発を図り、奉仕の機会を得ることを目的としメネット会を設けることが出来る。」と東日本区ワイズメネット委員会の覚書に書かれてあります。やはり親しくするには

メネットも例会に出席し、メンと共に自己の啓発を図ることが大切ではと思います。

全体的に平均年齢が高くなってきて会員も減少ぎみですが、昔のように、あれもこれもではなく、今のクラブの状況にあった事業や奉仕活動を、メン、メネットがお互いに助け補い合いながら続けつつ、常に新しいことにも目を向けていきたいと思います。

## プロフィール

金原 道子 (かなはら みちこ)

1973年 仙台クラブメネット会入会

1980年 仙台青葉城クラブ設立と同時に移籍

以後、クラブメネット会長、北東部メネット事業主査

1984年 第39回日本区大会実行委員

2006年 第9回東日本区大会実行委員

「北東部の歌」の作詞を担当

原理的に奉仕クラブの目的は、奉仕の心を涵養することであって、奉仕の実践ではないということを確認しておかねばならない。

## 8 奉仕クラブの基本的問題について

元 中央大学法学部教授 小堀 憲助

### ワイズメンズクラブの源流 —奉仕クラブの生い立ち

世界の奉仕クラブと呼ばれるものの歴史を考える時、まずとり上げねばならないものにロータリークラブがある。アメリカ系の一般的奉仕クラブ群が、20世紀初頭の社会の中で自己主張する迄の歴史は、17世紀にその原型が出来上っていたが、政治家の社交クラブ、ポリティカルクラブの中から、一分派が政党として発展した。従って社交クラブは政治性から、この時点で決別し、あらゆる政治から中立を守るようになった。ワイズメンズクラブもその範疇に入り、純粋な社交クラブとして西

洋社会の中に出来上って来た。

奉仕クラブとして最初に出来たのは、1905年のロータリークラブであり、次いで1922年オハイオ州トレドでワイズメンズクラブの誕生を見たわけである。

日本におけるワイズメンズクラブの歴史については、「日本ワイズメン運動史半世紀の歩み」に詳しく記されているので割愛する。

ワイズメンズクラブが、何をもちて社会に対して自己主張することが出来るのかを整理しておく必要があるのと、クラブの質の点からいうとアメリカ系のクラブよりヨーロッパ系のクラブの質が高いとされているが、われわれとしても一つの確信をもっている以上、ヨーロッパ系の人達と原理

的に対峙する可能性が充分にあることを予測して、今からわれわれの脚下をよく見、大きな悟りの境地に立って原理的な体系を整理して、徹底した理解を持つ必要がある。

## ワイズメンズクラブの特徴

ワイズメンズクラブの大きな特徴は一業種二会員制(編集委員会註 1983年7月1日発効の日本区定款第3条第5項による)であり、メネット、コメントを包含したクラブ組織であるという点である。

一業種二会員制の意味は、地域社会の少数の職業の親睦のエネルギーを、他の団体では類例を見ないような形で、世の為人の為に放出するという点である。この結果として自分の企業なり自分の家庭なりが、自由競争の世界の中であって、より一層発展し充実した生活が約束されるわけである。自分を守ろうとして行ったことではないのにもかかわらず、その功德が結果として己に返って来る事実を体験した時、奉仕の心のあり方によって自分自身が生かされているという、その現象の深さが違うことにワイズメンは自信を持つべきである。

次にワイズメンズクラブの綱領の第一にYMCAへの忠誠が唱われていることは、他の一般的社会奉仕クラブに無い素晴らしい特徴である。

YMCAと共に歩むことの意味は、精神的に位置の高い団体であるYMCAと対等の立場で連動し、より質の高いレベルで奉仕の実践を行ない、それが質の高い人格陶冶に励む点にある。

政治的に中立を守る点からも、良質な悟りを開いた人は決して権力者に近づいてはならないということは、クラブを維持発展させる観点からも非常に大切な一点である。イデオロギーに片寄らないから、キリスト者であってもなくてもよいし、左翼系であっても右翼系であっても、メンバーとしては自由に存在出来るわけである。ワイズメンズクラブの門戸はすべての人に開かれていなければならないのである。

## 世俗の論理を持ち込んではいけない

世俗の論理をワイズメンズクラブの中に持ち込まないということはワイズメンズクラブにとって極めて重要なことである。クラブに集うメンバー

は社会における地位も立場も離れて、総て平等である。一人の人間として誇りを持って集って来る人達に対して、平等を保障する原則としてはワイズダムにかかわる負担金は同額でなければならない。

ワイズダムを支えるのは、それぞれが持ち寄る共有の精神的な財産である。ワイズダムを減ぼすのも、栄えさせるのもメンバーそれぞれの共通の知恵によって左右されるわけである。

リーダーシップをとる人達にとって大切なことは、「世俗の論理」の判断によるクラブ運営は絶対に行なってはならない、ということである。

本来、クラブの構成メンバーは一業種一会員制が望ましいが、ワイズメンズクラブにとってはキリスト教についての共通の認識を背景として、一業種二会員制が許されているが、この原則は絶対に崩してはならない。どのような職業であっても、その中であって出来るだけ良質な職業人を選ぶことが大切である。職業による倫理規準の相違は仕方がないし、業界の慣行による過去を裁いてはならないが、改善しなければならない点を自覚して、一生懸命努力をしている人がいる時、その努力を高く評価し認識しなければならない。

## ワイズメンは良質の「おせっかい屋」たれ

少なくとも良質なメンバーを入会させなければならない。良質とは、外では地域社会との接点で、内ではワイズメンズクラブにおける人間関係を構成する重要な原則であって、自分の判断がまわりの人達に直接間接にどういう影響を与えるかをよく計算に入れて、まわりのすべての人達の幸せを保障する様な判断の出来る良質の職業人、社会人のことである。平たく言えば「おせっかいやき」の人である。

自分の思考の中に他人が宿り、他人の思考の中に自分が宿るという、自他包摂の倫理を原理的に要求されているのがワイズメンズクラブのメンバーであり、お互いの人と人との間に目に見えない因縁の連鎖によって結ばれているソリダリティー(連帯感)の認識、自覚を持ち合わさなければならない。

ここで奉仕クラブのメンバーとしての条件の一つに、以上の様な認識と管理者的な判断を下せる主体的な人であり、自由人であるという要素を加えたい。ワイズメンズクラブの存立目的はその地

域の幸せ、不幸せをそれぞれの立場、ニーズ、人脈などによって総合的、連帯的に決めるべきであろう。但し、今の自由裁量権の社会においては社会構造のどこにポイントを置いたらいいのかは、それぞれのクラブが自由にきめるべきである。

## ワイズは「同じ穴のむじな」 —友情あるメンバーシップについて

ワイズメンズクラブは同志の集りであるから、互いの共存意識を大切に相入れないことを行つてはならない。「同じ穴のむじな」であることから、社会改良のエネルギーが出る。等質の中で職業体験の異なる発想が、異質なるが故に社会改良のエネルギーに迄たかめられるわけである。この等質の中の異質論こそワイズを含め一般的社会奉仕クラブの基本的な考え方である。

人を育てるための知恵は使ってもよいが、人を利用するための知恵は使ってはならないのである。個人としては独立し、人生目的は別でも、ワイズダムの中では心と心をかよわせながらお互いに主体性を尊重し、補完的な機能を果すフエローワイズメンに誇りを持つべきである。

ワイズメンにとって進歩の最大の障害になるファクターは「自信を持ち過ぎた自我」である。自分は間違っていないと思っていたがどうもそうではないらしい。どこか間違ったところがないか知りたい。間違ったところを知ったら今度はしないように努力をしよう。知らずに犯したことは友情をもってクラブ例会において自覚させる。このような切磋琢磨や反面教師の繰り返しの中から自己改善ができるのである。

このように自己改善をはかるために例会に集うが、精神性を目的とする活動の中には一丸となるべきものはない。それぞれが個性的であるがゆえにそれぞれのメンバーの管理機能を通じて、他の団体では果たしえない社会改良のエネルギーを放流するわけである。

自己改善の努力を何年も続け、人生の転機を自覚する喜びを重ねながら、ワイズメンズクラブのメンバーと奉仕のつきあいは生涯を通したものとなる。そしてその奉仕の心を持ったワイズメンは、それぞれ顔の違うように心の形も進歩の形も違うのである。その人達がそれぞれのファクターで個

人として奉仕活動にとりくんでいく時、奉仕クラブたるワイズメンズクラブはその人数分だけ多面的な奉仕活動が可能になるわけである。このクラブの運動の精神的特徴は、すべての宇宙の中心は個人であるということである。世の為人の為にワイズメンの管理する会社がどんなに大きくなっても、その中心は個人でありその個人を育てるのはクラブであるという構造を持っている。

そして、それは友情あるメンバーシップと、YMCAを通して地域社会への奉仕に目覚めた、あくまでも個人を中心とした自己研鑽の集いである。

ひとにぎりの職業人の良質な親睦をあたためることを通して、それらの人達の倫理的な人生観というものを形成させることを目的にした社交クラブのことをわれわれはワイズメンズクラブとよぶ。

## 奉仕クラブに於ける親睦の大切さについて

奉仕クラブの中で生きようとする者は、まず奉仕の世界の中に身を置かなくてはならない。その奉仕の世界に身を置かせる最高の場所がクラブの親睦の場である。

ワイズメンズクラブは、メネットの制度を持つ。ワイズダムの親睦の中にメネットを必然的に包摂するというファクターを持っている奉仕クラブは、アメリカ系一般的社会奉仕クラブ群の中ではワイズメンズクラブだけである。それにコメット(子供)まで入れて家族ぐるみで親睦のエネルギーを発揮しようとするのは、ワイズメンズクラブの特徴であり、誇りに思っていることである。

ワイズを全く知らない人達にワイズのことを説明する場合、自分の心に誇りがないとだめである。従って良質な人達をクラブの中に入れたいという時「良質の人達とは、おせっかいやきの人、人のための自己犠牲をいとわない生活態度をもった人達」のことであり、出来るだけ同業者を排除しなければならない。

ワイズの規則によれば一業種二会員制をとっているが、これは奉仕クラブを維持発展させる上での最低限度の規準である。それ以上の同業者を排除しなければクラブの親睦は濁る。だから入ってくれるなら誰でも良いという姿勢は、ワイズダムの将来の発展のために好ましいことではない。

同業者の二人は等質であっても企業経験が異質

だから、夫婦でいう“似たもの夫婦”つまり等質の中の異質である。等質だから永くつき合うことができる。「同じ穴のむじな」だと言われる由縁は、元が同じで、それでいて発想の違いが刺激となって互いにパーソナリティーが大きくなっていくことを意味している。ワイズメンズクラブもその親睦の中にそういうものを入れていただきたい。

同じ質だけど企業経験がちがうが故に発想が異質だ……。これを等質の異質という。だから等質であるためにはワイズメンズクラブに入る前から良質であることが必要である。誰でも入ってくればありがたい。入れば誰でも良質になれるというのはだめである。よく腹を割って話しをして、YMCAの基本理念、ワイズメンズクラブの基本原則、奉仕クラブのあるべき姿というものを心の中に入れて話しをするためには、まず「親睦の本質」を誇りをもって語れなければならない。それでなければメンバーをふやこすとは出来ないことを十分に知っておくべきである。

## 一般的社会奉仕クラブの概念の中で ワイズを考える

ワイズメンズクラブは一般的社会奉仕クラブである。一般的社会奉仕クラブには、その親睦の精神的なエネルギーを世の為に放出しようという一般的原则がある。それぞれの人達にはそれぞれの主体性があり、等質の中の異質とは誠に絢爛豪華であって、一つのをAと呼べば他のものはBであって、AをとればBがとれないし、BをとればAがとれないというような状況でも、それを両方友達として温在させることの出来る団体のことを社交クラブというのである。

社交クラブというのは、政治団体ではなく親睦団体であるから、千差万別な対立を網羅包摂できるファクターというものを持っており、又そういうものを持っていないと社会改良のエネルギーは醸成されない。

奉仕クラブは親睦に名を借りて善と悪との間に橋渡しをしてはならないという原則がある。だから悪を切り善をとるということを嫌でもやらなければならない。

ワイズダムの色々なことをやる過程の中でメンバーは、さまざまなことにぶつかるであろうが、

リーダーはその個別的な問題に対して、思考系列の論理の展開の中に多少ばらつきが出てきても、それはケースバイケースで一期一会的個別の解決を下さざるを得ないであろう。

## 先づ自らに奉仕の心を育てよう

一般的社会奉仕クラブでは、おせっかいやきの人、面倒見の良い自己犠牲を払える人をとる。そして職種が違う人の集まりにおいては、等質だが企業経験が違うから、他人はすべて自分を含めて適切な教育の素材である。企業は人、人は心、心は育てられるべきである。人は自分の持たざるものを他人に譲渡することは出来ない。人を育てようとするものは先づ自分の心を育てておかなければならない。だから奉仕クラブのメンバーこそ心を常に解放的にして、自分と異質な情報を総て自分のところにとり入れ、慎重に考慮して自分の心の糧にしていくだけの心構えがなくてはならない。

奉仕の世界に身をゆだねる者は、先づ心を奉仕の世界に置かなければならない。その奉仕の世界の心とは自己研鑽のエネルギーを主軸とする、ある努力の世界のことだと言えばよい。自分のパーソナリティーが先づ教育を受けなければならないのである。

世の為人の為に、困った人を救おうと思う時、この中に教育的作業が入ってくるのである。世間一般にいう救済作業には金をばらまいて救うという場合もある。労力を投下して救うという場合もある。

その時に地域社会を育てるという要素の中で、教育機能が必然的に主たる要素となって浮かび上がって来る。その時に奉仕クラブのメンバーの心の中に、もしより良質なものがなければ、どうして人を教化することが出来ようか。こういう問題があるからこそ出来るだけ同業者を排除し、ありとあらゆる異なった発想が自分のところに入ってくるような状況を、奉仕クラブは創っておくべきである。

そして、自分の心の中に他のワイズメンの等質であるが異質の思考というものを鏡として、自分自身を磨いていく。こういうのを自己研鑽、自己教育、自己改善というのである。また、これらのことを指して社会改良とか、相互教育とか学校にあらざる教育制度というのである。

## ワイズ一元論

### —私的利潤の追求と奉仕の同化について

ワイズメンズクラブのみならず、奉仕クラブにおける親睦は極めて大切なことであるが、特に親睦に精神的価値を認めるワイズメンズクラブにおいては、その親睦活動の目的性について今一度考えてみたい。

ワイズメンズクラブでは二週間ごとの例会に集まる。それは何故か？ 他に忙しい仕事がたくさんあるが、価値があるから集まるのである。価値とはなんだろう？ 自分の会社にいたのでは、自分の同業組合にいたのでは、自分の地域社会にいたのでは、商工会議所にいたのでは、青年会議所にいたのでは、達成できない程の大きな価値をワイズダムは持っている。そのことに誇りを持つワイズメンになっていただきたい。事物の本質論 “In the nature of things” お互いが自分達が回りの人達から自分に無いもの、業界では得られないものを得る。そうすると視野が広がるし思考が深くなる。

それぞれが質的にどうするかについては、これを妨害するものは自己反省の無い人、無能力な人達であって、人はそれぞれにパーソナリティに違いがあるのは当然だから、転機を得なければどうしても他人が受けとめられない、という人は奉仕クラブのメンバーとしては不適格な人といえる。

人間は心を広くして人を受け入れれば自分の視野が広がる。奉仕クラブのメンバーにとって重要なことは、自分の欠点と自己の限界性を自覚しようとする努力が大切だということである。自分の力は限られている。足りないものの補給源として、自分が所属するクラブメンバーの異質の体験の中から学ぶ。これを一生続ける。その間の努力が大切であって、そういう人の行動は他人に対して説得力を持つ。

良質な考え方は人から尊敬と信頼によって、おのずから報いられる。EMCの適当なテーマになる。ワイズダムを拡げるために、地域社会の無自覚的な断層の中に良質な人がいると考えればいい。その世話ずきな良質な人の中の、その職種から2人必ずとってくるよう努力する。

しかし、どんなに良質でも、同化能力に限度があるからそれを見定めて、許される範囲で量、質のバランスを考えて会員を集めなければならない。

そのためには誇りをもって、その誇りを相手に述べられるような状態にならない。

奉仕クラブの第一の功德は、ワイズメンが管理する会社が質的に強化されてくるということである。そうすると自由競争の最只中であって、しかも自由競争の圏外にたって、自分の企業を安定的に発展させることができる。自分の家庭が幸福になるだけでなく、自分が管理し所属する会社全体が社会的な競争力をつけ、社会的に良質であるがゆえに競争力を高めて、激しい自由競争の中でも必ず生き残ることが出来る。

このことは人に対して説得力を持つ。ワイズメンはワイズメンズクラブの親睦の中で、純粹親睦を遂げたいという願望を持っている。その中で自分の思考を良質化し、良質化する基になる素地をできるだけ地域社会の範囲で、他の業種から多角的にもらってくる。自分の企業は私的利潤を追求するが、同時にそのことが社会的規範に反することなく、むしろ社会的責任の遂行になる。このことを奉仕、親睦、企業を通しての一元論という。そのためには事業財源をもっているクラブメンバーが清く、世の為人の為に奉仕することが前提になければならない。

もし奉仕するためのエネルギーと、稼いでくる企業のための管理エネルギーの次元に断層がある場合、これを多元論的奉仕とよんでいる。

一元論的なワイズダムの親睦の効果は、ワイズメンの管理する自分の会社の体質改善につながらなければいけない。私的利潤の追求が、同時に一つの心で行う奉仕となって、世の為人の為になる。それが出来て始めてワイズは一般的社会奉仕クラブとして、堂々と地域社会におけるステイタスと市民権を得ることが出来るのである。

ワイズメン一人ひとりがそのことを理解し実践してこそはじめて、ワイズメンズクラブは一般的社会奉仕クラブとしての存在感をもつことが出来るのである。そのためにはまず自分から、「隗より始めよ」である。親睦論というのが、自分の会社の体質改善と必ずしも無関係になっていないということを、第一義的に理解しなければならない。自分の企業の経営を奉仕の心でもって行い、そして体質的改善を行う。

それが出来上がった時、そのような経営が社会に有益な影響を及ぼして、人はこれを信用という形で評価し、奉仕クラブに所属する人の企業活動と

その人の行為を社会的に一貫性のある、有益なものとして認めるのである。

ここで親睦と奉仕にふれて「奉仕の心」とは何か、良質な人をして奉仕に励ませるものは何かという奉仕そのものの基本的な原点にふれておかねばならないが、それは先にも述べた如く、人は他人と自分との間に目に見えない深い絆で結ばれているという“Solidarity”（連帯感）の自覚そのものである。このことの大切さを一元論にふれて、もう一度強調しておきたい。

## 奉仕のあり方について — 純粋な心との出会い

奉仕クラブとしてのワイズメンズクラブにおいては健全な青少年育成、弱者保護という目的がわれわれにはある。健全な環境整備、奨学金制度、交通遺児、母子家庭、父子家庭、身障者、精神病患者の社会復帰、等々の問題がある。これらの問題がわれわれの将来にのしかかって来ているが、完全に解決している制度はないし、試行錯誤はあってもみな未完成である。これをどう社会に定着させるかという難しい問題がある。

ワイズメンズクラブの名前において考えてみても、果してワイズメンズクラブにおいて、この問題に挑戦出来るだろうか。挑戦して失敗したらどうなるだろう。世間からの尊敬と信頼が無くなって来る。ワイズメンはこの意味で失敗は許されない。クラブレベルにおいてもである。したがって出来る範囲のものを、因縁の熟成度に応じて出来るものから実行する。失敗すると信用がなくなる。信用こそ奉仕クラブの親睦の中核の概念であって、お互いに社会的な信頼と尊敬を育てるために親睦活動を行っているのであって、この根幹を傷つけるような活動は、いくら世の為人の為であってもやってはいけないのである。

精神性を重んずるワイズメンズクラブは、団体的金銭補給源は限られているがゆえに、社会福祉問題に対してはあまり力があるとは言えない。社会的な規模における奉仕に関する限りではワイズメンズクラブはクラブの名前で、世の為人の為に使える力をそう大きく持っているわけではない。

それは悲観することでも、なんでもない。ワイズメンズクラブとはクラブに身を置くことで自ら

が自己改革し、それぞれのメンバーが良質な社会人、職業人になることが目的であり、そのこと自体が自然に社会改良につながるクラブであるからである。このワイズメンズクラブがクラブとして十分機能するためには、一人ひとりのワイズメンがワイズに入る前から、世の為人の為に働いている人でなければならないし、入会してから益々そのエネルギーが横溢し、その功德によって自分の企業管理が根本的に改善され、それによって社会的な影響力が強くなるというのでなければならない。

そしてその自分のグループ管理能力を個人として一人ひとりとり出しあい、クラブとは関係の無いところで自分がリーダーとなってグループ形成を行い、ある願望を遂げるために地域社会の中から人を集めて、お互いに切磋琢磨のうちに自分の力で世の為人の為に働くのである。自己教育のためならば団体財源を組まないわけではないが、これはワイズメンズクラブの第一義ではない。団体奉仕はワイズの目的ではない。ワイズメンズクラブの奉仕の第一義は個人がやることである。

社会は人、人は心、その心は良質であり、純粋な心の中に宿る良質性は他の人類の幸せ、不幸せ、宇宙をも包含する指導性を持ち得るのである。

ワイズメンは本当に自分達に課せられた二度と無い人生の中で、ワイズメンズクラブと出会い、良質のフェロシップと良質な思考に出会い、その中で自分を育て、育った自分が世の為人の為に自分の個人的なエネルギーを放出して、その心の渴きを癒し更に大きな次のエネルギーを作るために、ワイズの例会に集まって来る。人は人によってのみ人となる。お互いの切磋琢磨が同時に世の為人の為となる。こういう奉仕クラブとしてのワイズメンズクラブはなんと素晴らしいものであるかと素直に申し上げ結論としたい。

(1986. 2. 8~9 京滋部EMC研修会  
同志社大学新島会館での講演記録)

## プロフィール (1986年当時)

小堀 憲助 (こほり けんすけ)

1926年生  
中央大学法学部教授  
ロータリー千種会代表リーダー  
社会福祉法人ホミニス会設立代表者

私達は、人生の生き甲斐と潤いを求めて入会し、自己研鑽している。  
その思いにふさわしいクラブづくりを。

## 9 新しく生まれ変わろう — 変化への挑戦 —

京都グローバルクラブ 澤田賢司

1997年に日本区が東西に分割されて以降の10年間、西日本区会員の推移は毎年平均105.5人の新入会員を迎え、137.7人の退会者を出して34.2名の会員減少が続いています。このことはクラブの衰退、部の衰退、ひいてはワイズメンズクラブ存続の危機的状況であります。西日本区財政も会員減少による逼迫は深刻です。

西日本区財政の採算分岐点の会員数は1,800人です。それが2002年の1,798人を皮切りに過去6年間、毎年150万円～200万円の赤字予算と赤字決算で終始し、役員会や代議員会でも、問題とされずに承認されてきたことに対して、誰が誰と責任を問えるのでしょうか。

会員減少はクラブの衰退、部の衰退、ひいては区の衰退と負の連鎖で繋がっている現在、会員減少から生じるさまざまな問題は、元を正せば私達一人ひとりの責任であります。この窮地を乗り越えるためには、これまでの問題を精査し、ワイズメンとしての使命感をもって会員増強に取り組まなければならないと思います。

クラブは会員がクラブに対する帰属意識の高い人が多いほど、クラブの発展につながります。会員はそのようなクラブに属していることに誇りをもち、自己研鑽に励み「愛と感動が経験できる学びのプログラム」をクラブに求めるような、良質の会員でなくてはなりません。

所詮、クラブの発展は良質な会員の数によって決まります。数は力であります。良質な会員の多いクラブは、一般社会の人に対する求心力があります。そのようなクラブは常に会員を増やし、退会させない魅力的な例会のプログラムが準備されています。残念ながら西日本区88クラブの大半は、クラブ改革、改造に着手する必要のあるクラブです。

日本のワイズメンズクラブはYMCAと共に1928

年からの草創期に始まり、1946年からの成長期、さらに1969年からの躍進期と、この間に誕生したクラブすべてが「イエス・キリストの教えに基づく愛と奉仕の精神」を継承し、質素に儉約したYMCAでの例会は時代背景とも折り重なって、より広い範囲での人々の賛同を得て、YMCAと軌を一にして発展し、1981年からのワイズの成熟期を最高潮に、全国140クラブ3,267人もの会員を有する一大組織を確立してきたのです。

そして更なる発展を求め1998年7月には新リジョンを設立し、東日本区1,246人、西日本区1,978人を擁して、新たな躍進を求めて出発したのであります。しかしこの10年間の未曾有の会員減少は、地域別偏重で見られるワイズメンズクラブの存在感と必要性が問われている反旗であり、挑戦であるように思うのです。

皮肉にも、YMCAの会員として働く多くの会員を擁しているワイズメンズクラブの、会員減少が著しいのです。その原因として考えられることは、例会を通じてクラブの伝統の継承、YMCA理解の教育など、クラブを守るために必要な事柄を学んだ後継者を育ててこなかったことに問題があると思います。

かつてはYMCAと共に働き発展することにワイズメンは誇りをもち、YMCAへの奉仕を旗印にして会員を勧誘する言葉には説得力がありました。しかし近年、全国的にNPO法人が設立されたことにより、YMCAへの奉仕がワイズメンズクラブの誇りになりきれしていないことも、会員減少の原因のひとつであります。YMCAの事業が社会的に認められたものであるという、説得力のある宣伝に欠けていることとも相まって、YMCAへの奉仕がこれから入会を促す人々への選択肢に入るだけの魅力に乏しいのも事実です。

しかし、時代の変化に適應したYMCAを支援す

るワイズメンズクラブとして、YMCAへの奉仕と地域社会への貢献によることで市民権を得る「奉仕の在り方」を考え、より大勢の人々に認知される魅力あるワイズメンズクラブとは何かを考える過渡期でもあると思うのです。

1970年代、京都では例会場が二極化され、例会のプログラムにも変化が出てきました。良し悪しは別にして、YMCA施設や公共施設での質素・儉約された例会と、一方は、若干の費用はかさむものの社交の場としての、快適な会場と食事のサービスがあるがために、きちんとした身支度と時間厳守を要求されるホテル施設の例会であります。時間を厳守しなければならないために、結果として詳細な毎例会の分刻みのプログラムを作る手間が増えました。

これらの体験を通して、私が実感することは会員減少に歯止めがかからないクラブに共通しているのが、会場のことはおくとしても、社交の場としての魅力と、緊張感のあるプログラムが足りない例会形式であります。新しい会員候補を連れてくるにふさわしい、もてなしの場と雰囲気、心遣いがあるかということであります。

会費の高い、安いで会員が増減することはさほどの理由にはならないと考えます。むしろ会費に値するだけの、質の高い例会のプログラムを提供しているかどうかであると思うのです。私達は日常生活の中にある、ひとときの非日常的な例会の中で潤いを求め、多くの友との語りを通して学び、人生の生甲斐と安らぎを得て、このクラブに入会して良かったという思いで自己研鑽が進みます。

そのクラブの形態が前述の逆であるとしたら、あなたはどちらのクラブに入会したいでしょうか。また、例会が待ち遠しいでしょうか。私が申し上げたいのは、誇りを持たない、ストーリー性のない例会を漫然と行っていれば、規律も規則もわずらわしい仲よしクラブとなり、その結果YMCAの力にもなれずにクラブの衰退を招く、ひとつの原因になるということです。

西日本区定款に示されているとおり、クラブの目的・モットーをより平たく具現化し周知徹底することでクラブの進むべき理念を明確にしたクラブづくりは、クラブの歴史を刻む上でクラブの伝統を守ることに他ならないと思うのです。その伝統を引き継ぐに値する魅力ある、楽しく有意義な例会を会員総意で、想像力を働かせて作りあげる

努力を怠ったクラブには衰退の道しか残されていないのです。

クラブはすべての会員に、「公平で規律と学びを实践する例会」が提供されるべきです。一人一票の権利の行使でマンネリ回避のために組織を拡充させて下さい。より大勢の会員の中で、「心に磨きをかけ人間関係を深める」ことで自己研鑽ができるのです。ワイズメンとしての経験と感動が学べるクラブ組織を確立することが大切であると思うのです。

会員の増強、維持が地域により偏重している現在、ワイズメンと呼ばれる人はどういう人か、私達のなすべきことは何か、それはこれからも変わることはありませんが、YMCAを支えるためのクラブの発展、ワイズの発展を考える時、その方法、手段は変化する世の中と共に「変化への挑戦」を怠ってはならないと思うのです。

YMCAが衰退するからワイズも衰退するという公式は、あってはならないのです。創造的破壊を繰り返し、これからの10年は組織力のある、新しいワイズメンズクラブづくりに取り組む英断が求められる時代であります。

かつてのような、「YMCA奉仕の魅力」にかげりが見えだしている現在、YMCAに忠誠を誓っているだけで、生きた奉仕も、魅力ある例会も工夫せず、前例を踏襲するだけのワイズメンズ活動はワイズメンズクラブの衰退につながります。常に私達は「働く人でなければならない」のです。

歴史あるクラブに学び、会員の加齢を憂うだけで手をこまねいているのでは、YMCAを支える使命に背くこととなりましょう。これからの時代、社会に必要とされるYMCAとするか、しないかは私達ワイズメンの誇りにもかかっているのです。

## プロフィール

澤田 賢司 (さわだ けんじ)

1993年 京都グローバルクラブにチャーターメンバーとして入会  
2000年 京都部地域奉仕事業主査  
2001年 西日本区会計  
2007年 西日本区EMC事業主任



創立者ポール・アレキサンダーのワイズ・スピリットは、時空を超えて今に伝わる。入会式式辞にそのDNAが埋め込まれている。

## 10 ワイズの真髓をたずねて — 語りつづける入会式辞 —

東京山手クラブ 鈴木 功 男

### I. まえがき

ポール・アレキサンダーが佐藤邦明\*に寄せた言葉、「たとえ3人であっても正しく伝えることが大切である」。

この意味するところは何か。

ワイズ・スピリットは、いわばワイズのDNAとして、国を越え、時を超え、如何に伝えられるべきかを示唆していた。そのDNAは入会式辞の中に埋め込まれていた。

\* (東京むかでクラブ・チャーター・メンバー、第23代日本区理事、元日本YMCA同盟委員長、少年時代に「全人教育」で育った。)

入会式辞は1930年Wilkes-Barreの第9回国際大会で、ポールがおこなった基調講演“Why be so exclusive?” (45頁～49頁参照)の骨子からまとめられたものであり、役員就任式辞もその中から分けてまとめられたものである。語り口調が残されているのはその熱弁の様子を今に伝えると同時に、理事自らの言葉として発する願いも込められている。

この二つの式辞が年度初めに国際本部から理事に一番初めに送られてくるのをみても、いかに重要視されているかが理解できる。

この入会式辞が頻繁に登場することに思いを馳せながら、この式辞が語るワイズの真髓を尋ねてみよう。

① THE INDUCTION CHARTERは、新会員個々の入会式に用いる「入会式文」と、新クラブ国際加盟の際の式辞「国際加盟認証状伝達式式辞」とを共用にしている。これは、新会員一人が入会するのか、新クラブ誕生により集団で入会加盟するのかの違いだけで、伝えようとしている

事柄は変える必要が無いからである。

② では、伝えようとしている中身は何か。一言で今流に言えば、「遺伝子情報」そのものであるといえよう。つまり入会によって、今までとは異なる「ワイズマン」という新たな人種に生まれ変わるために必要な「何か」。それがワイズ・スピリットという遺伝子であって、それが組み込まれなければ何事も起こらないからだ。

この遺伝子こそが国際憲法第2条「綱領」に示されているものであり、その際立った特徴を発揮する遺伝子情報はこれであると教えているのがこの式辞である。

また別な表現をすればこの遺伝子情報は価値判断の基準ともなるべきものを示唆し、私達の進むべき方向と道程を示すものとして重要な働きをするものでもある。

③ 入会・加盟したいと望む者は、このワイズ・スピリットを欲し、その日から遺伝子情報が我がものとなっていく過程に加えられることを喜びとし、それを希望したのである。もしこの遺伝子情報が正しく伝えられなかったり、欠陥が生じたりした場合には、個人としても集団としても異なることを信じる結果、ワイズ運動そのものの発展に問題が生じる。

④ 歴代の理事、先輩諸兄が苦心し、意を注いだのも実にこの点にあった。そして常に彼らが発した「原点に還ろう」との掛け声は、単なる誘導の表現に過ぎない。何を指しているのか分からない漠然としたものではなく、「綱領」に立ち、「入会式辞」に戻り、吟味・点検し、ワイズ・スピリットを再確認しようとする、立ち返る場所

をはっきりと示した掛け声であった。

リーダーは正しい情報を伝える義務と責任がある。正しい情報をどのように伝えるか、それが彼らの重要な任務であった。

- ⑤ 人の世は変わる。しかし変わってはならないものは何か、それを見分け、見通す洞察力をもたなければならない。私達は、個人の問題と共にワイズという組織そのものの健全発展の両面（一体の表裏）を大切にすることが故に、ワイズ運動の原点が示されているこの入会式辞について、特徴的なキーワードを追って、吟味したい。

## II. 式辞について

### 1. 式辞そのものについて概観する

- (1) 「式辞」は国際からどのようにして伝えられ、どのように使われるのか。

#### ☆加盟式

- ① 「式辞」は新たに理事が就任する前に、他のマニュアルと一緒に必ず国際から届けられる。常に正しい情報が間違いなく理事を通じて伝えられることが期待されているからだ。
- ② 「加盟認証状伝達式」において、「認証状を手渡す際の式辞」として理事によって朗読される。国際の権威ある行為として行われる。

#### ☆個々の入会式

- ③ 日本各区から配布されている日本語訳式辞によって、クラブ会長が朗読し、国際の権威ある行為として行われる。

- (2) 式辞の構成はどのようになっているか。

- ① 導入
- ② 国際憲法第2条綱領、ガイドライン201
- ③ ワイズメンズクラブの目的
- ④ ワイズメンとしての心構え
- 以上を受け入れる意思表示をした後、会員となることが公に宣言される。

- (3) 式辞はどういう役割を果たしているか  
列挙してみよう。

- ① 国際協会への加入であることを明確にしている。
- ② 入会者の決意表明
- ③ 協会の会員になったことを宣言する。
- ④ 全世界の会員がすべて同じ式辞によって入会する。
- ⑤ このことによって全世界のメンバーの連帯が期待されている。
- ⑥ しかも、この連帯は歴史を貫いて実現されている。
- ⑦ クラブとしても一会員としても生涯の指針となる。

- (4) では、入会することによって何が与えられるのか。

- ① 全世界30,000人の仲間が一举に与えられる。
- ② YMCAマンとして、YMCAの歴史も、機構組織も、奉仕の場も機会も一举に与えられる。先輩の築いて来た無限の財産が一举にあなたのものになる。

### 2. 式辞が伝えようとしているものは何か

通読するだけで分かることではあるが、式辞の中に述べられている特徴ある6つの言葉からその意味を探ることによって、全体理解の一助としたい。

- ① 「意味を確認する」
- ② 「モットー」
- ③ 「イエス・キリストの教えに基づき」
- ④ 「主事」
- ⑤ 「理想主義」
- ⑥ 「誠心誠意」

- (1) 「意味を確認する」ということ

なぜ、意味を確認するのか。後述の「理想主義」と密接に関連する。

- ① 「意味を確認する」という言葉の中にすでに価値観が含まれている。  
ある価値観をもつということは、ある立場

に立つということ。どの立場にも与しないということはアイデンティティをもたないことと同義的。

ワイズが或る価値観のもとに結び合わされているからこそ意義がある。そして、その結び合わせているものが何であるかを明確にするために、式辞は以下縷々述べるわけである。もし、私達の考えや行動が無意味なものであったとしたら、何も大仰な儀式も、組織も、存在の意味がなくなってしまう。あるいはその意味が別物であるなら何もワイズメンズクラブでなくてもよいのだ。

別な捉え方をすれば、今まで自覚されず、何の脈絡もなく、自然発生的と言っても良いような考え方や行動があったとすると、一見同じ現れ方をしている、意味を自覚したときのものとは本質的に異なるものであることを気づかせようとしている。

② たとえばBFを見てみよう。1931年、このプロジェクトがスタートしたビショップ・ファンドと呼ばれていたことはご承知の通り。教会団体のビショップ資金になぞらえて命名され、その後、使用済み切手の収集売上げが加わるようになった。これは、北米のワイズが自分達のためではなく、海外から多くのワイズを招くための働きに大きな意義を見つけ、盛んに行った。これが国際的に広がり、ポイントを競うゲームのように定着した。

③ ここにまた別の意味、つまり、捨てられるしかなかった価値の無い使用済み切手が、価値あるものに変えられていくところに意味を見いだした。そして、そればかりか、そのことを自らにオーバーラップさせて、ワイズダムにかかわることによって、それまで自覚されないうちの自分が、いつしかあるものに変えられていっているのではないかと、ふと、かすめるものがある。その過程がワイズ運動なのではないか。いわば限りない「問いかけ」と「意味の発見」の過程そのものがワイズ運動であるといつてよい。

BFはそうした象徴的な出来事を秘めながら深く熱心に受け止められていった。

こうした意味のあるところにこそ私達のアイデンティティが確かなものとされていく。

## (2) モットー「強い義務感をもとう 義務は凡ての権利に伴う」

ワイズマンなら誰でも知っている文言。ポール・アレキサンダーは1922年初の国際憲法草案の段階から入れていた。いかにも判事らしい言い回し。

① 現在も、このモットーは言葉としては頻繁に発せられ聞かされてはいるが、実際にはこの意味がどのように私達の中に受け継がれ、生きているのだろうか。単なる言葉だけのことで終わってしまわないようにしたい。

では、私達はこのモットーを具体的にはどのように受け止めたら良いのだろうか。

第1に、民主主義の根幹をなす。

第2に、組織を確実に維持発展させるための必要要件

第3に、常に具体的。結果的にではあるが、言行一致へと導かれる。

② 「権利」という言葉は「自由」という言葉と密接な関係をもっている。私達は自分の自由を限りなく拡張して行けば隣の人の自由とぶつかったり、犯したりすることになることをよく承知している。ここに自分の自由を大切にすると同様に、隣の人の自由を認め守る。

それと同時に、自分の自由を自分が自発的にコントロールする、つまり自律的に制御される関係のあるところに「権利と義務」の関係が成り立ち始める。これを私達は自明のこととして受け止めている。

この関係は多人数を擁する組織となると、益々曖昧なものでは済まされなくなる。ここに民主主義という、みんなの話し合いでことを決め、進めていく形が成立する。偉い一人の指導者がことを決めて民衆を治めるのではなく、民衆が合意形成の過程で導かれる、あるリーダーシップの中でその方向を見出していく。フォロワーにもリーダーシップと同じ権利・義務の関係のもとにある。これは、いわゆる「烏合の衆」の民衆でなく、見えざる

中心を共有している会員だからこそ成り立つことで、誠実が裏付けとなっている。

- ③ ワイズダムにおいては、権利・義務は難しいことの代名詞ではなく、体の中に染み込んだマナーとして生きている。

では、ワイズの活動において、この権利・義務が、あるいは自由が、最初に、そして頻繁に出合うのはどこか。それは「話し合い、会議、協議」の場である。

私達の間で、自己中心的な主張や根拠不明の発言が起こらないとはいえない。主張や発言が集団の中で価値をもつためには何が必要か。それはその主張を裏付けるはっきりした根拠、もしくはその主張の元となった事実を明らかにする必要がある。それが義務と呼ばれるもの。

- ④ 実はこのようなことを義務だという以前に、別な意味で重要な意味を持つ。すなわち良い議論の仕方は、結果的に「協働思考」を成り立たせることともなり、しかも参加意識の向上にも寄与し、より質の高い考察・意志決定へと導く重要な要件でもある。

- ⑤ 「民主主義は面倒なものよ」とのつぶやきがある。「結局は少数切り捨てサ」との嘆きがある。

それは何かと言えば、手続きの問題であるときえ言われるゆえん。役員会、代議員会などの議案の扱い方一つ取っても、正しい取り扱いによって整えられているのは、集団を正しく導くための、メンバーの権利でもあり義務でもある。

また単純に、少数切り捨てならば、全体主義となんら変わりなく、少数意見のもつ意義を尊重し、聞く耳を持ち、どう活かすか、ここにも権利・義務の関係がある。

このように、このモットーは単なる飾り物ではなく、私達の中に生きて働く活動原理となっている。

- ⑥ 別の点から本音が聞かれることがある。「義務」という言葉に強い拘束感があり、表に出にくい反発感があることは事実ではある。

これは義務を、人から押し付けられたものと受け止めるところから起こる束縛感で、自発の、自ら課した義務であるならば、励みともなり、集団の規律を整え向上させる導きともなる。ここに義務と権利を楽しむりべらるなワイズダムが形成されていく。

- ⑦ 自らの権利を投げ出した青年のエピソードがある。YMCA全人教育で育った熱心な少年が大学時代に学徒出陣した。終戦になり、部隊が待ち焦がれた引き揚げ船に乗る直前、チフス患者が出たために全員足止めとなった。一人の青年将校が患者と共に残ることを進み出て、他の全員は帰国が許された。看病の甲斐あって患者は回復した。しかし、青年将校は感染し還らぬ人となった。学徒出陣少尉の名は八田眞穂。YMCA少年時代、リーダー佐藤邦明の愛するボーイズの一人であった。

「友のために自分の命を捨てること、これ以上に大きな愛はない。」ヨハネ15：13

- ⑧ ワイズマンはワイズダムという特筆すべき無限の恩恵を受けて活動している。その過程を通して、次の世代に何を伝えるか、伝えるべきメッセージは何か、クラブとして、個人として、確実に伝えるべきメッセージを発する義務と責任があることを忘れてはならない。

### (3) 「イエス・キリストの教えに基づき」

この一言は、YMCAがその存立の基盤を表しているのと同様にワイズの中心を示している。もしも、この運動に中心が無いとすれば、中心ならざるものが中心となることさえ起こり得る。

- ① 「イエス・キリストの教え」ということを端的に言えば、「聖書を通して示されたキリストの愛」。別の言い方をすれば、「神と人との関係」、そしてそれに導かれて「人と人との関係」を聖書は教えてくれている。その上、聖書は非常に具体的である。

「愛は忍耐強い。愛は情け深い。ねたまない。愛

は自慢せず、高ぶらない。礼を失せず、自分の利益を求めず、いらだたず、恨みを抱かない。不義を喜ばず、真実を喜ぶ。すべてを忍び、すべてを信じ、すべてを望み、すべてに耐える。」(コリントの信徒への手紙Ⅰ：13：4～7)

- ② 聖書は、すでに信仰を与えられた者にも、未だ信仰を得ておられない人々にも分け隔てなく、恵みの言葉として与えられている。

私達はまさに人と人との関係の上に成り立っている集団を形成している。その集団の中にある個々人が外に向かってかかわりを持つ時、何を基盤として関係が成立するだろうか。少なくとも自己中心的ではない、この運動の根底にある本質中心主義であるということ。ゴールデン・ルール「隣人を自分のように愛しなさい」(マルコ12・31)に示された人間関係の基盤が意識・無意識を問わずあるからではないだろうか。

- ③ 私達は、聖書との出会いによって新しい視点を与えられ続けている。自分自身の問題ばかりではなく、他の人との関係においても、ただの「人」ではなく、「人格」としての交流が始まり、尊敬の念をもって交わるものへと導かれる。

- ④ 主が渡される夜、弟子達の足を洗って、あなたがたも互いに足を洗い合うようにと言われた。そのことから、人に仕えるものの姿が示され、下僕としてどうあるべきか、そこには、文字通りのただの下僕ではない、主のために用いられるサーバント・リーダーシップが示唆されている。

ワイズダムは、サーバント・リーダーシップが自然に滲み出てくる世界といえよう。

- ⑤ 日常、ワイズライフの実際の場面を振り返って見ても分かる。

さまざまな協議の場、語らいの場などで、頻りに交わされる味わい深い言葉からも、ユニークなアイデアからも、ここには何かがあることを伺い知ることが出来る。

交流の場面でも、ワイズマンらしいかわりの仕方が自然になされている。会員歴が古い、新しいは問題ではなく、ワイズ・スピリッ

トに満ちた新人、先輩は先輩で勿論いぶし銀のような味な輝きを見せてくれる。たとえジョークの中にもメッセージ性がある。先輩にはただの年輪ではない「スピリットの薫り」「スピリットの煌き」がある。

あるいは、「握手一つでも違う」と言えばほとんどの人が納得出来るのではないか。だれもが実感として手の感覚の中に記憶しているはずだから。この手の中に自分の心も相手の心も包み込んで交わす握手。区大会の時、国際大会の時……ワイズマンは「この感覚を」ワイズ以外の人達にも伝えたいと思っている。これは極く自然の気持ちの働き。「分かち合える確かな何か」がある……、一般社会ではないあるものが……。

- ⑥ ワイズマンが他とは違う秘密の中身、それは、人の自己実現のためにチャンスを提供し支えることによって、自らの自己実現をも添えて与えられていく共に歩く世界。実はここにある。これが兄弟愛に結ばれた世界を築き上げる決め手でもある。

- ⑦ もしも、ワイズという集団がクリスチャン100%ならば「綱領」のこの文章はなかったであろう。そうではないことを前提として、全く新しいワイズマンという人種がここにあると言う、その存立基盤を明確に示しているのがこの綱領である。

しかもYMCA結合の基準「パリ基準」と同じベースに立っていることを明らかにすることによって、YMCAとのパートナーシップの、いわば決意表明の裏付けとしている。これを国際憲法の最重要部分に位置付けているのは私達の誇りでなくて何であろうか。これが、栄光あるバック・ボーンとして私達を限りない発展へと導いてくれる原動力となっている。そしていつの時代にあっても変わらない私達の進むべき方向をはっきりと指し示してくれている。

- ⑧ この方向に進みたいと願う私達の姿勢そのものが「イエス・キリストの教えに基づき」ということであり、大きな求心力となってワイズ運動を導いている。

ワイズ運動がさまざまな展開、それぞれのクラブが独自の個性を作り上げながらも、ばらばらではなく、多様性の中の一致をみせているのは、この求心力が同時に生み出す遠心力によるエネルギーの証しでもある。

⑨ 主題聖句:「すべての人を一つにしてください」  
(ヨハネ17・21)

イエスが渡される夜、祈られた祈りの一節であるが、YMCAの主題聖句としている。YMCAはエキュメニカルの一翼を担って、教派間の一致運動から発して今では宗教を超えた一致への広がりを見せている。

⑩ この聖句がYMCA、そしてワイズメンズクラブの主題聖句とされるに至った経緯をメモしておきたい。

19世紀半ばから、リバイバル(信仰復興)の波、福音的プロテスタンティズムの流れの中で象徴的な出来事としてYMCAが誕生。

1855年第1回世界YMCA大会「パリ基準」採択。

1905年世界同盟50年第16回世界大会で、補助記述を付けパリ基準を再確認。その折、ヨハネ17章21節による福音主義的同盟の精神「これみなひとつとならんためなり」を主題聖句として採択。

その80年後、1987年ワイズメンズクラブ国際議会は、数年の議論を経てラゴス会議において、YMCAと同じ基盤に立つことを確認し、同じヨハネ17章21節を主題聖句とした。

これは、先に1981年YMCA世界同盟とワイズメン国際協会との間で交わされたパートナーシップの原則に対応するもの。

(4) 「主事」とは何をする人のことか

《パートナーシップの要》

① 原文では主事のことを次のように書いている。

“The secretaries are professionals, trained specialists whom we employ to supervise our work……”

まず気づくことは“we employ”。何か奇異に感じる向きがあるかも知れない。つまり今の私達には、私達が直かに主事を雇っているという感覚が無いからだ。しかし私達がワイズ入会と同時にYMCAの会員になっているから、結果的にはそうになっている。

次に気づくことは“to supervise our work”。“主事はわれわれの事業を管理するために……”とある。日本語で「管理」といえば、ただ座っていて帳面でも付けるといような、お役人的なイメージを受けるかも知れない。しかし、スーパーバイズするその中身は何か、機能的な面を考えると、「指導、助言」をすることによってその方向性を整える働きがある。

ちょうど、教育分野で「指導主事」が、カリキュラムなど教育方針に指導助言を与えるような働きを考えると、この場合は良くマッチした理解が得られる。

“professionals” “trained specialists”からも分かるように、主事は特別な訓練を積んだスペシャリストで、グループ・ダイナミクスなどさまざまなノウハウ、また地域から世界に至る情報を持ち、提供することによって、ワイズダムとのパートナーシップの要となっている。

主事の働きに、サーバント・リーダーシップの姿を見ることが出来る。もし、若さ故に活躍の場が小さくなっているようなことがあっては、もったいない話ではある。

② わが国では、1980年代半ばを過ぎると、主事とワイズとの関係が急速に変化して来た。それに追い打ちをかけるようにそれまでの「担当主事」の名称は一旦「連絡主事」へと変わった。そのことによってどういう変化が起こったかということ、スーパーバイズする主事は姿を消し、ただYMCAの行事の予告をしたり、募金集めのお願いをしたりする連絡係へと移行していった。これは、日本語の持つ意味「連絡」を皮肉にも正しく反映してしまった、それ以上の何物でもない結果によるもので、ネーミングの威力がはっきりと表れた一件。しかし、東日本区ではその後「担当主事」に戻された。

この「スーパーバイズ」を中心に、私の体験の周辺から考えてみよう。

- ③ 私自身が直接かかわりを得ることの出来た主事の中で、真のスーパーバイズを実行した方々の一部を、敬称略で挙げるのをお許しいただきたい(年代順)。

東京関係では、永井三郎、木本茂三郎、齋藤総衛、齊藤寛、小林道彦、羽鳥直之、井口延。

同盟関係では、宮崎幸雄、本行孝司、後藤邦夫、吉永宏。他のYMCA関係では、吉村恭二、高谷泰市など、まだ他にもたくさんお名前を挙げる事が出来る。

木本茂三郎は威厳をもってワイズを叱ることの出来た気骨のある人であった。中でも齋藤総衛、齊藤寛、本行孝司の三人は「産婆術」の上手な使い手として筆頭に挙げる事が出来る。両齋藤に共通するのは一度捕まると話が長くなること。

- ④ これはいったん「産婆術」をかけると完結するまでの応答が一巡しないと意味をなさなからである。「産婆術」というのはソクラテスが応答のステップを通して「気付き」のチャンスを与えることにより青年達の育ちを援助した一連の応答のニック・ネーム。

子どもは、産婆が産むのではなく、子ども自身が生れ出る。それを手助けする役割がお産婆さん。

青年は、考えを人から教えられるのではなく、自分自身で生み出すことこそが本人にとって本物となる。そこにいわば触媒のように、質問を投げかけ、問答を通して、忍耐強くそこに至る過程を手伝う。思考を耕すことを手伝う。青年がその考えは自分で生み出したのだと確信した時、産婆にとっては喜びの時であり、人知れず役割は終わる。青年は産婆がいたことさえ知らない。

青年の中から生れ出たものが青年自身を育てあげる。ここに真の成長がある。

主事に共通していることは、ひとことで答えを言ってしまうと済むようなことを、あえて質問をしてくる。時には答えに窮するのを、意地悪く楽しんでいるようにさえ思える時も

ある。しかし後で思えば、こうして産婆術をかけて会員を育て、ワイズメンズクラブを育てていたことに気づくのは、私だけのことであろうか。

主事は、人を「マス」でなく「個」で受けとめていた。

- ⑤ 日本区での入会式辞の変遷を見てみる。

日本では、はじめから完全訳があったわけではなかった。

先輩ワイズ鈴木謙介、坂村友三らが身近な指導を受け、その先輩から私が影響を受けたことをいわば「孫影響」として見れば、奈良傳の名を挙げないわけにはいかない。

奈良傳は日本ワイズ運動の50年を、熱誠をもって指導し育て上げた主事の中心的存在であった。

奈良傳が終戦直後、最初に抄訳として入会式辞をまとめたのにはある意味を汲み取ることができる。それは、奈良傳が日常的に指導し、各地で話す内容は、ことごとく入会式辞の中身を奈良傳流にして伝えていた(奈良傳の子息、奈良信はユーモラスな語り口で名を馳せたが、彼の話のネタもほとんどがこの「入会式辞」と“History of Y'sdom”から。あの「奈良信ブシ」が今、もっと聞かれてもいいのだが……)。

また奈良傳ばかりでなく、当時の主事達はYMCAそのものの体質からワイズとの関係を本質的にとらえていたから、例え入会式辞の一言一句を、字面として知っていなくても、結果としてその内容が実態化されていた。

その上に、「ワイズの心得」とか「メンバーシップサービス手引書」「ワイズフーズ」などが、抄訳の不足を上回ってかなり補っていたことも見逃せない。したがってこれらのバックグラウンドを考え合わせると、抄訳でも十分にその役目を果たしていたと見る事が出来る。

YMCAのカンパラ原則に歩調を合わせるかのように、1974年にワイズ新国際憲法、75年に区新定款が発効すると時代は新たな展開を見せ始める。79年に奈良傳を天に送り、日本のワイズは中心的指導者を失う。

一方、75年にいったん日の目を見た「完全

訳・入会式辞」は、いつの間にかまた別の「抄訳・入会式辞」となり、しかも奈良傳からは孤児のように取り残され、一人歩きを余儀なくされる。

そこへきて、スーパーバイズする担当主事がだんだん姿を消していく。マニュアル類も移り変わり「抄訳」を補うことから後退していく。そうなると「抄訳」はその存在のバックグラウンドを失ってしまう。それでなお十分にその働きを続けることができるのであろうか。時代は、完全訳を期待していた。

## (5) 「理想主義」とは

(1) ポール・アレキサンダーは頻繁に「理想主義」ということを言っている。

私達はそれを漠然のままか、あるいは右から左へ聞き流してしまう傾向がある。この入会式辞の他に役員就任式辞にも、役員に期待される特質として「I」で始まる4つの言葉の第1番目にIDEALISM「理想主義」を挙げている。この「理想主義」とは一体どういうものなのか、まず百科辞典で見る。

① 「道徳的、社会的理想の実現をひたすらに追求する立場。理想だけを真の实在とし、現実と妥協することなく、自分の犠牲を顧みないで理想の実現を追求する主義。⇔現実主義

別の辞典では

② 「ある究極目的あるいは価値の実現を目指し、どこまでも努力していく精神的態度。また、人間性の限りない完成可能性を信じ、最高の人格的価値を実現しようとする道徳的志向。」

(2) ポール・アレキサンダー達に影響を与えたと思われる理想主義を訪ねてみよう。

① 彼らに影響をもたらしたと見られる時期を特定すれば、19世紀末期～20世紀初頭にかけて、いちばん影響を受けやすい彼らの青年期がこの辺に当たる。

② その思想は、誰による、どういうものか追跡していくといくらでも広がっていく。

当時の倫理的思想傾向からたどっていくと、日本でいうドイツ観念論ともいわれる理想主

義ではなく、イギリス理想主義運動(T.グリーン、E.ケアド、G.S.モリス)と、その影響を受けた J.デューイ(1859～1952)の名が浮かび上がってくる。

③ 行安茂著「デューイ倫理学の形成と展開」を紐解いてみると、不思議にもポールが言ったり考えたりしたことと、ぴったり符合することが分かる。そして、これが現在のYMCAの基本的な考え方とも共通し、それどころか、アメリカのビジネス、政界にも、この考え方が根底にごく普通にあることに気づかされる。

(3) このテキストを概観する。

ワイズ運動と重ね合わせながら整理する。

A 《理想主義者が思考する時、人の中ではどうということが起こっているのだろうか》

理想実現に向かう過程そのものが理想的であること。

これは、「結果よければすべて善し」ではなく、結果に至る過程そのものが理想的なステップを踏んでいく。

① 理想は、われわれが環境に適応していくのに必要なくつかの可能性を前もって示してくれる。

② 理想によって目的が明確化されているから、それに至る取るべき手段として、多くの可能性の中から一つを採用し、他を排除する価値判断の尺度ができる。

これは同時に評価の尺度ともなっている。

③ 価値判断は、どんな場合においても比較なしには行われない。したがって、選択した理由の説明と同じく、拒絶した理由も明確である。

④ 価値判断において大切なことは、現在の行動を、将来において達成されるべき目的や満足との関係において評価することだ。

つまり、常にある目的の展望の下になされる。

⑤ 目的はまだ実現されていないから、イメージするしかない。しかし、それが一つの重要な価値として自分を動かし、思考、欲求、努力の対象となる。

このような目的は、自己を統一することができる。



⑥ 最も充実した活動というのは、自己と行為とが統一された活動を行っている時。

どんな行為も本人の注意を吸収するのでなければ、完全にはなされないことは明らか。注意が集中している状態においてこそ自己実現の理想が可能になる。

現在の行為の他に、ある目的を立てることは自己分裂を起こさせる結果になる。

⑦ 共通の目的をもつ自己と他者は共同体を作る。そして共同体を満足させる行為によって自分自身を満足させることが出来る。いわば一心同体的と言ってよい関係が成立する。

このような過程において共同体の中で人は個性を実現することが出来る。

⑧ 目的に向かって完成されつつある現在の過程は、絶えず完成し、成熟し、洗練する永続的過程の中にある。その永続的過程そのものが理想主義者ワイズにとって重要な意味をもち、その永続的過程こそがワイズ運動と言えるのではないか。

## B 《理想主義者は「連続性と相互作用」で考える》

① 何がワイズを成長させるのか

理想的自我は未来の視点から見ている。ここに可能性としての自我が、現在までの習慣的にある自我に働きかけ、これを修正し、新しい自我へと発展させる動機となる。より低いレベルから、より高いレベルへ、しかも、もとの要素を全く排除してしまうことなく、これを生かす方向において発展させる。

② 何がワイズという共同体を形成させるのか

自我が自己中心的状态から関心を拡大する時、自我を拡大させることになる。これによって他人の要求や期待を、自我の視野の中に入れることができる自発的感覚が備わってくる。ここにワイズ運動という目的を共有することが可能な状態ができる。つまり共感的態度が生まれ、共同体を形成していくことが出来るようになる。

③ 何が分かちあいを成り立たせることが出来るのか

ある個人のある行為を判断する基準と、他の個人の行為を判断する基準が一つであれば、

それが客観的基準となり、共に分かち合うことができるようになる。

④ 何が価値判断を確かなものとするのか

目的がその尺度となるが、多くの可能性(選択肢)の中から、さまざまな分析、比較、シミュレーションを通して熟慮の機会をつくる。この過程を通して価値判断を確かなものとさせていく。

⑤ 何が私達を動かすのか

理想や目標は、想像を通して生まれる。それが思考と行動に転換されて、もろもろの可能性をつかむ連続作用を起こさせる。自己も環境との関連において理想的目的に合わせて絶えず再形成される過程に取り込まれる。ここに、常に前進する人間達に特有の開拓者精神となって働く習慣が根付く。

この開拓者精神がワイズを動かし、ワイズ運動を発展させていく。

以上「理想主義」を概観してみると。私達のさまざまな体験とオーバーラップするものがここにあることに気づく。そればかりか、理想主義はなにもポール達だけのものではなく、私達自身の中にすでに、無意識のうちに入り込んでいたものであることに気づかされる。そして、理想主義は時代の遺物のように、あるいは私は理想主義者だなんて恥ずかしくてとても言えないと思っていたことが、実はそうではなくて、時代を貫いて、常に新しい資質を生み出し続ける態度であると知らされることになる。

ポールは、ワイズ運動の絶えざる発展の秘密をここにみていたのだと分かる。

## (6) 「ワイズマンは誠心誠意働くものであること。」

① 「誠心誠意」の元の語は他の語ではなく、「Enthusiasm」「熱心」「熱中」という言葉を使って、その語源から説明し、ワイズ・スピリットの根源を解き明かしている。

日本文を引用すれば「“Enthusiasm”はギリシャ語に語源をもち、“en”は英語の“in” “Theos”は神を意味している。誠心誠意の人

とは、神がそのうちに宿る人のことである。ワイズ運動における誠心誠意あふれた活動とは、常に靈感によって動かされている活動のことである」と述べている。

- ② つまり、誠心誠意働くものの源泉が何であるかを示唆することによって、ワイズ運動の普遍的で、永続性のあるものへと導くものの存在を意味している。いかなる時代にあっても揺らくことのない価値観に裏付けられた運動がここから発している。ポールが熱誠をもって伝えたかったのはこのことである。そして、このことによってYMCAへ忠誠を尽くすものの基盤が一致することを示唆したのである。

### Ⅲ. むすび

6つの言葉を手掛かりにそれぞれの意味を探りつつ、入会式辞の真意と全体像に迫った。

私達は、これらのことを自らのものとし、ワイズメンとなることを願って国際加盟を許された。まさに、この式辞にはワイズ・スピリットが凝縮されており、入会式においてワイズのDNAが伝達され、そこから始まる日常の活動を通して、確かなものとされていく過程がワイズライフであるといえることができる。

ワイズの真髓はここにあると、入会式辞は今もなお、私達に、そして永遠に語り続けていることを知った。

加盟入会式辞も役員就任式辞もポールの手になるものであると冒頭に述べた。読めば読むほど思いが広がって、興味あるものを多く含んでいるのが分かる。

ポールは、ワイズ運動が自分達のひざ元を離れて世界に広がっていくさまを思い描きながら、この式辞に多くの心の丈を注ぎ込んだのであろう。しかし、この運動が彼自身に所属するものではなく、見知らぬ所へ離れていくべき、一つの命をもった客体として見る事が出来たが故に、十分な配慮を、いわば持参金のように持たせたとさえ感じさせる。

常に、原点に帰ろうという呼びかけのある時に、帰るところとは、ワイズ・スピリットの原点を探る手掛かりがここにあるのだということを再確認

した。そして、その呼びかけは後退ではなくて、必ずその後に来る跳躍のためのスプリング・ボードのことを意味しているはずである。

日本のワイズダムが爽やかに、より豊かに成長を続けるためには、どうしてもYMCAのスーパーワイズが必要である。YMCAとワイズの発展の秘密を、この式辞は静かに教えてくれている。そこにYMCAとワイズのパートナーシップの原型が見えている。

先輩達と、まみえることのない後輩達との間にあって、いま私達は何をしなければならないか、自らへの問が発せられていることを知る。これがまた、新たな意味の発見へとつながるものであることを念じ、あわせて、この拙文にお付き合いいただいたことに感謝しつつ、この稿を終えたい。

#### (参考文献)

RDマニュアル、History of Y'sdom、日本ワイズメン運動70年史、ワイズフーズ、ワイズメンズクラブの心得書(訳・森田薫 1969)、Club officers manual、メンバーシップサービス手引書「デューイ倫理学の形成と展開」(行安茂著 以文社刊)、聖書。

【編集委員会註】日本語の「ワイズメン」は、原文では「Y's Man」で、本来ならば「ワイズマン」である。しかし、日本の多くの資料などの表記は「ワイズメン」で定着して日本語となっているが、本稿ではあえて「ワイズマン」と表記して、国際憲法や資料にあるポールの原文表記の意味にも関心をもってもらうことを願っている。

#### プロフィール

##### 鈴木 功男 (すずき いさお)

1965年 東京クラブ入会  
1987年 第33代日本区理事  
1994～98年 日本ワイズメン運動70年史編集委員長  
1998年 ビデオ「日本ワイズメン70年の歩み」制作  
2000年 東京インターナショナル・ファミリークラブ転会  
2005年 東京山手クラブ転会



## WHY BE SO EXCLUSIVE?

*By Paul W. Alexander of Toledo, Ohio*

**The thought from this cutting may well be used in inducting new members or installing new clubs.**

One of the great indoor sports of the world of late years has been organizing.

One consequence of organization is to confer a certain distinction upon the members to draw a line of demarcation which distinguishes them and sets them apart from other men, whether it be cause or effect it is a fact that if there is not something to distinguish the member from the non-member there is no organization. In many cities of the world the Y's Men's Club is recognized as the most exclusive organization in town. But our exclusiveness is not due to an unwarranted use of the blackball. We do not exclude members that way. Our method is more like that of some of our great institutions which, while commonly regarded as our most democratic, are nevertheless inherently exclusive. Take our armies. Remember how, during the war, thousands of doctors worked night and day examining recruits? Why? To exclude the physically unfit! Take our schools. Did you ever hear of a school that held no examinations or kept no record of the students' grades? Neither did I. And why do they all do this but to exclude the mentally unfit! Take our churches. The different churches set up their creeds and dogmas and doctrines and say to the neophyte, "Unless you hold these beliefs you may not be received into the fold." And thereby they exclude the non-conformist, the spiritually unfit, if you please.

But the Y's Men-and please bear in mind that throughout these remarks when I say "Y's Man" I mean Y's Man in fact as well as name, Y's Men are not concerned with such things. We care not if a man be athlete or weakling; college graduate or self-schooled, whether he believes this, that or some other religious doctrine; whether he drive a Lincoln or ride the street cars; whether he be an executive or an janitor; whether he live in an avenue or an alley.

The Y's Men demand something far more precious, something far more rare than any of these requisites. That is why we are more exclusive. The basis of membership in the Y's Men's Club is character -an idealism that expresses itself in sacrificial altruism. The Y's Men must be primarily interested in the welfare of others. He must declare his purpose in life to serve rather than to be served.

Now let us look at the situation frankly. We cannot kid anyone else and we are foolish to kid ourselves. If a fellow seeks increased business contacts, social or athletic opportunities or personal advantages of that sort he will find them in greater abundance (with the possible exception of genuine fellowship) in other excellent

organizations designed to provide that sort of thing. But if he seeks increased opportunities to be useful to humanity he will find them in our club in richest abundance.

And let us get this straight. We do not arrogate to ourselves all idealism. We claim or seek no corner on the market of unselfishness or altruism. If a club is composed of nobody but swimmers it doesn't follow that all swimmers belong to that club.

The Y's Men do not hope to compare with many other organizations in the matter of size, wealth, prestige, publicity popularity etc. But there is one ground upon which we need fear no comparison. And this is in the matter of ideals. I can learn of no organization which places greater emphasis upon and fosters more zealously its ideals as an organization and the ideals of its individual members than does the Y's Men's Club. This is at least one ground upon which we stand preeminent, and how silly -how very subversive- it would be for us to allow considerations of modesty to cause us to hide under a bushel this torch of idealism which is at once our inspiration and our guide!

In the convention hall at Atlantic City where our International Association was born eight years ago were two huge banners. One bore the inscription "And Their Young Men Shall See Visions." The other read "Where There Is No Vision the People Perish:" And these legends have woven themselves deep into the warp and woof of our Y's Men's Movement. A fellow who has not the capacity to catch the vision, to sense the need, to feel the urge, to absorb the inspiration for the kind of idealism we stand for has not the capacity to be a Y's Man.

It is because of our insistence upon this exclusive standard -this collective and individual idealism that the Y's Men's Clubs throughout the world have been said to excel in quality of membership- that our personnel is our pride! Just as surely as we, whether receiving a new member or retaining an old one, discount even by one percent this fundamental requisite, idealism, just so surely do we strike a blow at the very heart of our movement.

**To be a Y's Man means to be an idealist-one whose conduct is motivated by an idealism that expresses itself in sacrificial altruism.**

Every Y's Man realizes that next to the church we, the Y, are the greatest character builder in the world, placing emphasis on boys and young men, the citizens of tomorrow. Next to the day schools and colleges we are the greatest educational factor.

We lead the world in physical education and development. We have few rivals in breaking down the vicious barriers erected by diverse creeds, castes and cultures throughout the world. Our achievements in nearly every country make us a leading foe of international and interracial misunderstanding and prejudice, and thus a powerful factor for world peace, always extolling, never disparaging patriotism.

The central objective of the Y's Men as defined in our statement of purpose, is "To serve by active, diligent, personal and united effort in carrying forward every phase of the program of the Young Men's Christian Association."

**To be a Y's Man means to be loyal to the Young Men's Christian Association.**

Not necessarily to subscribe to any obsolete theological doctrine but to be in sincere sympathy with and thoroughly devoted to the fundamental purposes of the Association as revealed in the good it is accomplishing at home and abroad.

In the upper border of the triangle comprising our emblem appears the word "International," indicative of the scope of our brotherhood and the breadth of our purposes.

Your World Outlook Committee and others for some time have been broadcasting the aphorism, "The measure of a man is the breadth of his horizon."

That is one thing the Y's Men cannot tolerate in their own ranks, the fellow who takes no time for nor interest in world affairs or the problems of other nations and peoples. The measure of such a man is too small. Our movement has no place for such dwarfs and pygmies. The Y's Man need never fear to be tested by this standard -to be measured by the breadth of his horizon, for:

**To be a Y's Man means to have a horizon as broad as the world itself -to be world-minded.**

One of our primary ideals is expressed in our motto: "To acknowledge the duty that accompanies every right." This motto was adopted because of the noticeable tendency of most of us -particularly American citizen- to insist upon complete enforcement of our various rights, while remaining oblivious to the duties upon which these rights are based.

The simplest explanation of our motto can be made by way of illustration. As you drive along a highway and approach a traffic light showing green you breeze through the intersection secure in the knowledge no car is going to crash into you from the cross street. Why is this? Simply because you know that on the cross street the traffic light is showing red, and that all cross-traffic has a duty to stop and give you the right of way.

A traffic light showing green one way and with no red light showing the other way would be worse than useless.

There can no more be a right without a corresponding duty than there can be a green light without a corresponding red light--- then an object can have a right side without a left side, or a top without a bottom.

A recognition and discharge of some duty is what protects you in every one of your rights.

At the various cross-roads of life there is seldom a traffic light to point out where lies the right and where the duty. In some realms, particularly the social, moral, interracial and international, we recognize many rights but the duties are often obscured. Especially are they obscure if, it is our wont, we concern ourselves almost solely about our own rights but the duties are there none the less. Our motto challenges us to think less about enforcing our rights and more about discovering and discharging our duties; less about what is due us, more about what we owe; less about ourselves, more about others.

**To be a Y's Man means to acknowledge the duty that accompanies every right.**

One of our simpler duties as Y's Men is to attend club meetings regularly. Another is to meet financial obligations promptly. And there are some more, equally simple, such as attending, supporting and reporting conventions, answering communications promptly, reading -not merely subscribing to- our pages in "Association Men."

By far our most important duty is to engage diligently in all committee work of the club and every activity designed to accomplish our purpose. The present high standing of our clubs in, 160 cities, in a dozen countries on almost every continent, is due to the results produced, the service rendered, the objectives actually attained by the Y's Men. Our international committees have disseminated a wealth of material-hi fact there was some criticism that they have overburdened the local clubs with suggestions, too. (Which only goes to show what opportunities are ours.) But these committees are not doing our work for us. They can only point the way. Every individual Y's Man does his work,

Our Constitution says there shall be but one class of members -active. And it means just that.

The old adage says "Well begun; half-done." I think the fellow who got that off was doing some "wish-thinking" trying to kid himself along. It's generally a simple matter to start something. What takes the intestinal fortitude is to carry on and on and on. Anybody can make an occasional spurt, but to continue at a set pace is what requires the stamina.

The Y's Man is not merely a starter, but a continuer. And this he cannot be without

enthusiasm. To be a Y's Man means to be enthusiastically active.

Summing up, to be a Y's Man Means (1) to be an idealist; (2) to be loyal to the Y, (3) to be world-minded, (4) to discover and discharge our duties, (5) to be enthusiastically active, Verily, "It means something to be a Y's Man!"

You know what it means. And why does it mean all this? Because we are the most exclusive club In town -which, after all, is merely a provocative and challenging, a dynamic way of emphasizing our insistence upon the most intense and most rigorous idealism..

And my postulate to all Y's Men is this: the genius, the very salvation of our movement lies in this sort of exclusiveness, this discrimination. The moment we weaken our resistance and let down the barriers to receive or retain a member who has not our ideals or the capacity and will to develop them -to catch the vision- that moment do we let in the drop of poison that may grow and spread and add to itself until eventually it permeates the entire

system causing the paralysis which means death.

I propose that here and now we all take a moment to search our souls and see if we still have a right to our membership -whether we personally need fear the processes of exclusion. Let each one of us ask himself, Have I lost any of the idealism with which I was formerly inspired? Am I in full sympathy with the Y? If not, am I standing back-knocking, or am I honestly trying to rectify matters? Dare I submit myself to be measured by the' breadth of my horizon? Am I thinking about my rights to the exclusion of the duties on which, are based the other fellow's rights? Am I a "knife and fork" Y's Man or worker -am I enthusiastically active?

And to this idealism expressed in sacrificial altruism; to this loyalty to the Young Men's Christian Association; to this world-mindedness and breadth of horizon; to this greater concern over duties than right, and with activity with enthusiasm -with God in us- shall we, one and all, consecrate ourselves anew!

われわれは、自己犠牲を伴う人類愛を理想とする団体である。  
この理想を譲ってまで会員を広げようとは考えない。

## 「なぜワイズは排他的であるべきなのか」

ポール・W・アレキサンダー(オハイオ州、トレド)

ここに盛り込まれている考え方は、新会員入会式や新クラブ設立の際に活用できます。

近年、団体をつくるということは、世界の重要な「屋内スポーツ」の一つとなっています。

団体をつくる上で大切なことの一つは、そのメンバーが何か他の団体にはない特別なものを持っているということです。それが原因か結果かは別として、メンバーをメンバーでない人々から区別する特別なものがなければ、団体は成り立ちません。世界中の多くの都市で、ワイズメンズクラブは、最も排他的なクラブとみなされています。しかし、われわれは、この排他性を、加入反対の権利を不当に行行使するために利用しようとしているのではありません。われわれは、メンバーになりたい人を意味もなく拒絶したいではありません。われわれの考え方は、最も民主主義的だと広く知られているにもかかわらず、実は伝統的に排他的な組織と通じる場合があります。

軍隊を例にとって見ましょう。戦争中、何干という医者が日夜を問わず入隊希望者の身体検査を行っていました。何故でしょうか。健康的に軍隊に適さない者を除外するためです。学校の場合はどうでしょうか。試験もせず、生徒達の成績を問題にしない学校があると聞いたことはありません。それはその学校で意義のある生活を送ることがその学生にとって不可能であるような場合を排除するためです。教会はどうでしょうか。教会は教会な

りにそれぞれの信条、教義、教理を持っており、入会希望者に「これこれの信条をお持ちでない方は、入会していただけません。」と言います。それによって、教会の信条を受入れない人々、すなわち霊的にその教会と合わない人々が入ることができません。

しかし、ワイズメン(この文章を通して私が「ワイズメン」と言うときは、名称としてのワイズメンのみならず、実体としてのワイズメンをも意味していることを覚えていていただきたい)は、このようなことに関心はありません。その人が身体頑健な人か、虚弱な人か、大学卒か、自分で勉強した人か、ある特定の宗教を信じる人か否か、リンカーンという高級車を運転する方か、市街電車で通勤される方か、重役なのかより責任の低い役割の人なのか、その家が表通りにあるのか、路地裏にあるのか等々はまったく問題にしていません。

ワイズメンは、こういった資格よりもはるかに貴重で、はるかに稀なものを要求しています。だから、われわれは、より排他的だということができます。ワイズメンズクラブの会員の資格は、人格なのです。「自己犠牲に基づく人類愛」と表現される理想主義なのです。ワイズメン

は、自分の人生の目的を、仕えられることではなく、仕えることに置く者でなければなりません。

さて、現状をありのままに見てみましょう。他の人は当然、自らを欺いても何の意味もありません。もしある人がビジネス上のお付き合い、社交面あるいは健康面で得られるもの、あるいは個人としての利益を求められるのであれば、そういったものを提供するように作られた素晴らしい団体が他にあります。しかし、人間性(humanity)を養うのに役立つ機会を広げようことを求められるのなら、われわれの団体はその機会に豊かに恵まれています。

本当のところをしっかりと掴みましょう。われわれは理想主義をワイズの独占物だと主張しているのではありません。ワイズは、自己中心的不是な人や隣人を愛することを売りつけるただひとつの団体ではありません。クラブの会員全部が水泳選手だからといって、水泳選手はすべてこのクラブに属しているわけではないのです。

ワイズメンと他の多くの団体とを、その規模、財政、権威、認知度、人気等々において比較しようなどとは思いません。しかし、絶対負けたくない点がただ一つあります。それは、理想という点であります。私は、ワイズメンズクラブほど団体としての理想、そして、その会員一人ひとりの理想に重点を置き、熱心にそれを育む団体はないと思います。少なくともこの点は、われわれが立っている一つの卓越した基盤です。にもかかわらず、われわれはこの理想というともし火を、謙虚さのゆえに柵の下に隠そうとしています。何と愚かな、自殺的なことでしょうか。

われわれの国際協会が8年前に誕生したアトランティックシティのコンヴェンション・ホールに、二つの巨大な旗が掲げられていました。一つには、「そして、青年達は幻を見る」という銘が書かれてあり、いま一つには「幻なき民は亡びる」とありました。この二つの言葉は、わがワイズメン運動という布を織りなす縦糸と横糸になっています。幻をつかみ、ニーズを感じ取り、衝動を感じ、ひらめきを活かす力の無いものは、ワイズメンになる資格がありません。それは、人材こそわれわれの誇りであるという、このワイズにしか見られない基準を大切にしたいからです。この基準こそ、世界中のワイズメンズクラブが、優れたメンバーの資質として抱いてきたといわれる個人としてのそして団体としての理想主義なのです。新しい会員を迎えるために、あるいは古くからの会員を引き止めるために、この根本的な必要条件である理想主義をほんの1パーセントでも割引することは、われわれの運動の心臓部に対する一撃を意味するのです。

ワイズメンであることは、その行動が「自己犠牲の上に成り立つ人類愛」という理想につき動かされている理想主義者であることを意味します。

ワイズメンはすべて、「YMCAは世界中で明日の市民である青少年を大切に、教会に次いで大きな人格の形成機関」であることを知っています。YMCAは、学校や大学に次ぐ大きな教育機関でもあります。YMCAは、体育教育や体の発達において世界をリードする存在です。YMCAはまた、異なる信条、カースト、文化という形で立ち上がる世界中の壁を打ち倒すことにおいて誰にも引けをとれません。Yは、ほとんどあらゆる国におけるその働きによって、国と国との間を、民族と民族の間を引き裂く

誤解や偏見に反対し、そしてその故に、常に愛国心を称揚し、愛国心を軽視しない、世界平和のための力強い原動力となっています。

ワイズメンの中心的な目的は、その目的条項に記載されている通り、「YMCAのその時その時に提供されているプログラムを推進することに、個人としての、そして団体としての努力によって貢献すること」です。

ワイズメンになることは、YMCAに忠誠であることです。

それは、必ずしも時代遅れの神学的教理を受け入れることではありません。国際憲法に表されているこの協会の基本となる目的に心を一致させることであり、それに献身することであり、それをそれぞれの地域で、また海外で実現することです。

ワイズのエンブレムを構成している三角形の上辺に、「インターナショナル」という文字が入っていますが、この文字にワイズの友愛の及ぶ範囲と、ワイズの目的の広さが表わされています。

われわれの世界展望委員会(訳注：現在この名称の委員会はなくなっているが、その精神はIBC、TOFなどの活動に受け継がれている)などは「人はその視野(Horizon)の広さで測られる」という言葉を広めてきました。

ワイズメンが赦すことができないのは、世界の状況や他の国や人々の問題に時間をも関心をも与えない人々です。こういった人々の人柄はあまりにも狭く、われわれの運動はこのような幅の狭い、小さな視野の人々の居場所ではありません。ワイズメンは、その視野という基準で測られることを恐れてはなりません。なぜならば、

ワイズメンになるということは、世界それ自身と同じ広さの視野を持つことであり、世界を志向することだからです。

われわれの最も基本的な理想の一つは、ワイズのモットーにうたわれているように「義務はすべての権利に伴う」ということです。このモットーが採用されたのは、われわれはともすれば、われわれのさまざまな権利を完全に実行されることを要求する一方、こういった権利の基礎にある義務をないがしろにするという見逃すことができない傾向を持っている故であります。

このモットーについて、例を挙げてごく単純に説明することができます。大通りを運転中、交通信号が緑になっていると、そのまま交差点を走りすぎることができます。そこに交差している道を車が横切って衝突する心配がないからです。何故でしょうか。それは、交差する道の側では信号は赤になっていて、そこにさしかかった車は停止し、あなたの側の車に通行権を譲るからです。もし一方の道の信号が緑で、他方の信号が赤でないということが起こるとすれば、それは単なる間違いどころではすみません。それに対応する義務なくして、権利はあり得ません。一方の側での赤信号なくして、他方での緑があり得るとすれば、ものごとくに左側なしに、右側だけがある、裏なくして表だけがあるというようなものです。

ある義務の承認と履行は、あなたの権利のすべてを守ってくれます。

人生のさまざまな交差点で、どこに権利があり、どこに義務があるのかを示す交通信号はめったにありません。

ある領域においては、特に、社会的、道徳的、民族間、国家間において、多くの権利が叫ばれ、義務があいまいにされているのを見ます。義務があいまいだと、関心はほとんど自分の権利にのみ向けられることが常ですが、義務はそれにもかかわらず存在します。われわれのモットーは、権利の実行についてよりも、むしろ義務の確認と履行をもっと考えるように要求しています。われわれがしてもらえることよりも、われわれがしなければならないことを、われわれ自身についてよりも、他の人々のことにもっと目を向けることを要求しています。

ワイズメンになることは、すべての権利に伴う義務を認めることです。

ワイズメンとして、まず果たしやすい義務は、例会に規則的に出席することです。いま一つは、遅滞なく金銭的な義務を果たすことです。これと同様に、果たしやすい義務は沢山あります。大会に出席し、それに協力し、それについて報告すること、連絡事項には直ちに返事を出すこと、“Association Men”（訳注：現在では、ワイズメンズワールドですが、これに区報、部報、クラブブリテンを含めて考えてもいいでしょう）を読むこと等々です。

われわれの義務の中で最も重要なのは、クラブのすべての委員会活動およびわれわれの目的の達成のために企画されたすべての活動に参加することです。現在ほとんどすべての大陸の、12の国における160の市で活発な活動を行っているというわれわれのクラブの高い水準（訳注：2008年現在では、ワイズメンズクラブは、6大陸、73カ国、1,711クラブ、31,200人という水準です）は、提供された奉仕と、実際に達成された目的がもたらしたものです。わが国際委員会（訳注：International Committee、現在の国際本部 International Headquarterと考えて下さい）は、豊富な資料を配布して来ましたがこれに対しては、クラブに対してあまりに多くの示唆を出しすぎ、負担をかけた過ぎだという批判もあります（しかしこの資料は、われわれにどのような活動の機会があるかを示すためのものでした）。しかし、実際に活動をするのは委員会ではありません。委員会はやり方を示すだけのものです。活動を行うのは、メンバー一人ひとりなのです。

われわれの国際憲法には、「活動するメンバー」という一種類しかありません。そして、メンバーとは、本当に活動する者ということが意味されています。

古い格言に「はじめなければ半ばよし」というのがあります。何かをはじめた者は、「希望的観測」を始めただけで、結果として自らを甘やかせるに終ることが多いようです。何かを始めるのはそんなに難しいことはありません。しかし、それを継続し続けるのには強い覚悟が必要です。時には頑張るということなら誰にも出来ます。しかし、計画したとおりの速さを守りながらそれを継続するにはスタミナが必要です。

ワイズメンは、単にスターターではありません。継続者でもあります。これには熱意が必要です。ワイズメンであるためには、熱意をもって活動することが必要です。

結論的に申しますと、ワイズメンであることは、

- (1) 理想主義者であること
- (2) YMCAに対して忠誠であること
- (3) 世界的展望を持つこと
- (4) 自らの義務を理解し、自らに課すこと

(5) 熱意をもって行動すること  
を意味します。本当に、「ワイズメンであることは大きな意義があること」なのです。

皆さんはこの意義を理解しておられます。しかし、何故すべての人にこのことが理解されないのでしょうか。それは、われわれが地域の中で際立って排他的なクラブであるからです。その排他性は、私達の最も厳しく、最も情熱的な理想主義の主張を強調するための刺激的、挑戦的かつダイナミックな方法として維持しているものなのです。

私の、ワイズメンすべてに対する要求は以下の通りです。

われわれの運動の核心、われわれの運動の存在価値はこの排他性、差異性にあります。われわれが、われわれの理想や能力を共有せず、それを推進せず、ビジョンを追及する意欲を共有しないメンバーを受容し、そういったメンバーを引き止めるために排他性を捨て、敷居を低くするその瞬間、われわれは、一滴の猛毒を取り入れることとなります。その猛毒は、力を強め、広がり、浸透し、ついにはワイズメンの全組織に死を意味する麻痺を引き起こします。

今、ここで、私達は自らの心を探り、われわれはメンバーであるという権利をまだ保持しているのかどうか、われわれは個人として、この排除の過程を恐れてはいないかどうか、確かめてみることをお勧めします。各自が、以前自分の中に奮い起こされたあの理想主義を幾分かでも失ってしまったのではないかどうか、自問してみましょ。私は、YMCAと心を完全に一つにしているのだろうか。そうではなくて、私は逆行しているのではないだろうか、誠実に状況を修正しようとしているのだろうか。敢えて私の視野の広さによる私自身の測定に身をさらしてみてもどうだろうか。他の人の権利がその上に乗っかっている私の義務を排除する権利を考えたりしてはいないだろうか。私は、ワイズメンや働き手の「ナイフとフォーク」になっているのだろうか—私は熱情を持って活動しているのだろうか。

自己犠牲に基づくこの隣人愛に対して、YMCAに対するこの忠誠に対して、この世界志向、この視野の広さに対して、権利より義務についてのより大きな関心に対して、熱情的な活動をもって、私達のうちにおられる神様と共に、一人ひとりそして全員が、改めて私達自身を捧げようではありませんか。

（姫路グローバルクラブ 山川一郎 訳）

## 〓 訳者プロフィール 〓

山川 一郎（やまかわ いちろう）

1977年 姫路クラブ入会

1993年 姫路グローバルクラブにチャーターメンバーとして移籍

1990—1992年度国際議員、その後国際MC事業主任、BF委員、YMW翻訳委員、日本区Yサ事業主任などを歴任。

共に生き、平和を創り出すことの意味を共に考え続けよう。  
そこにワイズメンの本質がある。

## 11 ワイズの本質とは

神戸ポートクラブ 鈴木 誠 也

### 1) 共に生きる為に

「共に生きるために」とは、日本キリスト教海外医療協力会からネパールに派遣され、18年間現地で医療活動を行われた岩村昇先生がネパールの山村で出会った青年から与えられた言葉でした。YMCAとワイズダム運動は車の両輪であると言われ、共に生きる為に働くことだと教えられてきました。

私は大阪YMCAのスタッフとして香港YMCA研修所の研修生として10ヵ月間香港九龍ワイズメンズクラブの例会に出席させていただき、また大阪サウスクラブの担当主事として5年間お世話をさせていただき、その後大阪YMCA退職後はNGO団体の職員として働きながら神戸ポートワイズメンズクラブの設立にかかわり、チャーター会員として20年間在籍してまいりました。こうした体験から、両方の見方が出来る立場で、まさに「共に生きてきた」といえるようです。

私がアジアの国々に清潔な飲料水を提供することを進めているNGOでかかわった活動は、まさにアジアの人々との共生を旗印に「共に生きることとは何か」を、実践してまいりました。「開発途上」とか「貧しい」とかの言葉は、アジアの国に関わる中ではその意味を考え直さなければならないでしょう。物質的な貧しさとは精神的な貧しさとはかなり違うことが分かります。心の貧しさはどこにもあります。金持ちがいれば、必ず貧しい人もいます。パンへの飢えだけでなく、愛への飢えがあるのです。衣の無い裸だけでなく、人間の尊厳が失われているための裸があります。豊かな国ほどそれが目につきます。物質的な貧しさより心の貧しさの方が深刻です。

もともと、YMCAはロンドンで誕生し、あっという間にヨーロッパからアメリカへその運動は広まり、それに対してワイズメンズクラブは、アメ

リカオハイオ州トレドYMCAの会員獲得キャンペーンから始まり、YMCA会員増強の手段として作られたと教えられております。ワイズの会員増強は、YMCAのそれにも繋がるものとして、共に助け合いつつYMCAは、両輪の役を果たすことが大切なことなのです。多くの場合施設を維持し事業体として経済活動に力を入れながら、NGO/NPOの運動体として働くことを両立させていこうとしている場合が多いのです。なかなか難しい状況になっているYMCAもあるようですが、ワイズがそのサポーターになる努力をいたしましょう。

ワイズメンは理想主義者であること、YMCAに尽くすこと、国際的な見識をもつこと、義務がすべての権利に先立つことを承認すること、誠心誠意働く者となること、を意味します。ワイズメンの一人ひとり、心から人を愛することの出来る人になりたいと思います。心が貧しく、誰からも愛されないと感じている人に、愛を持って接しましょう。「隣人から自分達を守ることを考えるのは、戦争へと向かう武器のいる道です」。けれども「自分達のほうから隣人を守ってあげよう」と考えるのは、平和へと向かう武器のいない道なのです。

「ストップエイズでなく、HIV/AIDS陽性者と共に生きるワイズメン」でありたいと思います。今やHIV/AIDSの陽性者も薬を飲み続けることによって、生き続けることは出来るのです。ハンセン氏病患者を国策で隔離したようなやり方は、共に生きることではありません。別に生かせることとは大違いなのです。ストップ運動として進められている運動の中には、往々にして「自分は陽性者とは別の世界の人間だ」という想いはないでしょうか？ 隣の人、いや自分が陽性者になるかもしれないという想いも持ち続けていただきたいのです。何等かの障がいをもつ子ども達が一般の普通の学



校に通うことが進められています。特別扱いでなくノーマルな生活を共に生きたいものです。共に生きること、平和を創り出すことの意味を共に考え続けましょう。そこにワイズメンの本質があるのではないのでしょうか？

## 2) 奉仕クラブとは？

奉仕をすることとはどんなことなのでしょう？「人にして欲しいと思うことを、人にもしてあげなさい」との言葉のように、弱い立場の人の側からものを見ることを試してみましょう。弱い立場の人を護り、励まし、できることから始めて、見返りを求めない愛の行動が奉仕といわれる行動と言えるのではないのでしょうか。YMCAの活動に奉仕しながら、その活動に対して達成できた喜びがもてれば素晴らしいことです。環境を守り地球の温暖化を防ぐこと、ワイズメンに出来ることを見つけて貢献することが奉仕につながるのです。マイ箸やコップを持ち歩くこと、エコカーに乗り換えること、もしくは都会でのマイカー使用をやめること、太陽熱や風力を利用すること等々、自分に出来る環境対策は、その立場において十分な社会

的な奉仕活動なのです。クラブ会員の一人ひとりが奉仕を積み重ねて奉仕クラブが出来上がるのです。やれることから実践しましょう。

## 3) 社交クラブとは？

社交クラブとしてのクラブ活動は、最低限のルールとして食事付の例会ではピンバッジの着装や、大人が集うにふさわしい雰囲気重視した会場セットなど、各クラブが独自性のある最低限のルールを話し合っ、今一度クラブ単位で社交クラブとしてのルールとマナーを確かめ合ってみましょう。

### プロフィール

#### 鈴木 誠也 (すずき せいや)

1982年～ 大阪サウスクラブ担当主事  
 1988年 神戸ポートクラブチャーターメンバーとして移籍  
 1990年 西部EMC事業主査  
 1991年 西部書記  
 1999年～ 西日本区物品サービス委員長  
 2003年 六甲部地域奉仕事業主査  
 2005年 六甲部部長  
 2006年 六甲部メネット事業主査  
 2007年 六甲部広報事業主査  
 2008年 西日本区次期理事

YMCA会員であるということは、いわば一株株主。  
 YMCAの運営にもっと関心をもとう。

# 12 ワイズメンはYMCAの一株株主

甲府クラブ 仙洞田 安 宏

ワイズメンズクラブとYMCAとの協働については、過去、多くの人達によって論じられてきたと思うが、本論では筆者が所属する甲府ワイズメンズクラブ(甲府21クラブも含めて)と山梨YMCAとの協働について具体的な事例を挙げながら、地方都市におけるワイズメンズクラブとYMCAのあり方を中心に論じてみたい。

東京や大阪、横浜といった大都市におけるYMCAと、人口僅か20万人程度の地方都市・甲府とのそれでは、財政規模や会員数といった目に見える数字はもとより、そもそもの成り立ちや歴史、その基盤とする地域社会の精神的な風土においても異なるのは当然である。山梨YMCA会館建設の際、ワイズメンが建設資金集めに奔走した話は有名であ

るが、現在もレイマンである常議員の構成をみても、総主事を除く17人中11人がワイズメンで占められ、歴代理事長も一人を除きワイズメンが就任している。常議員会に甲府・甲府21両クラブの会長が陪席し、YMCAの情報をワイズメンと共有する工夫がなされている。これらのことは、地方都市ゆえの特徴と言っても過言ではない。つまり、人間関係が濃密なコミュニティにおいては、ワイズとYMCAの関係に留まらず、政治・経済・文化などの分野においても、相互理解・協力の関係が構築されやすい。

その典型的な例を、1998年から始まった「山梨チャリティーラン」に見ることができる。チャリティーランは周知の通り、その時点ですでに東京・名古屋・大阪などの大都市で先行して開催されており、山梨での開催を検討した際、まっ先に動いたのはワイズメンであった。甲府・甲府21両クラブの全メンバーが実行委員となり、企業協賛の獲得、実際の運営にかかわっている。また、地元メディアとのタイアップ、地元大学の駅伝選手やJリーグの選手の応援参加などで、地域社会に開かれたイベントとして定着している。人口20万人(全県約90万人)規模の地方都市にあって、毎年50チーム前後の協賛(1チーム協賛金5万円)を取付けていることは、ワイズメンとYMCAが一体となって地域社会に根差していることの証左に他ならない。

また、1961年から続いている「山梨YMCAバザー」も、チャリティーラン同様ワイズメン全メンバーが実行委員となり、オールYの体制の中で中心的な役割を担っている。

山梨YMCAでは、1959年に「つぼみぐるーぷ」という2才児を中心とした保育プログラムが発足した。この卒業生達は、現在地域社会の各分野で旺盛な働きを担う世代となっている。甲府クラブにおいて、この度会員増強運動に取組んだ際に、この「つぼみぐるーぷ」のOB達に声掛けを行なった結果、手応えを感じるが多かった。

また、山梨県内には、かつて県下のほとんどの高等学校に「ハイスクールYMCA(略称ハイY)」と呼ばれた組織があり、約40年間に亘り活発な運動を展開した。それは「ハイY王国・山梨」と県内外から驚きの眼でみられるほどであったが、そのハイYOBがワイズメンとなって、YMCAを支えているのも特徴的である。

このようにYMCAのプログラムを通して、ワイ

ズメンの活動に結びつくケースは、必ずしも地方のYMCAに限ったことではない。しかし、地方都市の強みはコミュニティが小さいゆえの人間関係の濃密さにある。数10年もの時間を要し、今その果実を得る時期になったとしても、その間におけるワイズとYMCA、それを取り巻く地域社会との良好な信頼関係がそのバックボーンにあることは言うまでもない。その信頼関係を築くのもワイズメンの重要な役割である。

ワイズメンズクラブとYMCAの関係は、それぞれの地域の個性によって、それぞれの行き方があるが、その前提として共通して言えることもある。最後に筆者の経験を通して感じた、ワイズメンとしてYMCAに対するスタンスを述べてこの稿を閉じたい。

2002年度のクラブ会長を務めた際、会長主題に「一日一Y」という一見ふざけたコピーを掲げた。これは、一日一度でよいから、ワイズやYMCAについてかかわりを持とうという思いからであった。たとえば、ブリテンを読む、メンバーにメールを送る、外出したついでにYMCAセンターに寄る等々、それぞれのYを実践しようという願いだった。

その年度の終わりに近づいた5月下旬、山梨YMCAの定期総会に初めて出席した。それまではYMCAの定期総会などに関心はなかったがこれもYの実践である。しかし、出席してみるといろんなことが見えてくる。YMCAの定期総会は企業でいえば株主総会である。

YMCAの会員であるワイズメンは、企業の一株株主に相当する。株主は、自分の持株の企業の動向には必ずと関心を持つであろう。今期の業績はどうだったのだろうか、将来性はどうか、コンプライアンスはどうか等々。YMCAの定期総会についても全く同様のことがいえる。

ワイズメンとしてのYMCA理解の第一歩は、この「定期総会に出席すること」から始まると言っても過言ではない。筆者もその後、一株株主の意識を持って毎年定期総会に臨んでいる。「一日一Y」が「一株一Y」へと“続伸”したのである。

## プロフィール

仙洞田 安宏 (せんだうだ やすひろ)

1994年 甲府クラブ入会

2004年 東日本区地域奉仕事業主任

ワイズの発展にもかげりがみえる。  
個々のクラブ活性化のためには細心の心くばりが欠かせない。

## 13 ワイズとは何か。どこに向かうのか。

熱海グローリークラブ 竹内敏朗

1928年、奈良傳氏を中心に大阪にまかれた一粒のワイズメンズクラブの種は、たくましい青少年の育成、向学心に燃える青年のために夜学校を開設して大阪YMCAのサービスクラブとして、その後大きく発展したことはご衆知の通りです。

1928年から1940年が創成期とすれば、戦後1945年から1965年までが第1期、1965年から1975年までが第2期、1976年から1997年第50回日本区大会までが第3期、1998年から今日までが第4期と区別することが出来るでしょう。

1975年、長年の夢であった第51回国際大会が熱海市ニューフジヤホテルをメイン会場として開催されました。通称アタミ大会はアジア諸国のなかで初めて開催され、地域密着型全市民あげての歓迎ムードのなかで開催された大会でもありました。この大会を機に海外から来日した多くのワイズメンのホームステイを大会前、大会後お引き受けすることによって、日本区ワイズメンの国際化が一気に進んだといえるでしょう。

北米大陸(アメリカ・カナダ)を初めて離れて開催された国際大会は1970年7月、デンマーク・コペンハーゲンで開催されました。1966年7月ホノルル・ワイキキのロイヤルハワイアンホテルで開催された国際大会に引き続き、100人以上の日本代表が大挙して参加、日本区のワイズメンの力をヨーロッパ、アメリカ、カナダを中心とする大会参加者に強く印象付けることができました。

1922年から1970年までがアメリカの時代、1971年から1981年までがヨーロッパの時代、1982年から今日までがアジア・印度の時代と大別出来るでしょう。

ワイズメンの運営をさらに円滑に進めることを目的に8つのAreaに分かれますが、3つのAreaアジア・印度そしてヨーロッパが大きく会員を増強、片や南太平洋、カナダそしてアメリカ、カリビア

ンが大きく会員を減らしている流れは、私が1984～85年国際会長として奉職した時代から基本的には変わっていません。すでに多くの専門職の人々が勤務する北米大陸のYMCAでは、もうワイズメンは必要としないと広言するYMCAスタッフが多いのも事実です。

YMCAの奉仕クラブとしてスタートしたワイズメンズクラブは、YMCAのサービスクラブと同時にその地域社会においても、その存在感が認められることによって存続が可能な新時代でもあります。日本においても会員の高齢化、15人未満のクラブが如何にして会員増強が出来るかが緊急課題でもあります。会員相互の親睦・友情がめばえて初めて会員増強、対外的なサービス事業は可能です。YMCA・ワイズメンの主従の関係を改善するため、Principle of Partnershipが1982年に宣言されました。

### 奉仕クラブとは

ROTARY、LIONS、JC、KIWANIS、TOASTMASTERS、OPTIMIST、SOLOPCHIMIST等々世界には多くの奉仕クラブがあります。航空運輸の発展、情報が瞬時に世界に伝わる時代、その本質的意義が問われる時代です。1980年以降先進国においては国際奉仕クラブは往年の勢いはなく、その存続すら心配される時代です。

クラブ活性化のためには先ず

- ① 強いリーダーシップ
- ② 例会のセレモニーの部分は短く、親睦と外部からスピーカーを招き会員各自の自己開発プログラムの強化
- ③ YMCAとの関係強化は勿論、COMMUNITY(地域社会)との結びつきを奉仕活動を通じて強化する。

- ④ 広報活動と併せプログラムにはもっとメリハリが必要
- ⑤ 過去に敬礼・未来に挑戦 Salute to the Past, Challenge for the Future.
- ⑥ 3年をひとつの区切りとして奉仕活動の継続性、Focus(焦点)を絞ることが大切
- ⑦ 夕食例会より早朝6:00~8:00例会に人気がある

## 社交クラブとしてのワイズ

YMCAの暗い小部屋でお弁当を食べながらの例会は要注意。

会場設営、進んで自ら声をかけることが大切。自分が主役という意識でクラブに参加。リーダーの大切な資格のひとつとして良きメッセージの伝達者(Good Communicator)、しゃべり上手より聞き上手、相手の名前を良く憶える。結婚記念日には奥さま、ご主人を招待。若い会員獲得のためにはより音楽性、おいしい食事、スピーカーの人選が大切。クラブの会員数は15人以上、出来れば25人以上50人迄が最も理想的です。

クラブはまさしく人と人との出会いの場でもあります。燃える情熱、感性、楽しい会話、美味し

い食事、そして全員参加(Participate)が基本です。あなたは観覧席に座っている立場ではありません。自分の話に自信と喜びを体験することも大切です。IMAGEをふくらませて下さい。IMAGINATION、INSPIRATION、INITIATIVE、自ら進んで参加する、心に平安を感じるように努めましょう。物事はすべてPOSITIVEにとらえましょう。

A Time for Action! 今こそ行動のとき

## プロフィール

### 竹内 敏朗 (たけうち としろう)

- 1948年 長崎クラブチャーターメンバーとして入会
- 1952年 横浜クラブへ転会
- 1963年 熱海クラブチャーターメンバーとして移籍
- 1984年 熱海グローリークラブチャーターメンバーとして移籍
- 1979年 第25代日本区理事
- 1980年 EMC国際事業主任
- 1981年 IMC
- 1982年 初代アジア地域会長
- 1984年 第59代国際会長
- 1975年 第51回熱海国際大会グランドマーシャル及び大会副委員長
- 1988年 第58回京都国際大会HC大会委員長
- 2004年~2008年 国際会長会会長
- 2010年 第69回横浜国際大会HCC名誉委員長
- 熱海YMCA理事長

ワイズの組織が整い、運営もされてきた。今、ワイズが誕生した時代のような荒々しく生きたアウトサイダーの出現を期待したい。

# 14 アウトサイダー

元 ソウルYMCA会長 全 大 連

さて、ユダヤ人の過越の祭が近づいたので、イエスはエルサレムに上られた。そして牛、羊、はとを売る者や両替する者などが宮の庭にすわり込んでいるのをごらんになって、なわでむちを造り、羊も牛もみな宮から追いだし、両替人の金を散らし、その台をひっくりかえし、はとを売る人々には「これらのものをもって、ここから出て行け。私の父の家を商売の家とするな」と言われた。弟子達は、「あなたの家を守る熱心が、私を食いつくすであろう」と書いてあることを思い出した。  
(ヨハネによる福音書 2章：13-17節)

Don-A社の韓国語辞典によると「アウトサイダー」という語は“協働者の同意事項や協力体制に参加しない者”と定義されています。また韓国語協会の辞典によると“境界外の仕事に関係をもたない者”となっています。

この点から見ると「アウトサイダー」とは物事を中心部分にかかわらずに、境界の外へ逃げてい

る人ということにもなります。いいかえるとアウトサイダーはある種の事業を促進させていくリーダーではなく、傍観者である、無気力、ドロップアウト、非専門職となります。

教会の運営の中では、執事や長老達はインサイダーと呼ばれ、その他の会員はアウトサイダーと呼ばれてもよいこととなります。YMCAの立場では会員はインサイダーで、他の人はアウトサイダーと呼べるでしょう。

このようにアウトサイダーは傍観者、非専門職、ドロップアウト、何かの外にいる人、というように理解できると思います。それ故、アウトサイダーはなにものにも全く影響を与えることのできない者であり、それは、どんな仕事が進められているのか知らないばかりでなく、無力でその仕事に参加することもできない人達です。その結果、そのような仕事からはドロップしていくのです。

しかし、「アウトサイダー」という言葉は以上に述べた定義とは違うもう一つの意味が含まれています。単に無気力で何かからドロップアウトしているという意味だけでなく、まったく異なる意味があります。より積極的な見方で、「アウトサイダー」は抵抗とか、実存というニュアンスをもっています。

普通の人は社会秩序の境界内にある伝統の価値を重んじて、社会的地位という基準で世を渡っていくことに関心をもっていますが、アウトサイダーは抵抗者そのものであり、伝統の価値はすべて否定し、現在の秩序や価値観が人の生に良きものをもたらさないとすると、怒りをもって立ち上がる人です。もはやその人は無気力のため境界外にドロップアウトした人ではなく、ある仕事の核心部分から自発的に逃げ出す人です。

この見方からすると、アウトサイダーは境界外で脱落している、世の中の動きをただ眺めている傍観者ではなく、世の中の批判者です。伝統的秩序を否定して、新しい、高いレベルの秩序を作りあげようとするだけでなく、歴史の重要点で新しい人生と繁栄を築くような助け手となる人です。歴史はこのような出発の場面がある度に、このようなアウトサイダーの努力と勇気と犠牲によってすばらしい発展をしてきたのです。

このような考え方に立って、私はイエス・キリストがアウトサイダーであったと思います。彼はその時代の宗教的秩序や権威をすべてひっくりか

えし、伝統的秩序を踏み越えていったのです。彼のそのような生涯と行動がヨハネによる福音書2章：13-17節に書かれています。

大変な群衆がエルサレムの神殿の前に集まり、過ぎ越しの祭りを祝おうとしていた時、イエス・キリストはテーブルをひっくりかえし、動物を追い出し、動物を売り買したり、金の交換をしている商人達を叱ったのです。W. バークレーによると、当時イスラエル人は年3回の祭り、過ぎ越しの祭り、五旬節、幕屋の祭り、を特別のものとしていました。中でも過ぎ越しの祭りはこれら3つの祭りの中で最も色彩に富んだ催しでした。過ぎ越しはちょうど韓国の“解放記念日”のようなもので、イスラエル人のエジプト脱出の出来事を記念しているので、イスラエル人にとって全霊を捧げる祭りなのです。

過ぎ越しの祝いにはイスラエル全土からおおよそ70万人もの人が集まったといわれています。すべての人が動物や金を神前に供えました。20才以上の人はだれでも1/2シケルを免罪金として捧げなければならなかったし、ユダヤ人はまたローマ貨幣のドラクマで捧げる義務がありました。

ユダヤ人の経済状況からすると、彼らは牛や羊や鳩を供えることになっていました。しかし彼らは動物の代わりにお金を捧げることもしばしばで、それは検閲が難しかったせいでもあります。その当時、宗教者達はユダヤ人に便宜をはかるという名目で、動物を売って金に換えることを許していたのです。そのような習慣は宗教的な伝統行事として長い間イスラエル人にゆだねられてきました。したがって誰もその習慣を批判したり、非難したりするものはなく、神職者や長老達はそのような商取引に深くかかわっており、権限や利益に結び付いていたのです。

けれどもイエス・キリストはそのような行いを見過ごすことができず、多くの人々が神に捧げ物をするという名目のもとにあさましく商売をしているのを見ると、鞭をふりあげざるをえなかったのです。それ故イエス・キリストはその商取引の場をひっくりかえして非難し、「私の父の家で商売をしてはならない」といったのです。

そのときには協力者もないイエスが、当時の宗教習慣や、宗教者達の確固たる集団に対抗して立ち上がるなどというのは、なんと向こうみずで

馬鹿げたことかと考えられたでしょう。ある意味でイエスは全く愚かなアウトサイダーとよばれてもしかたがないのです。

イエスは当時一般的だったレベルの高い教育を受けた人間ではありません。それにイエスは宗教者やある種の集団のどのグループにも属していませんでした。誰でもイエスは本当に愚かなアウトサイダーで、レベルの高い学者や確固とした集団をひっくりかえそうとしたり、また当時よしとされていた伝統や習慣をくつがえそうとするとは、と考えるのも無理からぬことです。本当に、イエスは全く愚か者のアウトサイダーでありました。

けれどもイエスがテーブルをひっくりかえしたのは、生を軽んじ、神の言葉をないがしろにする現実の安逸さにながまがならなかったからです。普通の人間の目から見ればこれはアウトサイダーのふるまいと同時に狂人の業といわれてもいいものです。しかしイエスは尋常ならざる情熱と生に対する勇気とをもっていたので、あえてこのことをしてかしたのです。

カミュの「異邦人」の主人公ミュソーのように、自分の行いに対して倫理的な省みができない人ではなく、イエスは不道德な人間ではなく、完全に道徳的な人でありました。アンリ・バルビュッセ作「地獄の門」に出てくる、扉の小さな覗き穴から世界を見ているような人生を送っている後ろ向きな主人公のようではなく、イエスは革命児であり、阿鼻叫喚のただ中にあるこの世の真っ只中にとびこんで、叫び、裁きをおこない、この地上に永遠の生命の種をまいて、天に昇っていった人であります。

英国の文芸評論家コリン・ウイilsonは、アウトサイダーの出現こそ現代人ががんじがらめになっている巨大な集団から離脱できる唯一の道であり、また生の豊かな発展よりも管理された集団と秩序に力点が置かれた窒息状態から脱け出す道でもであると述べています。

アウトサイダーは生の現実を否定しているように見えるけれども、実は現実の安易な生き方に溺れている人の方が、生の現実を否定し、ないがしろにしていると私は思います。

まことに、普通の人間の目には狂人にちがいないように見えるアウトサイダーにこそ、生の実存を見いだすことができます。このような見方でコ

リン・ウイilsonはアウトサイダーの出現というものを訴えています。

われわれは歴史のあらゆる時代に、いわゆるZeitgeist……時代の魂が現実に現れてきたことを示す典型的な人物像があったことを見いだすことができます。そのような人間は時には英雄として、時には聖人として、また時には支配者として歴史の舞台に登場してきます。けれども今日の時代の典型的な姿はアウトサイダーであるとウイilsonは言っています。

豪華な生活に慣れきっている、管理社会の中で成功することに全力を尽くしている抜目のない人間ではなく、自分が正しいと信じた道を最後まで頑固につらぬき、自分自身のことより、公の利益を最優先して、その目標にむかって闘うような無私無欲の人間が現れたならば、現代社会、とりわけクリスチャンの共同体は正しい道を歩んで行けると私は信じます。

多くの愛国者達が日本の植民地支配の束縛の下で、まさに“風前の灯”のような命を賭して、恐れず服従することなく独立を主張して、花のように散っていきましたが、彼らこそ真に無私無欲のアウトサイダーであったにちがいないと信じます。

おびただしい殉教者達がイエス・キリストを信じないとさえ言えば命を永らえたであろうものを、そうしなかった彼らこそイエスのために命を投げ出した無私無欲のアウトサイダーであったと信じます。

しかしそのようなアウトサイダー達が流した血や叫び声は歴史の教訓を教え、今日の世界を創り出したのです。己の利益のみを追求し、国民の利益や社会の美德に背を向ける人ばかりであったなら、われわれの独立国家は立ち得なかったでありましょう。今日われわれの生きるこの国は、常に愛国心と熱い忠誠心に生きた無私無欲のアウトサイダーが血を流して犠牲となったことによって創られたものであることを何人も否定し得ないでしょう。

クリスチャンは死せる魚ではありません。水に浮かぶか浮かんで流れて行く、死せる魚ではありません。活きた魚は水の流れにさからって泳ぎ昇っていきます。それこそ活きた魚のしるしなのです。

イエス・キリストは当時の宗教的伝統や儀式を知らなかったわけではありません。また彼は考えもせずそれらを非難したわけではありません。彼

は宗教家達が神の言葉から離れて、宗教や行いを名目にして汚職に精を出しているのを知ったが故に、この綻びのない宗教的伝統や集団に挑戦したのです。

私達は今日のキリスト教界の制度や集団や儀式や規則などがどのようなものであるのか、もう一度考え直してみなければなりません。それらが神の栄光を現すために役に立つのかどうか熟考してみる必要があります。正直に言って、明らかに是正しなければならない事柄が沢山あるのではないかと思います。宗教者の考えや日常生活や、教会の集団、儀式や伝統習慣などの多くの部分にイエス・キリストの教えを満たすものがないことを事実として深く考えます。私達はそのようなマイナスの部分から自ら取り上げ、審判していかねばなりません。

もし神の言葉が侵され、宗教という名のもとに墮落が起こるならば、たとえ苦しい試練に巻き込まれようとも、思い切ってそれを拭き去ろうと努力しなければなりません。そのような行動がないならば、われわれの社会の中でキリスト教は新しくならないし、新しくされなければ、キリスト教はわれわれの国民のいしずえとはなり得ないのです。

フランスの作家マーセルは「私は歴史の見物人ではない。私は生き、今日もまた心からこの言葉を学んでいる。」と言っています。私達は決して教会や地域の進歩をぼんやりと見ている見物人になってはなりません。私達は集団の真っ只中に飛び込んで行き、高いレベルの成長をリードしていくアウトサイダーであらねばなりません。

安逸と無気力にとりつかれた制度や儀式には生の跳躍は決してみられないと思います。そのようなものの中にはただ硬化した、かさぶたのようなものがあるだけで、生が芽生え、育つことはないからです。このことから私達は手詰まりになった制度や集団をうち破り、新しい生の芽生えを呼び起こすべく行動する必要があると考えます。しかし、そのような手詰まりをうち破ることができるのはインサイダーではなくアウトサイダーなのです。

話によりますと、庭師は芝生を新鮮に保って、なめらかに、青々とさせておくためには、何度も芝の根を刈らなければならないそうです。芝生を刈らなければ、弱くなっていったなめらかさも青さも保てません。これと同じように、人間は真の生命のなめらかさや、生のすばらしさをとりもど

すために、儀礼や儀式でがんじがらめにされた伝統的秩序を破壊する作業を必要とするのです。歴史は成熟した時、はじけるように開けるでありましょう……ちょうど栗が熟してはじけるように。

ワイズメンズクラブは創立して70年を越えました。ワイズメンズクラブの制度の大部分はこの間にだんだんと変わり、定着してきました。ワイズメンズクラブの組織が大がかりになるにつれて、ある部分では当初の動機から離れてきています。本当のことをいうと、いくつかのワイズメンズクラブではその地域に奉仕することを無視しているように思われます。

生命が誕生する時に起こるあの跳躍やほとばしる勢いのように、ワイズメンズクラブが生まれたときには生き生きとしていたのが、今は静まってきました。なぜならワイズもその組織や制度を運営することに気をとられているからです。このような状況下で、心から望みたいのは、ワイズメンズクラブにアウトサイダーが登場してほしい、そしてもっと荒々しく、もっと新鮮な、もっとほとばしる力を結集して、YMCAを通して、YMCAと共に社会への奉仕に力を尽くしてほしいということです。このようになれば、YMCAとワイズメンとの間の永遠の関係はまた新しく創造されると私は確信いたします。

〔1995年2月19日 韓日ワイズメン会議早朝礼拝説教和訳  
翻訳：坂本 忠幸(和歌山紀の川クラブ)〕

### 〓 訳者プロフィール 〓

**坂本 忠幸** (さかもと ただゆき)

1974年 和歌山クラブ入会  
1984年 和歌山紀の川クラブチャーターメンバーとして移籍  
1985年 日本区IBC・YEEP事業主任  
1987年 中西部長  
1989年 日本区分割問題検討委員  
1991年 ワイズメンズワールド翻訳委員  
1992年 オスロ国際大会BF代表  
1994年 第2代西副区理事  
1998年 第6回西副区大会実行委員長  
1999年 逝去(メネット智さんは現在同クラブ会員)

ワイズメンズクラブでは、信仰を迫られるわけでも、聖書片手に活動をするわけでもない。気軽にキリスト教の文化、価値観に接しては……。

## 15 ワイズとクリスチャニティー

名古屋クラブ 長井 潤

### はじめに

ワイズメンズクラブに入会されて、例会や、部・区での会合、またYMCAの集会で、聖書の朗読や祈禱があったり、讃美歌を歌ったり、それまで馴染みのなかった「キリスト教」と接し、戸惑われる方も多いでしょう。中には「キリスト教を強要される！」と感じる方もいらっしゃると思います。

しかし、西日本区で使用している「キリスト教理解のために」(西日本区で作成されたもの)をお読みいただくとわかりますが、ワイズメンズクラブやYMCAは、決してこの宗教を知らない人に「押し付けよう」とするのではなく「キリスト教」のもつ、普遍の真理や倫理観、人が互いに愛し合い生きていく上での哲学に「触れ、知り、学ぶ」機会を身近に可能にする、ということなのです。

YMCAは、当時の産業革命という時代の波に翻弄され、その中で自己を見失い荒廃する青年の心を救うために、一人のキリスト者の青年の“祈り”から始まりました。ワイズメンズ運動も、そのことに賛同し、支えるために起こりました。

このことは「ワイズメンズクラブに属する人々がキリスト教を信じている、信じていない」ということを超えた真実なのです。

### 私達は知らず知らずのうちに聖書からの学びの中に居ます

明治時代になって、日本がそれまでの鎖国政策を解くと、西洋からそれまでの日本の文化にはなかった言葉や価値観が多く入ってきました。それを私達の先達は、新しい日本語として訳し、創作しました。

たとえば私達にとって有名な言葉に「青年」という単語があります。これはYMCAが日本に紹介され

たときに、Young Menの訳語として日本のYMCAの創始者のお一人である小崎弘道氏(熊本バンド出身・東京YMCA初代会長・後に同志社総長を経て東京霊南坂教会を創設)が、中国唐時代の詩集「唐詩選」の中の張九齡の「白髪」という漢詩にある「青雲の志」にヒントを得て創作されました。他に哲学者の西周は「哲学」や「演説」を作ったとされていますし、「情報」は恐らく福沢諭吉によるものだと言われています。これら多くの新しい日本語の創作を可能にしたのは、当時の方々の漢文に対する深い知識と教養だと言えます。

きっと意外に思われるでしょうが「愛する」「天国」「天使」「洗礼」「聖霊」「十字架」これらの単語は明治までの日本語にはなく、聖書を日本語に訳す過程で造られた単語です。また「目からウロコ」「豚に真珠」「目には目を」「罪と罰」「三位一体」これらはすべて聖書に記載されていることが基となっています。

このように私達は「キリスト教を信じる・信じない」といったこととは別の次元で、知らず知らずのうちに、聖書からの学びの中にいるのです。

このことは、キリスト教信仰という世界ではなく、知識・文化・教養という世界であるをご理解ください。

### イエス・キリストという名

イエス・キリストとは本来固有の「姓名」ではありません。イエスは当時のユダヤでは一般的な名前です。他方「キリスト」は人名ではなく、「王」「預言者」「大祭司」を表す職名で、これらの職につくために「油そそぎ」が行われ、その「油そそがれた者」のギリシャ語です。そこから「救い主」を指し、イエス・キリストという名が固有に使わ



れるようになりました。

## イエス・キリストの教え

イエス・キリストは、その生涯の言葉と行いを記した新約聖書の中の福音書で、多くの教えを語られています。その教えについては、YMCAやワイズの中で、身近に学ばれる機会がきっとあるはずです。

今、キリスト教は全世界の3分の1の人に信仰されている世界最大の宗教となっていますが、イエスの伝道の生涯は、バプテスマのヨハネ(イエス・キリストの先駆者で親戚。悔い改めることの必要を人に説き、その証としてヨルダン川で洗礼を授けた)に洗礼を受け、十字架につくまでの僅か3年間、足掛け4年間でしかありませんでした。

この方は、愛に満溢れ、その目は、何時も貧しく、弱く、小さな人に向けられていました。さらに、十字架刑という最も苦しく残酷な刑を受けるときでさえ、自分のことよりも、他人のことを気遣い愛されました。そんなことを知れば知るほど「自分は、本当にこのままでよいのだろうか?」と思います。

このことを学び、考えることがキリスト教を信仰することへの歩みなのです。しかしこれらのことは自分自身の歩みであって、決して人に強要するものではありません。

## キリスト教が西欧文化へ与えた影響

私達は日本の歴史の学びから、中国や韓国から伝わった仏教が、日本の建築や学問や制度や、あらゆる物と精神の文化において与えた影響の大きさを知っています。

同じようにYMCAを生み出したキリスト教は、西欧の文化の根本を形作ってきました。この中に生きているキリスト教の伝統の力は、私達日本人の想像を超えて大きく、西欧の人や国のあらゆる価値観の根底に、その影響があるといっても過言ではありません。

そのことを知らないと、西欧の絵画や音楽、たとえばミレーやレンブラントの絵やバッハやヘンデルの曲が表現しようとする精神世界を決して理解することはできません。

これまでキリスト教というものにあまり触れる

機会のなかった方は、西欧の文化によく触れ、そして日本の伝統的な生き方、考え方を振り返ってみる上でも、きっと学ぶ意義があるはずですよ。

## たとえば……(学びの一つとして)

では、聖書から学ぶ興味深い話をいくつか。

聖書に旧約と新約があることは、ご存知の通り。この「約」とは「神との契約・約束」の約で、翻訳の「訳」ではありません。

「旧約聖書」には、神がイスラエル民族を通して人に神ご自身を示そうとされた出来事が記されています。すなわち「神は天地の創造者であり、人はその神の意思に従って生きることに祝福がある。」という約束です。そして、この「旧約聖書」は、イスラム教とユダヤ教とも共通の聖書なのです(+コーラン=イスラム教 +タルムード=ユダヤ教)。

ちなみに、旧約聖書というのはキリスト教だけで、イスラム教では「聖典」ユダヤ教では「聖書」といいます。また共通の一神教である神は、キリスト教では「エホバ」、イスラム教では「アッラー」、ユダヤ教では「ヤハウエ」と呼ばれます。

キリスト教の「新約聖書」の「約束」とは、神がイスラエルの中から救い主(イエス・キリスト)を誕生させ、彼を通して全世界に神ご自身を示して救いの道を示したという、新しい「契約」のことです。

また、旧約聖書はヘブライ語で、新約聖書はギリシャ語で書かれています。このところがとても大切なことなのです。たとえば「罪」という言葉は、ヘブライ語ではもともと「神に対して何かしそこなうこと」を意味します。また、ギリシャ語では2つの単語が使い分けられています。判りやすく、同じ単語をもつ英語で例を挙げますと、窃盗や交通違反のように、法律や決めごとを守らない罪を「crime」と言い、刑法上では罰せられないけれど道徳や道義上、つまり神様やご先祖様に申し訳ない罪を「sin」と言います。このことを知っていると、女の子が恋人に歌う有名なスタンダードナンバーの、「It's a Sin To Tell a Lie(嘘は罪よ)」という歌のもつ意味シンさが分かるという訳です。

また「愛」は日本語では一つの単語でしかありませんが、ギリシャ語ではいくつもの言葉が状況に応じて使い分けられています(アガペ=神から人への愛・人から神への愛、エロス=男女や人と人の間

の愛、フィーロス=真実や真理への愛・信頼や友情)。

これらのことから、キリスト教の聖餐(キリストの血と肉を意味するパンと葡萄酒を食す儀式)をアガペと言い「フィロソフィー(哲学)」という言葉が生まれ、アメリカ独立宣言が行われた、City of Brothely Loveと呼ばれるフィラデルフィアの街の名前も生まれました。

こんなところが、キリスト教は「愛」の宗教であると言われるゆえんでもあります。

そんなこんなが、ワイズならではの「学び」なのです。

## 最後に

ワイズメンズクラブやYMCAは教会ではありませんし、キリスト教布教の場でもありません。しかし、身近に「イエス・キリストの教え」に触れ、学びとして接することのできる「場」なのです。

クリスチャニティーというとすぐに「宗教だ」「押し付けだ」「わしゃ仏教徒だ」と、大変迅速な反応をされる方がいらっしゃいますが、もっと気楽に、肩の力を抜いていただき、「ワイズやYMCAは、いままであまり知らなかったキリスト教の、そんな価値観に触れ、学び、知ることのできる機会である」という観点で「強要ではなく、教養として」この教えを受け入れてくだされば、こんなに嬉しいことはありません。

## プロフィール

長井 潤 (ながい じゅん)

1953年 名古屋クラブ入会  
1975年～1989年 奈良、名古屋YMCA主事  
2003年～2008年 クリスチャニティー特別委員会委員長  
2008年 クリスチャニティー特別委員会委員

名古屋キリスト教社会館、愛知いのちの電話評議員  
名古屋YMCAキリスト教センターディレクター

理事退任時に「遺言書」と称する提案を行った著者の危機感と提言。

# 16 もっと外へ！ もっと光を！

札幌クラブ 中 田 靖 泰

ワイズメンズクラブは自分のYMCAを支援し、それを通して地域に奉仕します。長い間奉仕を続けるためにはまずクラブライフが楽しくなければなりません。義務で奉仕を継続できるものではありませんから。クラブライフを楽しくするに、メンバーは皆それぞれさまざまな工夫をしています。私の場合は第一に他クラブ訪問でした。

## メーキャップ

メーキャップとは「自分のクラブの例会を欠席した時、他クラブで補填すること」と思っている

ワイズメンがいます。それだけではありません。クラブ訪問とは自クラブの欠席の補填のためにはありません。他クラブに学び、新たな交友を開発し、自己研鑽のために行うものなのです。

たとえば、出張で他都市を訪れる時など、日程が合えば(あるいは日程を調整してでも)他クラブを訪問してみましょう。そのクラブの地域奉仕(CS)に学ぶところがあるかもしれません。あるいは生涯の友に出会うこともあるかもしれません。

クラブ訪問を奨励するために区も部もクラブもさまざまな工夫をしましょう。クラブの例会の日程表、場所、日時などを見やすいように一覧表に

してロースターに載せましょう。日本には3,000人、アジアには10,000人、世界には30,000人のワイズメンがいるのです。

自分のクラブの10人、20人で満足しているのはもったいない話です。メーキャップとは仕方なしにするものではなくワイズメンの権利なのです。自分のクラブからちょっと飛び出してみましょう。新しいワイズが見えてきます。ワイズは自己研鑽の場でもあることを常に肝に銘じておくべきでしょう。

私も転勤などで幾度か物理的に退会せざるをえない状態になったことがあります。その度に私を思い留まらせたのは、ワイズを離れたら会うことができなくなる友人達の顔でした。

## ギャベル・リレー

クラブ訪問を奨励するためにさまざまな工夫がされてきました。

東日本区ではある年度にギャベルをクラブ間でリレーしたことがあります。ギャベルが自分のクラブに届いたら長く放置しておいてはいけません。出来るだけ早く誰かが他のクラブへ届けなければならないというルールなのです。

そのようにして交流が生まれ、他のクラブに学び、競い合いが生まれ、共に成長するきっかけになるのです。

今でも東日本区のいくつかの部ではギャベル・リレーが行われています。また、年度内に一番多くのクラブを訪問したワイズメンを表彰している部もあります。

## 部会、区大会、国際大会に出席しよう！

部会、区大会には万障繰り合わせて出席しましょう。アジア地域大会、国際大会にも時間と金とをやりくりして出席してみましょう。必ず得るものがあります。

国際大会を経験するとワイズライフは新たな次元に入ります。ワイズ運動は国際的な広がりを持っているのだということが実感でき、新たな意欲が湧いてくるはずですよ。

## IBCで新たな次元へ！

他クラブ訪問を一步進めるとIBCになります。国際的規模で交友を広めることができます。まだIBCを持っていないクラブはぜひ締結しましょう。アジア地域大会、国際大会などに出てみれば気の合いそうな相手は直ぐに見つかります。もし難しければ、東日本区は国際交流事業主任、西日本区は交流事業主任に連絡すれば見つけてくれるでしょう。IBCと交流することになるとワイズライフもまた一味違ってきます。

## YEOP/STEPをもっと活用しよう！

ワイズにはワイズの子弟を1年間外国のワイズの家庭へ送り出すYEOPという制度があります。

近年あまり活用されていないようです。メンバーの高齢化が一因だと言われていますが、残念なことですよ。

若い間に異文化を知ることは人間形成上得がたい経験です。YEOPでは巷の旅行社の主催する同種の企画では得られない経験をすることが出来ます。

私の娘もオーストラリアの家庭にお世話になりました。娘が滞在した家庭では、夫婦共働きで、子供も小さく日本人の感覚でいえば、とても留学生を世話するような状態ではなかったそうです。娘が「こんなにお忙しいのにどうして私を預かってくださったのですか」と聞いたところ、夫婦は「私達がかねがね日本に興味を持っており、いつかぜひ日本に行きたいと思っていたが、日本の方から来てくれるのだからこんないい機会はないと思った」と答えたそうです。

これを聞いて私達も感動し、それからずいぶん留学生を預かりました。与えたものより得たものの方が多かったと思います。「1年間はちょっと……」という場合にはSTEPもあります。

「来年を考える者は米を作る。10年後を考える者は木を植える。100年後を考える者は人を造る」と言います。YEOPの対象をリーダーなどにも広げて将来のワイズ、YMCAを担う青年をつくろうではありませんか。

## BFももっと活用しよう！

BF代表になれば3～5週間世界のワイズを見て回ることが出来ます。世界に友が出来、クラブとクラブを結ぶことも出来ます。

戦後日本のワイズがいち早く国際に復帰できたのはこのBF資金のお陰です。現役のワイズメンにはちょっと期間が長いのですが、日本の企業も次第にこのような充電の期間を認めるようになりました。

東西日本区は世界最大のBF資金を抛出しています。もっともっと活用しましょう。

## 終わりに

先見性、国際性、公益性、これがYMCAの、そ

してワイズの特長でした。このDNAを受け継ぎ、前者の轍を無難に受け継ぐだけでなく、次世代のワイズの皆さんが「ワイズの前に道はない。ワイズの後に道は出来る」……この気概を持ってワイズをさらに魅力ある組織に発展させていって下さることを祈っています。

## プロフィール

中田 靖泰 (なかた やすひろ)

1983年 札幌クラブ入会  
1989年 日本区IBC・YEPP事業主任  
1992年 アジア地域YEPP事業主任  
1999年 第3代東日本区理事  
2000年 国際議員

## 講演抄録

ワイズメンズクラブ誕生の背景をYMCAの創立にさかのぼり、国際憲法、日本区定款に込められた思いを語る。

# 17 ワイズメンズクラブとワイズメンに求められるもの — 奈良傳が伝えたかったことと私の願い —

東京山手クラブ 奈良 信

本稿は、2001年1月14日に大阪YMCA六甲研修センター(現六甲山YMCA)で開催された西日本区次期会長研修会における講演の内容を、演者の了解を得て、まとめたものです。

\* \* \*

## はじめに

昨日から久しぶりにいろんな人に会って、いろんな話を交わすことが出来ました。ワイズメンはやっぱり変わってへんわ。変わってへんけれど、変わってんねんやな。変わってるけど、変わってへん。

さて、僕が今、言うとかないと、判らなくなっ

てしまうということもありますから、ちょっとだけ言うときます。

僕は、旧国際憲法時代の最後の19代日本区理事です。日本語では理事といいますが、その当時の理事は、英語ではInternational Directorでした。新国際憲法によって20代区理事からはRegional Directorとなりました。新憲法で年度の区切りの時期が変わったため、僕の理事の任期は10か月でした。主な任務は、新国際憲法を日本に伝え、普及させること、そして引続いて新たな日本区定款を作ることでありました。

そのために、私はワイズメンの歴史を勉強せざるを得ませんでした。『History of Y'sdom』は、過去に3回、英語で出版されていますが、えらい

無理して読みました。また、YMCAの歴史にも関心を持たざるを得なかったので、YMCAの歴史についても、素人としてはかなり勉強しました。そして、それらに出てくる事柄を面白く話したので、皆さんから「奈良ブシ」といわれるようになったのであります。

## 父、奈良傳が伝えなかったこと

親父の奈良傳(初代日本区理事)が伝えようとしたものは、何かと言うたら、ワイズメン運動です。ワイズメン運動をこういう風にやれとか、ああいふ風にやれとか、を伝えようと思うほど、彼は傲慢でなかったと思います。次代の者が、それぞれしっかりとやっていってくれるだろうという気持ちだったと思います。

僕はこういう(六甲研修センター)自然の豊かな所へ来ますと、植林ということを考えます。植林は木を植える。時が経て、木を使うときには、植えた人は死んでしもうて、いないんです。けれども、良いことに使ってくれるようにと思いながら残していくわけですよ。そういう、信頼して委ねていくこと、そしてこれを本当に良くしてくれという、その思いを奈良傳は、持っていました。

奈良傳を動かしてYMCAとかワイズメンとかに人生を賭けさせるようにしたものは、私達をも揺り動かし、現代に即してやっていかせる源であろうかと思うのであります。

## 奈良傳の人となり

奈良傳は、九州大村藩の侍の家で生まれました。彼の親父は会津戦争に少年鼓笛手として参戦しています。明治になってから、もろうた退職金で銀行をやれということで、すってしまいよった。えらい貧乏しまして、屋敷を引払わんといかんようになった。彼の親は佐世保へ移って、字が上手やったんで、今でいう司法書士みたいなことをやったんじゃないかと思います。明治31年生れですから、奈良傳が小学校1年生のくらいの明治37年に日露戦争がありました。佐世保におったから彼は軍艦少年だったんですよ。日本海開戦のときのドカン、ドカンという大砲の音を聞いております。連合艦隊が三笠以下凱旋してきたのを、感激をもって迎

えています。それで、軍艦、軍艦、軍艦で、彼は、将来、軍艦を作る人になりたいと思ったわけでありませう。

佐世保中学校を出てから大阪高等工業(現大阪大学工学部)の舶用機関、船のエンジンを作る学科に入学したら、隣の席に中川という男がおりました。その中川ちゅうのがえらい苦学して、工員さんとして働きながらYMCAの夜学へ行っていた。大阪クラブのチャーターメンバー三井満寿夫さんの兄貴分です。大阪YMCAでジョージ・グリーンソン主事からいろいろ指導されて、中学の卒業検定試験をとった。「お前、高等工業行けよ」とグリーンソンさんに勧められて、トシ食うて入学したのです。奈良は金が無い、そんな話ばかりしておったのでしょう。そしたら中川が「ほなら、安いところだ」と、学生YMCAの磐上寮を教えてくれたんですよ。安いというだけの理由で、奈良傳はYMCAの寮に入ったのです。

ある春、クリスチャンの学生が皆、卒業してしまつて、寮にはクリスチャンが一人もおらんようになる。そら困る、誰か洗礼受けてクリスチャンになれと、ことごとに上級生が言いよるわけや。ところが、皆、下向いている。そんな簡単になれんわいな。ところが奈良傳は単純やって、彼は、寮に安うに入れてもらたんやし、世話にもなつてるんやし、「誰も受けないなら僕受けます」と言うたんや。なんにもキリスト教のことは判っておらんのですわ。その彼を入れてくれたのが宮川経輝牧師、大阪YMCAの初代会長、初代理事長だった人です。

その人が教会の尋問で「聖書を、お前はちゃんと読んどるか」というようなことを言わずに、「君は祈るとるか？」と聞いたので、彼は「祈ったことはあります」と言った。それは自分は、こうありたいとか、あらねばならぬとか、ということだったので。そしたら「よし、次ぎ洗礼式をやる」と言つて、彼は洗礼を受けてクリスチャンになった。クリスチャンになつてしもうた以上、ちょっとはキリスト教の勉強もせなあかんと思つて、だんだんクリスチャンらしくなつてきた。

奈良傳が一生の間に教会で、ある意味で戦つたことがひとつあります。教会が洗礼を受ける人に、「お前はこういうことが分かっとらん」「三位一体、これも勉強せな、あかんやないか」とか言つてなか

なか受け入れない。そういったことに反対しよったわけです。とにかく、「洗礼を受けたい」と言うたら受けさせたらええやないか、という考えを彼は一貫として持っていました。僕はそういう雰囲気の影響を子どものときから親父に受けております。

クリスチャンになったんですけれども、その寮がボロでしたから、建替えるというようなことを一生懸命やったのがもとで、その面倒を見る役目として、大阪高等工業YMCA学生主事になったんです。

もちろん軍艦のことがありましたから、一度は卒業して、当時、軍艦を輸入していた高田商会というところに勤めた。ところが彼がちょっと病気がしたりして休んでいるときに、寮の建て直しの機が熟してきて、誰かが面倒見ないかと、「お前やれ」というような話になったのです。その工事が終わったら、ちょうど大阪YMCAが古い建物を壊して会館を建設する計画があり、「お前は磐上寮で建築を経験したから、その仕事をやれ」ということで大阪YMCAの新会館建設を担当する主事になったわけです。

それが終わった後、彼は、いろいろとその後の自分の人生について考えたんでしょう。YMCAの会員部門を担当して、始めたのが、大阪Y倶楽部であるとか、タイガークラブとかです。ワイズメンズクラブのもとになるやつですな。僕は、Y倶楽部は判るけどタイガーってなんでかなと思った。阪神タイガースはそのときにはなかったし。これはすでに奉仕クラブのライオンズクラブがあったから、それでライオンに張り合うてタイガーとしょったんかいなど、そんな気がしてきました。

## 日本生まれのサービスクラブ

だから、奈良傳が日本のワイズの父であるとか、日本のワイズメンズクラブを作ったとか言われておりますけれども、アメリカから伝わってきたワイズメンズクラブを担当したとかではなくて、自分で初めからそういうものを作ろうといういろいろやっとなったわけです。

それに影響を与えたのが大阪ロータリークラブをつくった星野満さん、ここ(六甲研修センター)の星野池を寄付した人です。親父の同郷の先輩で、親父は非常に可愛がられました。それで、星野さんからロータリークラブの組織や運営について、

ちょっとは聞いたんじゃないかと思います。

奈良傳の誕生日は、明治31年1月14日で、今日が誕生日なので不思議な感じがします。彼は軍艦少年で、キリスト教とはなんの関係もなかったんですが、アメリカのYMCAの人達がお金を出し、人を献じて造ったYMCAの寮に、安いからといって入って、クリスチャンになり、軍艦のことをやめにして、ついでにボランティアムーブメントの流れの中から、YMCAの主事になったのです。

## ワイズメンズクラブとの出会い

やがて彼は、アメリカへ研修に行った。彼の関心のひとつは、米国にあると聞いていたワイズメンズクラブ。Y倶楽部やタイガークラブを発展させるために参考になるんじゃないかと考えて、冬、雪の降っている中を、当時の国際書記長のヘンリー・グライムスの家を訪ねるのです。

グライムスは自分の家をワイズメンの事務所にしておさんも手伝うて、まったくボランティアでやっとなったんです。遂にはそれが本職になるのですが。たまたま親父と同じ歳やったし、エンジニアだったので気が合うた。1週間滞在していろいろ教えてもらって、自分が今までやってきたクラブに当てはめて、こういう風にしよう、ああいう風にしようと考え、日本にもワイズメンズクラブを作ることを約束して帰国した。

そして大阪でY倶楽部、タイガークラブをもとにして大阪ワイズメンズクラブを1928年につくったのであります。

僕は、親父が磐上寮を新築した頃に生まれてくるわけです。親父が大阪YMCAに勤めとったから、中学校1年になるまで豊中におったんです。親父が39歳の時に神戸YMCAに総主事として招かれまして、岡本へ引越しましたから、僕はそこで育って、そこで洗礼も受けました。

子どもの時、初期のワイズメンズクラブのクリスマスなんか子どももみんな招いてもらった。プレゼントをもらえるし、何か勝負事のようなことやったら、必ず子どもが勝つようになってるわけやな。ワイズメンズクラブは楽しいところで好きでした。そしておじちゃん達が、みな今と一緒にです。何かこんなん付けて、なんか歌うたりしておった。

そこに顔の長いおっちゃんがおりましてね、あの人はお菓子屋さんやと聞いた。三井満寿夫さんや。お菓子屋さんがいたはる、お菓子もらわれへんかいなど、思ったことも覚えています。

## ワイズメンズクラブの誕生

親父は大阪ワイズメンズクラブを作ったのですが、そのワイズメンズクラブちゅうのは一体どういうもんや、ということですね。これは皆さんご存知のように、ワイズメンズクラブは、アメリカのYMCAの中で出来た。1922年といわれておりますが、正確にいうと1920年に出来た。これが国際協会になったのが、1922年です。

このクラブの設立には、すでにあつたロータリークラブやライオンズクラブやキワニスなどが非常にヒントになりました。YMCAの中でエバンス主事というような人がそういうクラブを作るんですが、クラブが盛んになってきたら、YMCAを出てしまふよるんや。YMCAは場所だけを提供しただけの結果になるのは、あまりメリットがないんですな。そこで考えたのが、YMCAのメンバーの中でも選り抜きの熱心で優秀なメンバーを集めてクラブをつくろうやないかということで、トレドYMCAの中にトリムカクラブというのを作った。これは皆さん、よく知ってるやろうと思います。その中心人物がポール・アレキサンダーであつたのです。

このトリムカクラブがYMCAに非常に役立った。それからメンバー同士の交わりも非常に良かったわけですね。17人ぐらいで始めたのが、すぐに75人になったといわれております。そのことがYMCAのためにも非常に有益であるということが伝わり、1922年になったら、ポール・アレキサンダーは、あっちこっちに呼ばれて、また見学に来たりして、オハイオ州にある他のYMCAにワイズメンズクラブに相当するようなクラブを作りよつたのですよ。

そうすると、トリムカクラブという名は、トレドのYMCAには通用するけれど、他の地域では具合が悪いという事情があります。そうしているうちにカナダにもクラブが出来た。ワイズメンズクラブは国際クラブや、とごっついこと言うところけれど、当時はなんのことない、カナダのクラブが一つ入つたから国際クラブや、ということになったのですよ。

そうすると名前を考えないかんわけですね。そこで閃いたのが、ワイズメンズクラブなんです。続いてマークも決まりました。このマークは、その時のワイズメンズクラブの精神というか、心というか、目的というか、教義を表しとるわけです。三角形はYMCAです。スピリット、マインド、ボディの健全な状態、これがYMCAやということですね。

ワイズメンズクラブというのはYMCAの中の選り抜きで、YMCAをがんばって支えるところのグループやと、それで三角形の中でYの字の形でぐわーっと頑張るとる。それもなんかしっかりとやってるわけではなくて、上にはベツレヘムの星が輝いておると。これはキリストが生まれたときに3人のワイズメン(賢人)をベツレヘムに導いた、あの星や、ということですね。

それですべてが語られていて、名前はワイズメンズクラブ、Y's Men's Clubです。

これは、まずはYMCAの中のクラブですね。YMCAの中で選り抜きの者がこれやということになったのです。アメリカで生まれたワイズメンズクラブはそういうものであって、今日、ワイズメンズクラブとYMCAは別の組織で、しかし精神は非常に共通したものがあって、パートナーシップ〈協力関係〉であるということになっていますが、この事情はまた、後から話します。

しかし、その時に出来たワイズメンズクラブは、YMCAが利用するというだけでなく、あくまでYMCAを発展させていき、ワイズメンのメンバーがYMCAの会員であることは当たり前であり、YMCA会員の中でもただ「俺は金を払ってるだけでええ」と言う、そんな程度ではあかんと、もっとYMCAのために一生懸命やるようなグループがワイズメンズクラブやという考え方だったので。

だから僕は区理事の頃に言いましたが、ワイズメンはYMCAの中のエリートだ。エリートというのは、なんか上座へ座って、なんぞ早よう出世するとか、そんな意味やない。エリートは、先のことをよく見通しもするし、そして本当に困難な事態になったら率先して働く、それがエリートですわね。そういうクラブであつたわけでありませう。

アメリカのYMCAの中にワイズメンが出来た事情はそういうことであつて、そのことは皆さんもう耳にタコが出来るぐらい知っておられるでしょう。

## YMCAの誕生と発展の経緯

それでは、ワイズメンクラブを生み出したYMCAとは、どんなものやったんか、ということになります。

奈良傳は、YMCAの興りについて非常に関心を持っており、YMCAの創立当時のジョージ・ウィリアムズについて、YMCAのメンバーの人達に良く知ってもらいたいと、簡単なパンフレットみたいな『ジョージ・ウィリアムズ』という本を作った。というところに奈良傳の心は表れていまして、その本はある意味において青少年の読み物でありました。

話せば長いですが、要するにロンドンのヒッチコック・ロジャーズ商会という呉服問屋に140人ぐらいの店員がおったわけですが、青年ジョージ・ウィリアムズは、店員の一人でありました。1700年代ですから、イギリスの産業革命の時代で、農村の次男、三男は都会へどんどん出て来るわけですな。今日でいうたら青少年の問題があるんですよ。彼らの労働条件は非常に厳しく、福祉施設とか厚生施設とか、そんなもんあらへんで、住み込みでやとった。モラルも非常に低くなっていく。そういう中でジョージ・ウィリアムズが仲間と話し合った。当時は、お祈りをする場はあるわけですわ。それでいろいろ話し合ったり考えたり、そして青年ですから楽しくやっっていこうということになったのです。なんのことはないYMCAは、田舎から出てきた呉服屋の住み込みの若い店員の中で生まれたわけですよ。もの凄く学のある人が作ったとか、あるいは社会の有力者が金を出してやったんじゃないんですわ。

若者の間だから喧嘩もあります、妨害もあります。それらを切り抜けたり、いろいろやっっていくわけですな。そこで大きかったのは、店主であったヒッチコックが非常に喜んで、こっちの部屋を使えといたり、支持してくれたことです。

奈良傳が繰り返し言っておりましたが、あの青年達、あるいは少年的な連中が、いろいろやっっていることを支持した、あのおじさんがワイズメンの源流やと。そして、このYMCAは呉服屋さんの同業者の間に広がっていくわけです。だからその頃、「わしYMCAやね」「そしたら呉服屋さんで働いてるの?」という感じやったんでしょ。

1844年6月6日に、YMCAにはなんかダブった数字が多いのですよ。44年の6月6日にYMCAは生まれたのですが、1851年にロンドンで万国博覧会が開催されました。このことがYMCAの発展に寄与するのです。アメリカなんかイギリスから出稼ぎに行っておるのが、里帰りして万博を見に来る。そこでイギリスのYMCAの活動を知るのです。

アメリカには、独身の若いモンがようけおるし、現場小屋のようなところで働きよる。開拓地ですから問題がある。そういう所にこそ、YMCAは必要やないかと思うわけですよ。

## YMCAが世界に広がる

YMCAのことを別の言葉で言いますと、Home away from Home、つまり、ホームを離れた人達のホームです。今、僕らも、ワイズメンは皆仲良くやとりますけれどね、これは私達みんなにとっても家庭とはまた別のひとつのホーム的なものがあるわけです。

そしてホームにおいて今まで知らなかった人と家族になり、兄弟になって楽しく、わあわあやり合う。このことが、Home away from Homeなんです。開拓時代のアメリカにおいてこそYMCAは適切やということで、アメリカに持って帰ってアメリカ、カナダにこれが出来た。これが1851年なんですよ。

その頃、ヨーロッパ大陸のドイツやらフランスやらにもこれと似たようなものが、出来かけておった。

スイスのジェノバにアンリー・デュナン(後に国際赤十字社を設立)という、当時18歳の少年がおりました。アンリー・デュナンは、農村の出稼ぎの子ではなく、ジェノバのいいとこの坊ちゃんでありまして、お父さんは実業家であり、お母さんは信仰深くて慈善事業とかに熱心なお母さんであった。デュナンも非常に人道主義的な考えをもって、刑務所を訪問して、手紙を書いてあげたり、聖書ばかりだったかは知りませんが、本を読んであげたりするグループをぼちぼちやとったわけです。

ある時、アルプスでフレデリック・モニアという青年と出会うのですが、これがパリ・ベシス(YMCA結合の原則・パリ基準)の原文を書いた男です。この男が仲間になって木曜会という組織を作



るのです。アンリー・デュナンという人は人道的な考えを持っていたと同時に、非常に外国の事情に興味があったんですな。そして手紙書きやったわけです。帆船でひと月遅れで来るアメリカの新聞なども読んでいた。それでアメリカにYMCAが出来ていることを知り、手紙を出したり、ヨーロッパの中を仕事で駅馬車なんかで回るときに各地のYMCA的なグループと連絡をし合ったりしていたのです。

さっき言ったフレデリック・モニアはパリ大学に留学し、パリのYMCAに出入りして、いろいろ手伝いました。1855年のパリの万博の時に、世界でYMCAやYMCA的なことをやっておる者達が一堂に集まってみようやないかという企画をして、デュナンがそれまでに手紙を書いたり訪問していたところなど、あちこちに案内をした。返事がなかなか来よらんという話だけはありました。最後まで返事がけえへんで、当日、飛び込みできたモンもおったかも知らん。

結果として9つの国の38のYMCAから、99人が、初めて出会うた。話し合ってみると、皆それぞれ特徴があり、違うことやとるけど、似てるなあ、精神は同じやなあ、ということになった。これを最終日にひとつの書面にして、われわれの宣言、そんなものにしようということになるのです。

けれども、酒はなかったらしいけれど、青年の飲む飲み物があつたらしくて、そんな飲みながら皆、寝てしまひよった。フレデリックが一番元気だったので最後まで頑張って宣言文を書いたんですわ。それで採択されたのがパリ・ベイシス(YMCA結合の原則・パリ基準)です。

だからパリ・ベイシスは、神学的な議論を踏まえて神学者がなんやいろいろ言い換えてとか、そんな大げさなものじゃなくて、そういう青年達がこしらえたものです。それだけに、非常に生き生きした文だと思います。

歴史上、このパリ大会で万博のときに集まった会を第1回世界YMCA同盟総会として、その日を世界YMCA同盟の設立日としているのであります。

## アメリカのYMCA

デュナンらが中心になってYMCAを作っていた1851年～1852年頃ですが、アメリカにYMCAが設立され、どんどん発展していくわけです。発展し

ていく中で、雪の中でもスポーツが出来る室内体育館を作りよった。鉄道が敷設され、西へ西へと行く。鉄道工事では若者が働きよるし、鉄道が動くようになると、機関士やら車掌さんやらは若者で、家を離れて今日は泊まりや、ということになりますね。それで鉄道YMCAが出来てきます。Home away from Homeですから、鉄道YMCAがそれなんです。名前を忘れましたが、鉄道YMCAをやったおっさんが、学生YMCAを作ったんです。大学生は郷里を離れて泊まる所が要るわけや。だから学生YMCAちゅうのは寄宿舎が中心でした。

青年がもっと集まる所はどこや。軍隊ですわ。軍隊は皆、家を離れている。軍隊YMCA、そういうのが出来ていくんです。ところが、1851年にアメリカにYMCAが出来たが、1861年からは南北戦争ですわな。学生YMCAの一番初めは1864年なんですがね。南北戦争で南部のYMCAはつぶれた。北の方も戦争のためにYMCAも発展しない所がありました。それで南北戦争が終わってから後にYMCAは盛んになっていくんです。

面白いのは、岩倉使節団が初めてアメリカへ大勢で行ったとき、YMCAに出会っています。雨の時でも家の中に機械を置いて、今日でいえば体操やね、そんなことをするらしい。変わった珍しいものやと書いてあるんですわ。「あ、これはYMCAやな」と僕は思いました。

## 学生YMCA

そのようにして、YMCAはアメリカでどんどん広がっていくんですが、大きなことは学生YMCAの発展であります。学生YMCAは1886年からだったか、マサチューセッツのノースフィールドというところで夏期学校をやる。そこへ、ブービーという有名な名説教家が講師として来よったんですな。外国、アジアが多かったのですが、外国へ派遣されておって何年か一度休暇で帰国する宣教師達を呼んで、その経験談を聞くことが習いになっとった。それを聞いて学生が感動してね、150～160人おつたら、そのうちの、100人近いやつが、「とにかく俺は宣教師になる」と、言い出すわけですよ。だからYMCA主事のジョン・R・モットーなんかちゅう人は、その2回目のときに決心しよった人ですよ。

これの繋がりの中で決心しよったんが、近江八幡

のポーリスさんだそうです。この運動を、Student Volunteer Movementというのです。日本で今日、ボランティアという言葉が使われておるんですが、ボランティアとは元々は軍隊用語です。召集されていやいや入隊するのもおるんですが、自発的に「俺は兵隊になる」というものをボランティアといい、これは義勇軍と訳されておりました。日本でも以前はボランティアというのはなんやと、普通の人は知らなかった。今は、ボランティアは日本語になってしまったわけです。

このボランティアの学生YMCAの運動の中で出来たひとつが、親父が入った磐上寮です。そういった影響をもとに、親父はYMCAそれからワイズメンということになってきたのであります。

いま、古い話をずっとしてきましたが、親父は大阪ワイズメンズクラブを作って、ワイズメンが一生懸命やりかけた頃に、いやらしい時代になって、満州事変が起こります。国際協会から日本区に電報が来たのです。僕が今、あんな電報が受けとったらびっくりしますよ。「お前とこの国の軍隊が俺のどこ攻めてきよる」とか「おい、お前止めてくれるようになんとかやってくれ」なんていうような電報が届いたら、今の区理事さんどんな返事しはりますねん。まあ、そういうようなことに遭遇しとったわけです。このような経験は私の親父にとってはですね、大きな経験であった筈です。

僕はその頃のことは断片的には経験していますから、言い出したらなんぼでも話がありますが、日本のワイズメンズクラブは、はっきりいえば戦争でペケになったわけです。

ヨーロッパではどうなったかというたら、東のヨーロッパは、ナチスの時代、ソビエトの時代になっていくわけですし、ワイズメンズクラブはほとんど潰れてしまって、わずかに、デンマークなんかにはちょっと出来たのは戦後の話であります。

## ワイズのヨーロッパへの働きかけ

戦後の1947年、ノルウェーのオスロで世界キリスト教青年大会というものがあつたんです。主事のラッセル・ダーギンさんは進駐軍の顧問として戦争が終わった年の10月に再来日しました。僕は出会って非常な感動を覚えたんですが、あの人が一生涯懸命になって日本からオスロに日本の青年代

表が行けるよう尽力しました。実は私が学校を卒業したところだったんですが、その一員として参加することになっていました。ところが、いよいよ出発という土壇場のところで許可が下りず、だれも行けなくなつたんです。

後になって判ったことですが、その時、オスロには、後に国際会長になった韓国のオウムさんや、ヨーロッパなんかのワイズメンのある年配の人達は、参加しとって出会っているのです。俺は行けなかつたんやということで、後になって僕は、病氣して皆が反対しよつたけれど、オスロの1986年の国際大会に行きました。格別の思いがあつたんです。

その会議にアメリカの若者が参加して、アメリカでワイズメンちゅうのは、こうやと言うたんで、その影響で北欧にクラブが出来たこともあつたのですが、その程度でとどまつた。

さて、1955年、つまりパリ・ベイシスが出来てから100年、世界YMCA同盟100周年大会がパリで行われました。これに私の父も参加しました。そこでワイズメンズクラブにとって大事なことが起こってくるのであります。

100周年大会に参加しておる世界のYMCAの幹部は、ほとんど、ワイズメンズクラブって何やねんという人やったわけです。当時、世界に約1万のYMCAがありました。ワイズメンズクラブの数は525であつたと記録されておられます。525のうち、ほとんど500近くがアメリカ、カナダのクラブだったのです。ワイズメンズクラブはアメリカ、カナダのものだったんです。

## アメリカ、カナダ中心だったワイズメン

さて、「国際」となると格好つけな、いかん。僕は1963年に国際大会に参加しましたがけれども、国際大会というたかて、アメリカ、カナダがお祭りをしはって、われわれは色づけするために呼ばれて旗を持たされるわけや。日本からは2人以上参加しておつたので、オランダの旗を持たされて。本当にどの国が参加しているか、よう分からなかつた。当時、その国の旗を持たされた経験のある人は多いと思いますよ。アメリカ、カナダの方は非常に親切に優しくいろいろやったださつたから感謝をしているけれども、この頃は、国際というたかて、あまり国際やないなと思つた。

## 国際憲法の改定

ワイズメンインターナショナルは1922年に生まれました。僕の生まれたのは1922年、ソビエトが誕生したのも1922年ですよ。ソビエトは潰れてしまいましたが、私も、ワイズメンズクラブも生きとる。

ワイズメンズクラブの50周年をゴールデンイヤーちゅうてね、その時に金集めて、ワイズメン本部の自前の事務所を建てたわけです。その事務所に働いている人が12人いた。非常に立派な事務所であったし、いろいろな印刷物やなんかもいろんなええもんも出来たんですが、急速に、ワイズメンズクラブが弱ってしまい会員が減ってきたということがあったのであります。ここでワイズメンズクラブは生まれ変わりを図ったのです。

結局、国際憲法が変わったでしょう。そして本部がジェノバに移って世界YMCA同盟のモットー記念館という所の一室で、イングヴァー・ワーリンが国際書記長になったのです。それまでは私なんかもインタナショナルディレクターでしたが、それぞれのリジョンに理事がおるようになった。リジョンディレクターが何で日本語で「理事」なのかというのは、昔の国際理事というところから伝わってきているわけです。

それまでの50年の間の国際会長はすべてアメリカ人かカナダ人であって、その一番最後の頃にデンマークのポール・ヨルゲンセンちゅうのが米大陸以外で初めて国際会長になった。ついこないだまで、そんなだったんです。

## アメリカ型とヨーロッパ型の違い

ここで、さっき言い残した大事なことを言いますと、パリで世界YMCA同盟の100周年大会をやった。ほとんどのYMCAの総主事がワイズメンのことを知りやらへん。その頃、ヨーロッパでは僅かに15クラブしかなかった。しかし、ワイズメンズクラブが発展していくためにはヨーロッパにクラブが出来ないとあかんということがあったわけです。その大会でワイズメンについての講演を頼まれたのが奈良傳だったんです。ワイズメンズクラブの国際レベルで、なんか言うたりやったりするのは、アメリカとカナダしかおらへんのです。他は皆お客さん扱いみたいなもんで。ひどい言い方すれば、

奈良傳は、唯一のインターナショナルな問題に意見も言うてくれる人やということやったのです。

たとえば、ワイズメンズクラブちゅうのは英語の名前やと、そんな名前は日本の中に相応しくないやないか、ちゅうことを日本が言うとしたんやなくて、アメリカの中で、えらい親切的な議論もあつたんですよ。日本人に意見を聞いてみようということがあって、これに奈良傳が発言したのですね。

日本ではワイズメンズクラブちゅうのは日本語や、なんだか変な名前を付け替える必要はないというようなことを言うたんです。これはワイズメンズクラブという名前を守ろうと思うていた派の人にとっては、当事者が言うのやからちゅうことになって、ワイズメンズクラブの名前は安定したんです。それまでは、ごちゃごちゃとした議論があつたんです。

彼は、ワイズメンズクラブをヨーロッパで広げていくためには、YMCAのおけるパリ・ベイシスにあたるようなものがワイズメンズクラブの中になければ、アメリカでは通用するかしらんけれども、ヨーロッパでは無理やという思いを持っていました。このパリ大会でその発言をするんです。それが時間をかけていろいろ検討されて、出来た文章が、「イエス・キリストの教えに基づき」という綱領になったわけです。

## 「イエス・キリストの教えに基づき」ということ

そして、国際憲法でも、それはそのまま受け継がれて、ただ、新国際憲法では、「イエス・キリストの教えに感動し (Inspire the teachings of Jesus Christ)」というところの「Inspire」を「based on」にしたんです。「based on」にすることは、僕もジャマイカの国際議会で強く主張したんです。それは何かというたら、日本では、イエス・キリストの教えにごつつInspireされたとか、いうことは、クリスチャンでも本当にInspireされたかどうかあやしいのが多いわけやから、ちょっとそれはきついと。だからInspireされる人もおり、俺にはピンとこんとと言う人があろうと、何と言おうと、ワイズメンの運動は「based on the teachings of Jesus Christ」だと。

「based」というのは見えへん、土地の中に埋まっ

ているのだけれども大事な所を支えてるんだと、それがbasedやと。だからきらきらきら見えて、教会に行く奴がこんだけになったから、ワイズメンズクラブは良くなったちゅうようなとは違くと、見えなくていいんだと。それが支えになって、あらゆる宗教、どんな宗教、俺はあんな宗教は堪忍してくれという人も、皆が燃えてそのベースの上でワイズメン運動をやってるんじゃないかと、そういうことであればいいんだと、主張しました。それがイエスさんの心やと僕は思ってるわけです。

日本区定款で、「あらゆる宗教、信条の違いを超えて」という文言になっるとするのは、私の独断ではなかったけれども、それを主張してこれにしたんです。英語の原文は「all faiths」で、あらゆるという意味です。

しかし、ヨーロッパの人には、そんな言い方もええかも知らんけど、僕らはあらゆる宗教なんかいうたら話がややこしいて、どんな宗教団体であっても呼ばんといかんのかと言われてたら困ると思ったし、日本人は、いろんな違いを超えてという言い方が好きやから、これは事実とはそう遠くはないと判断して決めたんです。ただ僕はびくびくもんやったんです。あれ、国際憲法と違うやんけと言うて吊るし上げられること期待しとったんです。ついに、指摘されなかったんで、がっかりもしました(皆、区定款をあんまり読んどらへんのかいなと思いましたが、森田恵三さん(京都ウエスト)が今日、言うてくれたから僕は非常にうれしかったわけです)。

## ワイズメンはYMCA会員であるということ

(森田さんが言われたことで、)ワイズメンはYMCAの会員でなければならんということがあるでしょう。あれは国際憲法には書いてないんです。なんで日本ではそうなっとなのやということを話します。

旧国際憲法には(アメリカの前の憲法)そのことははっきり書いてあったんです。僕が理事になった当時、日本区は非常に発展していて、日本ではワイズメンはYMCAのメンバーでなければならん、というようなことはもうとっくに守っているという誇りをもっとったわけです。新日本区定款では国際憲法に合わせて、YMCAの会員であれと書きませんでした。そしたらね、代議員会の議場で吊るし上げられました。「これは日本のワイズメン

運動の誇りやろ、ずーっとやってきたことを何ではずしたんや」ということになりまして、第1回の代議員会で加えることに決定したんです。そういう歴史があるんです。

それでは、国際憲法にこのことを書いてないのはなんでやということをお願いします。

YMCAはヨーロッパで始まったのですよ。ヨーロッパのYMCAには伝統があるわけです。ところがアメリカにもアメリカYMCAの伝統が出来ていて、その中でワイズメンが生れたのです。だからワイズメンはあくまでもアメリカ的、アメリカのYMCA的なんや。日本はその意味でアメリカ的のやってきたんですよ。

誇り高いヨーロッパのYMCAの中で、YMCA会員がワイズメンになるということはヨーロッパではちょっと過激に属するようなところがあります。「YMCAなんか嫌いや」というような者が「ワイズメンズクラブはええ」というて設立したワイズメンズクラブやというようなところがありまして、ヨーロッパでは、なじまん点がありました。

僕が国際議員だった頃、パートナーシップ〈協力関係〉の話が出始めました。YMCAの内側からでなくて、パートナーとして協力してやるんやというように持ち込まないと、アメリカと日本以外の国においては具合が悪い、いろいろ問題があった時に、より多くの方が現実にYMCAとワイズメンズクラブが仲良くやっていくためには、パートナーシップでやった方がええやろうということになったのです。現実には日本においては、YMCAとワイズメンズクラブは良い関係でありますから、現在の定款(日本区定款)になったという事情があります。

## 今、最もYMCAらしいところ

やっぱり一番肝心なことは何かというたら人ですね。人です。人と交わり人と出会い、そして人と人がお互いにニッコリし合えたり、心が通うてるというようなことが人生の喜びであるのです。

ワイズメンズクラブには、クリスチャニティーとかなんとか、いろいろあります。YMCAというだけでも、「ちょっとかなわん」と、入りにくいわけです。だけど「僕はワイズメンズクラブのことをなんかで読んで、ワイズメンズクラブの精神に非常に共鳴したからワイズメンズクラブに入りたい」

と言うて自分から入会を申し込んだ人、この会場にいらっしゃいますか(注 何人かの手が上がった)。それは例外的でしょう。たいていは「何や知らんけどあいつが誘いよるし、俺、ちょっとそんなとこ、かなわんと思うたけど、今日あるからお前来るやろな」、「しゃない。いやと言われへん」と言うて入会する。「かなわんな、かなわんな」と思っているうちに、僕はアリ地獄というんですが、早いとこ逃げとったらええんやけども、なんやそれも悪いとかなんとか思ったりして。「どっぶり温泉につかれ」とか言う人がおったりして、どっぶり入ったら災難でアリ地獄になるんですよ。

災難に遭うたらみな怒る、腹立てますよ。俺を騙しやがった。そやけど、こんなこと言う人はあんまりおらんわけやね。なんか、みなゲラゲラ笑うて、もうはよ寝たらええのに、僕も、昨夜は2時まで付き合うたんですよ。楽しいこんなことになってるちゅうのは、ワイズメンの現実ですわな。いろいろな苦労があるだけけれど、しかしやっぱりこれは、ええ仲間です。生涯を通して仲間ですよ。こういったことが、Home away from Homeです。

これはHome、YMCAです。だから今、最もYMCAらしいとこはどこやと言うたら、僕はワイズメンズクラブやと思います。

ワイズメンズクラブはYMCAの本当の歴史を受け継いで、どういようように発展させていくかということについて、研修会を開いて、この雪の中までこんなに遅うまで勉強して、それまでしてやるとるちゅうのは、これは素晴らしいですよ。「かなわん、かなわん」と言いながらやるとるわけやから、これ偉いもんやと思います。私は、奈良傳がこのことを知ったら、「は一、やとる、やとる」と喜んでいていると思います。

以上でございます。

### プロフィール

奈良 信 (なら しん)

1959年 東京山手クラブに入会

1962年 東部部長

1973年 第19代日本区理事

1976年～1977年 国際副会長として国際定款、区定款策定にかかわる

父は初代理事・奈良傳

### 参考資料

日本のワイズメンズクラブの黎明期に、YMCA、ワイズ、行政の組織を横断的に歩んだ人物像を活写した奈良 傳さんの文章です。

## 松田 稔 兄 と 私

奈良 傳

ワイズメンズクラブのために永らく奉仕された松田稔兄は昨年7月、大阪YMCA副総主事を辞任され、大阪府青少年野外活動協会へ転任された。

尚その後も大阪クラブのメンバーとして出席しておられる。

松田兄がクラブに関係したのは昭和の初年で、始めは私を助けて、月報の謄写印刷を担当した。その後メンバーとなったのは確か戦争も終りの頃であったろう。戦後は大阪クラブ復興のために力を尽し、引続き17年間担当主事としてよく働かれた。

私が1947年、初めての日本区理事に就いた頃から52年まで、5年間留任している間、区書記として、クラブの復興、新設、強化のため、また日本区大会の発展のため、私を助け、また私に代って誠心誠意世話をしてくださったのは松田兄であった。

私共二人はたしかによいコンビであった。今から思うと実に飛躍的で、1947年以前、大阪・東京・神戸の3クラブだったものが同年6クラブ、翌48年7クラブ、49年5クラブ、50年3クラブと増加し、4年間に3クラブか

ら24クラブに発展したのであった。

1951年に大阪土佐堀が生まれた。これは新しい型のクラブで同一YMCA内に2個のクラブが出来た最初のものである。その後東京にむかでクラブが出来、またブランチクラブも次々に結成され、クラブ数は増えていった。

尾形、松野両兄が区理事をつとめた時は、高山、鈴木(武)の両主事が区書記となって補佐した。岩越理事の時代(1961～63年)には理事秘書として、また松田兄が区のために働いた。

区報や会員名簿など面倒なことをやって下さった。私の目から見れば松田兄はYMCA半分、ワイズメン半分に働いた人で、こんな主事は二度と出る筈もないとさえ思う。

さて、今から10年程以前に、大阪府青年問題協議会で青少年の不良化や非行が取り上げられていた時、青少年の健全育成こそ必要であると再認識され、大阪府青少年野外活動協会が全国に先がけて設立された。松田兄と私とはキャンプやグループワークの草分け時代を背負っていたので、これらの一連のことに主役を演じさせられていたが、私は理事長に、松田兄は副専門委員に挙げられたので

ある。

吾らの提唱を額面以上に受取って大阪府は1963年に総合野外活動センター設立に踏切り北攝高原に62万坪の土地を購入した。4年計画で数億円を投入し、7個のキャンプ場がその中に計画され更にセンター本館(150ベッド)、自然研究センター、養魚場、放牧場、野外ステージなどが建てられつつある。

協会はこの運営一切を府から委託されたが、センター

所長たるべき人は松田兄をおいて他にある筈はなく、大阪府知事の切なる要請もあったので、YMCAを去ることは惜しまれたが、Yのエクステンションのような気がまえて、遂にその求めに応じることとなった次第である。

私が理事長、松田兄が所長、このコンビがここまでついて来るとは夢にも思わなかったが、私と松田兄との関係は臺場まで続くのだろうとさえ思われる次第である。

(日本区報より 1965. 5. 1 発行)

ユースに夢とチャンスを与えるのがワイズの使命。  
今、ユース育成の方向が定まってきている。

## 18 今の課題 ワイズとユース

東京センテニアルクラブ 西村 隆夫

ワイズとユース、過去からの課題であり、永遠の課題であるとも言えます。1922年米国オハイオ州、トレドでワイズの前身のトリムカ・クラブを設立したときのポール・アレキサンダーは20歳代後半の青年判事でありました。YMCAをサポートしようとする彼のもとに集まったのも同じ年代の使命をもった連中でありました。彼らもその1クラブが今や74ヶ国、1,700クラブ、31,000人の組織になるとは夢にも思わなかったでしょう。ワイズが設立して、85年が過ぎて、世界的に高齢化が進み現在の世界のワイズメンバーの平均年齢は57.6歳です。平均年齢のもっとも高いのはヨーロッパで63.0歳、アメリカは57.9歳、アジアは53.3歳でもっとも低いのはインドの42.0歳です。

ワイズで良く言われるのは、大切なのはワイズ・スピリットで年齢は関係ない！ もちろんその通りですが、どんな運動もその推進母体の組織の運営をつかさどる会員の高齢化は運動拡張のスピードと運営力に大きく影響します。ワイズメンズクラブは他の国際奉仕クラブとはその性格を特にしているのは、イエス・キリストの教えに基づく運動であり、世界YMCA同盟とパートナーシップを締結し、その活動を展開し、そのことをミッショ

ンの大切な部分としていることであります。ですから、ワイズメンズクラブはサポートするYMCAの青少年教育・野外活動などに協力をしつつありますので、ワイズは絶えずYMCAとともにユースに手をさしのべているともいえます。国際交流事業でも、永年ワイズメンズクラブはYEOPで若いワイズメンの子弟を中心に交流事業をすすめてきており、近年ではビザや受け入れるワイズメンの家庭減少と現地学校の問題などもあり、短期のSTEPでの交流やYIA(Youth Involvement and Activities)で事業を推進しています。

1988年の京都国際大会でのユース・コンボケーションは大規模なワイズによるユースの大会として位置づけられると言っても過言ではないくらいに、アジアのみならず世界からのユースが参加し、日本のワイズと参加者が協力し成功させたことは画期的なことでありました。その大会がきっかけとなり、ユース・イーストとユース・ウエストという大会に参加したユースを中心の集まりがスタートしました。それぞれはワイズメンズクラブからバナーも授かって彼らの交流活動をつづけました。

しかし、YMCAのOBリーダー達の交流も世代が変わるとなかなかメンバーが継続していかないと同様に、これらのユースクラブも活動の維持は易しいものでなく、またワイズ自身も彼らの活動を直接サポートするというのが出来ない状態でもありました。それでもワイズメンズクラブ国際協会は各エリアや国際大会でのユース・コンボケーションを継続し、大会に参加した多くのユースがすばらしい交流と動機付けをうけました。

国際本部でもYI(Youth Intern)ユース・インターン制度で世界のユースから毎年一人を1年間国際本部でインターンとして本部の仕事を手伝い、各エリアのユース達とコミュニケーションをし、ユース・コンボケーションの企画などのリーダーシップを取っています。日本からは2001年9月から東日本区・沼津クラブの稲田ワイズのコメット、稲田奈々美さんが1年間ユース・インターンを経験されました。これらのインターンの動きにも呼応して、IYR(International Youth Representative)国際ユース代表やAYR(Area Youth Representative)エリアでのユース代表が積極的にコンボケーションの企画やコミュニケーションを活発にとりだす流れに繋がっていきました。

2004年8月に日本からのユースで、インド・コーチンで開催されたユース・コンボケーションでの選挙で西日本区・姫路クラブのコメットの橋崎頼子さんが国際ユース代表に選出されたことは日本のユースの新しい時代の幕開けとなりました。また、そのことを国際的にも大いに後押しすることがワイズメンズクラブで決定されました。それは同じコーチンで国際大会直前に開催された国際議会(ICM)で、ワイズの長年の案件であった、ワイズ・ユースクラブのガイドライン作成の最終部分にユースも加わり、最終案がまとまり、議会に提出され満場一致で可決されました。このことによって、ワイズメネットと同じく、ワイズ国際協会はワイズ・ユースクラブを正式にガイドライン上でも、ワイズファミリーとして認めることとなりました。そのガイドラインの決定と、ユースの熱意と活発な動きは、とくにアジアで広がり、マレーシアを始め、日本でもワイズ・ユースクラブ横浜-Y3が2007年1月に認証を受け、続いて、姫路-Y3も認証され、

さらに東京圏でも2008年6月にワイズ・ユースクラブ東京-Y3が認証されました。

それまで、このガイドラインがない時代に設立されたユースのクラブの東日本区・Y3E(1998年6月設立)が、ワイズ・ユースクラブ東京-Y3の設立に加わって、発展的に解散するような流れも出てきています。Y3宇都宮(2003年6月設立)は宇都宮クラブのスポンサーで20名以上のユースが登録され活動していますので、新しいワイズ・ユースクラブとともに活発な交流や大会に参加できることを期待します。

2009年にはスリランカでのユース・コンボケーションや、特に2010年に横浜で開催される国際大会でのユース・コンボケーションに向けてのワイズ・ユースクラブの活躍が期待され、その環境をワイズメンズクラブが積極的に作りだしていくことが、今後のワイズメンズクラブとユースのあるべき姿を現実のものとするか、瀬戸際だと思えます。

ワイズコメット(ワイズリング)、孫メットのみならず、YMCAと共に、YMCAリーダーや学Y(学生YMCA会員)メンバーも積極的に参加してもらい、国内・海外での交流の機会をどんどん提供していくなかでワイズメンズクラブもYMCAも将来の両運動のリーダーを輩出することが出来るでしょう。

今まさに求められているのは、YMCAと共にユースに夢とチャンスを与えられる、ワイズメンズクラブのスピリットと若々しい行動でしょう。

## プロフィール

### 西村 隆夫 (にしむら たかお)

- 1982年 大阪センテニアルクラブチャーターメンバーとして入会
- 1984年 東京クラブ転会
- 1986年 Tifysクラブチャーターメンバーとして移籍
- 1988年 日本区書記・第58回京都国際大会HC委員(チーフマーシャル)
- 1990年 日本区書記
- 1994年 日本区ユースアクティビティ事業主任
- 2000年 東日本区国際担当事業主任
- 2003年~2006年 国際議員
- 2004年 東京コスモスクラブ転会(Tifysクラブ解散)
- 2004年 アジアエリア会計
- 2005年 東京センテニアルクラブチャーターメンバーとして移籍
- 2007年 アジアエリア書記・2010年横浜国際大会広報委員長
- 2008年 ISD-LTOD(リーダーシップ・トレーニングと組織関係、国際事業主任)

ワイズ・YMCAのファミリーとしてユースにその魅力を分かち合い、その活動を見守って欲しい。

## 19 YMCA・ワイズファミリーの一員としてのユース

ワイズ・ユースクラブ姫路-Y3 橋崎 頼子

### 1. ユースって？

YMCAやワイズメンズクラブにかかわる「ユース」とは誰のことを指すのでしょうか？ 現在、ユースの定義を、ワイズメンズクラブ国際協会は「15歳から30歳の男女」、日本YMCA同盟は「18歳から35歳の男女」としています。以上の定義に従えば、10代後半から30代半ばくらいまでの男女のことを「ユース」と呼ぶことができるようです。

次にユースを、グループで分けるとYMCAボランティアリーダー、ワイズコメット、学生YMCA、その他のユース、という4つに分けられます。これらのユースは各々違う場所で活動していますが、同世代であり、YMCAの理念に賛同して活動している、いわば「YMCAファミリー」の一員という点では同じです。

### 2. 今、なぜユースなのか？

それでは、今、なぜユースに対する取り組みが課題となっているのでしょうか。

まず、国際書記長のDalmás氏は、ワイズメンズクラブの平均年齢の上昇に対する懸念を示し、「ユースはワイズメンズクラブの未来だ！」と述べています。長い伝統を持つワイズメンズクラブがより活力あふれるクラブになるために、ワイズの継承者そしてパートナーとしてもユースの参加が求められています。

次に、学校卒業後の受け皿が求められている点です。YMCAを愛し、ワイズメンズクラブが好きなユース、豊かな経験と実践知識を持っているユースの多くが、専門学校、短大、そして大学卒業をきっかけにYMCAやワイズメンズクラブを離れてしまっています。YMCAやワイズメンズクラブに

とってこれほど残念なことはありません。卒業後も活動を続けていけるような支援体制が求められており、具体例として、後に述べるワイズ・ユースクラブやリーダーOB・OG会が注目されています。

最後に、国際的な文脈の中でユースの意思決定への参加の重要性が認識されてきたことです。これまで、法律の年齢規定や、「一人前になるまで意見を言わない・聞かない」といった社会慣習によって、ユース世代が意見を表明する機会は制限されてきました。

しかし、意見を表明する権利は世代を超えて平等に与えられており、ユースの声を取り入れることは、民主的な組織運営にとって欠かせないと考えられるようになってきました。

ワイズメンズクラブでは、国際議会(ICM)に国際ユース代表の参加を認めています。また、世界YMCA同盟では、去年(2007年)評議員の3分の1がユース世代から選出されました。青年による青年のための奉仕団体として出発したYMCA、それを支援するワイズメンズクラブであるからこそ、現代においても、ユースの意思決定への参画に積極的に取り組んでいくことが求められていると思います。

### 3. ワイズ・ユースクラブ設立までの大きな流れ

ワイズメンズクラブ国際協会の中で、ユースの活動が本格的に組織化され始めたのは、1994年、第5回ユースコンボケーションにおいてでした。この大会でユースは、ワイズの組織を参照しつつ国際ユース代表とエリアユース代表を選出しました。また、国際議会において、国際ユース代表が国際議会へ参加することが認められ、国際本部(IHQ)にユースインターンを置くことが決まりました。



このような国際の動きにいち早く対応したのが、日本のユースでした。2年後、韓国で開催されたアジアユースコンボケーションの参加者らによって、「Y3-East」「Y3-West」という区認証を受けたユースの会が結成され、その後、「九州ヤング」「Y3宇都宮」が設立されました。就職や進学に伴う移動により活動の継続に困難を抱える会が多い中、Y3宇都宮などは、今も地道な活動を行っています。

2004年のインド大会では、国際ユースにとって新たなステージが訪れます。国際議会で、ワイズメンズクラブのパートナークラブとして、国際協会から認証を受けた「ワイズ・ユースクラブ」の設立が可能となったのです。その後、チャーター関連の書類が承認されたことを受けて、2007年1月に世界初のワイズ・ユースクラブとして「ワイズ・ユースクラブ横浜-Y3」が、3月に「ワイズ・ユースクラブ姫路-Y3」が設立されました。2008年6月現在では、韓国、香港、オーストラリア、ロシア、ケニアなど、世界に15の国際認証を得たユースクラブが誕生し、今後とも各地に設立される予定です。

#### 4. ワイズメンズクラブの皆様にお願ひしたいこと

- (1) ワイズメンズクラブの魅力をコメントと分かち合ってください。

私の両親はワイズメンズクラブのメンバーです。私にとって両親とは、ワイズメンズクラブの魅力を良く理解しており、それを子ども達と分かち合ってくれた先輩です。私は小さい頃から両親に連れられてYMCAのプログラムやワイズメンズクラブの家族例会に参加しました。

また、高校生の時にYEOP学生としてデンマークに1年間留学し、大学生の時には国際大会やアジア地域大会のユースコンボケーションへ参加する機会が与えられました。国内外の素晴らしいワイズメンの方々やユースとの出会いは、今の私の多くを形作ってくれています。

またこの体験は、現在、私がワイズ・ユースクラブで活動する上での大きな原動力となっています。実際、YEOP、STEP、ユースコンボケーションのいずれかに参加した経験を持

つコメントは、その後、積極的にYMCAやワイズ・ユースの活動に参加する傾向があるようです。

私は、ワイズメンズクラブのユース向けプログラムの魅力を知り、積極的に扉を開いてくれた両親に感謝するとともに、今後は、1人でも多くのコメントがこのような素晴らしい機会が与えられることを心から願っています。

- (2) 「ワイズファミリー」の先輩またパートナーとして見守ってください

ワイズ・ユースクラブが対象とする「ユース」は、ワイズコメントだけではなく、YMCAボランティアリーダーや学生YMCAなど、YMCAやワイズメンズクラブの理念に共感する15歳から30歳のユースすべてを含みます。

どのグループのユースが、どの時点で、どのようにワイズ・ユースクラブにかかわるのかについては、それぞれの地域の状況によって異なるでしょう。ワイズ・ユースクラブは、YMCAを愛しワイズが好きなユースが、継続的にYMCAやワイズメンズクラブ、そして地域にかかわっていくための多くの選択肢の一つだと考えます。

ただし、ワイズ・ユースクラブ独自の特徴を挙げるとすれば、ユース自身が、活動を企画・実行する中で学び合い、クラブライフを楽しみつつ成長し、YMCAを支援することだと思えます。ワイズメンズクラブの方々には、ワイズ・ユースクラブの歩みを、YMCAに連なる「ワイズファミリー」の先輩、そしてパートナーとして見守っていただきたいと願っております。

#### プロフィール

橋崎 頼子 (はしざき よりこ)

姫路グローバルクラブワイズリング

1996年～1997年 YEOP学生としてデンマークに留学

1997年～ Y3-West会員

2004年～2006年 国際ユース代表

2005年 韓国国際大会ユースコンボケーション実行委員

2007年 ワイズユースクラブ姫路-Y3会長

デンマーク国際大会ユースコンボケーション実行委員

2008年 2010年横浜国際大会ユースコンボケーション実行委員

国際、アジアユースコンボケーション参加(過去9回)

女性メンバーの増加は、国際でも国内でもワイズメネット活動に変化をもたらしてきた。しかし、メネットだから出来ることもある。

## 20 ワイズとメネット

東京江東クラブメネット 藤井祥子

30余年前、初めて接したワイズは当時珍しく女性を対等に扱うメンバーに感激しました。夫婦が同じく扱われ、活動できることにです。わがクラブには、男性と論戦を張れるメネットがおいでになり尊敬されているのを拝見し感心しました。当時は、メンだけが活躍している方は少なかったのです。メンバーの入会時が若く、メン・メネット同時に活動を理解していったわけです。

今日では、入会される年齢が高くなり、すでに独自に社会的に活躍され、新たに活動を始めることを躊躇されるメネットが多くなりました。

クラブがあれば、当然メネット会もあった時代から、意志を尊重するという理由で、東日本区では、この10年の間にメネット数・メネット会が半減しました。新クラブ設立時のメネットへの勧誘・メネット会の説明にワイズメネット委員会はかかわっていません。メンのメネット会への協力を必要とすることであり、残念に思うことの一つです。

この10年の間に、東西のメネット会の運営・事業、また区内の立場は、大きな違いを持つことになり、それぞれに合ったメネットの形となったと思います。

西ではメネット事業主査にメンがなられる年度が多くなっています。メネット事業が区の事業としてクローズアップされ、大きくメンがかかわっておられるからでしょう。

東はメネット主査にメンがなられることは現在ではありません。当然協力をお願いしての上のことですが、独自に事業は展開されています。

東のメンは西に比べて、日常の認識は低いかもしれませぬ。しかし東西両区は、形は違えても熱心なメネット達によって、その立場を揺るぎないものとしていると思います。

東西での扱いが違っていても、それぞれに区の

運営に沿ってよい活動をしていると思います。小さいコメットを持つ若いメネットには、また介護の必要な高齢者を抱えるメネットには、時間的、経済的な理由でも、メネット会は、少しでも社会にかかわるボランティア活動の出来る良い組織と思います。

国際でのメネット活動も1990年代に変わり、形式上では、東日本区がその形を踏襲しております。と同時に国際ワイズメネットの事業・その決定方法・決算などの報告が次第になくなり遠い存在になってしまいました。

国際会議でも、メネットID(International Director 国際主任)の存在は、東日本区役員会でのワイズメネット委員長と同じ扱いです(出席の義務はあるが、議決権は持たない)。国際でもメネットの高齢化などが進み、メネット会は減少し、女性メンバーとして吸収されていっているそうです。

アジアエリアでいえば、日本、韓国、フィリピンでメネット活動が報告されています。デンマーク、オーストラリアも活動は盛んなようですが、女性メンバーになられて活動されている方も多いそうです。インド・カナダはIDを出されていますが、具体的な活動は伝わってきません。

女性メンバーが多く活躍する時代になり、女性の立場がキャリアウーマンと家庭人と(形式上)2通りの立場ができ、完全な融合は難しいでしょうが、女性の視点から、新しい展開が図られれば、それも一つと思います。万が一メネット会組織がなくなっても、女性からの視点は残っていく方が良いと思います。

これからのメネットは、本来のメンの応援団の立場を力強くわきまえながらも、なお独自に活躍できる方法や事業をYMCAとかかわりつつ推進できると思います。必ず発展していく方法があるでしょう。

メネット会のないクラブ、メネットがないクラブにメネット事業を意識していただき(区の事業の一つであるのですから)、そして、ワイズメネット事業をYMCAに認識していただきましょう。もちろんワイズにかかわっておられる方はご存知なのですが、案外知られていないのが、メネット事業です(2004年のアンケート結果により)。メネットの視点からの事業は、一つの方向です。区の事業の中で、理念を具現化している事業といえるのではないのでしょうか? メネットの力を利用して小さな手段を見つけられるかもしれません。器用な力強いやさしい手は必要ではありませんか? クラブによっては、メンの活動に伍すほどのメネット力を持っていますが、違った方向でも力として活用してください。

たとえば、YEOP、STEPなどは、家庭を預かるメネットにPRの方がより効果的ではないかと思えます。国際では、直接的な事業ではないいくつ

かの事業への積極的な協力とその必要性が掲げられています。

東西のメネットの運営方法の違いからなのか、この10年お互いの活動・事業に関心が薄れ、この期間に入会されたメネットの交流がありません。主任・委員長がお互いに活動・事業を報告した年度もありました。何年かに1回は合同で「メネットのつどい」を持つことが出来ればいいと思います。費用と時間、特に情熱が必要ではありますが。

長らくワイズにかかわっているメネットはその力を、若いメネット達や、その組織を育てる方向に役立てていきましょう。

### プロフィール

藤井 祥子 (ふじい しょうこ)

1976年 東京江東クラブに藤井寛敏メネットとして入会

2003年 東日本区メネット委員長

2004年 アジア地域メネット事業主任

体調が良いだけでなく、心も精神も、家族も、そして多少のお金もないと、「I'm very well.」とは言えない。ウエルネスは、ワイズメンのライフスタイルの理想。

## 21 ウエルネス概論

東京西クラブ 堀内浩二

### 「ウエルネス」とは

健康の概念が病気とか虚弱でない状態から、人生において身体的にも、精神的にも、社会的にも質的向上が求められるようになり、WHOの定義でも、「より良い状態」を達成するため、各個人の生活における行動様式(ライフスタイル)を改善して、毎日を「健康づくり」の姿勢で送ることである。

具体的には、生活習慣の4つの側面として、①ストレス管理、②栄養・食事、③休養、④運動の積極的な努力行為をウエルネスといっている。

YMCAが目指すウエルネスは、赤三角形のマークに象徴される「身体、精神、知性のバランスと総合、継続的成長、そして神と人への奉仕」の考え方を骨子にして、それぞれをさらに発展させる考え方であり、生き方をいう。

各人が与えられた状況の中で、各要素の身体的健康、精神的健康、知的健康、情緒的健康、社会的健康のそれぞれのバランスを大切にしつつ、全体を統合させ、より良い状態に高める生き方を指している。

ワイズメンズクラブのウエルネスは、1988年に

ウエルネス委員会が発足し、その委員会でもう少し分かりやすく親しみやすくするため、キーワードを8つに表現した。いわば予防医学の先進的な取り組みである。

- ① 環境(自然と共に生きる大切さ)
- ② 友だち(分ち合い、友情と国際友好)
- ③ ところ(思いやり、やさしい心)
- ④ 学び(人生を豊かに)
- ⑤ 奉仕(ボランティア活動)
- ⑥ 栄養(バランスよく食べよう)
- ⑦ 休養(ストレスからの解放)
- ⑧ 運動(心と体のリフレッシュ)

として相互に関連し合いながら、それぞれのライフスタイルのなかで、イメージを広げ実現されていくことを願っている。

## アンチエイジング

100才以上長生きした「百寿者」は1950年で100人程度だったが、2007年には32,000人を突破した。医療や栄養事情、衛生環境が向上したおかげである。現代は高齢者の「元気」が求められ、アンチエイジングが活発になってる。誰でも年をとれば老化が進む。できることなら若々しく生きたいというのが多くの人が望んでいる。

アンチエイジングつまり「抗加齢」は老化防止、若返りと同じ意味である。日常生活で細胞が分裂そして再生され、その繰り返して私達は生きてるが、年をとると細胞の再生する力が弱くなって老化が進む。なかでも骨、血管、筋肉の3つが全身の状態に大きく関係してくる。これが転倒や骨折、動脈硬化性のもとであり、寝たきりになりかねない。

体の変化を遅らせるには、年とともに低下する抵抗力(免疫力)や感染症などの病気にかかりにくくすることも大切である。

生活習慣によって起る病気の原因はストレス、喫煙、飲酒、運動不足などである。これらは細胞を傷つけ老化をすすめるから生活習慣を改めることが老化を防ぐことになる。

最近では、日本でも外見からも、見た目によっては自己管理能力をアピールでき、シミやシワを防ぐことで、外見が若返り精神的な好影響をもたらせる。ウォーキングや筋力トレーニングなどの

運動の効用など、いろいろな医学分野で老化に対する研究が進められている。

しかし基本的には食事と運動に気をつけ、今はやりのメタボリック症候群といわれる内臓脂肪型肥満でも、適正カロリーの摂取と、栄養のバランス、そして大事なことは、家の中や職場での活動量(動きまわる)を増やすことが改善の第一歩といわれている。

## 未病

風邪は、睡眠不足や過労、偏食で胃腸や腎臓が弱ったときにひく。つまり、おなかでひくといわれている。

不摂生や精神的ストレスなどで、免疫力や自己治癒力がおちてしまった状態である。これを「未病」とよび、頭痛、肩こり、食欲不振、下痢、便秘などの病気になる前の状態のことである。「自己治癒力がおちていますよ」のサインである。

病気の芽を未病のうちにつみとるには「一に小食、二に早寝」です。早寝とは10時くらいで寝ることで、腎臓の回復時間は午後11時から午前1時の間といわれています。

## ストレス

ストレスの原因となる外部からの圧力は、自分以外の仕事の関係などの環境問題、すなわち人間関係だといわれ、普段の生活にとっては避けられないものが多いから、その受けとめ方によって、ストレスの状態が大きく変わる。

体の調子の良いときは軽く、調子の悪いときは重くのしかかる。個人の価値観、心のもち方など、よく例に出るが、「まだ5分ある」「もう5分しかない」の考え方で心の重荷は軽くなる。社会的支援によるもの、話を聞いてくれる人がいる。知識を教えてくれる人がいることで物の見方が変わる。もう一つは対処処理力で、経験や体験による自信などはストレスの軽減に役立つ。

ともあれ精神的疲労は寝ても直らない。ストレスはなるべくその日のうちに取り除くことが必要で、それには運動がよい。精神と肉体の疲労のバランスが快眠につながる。昔の縁台将棋は肉体労働をした人が頭を使うゲームで、疲労のバランス

を自然にとっていたのである。

休養にも二つあり、カレンダーを日月火と読み、明日から働く力を養うため、日曜日に体を使って積極的休養をすること、働いて疲れたから日曜日は寝て過ごすカレンダーを月火水と読む消極的休養がある。

この消極的休養ではブルーマンデーとなって、精神的疲れがのこったまま月曜日となる。日曜日はスポーツなどで気分を転換することがお勧めである。

## アルツハイマー病と対策

人は年をとると誰しも物忘れが起きる。人の名前が思い出せないだけなら加齢による記憶力の低下だが、食事をしたことを忘れるといった数分前のことを覚えていない場合、アルツハイマー病の疑いがある。早期発見には家族が見過ごさないことである。早期発見ができていれば、介護を含め今後どう暮らしていくか本人がじっくり考えられたはずで、症状の進行を遅らせることができたかもしれない。

退職し仕事を退くと、家に閉じこもりがちになる人が少なくないようだが、地域活動や趣味、ボランティアなどを通して積極的に社会にかかわっていくと、寝たきりや認知症を予防し健康な老後を維持できるようである。

高齢になると普段あまり使わない身体機能が、サビ付きやすくなってしまうので、外に出て生活空間を広げて足腰や頭をつかうことが、寝たきり防止に役立つ。

社会参加が健康維持に役立つ背景は、周囲から自分の存在を認めてもらい、社会の中で居場所を見つけることの精神的な作用が大きく影響するようである。

ただ社会参加が健康維持に役立つのは、地域活動やボランティアに喜びを感じなければ、嫌々ながらやってもあまり効果は期待できない。心から楽しんで参加できる仲間や居場所を見つけることが、心身ともに健康になる第一歩と言える。

## 新しい人生をつくるために

人生には3つに分け、第1の人生は人から教え

られる人生。第2は会社勤めのように、きめられたことを義務としてやる人生。第3の人生は、自分の思うように生きることの出来る人生である。

この第3の人生をサードエイジと言い、活力をもって人生を謳歌する生き方の人、2つ目は引退後も働くパターンは社会活動の源でもある。3つ目は個人の夢を実現するパターンで世界一周旅行などを行う人など、4つ目は知識労働を続ける人。5つ目はボランティアを中心とした他人を思いやる活動を行い、家族や隣人、地域社会のために尽くしたいと考えている人、6つ目は生涯学習を軸とした人などがある。

人間は自分の運命を創り出すことができると言われる。それには、「よい遺伝をのばし、よい環境に身をおき、よい習慣を形成し、よい自己を創り出す」ことである。

よい習慣とは「よく考える習慣、よく観察する習慣、配慮する習慣、記憶する習慣、そして静かに話をする習慣」で、その習慣が心と体をつくる。

不用症候群という病気は、体を使わないことで発病する。予防にはまず歩くこと、筋肉を使うことで体と脳力の向上につながり、笑顔をもってよい習慣を身につけ、元気で心豊かな人生を創り出してほしいものである。

## プロフィール

### 堀内 浩二 (ほりうち こうじ)

1976年 東京西クラブチャーターメンバーとして入会  
 1982年 日本区会計  
 1983年～ 日本区ウエルネス委員、その間委員長を務める。  
 1985年 南東部部長  
 1984年～ 東京YMCAボランティアリーダーとしてデンマーク体操を指導



「イエス・キリストの教えに基づく」という国際憲法の綱領に、仏教徒として、どう向き合うのか。そして現在の心境は。

22

## ワイズメンズクラブの特質

### — 仏教と他の奉仕クラブとの対比において —

京都ウエストクラブ 森田 恵三

#### 1. はじめに

私はクリスチャンではなく、歴とした曹洞宗信徒として朝夕には仏前回向を習慣とする仏教徒であり、また、ロータリークラブ会員でもあります。

一方、東西日本区の会員の現況をみると、人数的にはクリスチャンは少なく、仏教や神道などの他宗教を信仰されているか、あるいは宗教に関しては融通無碍な考え方や行動をもたれる会員が大半であろうかと推察しています。

そこで私は「ワイズメンズクラブの特質とは」という簡単なようで難しいテーマと取り組むに当たって、ワイズメンズクラブの基本的要因であるキリスト教とわが国における宗教としては最も普遍的な仏教との対比、そして、他の代表的な奉仕クラブとも対比して論述することを試みたいと考えました。

とは申せ、浅学菲才の私見に基づく入り口付近の論点にとどまり、到底、多くのワイズメンの批判に耐えられるものではないと思いますが、あくまでも一人のワイズメンの見解としてお読みいただければ、これにすぎる喜びはありません。

#### 2. ワイズメンズクラブ誕生の因

仏教教義の根本的な立場は「縁起思想」にあります。この思想こそが、他の多くの宗教における絶対者による天地創造説と異なるところなのです。縁起とは因縁生起の省略であり、この世のあらゆる存在の相関関係を説明しているものなのです。

つまり、ある一つの存在は、他のすべての存在と、無関係には存在し得ないということであり、仏教においては、唯一つの根本原因としての絶対者はたてないで、この世のすべてが、こういった

縁起によって生ずるというのです。

この観点からみると、今を遡る1920年、アメリカオハイオ州トレドYMCAにて発足した、YMCAサービスを目的とした青年クラブTolymca Club(トリムクラブ)がワイズメンズクラブ誕生の因となっており、その後1922年のポール・ウイリアム・アレキサンダーを初代会長とするワイズメンズクラブへの改変を最初として、幾度かの大きな縁がかかわった善因善果の姿として、今日のワイズメンズクラブ国際協会が存立しているといえるのです。

また、仏教では、すべての人間は一人のこらず仏の種を有しているという「一切衆生悉有仏性」と、植物から無生物までが例外なく仏に成り得るという「山川草木悉皆成佛」を説いています。つまり形あるものには生命があり、すべて仏となる本性をもつものだというわけです。その上で、この世に永遠なるものは何一つない、形あるものは必ず消滅するという諸行無常を説きます。

#### 3. 人の生命の有限性

人は、一人ひとりに生きるための基となる力“生命”が与えられています。そして、生きている間は、神仏の加護や自然の力によって生かされているのだという感動を支えとしています。

しかし、しょせん人の生命は長くて100年、有限なものであります。私達にとっては、常にこの生者必滅の理を意識することが大切であり、戻ることの出来ないただ一度の人生を悔いの残るものとするか、すべてをやり尽した満足感溢れるものとして終わるのかは、人それぞれの人生観に基づくものといえませんが、人には根本的に種を維持するという本能的な使命を持っています。

たとえ人の生命は朝露のごとく消え失せても、

良い種を残せば子孫末代までその家系は永続性を保つことが可能なのです。

#### 4. クラブ生命の無限性

有限の生命体である人が、共感する理念のもとに会員として参加し、組織化されて団体となったクラブは、一個の集合体として無限の生命を維持し得る可能性が生じます。

とはいえ、ワイズメンズクラブも誕生後において、親睦と奉仕によって培った新鮮なエネルギーをYMCAや地域社会に放出した後、何ら新陳代謝や生命維持の手当てをすることなく漠然と時を過ごせば、高齢化が進み、やがてはそのクラブは崩壊し、死にいたることは自明の理であります。

しかし、前述の種の維持の使命と同様に、クラブ存立の理念を正しく承継するリーダーが、年毎に独自性を組み込ませながらも継続性の原則を尊重して、時代の変化に適応したクラブ運営と会員の増強、若返りの努力を続けさえすれば、クラブ生命はDNAの継承が約束されて無限に永続し得るのです。

#### 5. 継続発展のための条件

継続発展のためには次の公式条件を満たさねばなりません。

その公式とは「良質×多量＝大きさ＋強さ＝ワイズダム的发展」というものです。

会員を増やすといえ、必ず“量より質”という質優先論が出されますし、会員の質を高めなくてはというと、また“質より量”という量優先論が出てきます。ことほどさように、質と量には、たがいに切っても切れない関係にあることは誰でも認めるところですが、敢えて良質×多量と表現しているところに意味があることを強く認識していただきたいのです。

当然のことながら、良質の会員が多数集まらなくては大きくて強さのある大集団にはならないし、ワイズダム発展につながらないということです。

良質な人には多くの定義があることでしょうが、少なくとも社会人としての良識を備えた誠実な人であるべきでしょう。こうした人は、国際憲法の綱領に定める「イエス・キリストの教え」という言葉のみにこだわることなく、ワイズダムの最も大切な精神

基盤である“愛と奉仕”に共感し、ワイズのモットー「強い義務感を持つ 義務はすべての権利に伴う」を理解し実践できる人であることと確信します。

会員の質を高め、量の増加に努力するという相乗効果によって、ワイズメンズクラブという運動体を拡大させ、内容を強化させるという単純明快な原理を実践して参りましょう。

#### 6. ロータリー・ライオンズ両奉仕クラブの概観

ここで、本論を進めるに先立って、代表的な奉仕クラブについて概観しておきたいと思います。

1905年、米国シカゴにおいて創立された世界における最初の奉仕クラブであるロータリークラブは、善良な成人であって、職業上良い世評を受けている者を会員(1989年から女性も入会可能)としています。そして「他人のことを思いやり他人を助けること」を基本として、会員一人ひとりがクラブ活動の中で奉仕を学び、これを行動実践として、自分の職業を通して地域社会のために役立てる、という職業奉仕団体であり、職業奉仕をロータリークラブの看板と称しています。

世の中のニーズの変化が大きいため、昨今は団体奉仕を行う傾向にありますが、あくまでも一つの目標に向かって、一人ひとりが納得して行う個人奉仕(I Serve)の集積としての団体奉仕であるべきという立場をとっています。

ロータリークラブはモットーとして「超我の奉仕＝Service above self」と「最も良く奉仕する者は最も多く報われる＝They profit most who service best」を掲げており、個人奉仕を基調とする特色を示しています。

1917年に同じくシカゴで創立されたライオンズクラブは、世界最大の会員数を誇る奉仕クラブですが、善良な徳性の持ち主で、地域社会において声望のある成年を会員(1987年から女性も入会可能)としています。奉仕は、個人が日常の職業や人間関係を通じて行うだけではなく、クラブのチームワークを発揮して行うことによって、さらに有意義となり、効果を収めることが出来るという団体奉仕をもってする社会奉仕団体といえます。

ライオンズクラブは「われわれは奉仕する＝We Serve」をモットーとしており、団体奉仕クラブの

特色を表わしています。

参考までに、ワイズメンズクラブと同様に小さい奉仕クラブではありますが、キワニスクラブのモットーも「われわれは建設する＝We build」であり、ソントクラブとともに女性の社会的地位向上を目指すソロプチミストクラブも「女性のグローバルボイス＝Global voice for women」というモットーを掲げており、ライオンズクラブに類した社会奉仕団体であります。

## 7. ワイズメンズクラブの特性

ワイズメンズクラブを含む国際奉仕クラブに共通するところは、各クラブの理念や綱領の内容に差異はあるものの、例会を中心とした友好親睦を通して自己の人格向上を図るとともに、他に尽くす「奉仕の心と実践」を地域社会に広げ、ひいては全人類のために平和な世界を築くことを、目的としていることであります。

しかし、ワイズメンズクラブと創立時期も大差のないロータリークラブが120万人、ライオンズクラブが140万人という膨大な会員を擁することとの対比を試みると、ワイズメンズクラブが3万人程度の成長に止まっているのはなぜだろうか、という素朴な疑問をもつ会員、とくに入会后日の浅い会員の中には多く見受けられます。

この理由については、すでに1941年にポール・ウィリアム・アレキサンダーは次のことを挙げています。

- ① ワイズは青年運動であるだけに、当初から財政的に弱いという問題をかかえていること。
- ② ワイズメンズクラブの会員は、YMCAに対して積極的かつ献身的に奉仕することを宣言したYMCA会員に限定し、当初から自己中心者を厳しく排除したこと。

クリスチャンを主体としてボランティア活動を目指したYMCAと、そのサービスクラブであるワイズメンズクラブの会員組織が、相当の期間にわたって厳しい一つの枠内に縛られていたために、その成長発展性を阻害してきたことを率直に認めざるを得ません。

しかし一方では、このことがワイズメンズクラブの特性ともなっていたのです。

そこで、ワイズメンズクラブの素晴らしさを理

解していただくために、他の奉仕クラブがもたないワイズメンズクラブの三つの特性を、以下に述べて参考に供したいと思います。

### (1) 高い精神性

ワイズメンズクラブの特性として最初に挙げるべきは、高い精神性であります。

#### ① ワイズメンズクラブのモットー

「強い義務感を持つ 義務はすべての権利に伴う＝To acknowledge the duty that accompanies every right」のモットーは、ワイズメンにかかわらず一人の人間として、法律や道徳などを守らねばならない義務を先ず果たしてこそ、法によって保護された利益を享受することを主張できる権利が与えられるのだということです。当然のことながら、クラブ活動の上にも数多くの義務と権利があります。ワイズのモットーは、一人ひとりの内心に「権利より義務を！」と強く問いかけるものとなっており、他の奉仕クラブのモットーとは異なった精神性の高い個性があるものといえるのではないのでしょうか。

#### ② ワイズメンズクラブの宗教性

ワイズメンズクラブの国際憲法の綱領には、他の奉仕クラブには無い特異な文言ともいうべき「イエス・キリストの教えに基づき……」という言葉があります。加えてガイドライン201には「ワイズメンはイエス・キリストが教えられたことを受け入れ、ワイズメンの行動・意思決定、そしてクラブや国際協会運営のための、さらにはワイズメン個人の日々の生活のための指針となるものである」と規定されています。

ここでまた、ワイズメンはクリスチャンでなければならないのか、という誤解が生ずることがあるようです。

しかし、その誤解は「会員は何人も性別・人種・信仰・皮膚の色・出身国の故に会員の地位を拒まれることはない」と自由平等を謳っている国際憲法の構成会員の定めによって、すぐに氷解するものと思います。

ワイズメンズクラブが奉仕の対象でありパートナーでもあるYMCAとの関連からして、ク



リスチャンのグループとして発祥したことは自然なことであり、その存在基盤がキリスト教にあることは当然なことといえるのです。

クラブ例会や各種行事において、讃美歌斉唱や聖書朗読・祈祷などが行われることがありますが、むしろ昨今ではこうしたことを宗教行事としてとらえず、ワイズの長い伝統の中で習慣として受け継がれていることであり、キリスト教理解に役立つことと肯定的に理解すれば良いのであって、ワイズメンズクラブの中に宗教性が存在しているものの、ノンクリスチャンを受け入れる幅広い門戸が開かれているからこそ、緩やかながらも今日のワイズダムの発展があったと思うのです。

### ③ 「イエス・キリストの教え」の文言変更

前述のワイズメンズクラブにおける最も重要なキリスト教理解を容易にするために、2003年7月に東西両区の定款改定によって目的を次のように変更しました。

東日本区では、目的第1項を「……イエス・キリストの愛と奉仕の実践を目指し……」とし、西日本区では、目的第1項には「……あらゆる人々が宗教・信仰の相違を超えて……」を残し、第2項では「……イエス・キリストが示された愛と奉仕の実践を目指し……」と変更されました。

ちなみに日本YMCAの基本原則においても「……イエス・キリストにおいて示された愛と奉仕の生き方に学びつつ……」との文言が採り入れられています。

### ④ 愛について

次に、定款条文の変更によって表現された「愛と奉仕」の意味を考えてみたいと思います。「愛」は他の奉仕クラブの綱領においては「友愛・友情・愛他的奉仕」などの言葉が見られるほか、「愛」や「思いやり」を年度テーマやスローガンに採り上げられることもあります。ワイズメンズクラブが「愛」を絶対不変の精神基盤として定款において明確にしていることを、私は本当に素晴らしい特性だと理解し、そこにワイズメンとしての誇りさえ感じています。

「愛」という言葉は、聖書の至るところに見

受けられますが、ワイズメンズクラブやYMCAにおいては、旧約聖書にある「自分を愛するように、あなたの隣人を愛しなさい」が「愛」を表現する最も端的なものとして用いられています。これは崇高な人類共通の愛、隣人愛であり、何もクリスチャンだけが理解し実践すべきことではないと思います。

それでは、果たして「愛」とは何でしょうか。私は「愛」については、同志社大学第10代総長や国際基督教大学初代総長・京都YMCA理事長をお務めになった湯浅八郎先生が自分自身の生活信条とされていた「生きることは愛すること、愛することは理解すること、理解することは赦すこと、赦すことは赦されること、赦されることは救われること」という言葉と、聖書の言葉「愛は寛容であり、愛は情け深い」を思い出します。

寛容とは心が広く、人をよく受け入れること、とがめだてもせず、過ちを赦すことと理解します。私には湯浅先生の説かれる「愛」こそ、最もよく理解できるものであり、いずれのクラブにおいても、義務やルールを守る厳しさ、理解し赦しあう優しさが均衡する寛厳よろしき運営が行われることを望んでいます。

ところで現代では、「愛」はクリーンなイメージで、人やものを慈しみ大切に思う心という意味で使われていますが、仏教語としての「愛」は、キリスト教のいう「愛」や一般的に考えられている「愛」とは文字こそ同じですが、全く意味が異なり「渴愛」と訳されて、広い意味の「煩惱」、具体的には「食欲」とか自己中心的なわがままな心という意味となっており、キリスト教の「愛」が信仰の杖になるに反して、仏教の「愛」は信仰の妨げになるのです。

仏教においては、釈迦が「自己の愛しいことは誰でも同様である。決して他の人々を害してはならない」と説いていますし、キリスト教が説く他の人に向けられる思いやりの心を示す「愛」の同意語としての言葉は「慈悲」と称します。

「慈悲」とは、「仏の深い愛情」という意味であり、相手の立場に立ったところから生まれる愛情のことです。それには自分に経験の無いことでも相手の立場になろうとす

る謙虚な努力が大切であり、仏道は自ら謙虚になることを学ぶことにあります。そして「慈悲」には、他に対して「何々をしてあげた……」という気持ちや見返りを期待するような自我の心を捨てるという教えもあるのです。

キリストが神と人間という縦の関係(絶対的な上下関係)において他者を愛することを説いたのに対し、釈迦は仏性によって繋がる人間同士の横の関係(同等の関係)において他者への慈悲を説いています。

この全く異なる救済原理でありながら、結果的には現実世界における人間の行うべきことについて、同じ利他の教えを説いているところでは共通していることに注目すべきだと思います。

#### ⑤ 奉仕について

奉仕とは、献身的に社会・国家・公共のために尽くすことであり、自主的に奉仕活動に参加する人をボランティアと呼んでいます。奉仕の見返りを期待することがあっては、真の奉仕とは言えないわけで、真実、愛と慈悲の心から生ずるものでなければなりません。

聖書には「誰でも、自分の利益ではなく他人の利益を追い求めなさい」という言葉があり、ロータリークラブの「超我の奉仕」や、仏教で説く「自利利他＝自利とは利他をいう」とか、「忘己利他＝己を忘れて他を利する」という言葉もありますが、いずれも己を無にして人々の利益を図ることであります。曹洞宗の「修証義」には、次のような文句があります。「愚人謂わくは利他を先とせば自らの利、省かれぬべしと。爾には非ざるなり。利行は一法なり、普ねく自他を利するなり。」

「自利利他」とは、根本的には一体であるという「自他不二」を意味しており、自利と利他と、分けずに自利はそのまま利他であり、利他はそのまま自利なのだという考え方なのです。平たくいえば、あなたの幸せは私の幸せです、ということでしょう。

#### (2) 奉仕対象の第一はYMCA

ワイズメンズクラブの第二の特性としては、ワイズメンズクラブの目的の第一としYMCAのサー

ビスクラブとして活動することを挙げていることです。

他の奉仕クラブが、奉仕の対象を地域や国際社会、全人類などと広い範囲に定めているのに比して、ワイズメンズクラブは、奉仕の第一の具体的対象をYMCAと定め、第二義的にワイズメンにふさわしい団体を対象としていることを、会員は強く認識することが大切だと思います。

あなたが、希望を胸に緊張感を味わった入会式を想起してください。入会式において会長が、あなたを前にして読み上げたワイズメンであることの5つの特別な意味を列挙した入会式文には何とあったでしょうか。

その2番目に「ワイズメンであることは、YMCAに尽くすことを意味します」とあったはずですが。ワイズメンズクラブではYMCAが共通の目的に向けて共に働く者の集まりであるとの認識に立って、YMCAを支援することがまず優先されるのです。

YMCAは、社会のニーズをつかむことに優れた機能をもっています。ワイズメンズクラブはそのニーズに適合する奉仕の実践をYMCAとともに、あるいはワイズ独自の活動として一般社会において展開するのが使命なのです。

#### (3) メネット活動

ワイズメンズクラブの特性の三つ目は、メネットの存在です。

ライオンズクラブでもクラブの裁量をもって夫人達のライオネスクラブを作ることがありますが、ワイズメンズクラブのみが、国際憲法や定款においてメネットやメネット会について明確に規定しているところに他の奉仕クラブとは違った大きな特徴があります。

他の奉仕クラブと同様に、ワイズメンズクラブでも女性の入会(奉仕クラブの中では最も早く1974年から入会可能)は認めていますし、女性だけのクラブも存在します。

現在ではメネットの域を超える奉仕活動を望む女性会員が増加傾向にあるため、独自のメネット活動にあっては女性会員との協調性を保ち、女性ならではの着想をもったユニークな事業展開がされています。

私は、すべての会員夫人がメネットとしてワイズ活動に参加されることをお勧めしたいと思います

す。なぜなら、他のメネットさん達との親しい交わりを通して得られる愛と奉仕の喜びが、すべて自分自身の人間的成長への糧となることを知るとき、それは何物にも代えがたい価値あるものと思えますし、他の奉仕クラブに無い夫婦揃ってのワイズメンズクラブでの協働は、まさに夫婦愛を育む体験道場となることを信じるからなのです。

## 8. おわりに

この「ワイズ読本」には、多くの執筆者がワイズメンズクラブについて高レベルの私論を展開されておられます。

曹洞宗のクリスチャンとのニックネームを頂戴している私としては、本文冒頭において執筆に際しての観点を説明させていただいた通り、ワイズメンズクラブという奉仕クラブの態様を、仏教や他の奉仕クラブと対比しつつ浮きぼりにしたいといういささか型破りな論述を試みたわけですが、会員の皆さんには、どの程度の関心をもってお読みいただき理解されることかと案じています。それぞれに持っておられるワイズ観の整理にいささかなりともお役に立てればありがたく思う

次第であります。

私は、ただ一度の人生にあっての約40年間、ワイズライフの中で接する牧師のお説教には真摯に耳を傾け、頷き、美しい讃美歌に心を震わす一方、日常生活では釈迦の説く「諸悪莫作(悪いことはしてはいけない)、衆善奉行(多くの良い奉仕をなさい)、自淨其意(そうすることで自らの心が浄められる)、是諸仏教(これこそ仏教なのだ)」の実践奉仕に心を砕く自分自身を見出すとき、ひそかに自分が仏教徒でありワイズメンであることに感謝と喜びの念を覚えます。

今後も生涯ワイズメンを貫きとおせることを願いつつ拙稿を閉じることといたします。

## プロフィール

森田 恵三 (もりた けいぞう)

1971年 京都パレスクラブチャーターメンバーとして入会  
 1980年 京都ウエストクラブチャーターメンバーとして移籍  
 1983年 京滋部部长  
 1986年 第58回京都国際大会HC委員(会計・事務局長)  
 1992年 第38代日本区理事  
 1994年～1996年 ワイズアカデミー委員長  
 1996年～1999年 国際議員  
 2006年～ ワイズ必携編集特別小委員会委員  
 2007年～ 2010年横浜国際大会準備委員(総務副委員長)

地域には必ず課題がある。ワイズのネットワークとYMCAの専門性を合わせると新しいプログラムが開発できる。

# 23 体験的「YMCAとワイズの協働」論

八代クラブ 守田 富男

ワイズメンズクラブはYMCAへの奉仕クラブとして誕生しました。近年、ワイズの活動が広がるに従い、YMCAが無い地域にクラブが設立されるケースが見受けられます。そのようなクラブがYMCAの奉仕クラブとして果たすべき役割は何でしょうか。YMCAとの協働は可能でしょうか。私自身のささやかな体験を通して一緒に考えていただけれ

ばと思います。

1989年にチャーターした八代クラブは、熊本で唯一YMCAの無い地域に設立されたワイズメンズクラブです。私は所属教会の牧師に誘われ、何も分からないままに、チャーターメンバーとなりました。

経済が熊本市に一極集中し、若年労働者が流出

する状況は当時も今も変わっていません。客観的に判断して事業体としてのYMCAは成立たない、とランチ設立構想はいつしか立消えてしまいました。八代ランチ設立の足がかりとして設立された経緯を知る会員に不満が募り、ワイズ活動もいつしか停滞気味となってしまいました。今にして思えば「建物としてのYMCA」ばかり思い描いていたわけです。YMCAの根底にあるものは「イエス・キリストが示した愛と奉仕の業」を実現するムーブメント、すなわち「運動」であることに気づいていませんでした。

そんな閉塞状況の中、転機が訪れました。

1998年、当時の連絡主事から「八代でデイキャンプをやりませんか」と話を持ちかけられました。デイキャンプとは文字通り「日帰り」のキャンプです。幸いにも会員に学校の先生が多く子どもの扱いにも慣れていたこともあり、小学校の元校長だった会員を中心に企画例会の中で準備が進められました。月例会出席だけだった連絡主事が企画例会にも毎回顔を出すようになり、YMCAとの連携が密になっていきました。

その年の夏、小学生7名で第1回デイキャンプを開催しました。初日から海水浴という今にして思えば無謀なプログラム、リーダーもボランティアも全員が素人で、集合をかけても集まらない子どもや、仲間内で遊んでいるリーダー双方のお世話に明け暮れました。その後、回を重ねるごとにノウハウが蓄積され、現在の形に至っています。

現在は、直前会長が実行委員長となり、YMCAから野外に強いスタッフを連絡主事として派遣してもらっています。実行委員の選任や運営についてはYMCAのやり方をモデルにしました。参加メンバーと社会人ボランティア、リーダーの募集はワイズが事務局として行い、リーダーの訓練と参加メンバーの指導はYMCAスタッフが行います。

10回目となった「YMCAデイキャンプin八代2007」は、参加小学生32名でした。大半がリピーターで、初めての参加者もクチコミがほとんどです。兄弟での参加も多いため毎年、募集開始一日で募集終了となります。

参加者が年々増えるに従い、リーダーの確保と養成が課題となってきました。リーダー訓練を受けたYMCA専門学校生はもちろん、地元の高校生と中学生(元参加メンバー)に声かけをしています。

リーダーの確保には、地域ボランティアメンバーが大きく貢献しています。中でも、不登校だった高校生リーダーが毎年参加し、今では社会人リーダーとしてかかわっているのは会員にとって大きな励ましとなっています。

八代のデイキャンプには、いくつかのこだわりがあります。

1. まず、ネーミングです。「YMCAデイキャンプin八代」とYMCAとの協働プログラムであることを、しっかり謳っています。八代の子とも達が始めて出会うYMCAがデイキャンプ、というわけです。
2. プログラム期間中、保護者に手作り弁当をお願いしています。コンビニで手軽に買える時代ですが、あえて手作り弁当にこだわっているのは、親子の会話のきっかけづくりと、保護者にも参加意識を持っていただくためです。
3. プログラム最終日午後は、子ども達とリーダーに感想文を書いてもらいます。それをまとめて製本し夕方には手書き文集として配布します。印刷と製本は大変ですが、みんなの気持ちが熱いうちに記録し手渡します。  
後日、保護者にも感想文を依頼します。手書き文集を読んで半数以上の保護者から原稿が寄せられます。それを読むと、子ども達がどんなにデイキャンプを楽しみにしていたか、一日の出来事について目を輝かせながら話している様子が伝わってきます。  
更に、子どもと保護者の感想文を写真と共にまとめた文集を編集作成し、8月に開催する「デイキャンプ思い出会」で配布しています。
4. プログラム開催場所は地元中心に組み立てています。経済的視点で見ると特筆すべき点がなく、目立った観光拠点があるわけでもない八代が、実は豊かな人と自然に恵まれた地域だと気づいたのはデイキャンプのおかげです。

試行錯誤しながらYMCAと協働してきた中で気

づいたことを述べます。

① レイマンを見出し育てる

ワイズメンがYMCAのためにできる貢献は何でしょうか。それは次代を担う人を見出し、YMCA運動を支えるレイマンを育てることでないでしょうか。

10年間続けたデイキャンプは地域社会とYMCAを繋ぎはじめています。デイキャンプの楽しさを体験した子どもはリピーターになります。続けて6年間参加する子供も珍しくありません。

思い出文集には「YMCA」の文字が大きく踊っています。YMCAが何か説明できなくても、デイキャンプの楽しい思い出とYMCAがリンクしているのです。

その結果として、最初の頃にメンバーとして参加していた小学生がYMCA専門学校生リーダーで戻ってきました。2007年にリーダーとして初参加した高校生が、YMCA専門学校へ入学し、キャンプリーダーになりました。保護者の一人がボランティアで実行委員に加わり、数年後ワイズに入会しました。

近い将来、参加した小学生がリーダーになり、社会人ボランティアとして実行委員に加わり、ワイズメンとしてYMCAを支えるレイマンになるという成長サイクルを定着させたいと考えています。

② 専門性とネットワークによる協働

YMCAとワイズを車の両輪に譬えるなら、それぞれが持ち味を生かしてこそ、YMCAムーブメントが前進します。

YMCAには専門性と組織力、ワイズには地域とのネットワークがあります。デイキャンプに於いて、YMCAの専門性は重要な役割を果たしています。プログラムの内容検討や下見、リーダー研修、ゲーム指導など、訓練を積んだスタッフの働きには目を見張るものがあります。

そのことがデイキャンプへの高い評価につながり、参加者が増える要因となっています。一方、ワイズメンのネットワークは地域のボランティアと繋がり、共にプログラムを支え

ています。

③ 会員増強による協働

ワイズはなぜ会員を増やす必要があるのでしょうか。友好団体という側面から多種多様な人が集まり親睦を深めることも重要です。協働の視点から見るとYMCAを担うレイマンをより多く送り出すためでもあります。クラブの活性化とYMCA運動の発展には密接な関係があると思います。

八代クラブにデイキャンプを勧めた連絡主事は、その後、熊本みなみクラブのチャーターメンバーになり、YMCAとワイズ双方で活躍しています。これは協働の実といえるでしょう。

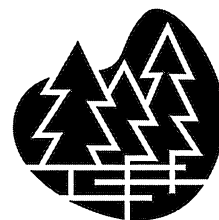
YMCAの無い地域のクラブは、とすれば孤立しがちです。しかし、その地域で取り組むべき課題がきっとあるはずで、それを見出し、ワイズメンがもつ地域のネットワークとYMCAの専門性を組み合わせることで、独自のプログラムが可能だと思います。そこに目に見えないYMCAが生まれます。

ワイズメンズクラブはYMCAへのサービスクラブです。同時にYMCAのもつ豊かなリソースをクラブ活性化に活かすチャンスに恵まれています。互いにイコールパートナーとして、強みを活かし、弱みは助け合いながら、YMCAスピリットを地域に広げ、未来に向けて共に発展していきましょう。

プロフィール

守田 富男 (もりた とみお)

1989年 八代クラブチャーターメンバーとして入会  
 1996年 九州部Yサ・ユース事業主査  
 2001年 九州部部長  
 2005年 九州部CS事業主査  
 2005年 ワイズメンズクラブ熊本連絡会議議長  
 2007年 西日本区広報事業主任  
 2008年 西日本区書記



父が、私に遺してくれた大きなもの。それはワイズとYMCAだった。

## 24 両親がワイズメンであったことが、 自分の人生にどのような影響を与えたか

京都キャピタルクラブユース 山 口 貴 也

忘れもしない。あれは中学の時でした。

父親「貴也、来週アメリカから、ワイズメンの人達が京都に来られるんや。それで、家にも一人、ホームステイに来てもらうからな。」

私「えっ？ 何したらええの？」

父親「特に、何もせんでええ。普段のままで、それでええんや。」

それまで私は、父親がワイズメンとして何をやっているのか、はっきりと分かりませんでした。京都YMCAの野外キャンプをすすめられて参加したり、夏には、琵琶湖畔にあるサバエキャンプ場の開設準備ワークに参加したり、年末は、クリスマス例会に参加したり。それまでのワイズメンズクラブの印象は、とにかく仕事とは違う、いろんな人達がYMCAと繋がりながら、何かをやっている。そんなイメージでした。

「Nice to meet you. My name is Takaya. Welcome……」

目の前には身長180cm以上、体重は(失礼ながら)100kgは超えるかという巨漢のアメリカの方が、満面の笑みで握手をしてくれました。

前日までに覚えた英語の質問や、家族の紹介をすると、しっかりと頷いて聞いてもらえました。やった！ ちゃんと通じた!! 普段、接する機会のない外国の方を目の前に、英語が通じただけで、うれしいやら、楽しいやら。

次に、アメリカの文化や生活のことも教えてもらったりして、さらに話が盛り上がってくると、アメリカと日本の違いが身をもって理解できてきました。当時は、そんな話ができていて、自体に、感動していました。

このわが家のささやかな歓迎会には、父親が当時、京都キャピタルクラブでお世話になっていた、

岡本尚男さん、堀一行さん達もご一緒に、その貴重な時間は、あっという間に過ぎていきました。

寝る前、あまりの大きさ(笑)だったので、用意しておいた布団が小さいのでは、と心配になって寝室までご案内し

「Is this OK?」

と聞くと、何といきなり、その布団の上に、ドーンとダイブされ、両手と両脚をいっぱいに拡げて大の字になり、

「No problem. OK! OK!」

と、ユーモアたっぷりに表現されました。あのとき、二人で大笑いしたことが、昨日のこのように思えます。

「普段のままで、それでええんや」飾らない。飾る必要はない。ありのままで接する。

今思うと、あの言葉が、以後私がかかわったすべての異文化交流の原点であったように思います。あの時の経験が、私の人生に大きく影響したように思います。

当時父親は会社を起こして、それを軌道にのせるまで、とても苦労したようですが、一方、ワイズメンの活動をすることで、YMCAの世界的なネットワークから、さまざまな貴重な機会を私に与えてくれました。今の私では到底真似ができない、そのパワーと思いいには頭が下がるとともに、感謝の気持ちでいっぱいです。

ワイズメンズクラブ、YMCAの繋がりを通して、私の希望は大きく膨らみ、そして実を結ぶことになったのです。

アメリカ中西部、とうもろこし畑の間を、地平線を見ながら何時間もかけて到着した小さな町では、YMCAという繋がりで、大歓迎を受けました。

ホームステイ家庭は、私を、家族の一員として受け入れてくれたのです。

また、1985年には、世界中から同世代の若者が集まり、2週間のキャンプを通して、互いの国、文化、考えをぶつけ合いました。世界を知るとともに、母国日本について、また日本人としての自覚を考えさせられる素晴らしい機会でした。

リーダーとなり、子ども達を引率して参加した本格的なアメリカのキャンプでは、乗馬やカヌーなど大自然の中にあるプログラムの質と多さだけでなく、日本人とは違うオープンな接し方で、はじめは不安いっぱい泣き出しそうな子ども達が、キャンプ最終日には、逆に別れを惜しんで涙を流していました。

YMCAによって自分が成長し、そして、その素晴らしさを後輩に伝える、当時はそのサイクルが私の中で最高の楽しみであり、生きがいでした。

先日、仕事で、台湾にある世界でも有数の液晶パネルメーカーに行きましたが、商談のあとの会食で、先方の担当者が、日本のYMCA日本語学校の卒業生であることが分かりました。それまで緊張の連続でしたが、それをきっかけに、一気にお互いの距離が縮まりました。YMCAの拡がりの大きさを感じた瞬間でした。

父親は、私が18歳の時に他界しましたが、いま当時の父親と同じ世代になり、子どもを持ち、必死に仕事をして、一家を支える身になって、当時父親がワイズメンの活動で何を求めていたのか、分かる気がするのです。

これからの自分のため、子どものため、そして関係するすべての人達と、前向きに、目的を持って、日々活動する。父親のあとにワイズメンとなった母親も、ワイズメンの活動を通して、生き生きとした毎日を送っていました。

今の私は、得意な英語を生かし、月に1~2回は海外に出張して異文化に触れながら仕事をしていますが、このような仕事をする上で、技術やサービスの知識だけでなく、YMCAで経験することができた、コミュニケーションノウハウがとても役に立っています。

それは、常に相手の立場に立って物事を考え、相手を認め、何事にも配慮を忘れないことです。John.17.21「みんなのものが一つになるため」は、

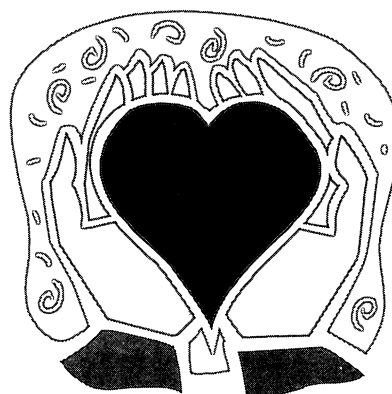
今でも忘れていません。

最後に、以上のような素晴らしいワイズメンズクラブとYMCAに、その貴重なスピリットと活動を、限られたものに留めず、より多くの人びとに、上記のようなことを提供できる場があるという情報を、もっともっと発信してもらいたいと思います。

## プロフィール

### 山口 貴也 (やまぐち たかや)

1969年生まれ。両親が、京都キャピタルクラブ在籍。小・中学生の時、京都YMCAの野外キャンプ、スキーキャンプ等に参加。高校生の時、北米YMCA 設立100周年記念「WORLD CAMP」に参加。大学では、京都YMCAボランティアリーダーとして国際交流プログラムの引率等をする。卒業後京都YMCAの職員として、主に英語教育を担当。現在、電子部品会社で海外営業に従事。



ユース事業は、ワイズメンの関心事だが見えにくい。  
クラブメンバーに対する問題の提起。

## 25 ワイズのユース事業を考える

東京西クラブ 吉田明弘

### はじめに

本稿は、東京西クラブのブリテンに2008年5月から9月まで連載した『ユース事業を考える』を一部変更したものです。

東京西クラブは、1998年以来、その活動拠点である東京YMCA杉並センターが施設と専任スタッフを失っているため、YMCA活動が見え難い状況にあります。加えて入会歴の短いメンバーが増えたことから、「ユース事業」について、共に考えたいという思いでまとめました。そのため、ごく身近な話題もとりあげています。ご勘案の上、お読みいただければ幸いです。

### クラブにとっての奉仕事業

私は、ワイズメンズクラブにおいて行う対外的な個々の奉仕事業は、「目的」ではなく、「手段」と考えています。

それは、私自身、ワイズメンズクラブとは、イエス・キリストの教えに基づき、「内外の仲間とクラブライフを楽しみながら、奉仕(すべての人と共に生きること)の心と実践を学び、それを地域や世界に広める活動」だと、理解しているからです。このことは、私の中では、国際憲法の「目的」とも矛盾していません。

よく「クラブの柱になる事業」とか、「1クラブ、1事業」などと言われます。たしかに対外的な事業をもつクラブは、活力があり、人を集める力もあり、知名度も高くなります。弱体化したクラブが、そのクラブの伝統的な事業によって、からくも支えられている事例もあります。しかし、目的ではないと思っています。

そもそも事業というものがクラブになじむかと

いう問題があります。事業を目的とするなら、それにふさわしい組織や運営方法を探り、徹した方が効率的ですし、誰にとっても分かりやすいわけです。クラブは、一義的には仲間同士が集って、そのグループの人間関係の弾力性を楽しむものです。

ただ、楽しむだけでは、気の合う仲間同士だけに固まってしまう、発展性も継続性もありません。その点では、ワイズメンズクラブは、「YMCAへの奉仕」などの目的を掲げたために、幾世代にわたって継続し、世界的に広がってきたのだと思います。そして、その目標を失ったクラブが衰退している現実があります。

しかし、クラブとしての個々の奉仕事業は、規模が拡大し、専門化すれば、その社会的責任から、別の事業組織に移行するという宿命があります。そういう意味では、ワイズメンズクラブは、法人であるYMCAが行う活動を応援するのが賢明と言えます。

ワイズでは、「事業」というよりも、STEP、YEEPのような若者の国際教育交換や、YIA (Youth Involvement and Activities) といった若者と共に何かをやるという運動のように、「プログラム」とか「活動」、「プロジェクト」という表現が適当かもしれません。

### ワイズのユース事業〈活動〉

ワイズ用語では、ユースを18歳以上30歳までと規定しています。東日本区ではさらにユースを、ワイズリング(ワイズメンの子、孫)、YMCAユースリーダー、同OB・OG、ワイズユースクラブ会員、学生YMCA、およびワイズ・YMCAに関心をもつ若者に絞り込んでいます。ですから、富士クラブが毎年開催している全国高校女子サッカー大会な



ど素晴らしい事業がありますが、ワイズでは「ユース事業」ではなく、若者を対象とした「地域奉仕事業」に分類しています。

これまでワイズメンズクラブは、ユース事業として、YEOP、STEPという若者交換プログラム、ユースボランティア・リーダーズフォーラム〈東日本区〉の開催、国際・アジア地域ユースコンボケーションへの若者の派遣などのプログラムを実施してきました。このことに対する資金援助は、それだけで立派なユース活動ですが、その若者が自分達に直接かかわりない場合には、活動に加わった実感が得られないうらみがあります。また、これらのことはわれわれが出来上がったプログラムを若者に「与える」という形になっています。

この数年、国際協会が盛んに奨励し、区も注力しているのは、若者が自らの意思で参加してワイズメンと共に活動「YIA (Youth Involvement and Activities)」を創り出していくことなのです。ユースクラブもそのひとつです。

## ワイズメンはPTA役員？

2000年ごろに、杉並YMCAで活躍していたユースリーダーOB、OGが、2008年9月に山中湖でキャンプを行いました。一方、1970～80年代のリーダー卒業生達は、毎年、誘い合って旅行を楽しんでいます。忘年会は30人くらいが集まるそうです。

彼らが再びYMCAの活動に参加したり、ワイズの活動に加わってくれたら、どんなに素晴らしいだろうと思います。

私は、20歳代後半にワイズメンズクラブとYMCAとに同時に入会しました。若手ということで、家族キャンプやスキーキャンプを手伝いました。そこで発見したことは、プログラムの対象は子どもですが、最大の受益者は、奉仕をしている若いリーダーだということでした。「君、大丈夫？」といいたくなるような若者が見る見るうちに、社会性と責任感とリーダーシップを身につけていくのです。若者にリーダーとして活動機会を与え支援することこそ、YMCAと協力関係をもつワイズメンズクラブにとって、最大の「らしい」ユース事業だと思ってきました。

子ども達は、ジュニアリーダーに憧れ、ジュニアリーダーは、リーダーを目指し、リーダーは、YMCA

スタッフを尊敬しています。このリーダー達がワイズメンに憧れ、やがてワイズメンとなってくれたらと思わざるを得ません。

彼らにとって、ワイズメンがどう映るのでしょうか。私は、ひょっとしたら自分が子どもの頃のPTA役員のイメージではないかと思っています。普段は出会う機会が少ないのに、卒業式などには現れて状況の読めない祝辞を述べる、運動会のテントの来賓席に座っている、校長以下の先生が奇妙に気をつかっている。あの姿を見て、大人になったらPTAの役員になろうとは、考えませんでした。

ワイズメンにも類似する面があって、若者にとって、なんとなく感覚が違う存在なのではないでしょうか。

若者にワイズメンズクラブを理解してもらうには、共に活動することが重要なようです。私達と同じように近くにYMCA活動をもたない東京八王子クラブは、中央大学の学生YMCAの学生と草刈り奉仕や、街頭募金を通して、共に汗し、声をかからして良好な関係を築いています。

しかし、一般的には学生にワイズメンが理解されないのは、いたし方ないことだと思っています。また、YMCA活動に情熱を燃やした学生が、卒業を区切りにYMCAを離れて仕事に専心するのは当然とも思います。

実は、前に書きました山中湖のリーダー卒業生のキャンプに東京西クラブも合流して、1泊例会を行いました。今や実業の立派な中核となって活躍しているリーダー卒業生が、大人の目で、YMCAの価値とそれを支えるワイズメン運動の良さや可能性を見出してくれればと願っています。

## YMCA、そこはだれの場所？

YMCAの会員になると、YMCAの機関紙が届きますから、紙面から自分の興味のあるプログラム、あるいはクラブとして取り上げたらよい活動のヒントを見つけることが出来ます。

ワイズメンズクラブとYMCAはそれぞれ独立した組織です。形式的にいえば、YMCAの会員である個人として、あるいはサービスクラブであるワイズメンズクラブとして参加したり、支援したりすることになります。

この場合に、YMCAのプログラムや行事を、自

分やクラブなりに捉え直して、新しい切り口をもって参加すれば、もっと興味と関心が深まるでしょう。

現在のYMCAの「会員組織」は、さまざまな面でワイズメン抜きには成り立ち難くなっています。そのことについては、私はいささか複雑な思いをもっています。

就職するまで東京・渋谷は私の街でした。住宅地を背景にゆったりとした大人の街でした。ホームグラウンドが新宿に移って、50歳くらいになったある日、渋谷で昼食をとろうと店を探して驚きました。どこも若者に占領され、中高年者が一人でも入れる店はソバ屋とウナギ屋、デパートの食堂だけでした。「ここは大人の街だったんだぞ！」と叫びたくなりました。

それとまったく反対のことがYMCAでも言えます。「ここは若者の場所だったんだぞ！」と叫びたい若者がいるのではないのでしょうか。専門学校のあるYMCAに行けば20歳前後の若者で溢れています。でも彼らは会員組織の中核ではありません。

若者がYMCA活動に参加しにくい社会環境にあります。もうひとつはワイズメンのやり過ぎがあります。会議に休まないのはワイズメン。自然に中心的な役割になってしまいます。

今の会員部門、特に組織の方向を決める人達は圧倒的に高年層です。この問題は今、始まったことではなく、昔からあったことです。若者達は、自分達の出番がないことに不満をもっていました。しかし今はその不満が出ないことこそが大問題なのです。

ワイズメンが頑張るのは結構です。YMCAも多くの世代を取り入れることも大切です。しかし、物事を決定する、あるいは中心となる部分では、中高年者は、引くこと、退くことも必要だと思います。たとえ失敗しても、若者の失敗には、それ自体に意味があるのです。

サッカー界では、U-23〈23歳以下〉というように年代を分けてそれぞれの世代が育つようにして裾野を広げています。YMCAでも場面によっては年齢の枠や人数の制限をしたらどうなのでしょう。

もちろんこのことはYMCA自体が決めることですが、YMCAからは言いにくいことです。YMCAに積極的にかわりながら、しっかりとした抑止力も併せもつことも、ワイズの前向きな「ユース事業」であると思うのです。

## 全国にわたる鉅脈一担当・連絡主事

社会のニーズを捉えて誕生した企業も、時の経過につれて社会との乖離が始まります。その隙間を埋めるのが新商品、新サービスの開発です。ズレに気づかず、埋められない企業は脱落します。それはワイズメンズクラブのような組織でも同様でしょう。

クラブが、社会や若者とのギャップを埋めるには、社会の動きや関心をクラブの中に持ち込み、新プログラムを開発することが望まれます。さまざまな考えられる方策の中で、YMCA主事の力を借りるのが早道だと思います。

ほとんどのYMCA主事が気づいていないように感じますが、YMCAの名刺は世間で価値があります。たとえば、クラブの会長とYMCA主事とが、ある会社の人に会って名刺を渡したとしたら、名刺をもらった人は同僚に、「YMCAの主事だという人に会ったよ」と言って名刺を見せるでしょう。多分、ワイズメンズクラブの話は、会長さんがよほど特異なキャラクターでないかぎり出ないでしょう。

YMCAほど、世界中に広がりがあり、幅広い年代層にかかわり、多彩なサービスを行っている、1つの民間団体はないのではないのでしょうか。

ワイズが、特にユース事業を展開する上で、その情報、経験によるアドバイスを受けるのが得策だろうと思います。具体的にいえば、クラブの担当・連絡主事(東日本区の場合は担当主事、西日本区の場合は連絡主事)を通してです。

問題は、YMCAのスタッフにとって、ワイズメンは分かりにくい存在だということです。

東京YMCAの中堅だったある主事が、私立学校の事務局に移り、しばらくして、こんな話をしてくれました。「今の仕事をしながら、メンバーとしてYMCAの活動に参加したいと思ってもなかなか出来ない。ワイズの皆さんが活動に参加するためにどれだけ身を削って努力されていたかが分かりました」。

現役の若いYMCAスタッフにとって、ワイズメンは、こちらの仕事に来て、談笑し、自分の楽しみだけを求めていたり、落語の『花見酒』のように、ほとんどのエネルギーが組織の維持に使われているようにも見えるかもしれません。外向き

のプログラムとなると途端に参加が落ちるとも感じることもあるでしょう。

それは仕事と遊び(クラブ活動)の違いでもあります。また若いスタッフが、スポーツや趣味など以外のクラブを経験していないことにも理由があると思います。定年のある主事と、ないワイズメンでは年齢差は開く一方です。しかしマイナス要素を数え上げてみてもきりがありません。

担当主事・連絡主事に、クラブ活動の本質を十分に理解してもらうことが大切です。そして、クラブの人材、能力に合った、ちょっと背伸びをすれば可能なプログラムや協働のプログラムを提案してもらいたいと思います。

ワイズは、柔軟性があり、さほど手続きを必要としない組織です。ワイズメンという地層の中に、主事の若い鉱脈が、しかも全国を縦断して横たわっていると考えると、新しい希望と発想が湧き上がってきます。

## これ以上を望みますか？

あずさ部のあるクラブの例会で、隣席のメネットから話を聞きました。そのお宅の二人のお嬢さんは、中学、高校時代にアジア地域や国際ユースコンボケーション(YC)に何回か派遣され、その後ユースクラブ(Y3E)で活躍されましたが、現在は、歯科医師と、地球物理学の大学院生となっています。

今もワイズメンになったユースの先輩や、多くの仲間と頻りに連絡をとり、YCに参加した海外の友人とも連絡や行き来があるそうです。高校生時代から、仕事に忙しい両親よりもワイズを通して、さまざまな体験をしました。今は、年上の人(特におじさま)とのコミュニケーションが上手にとれるので、同世代に頼られることがあるらしい。「これはワイズの皆さんと一緒にいて、学んだおかげ」とのことです。

YEETPに参加したことが弾みになって、その経験を生かして、社会で活躍している元高校生もいます。

ワイズのユース事業において、費用対効果ではありませんが、どうしても自分達がやったことが、なんらかの形でYMCAやワイズメンに返ってくることを期待してしまうところがあります。あるいは、自分達と一緒に何かをやってもらいたいという思いがあります。東日本区は、近年、ユース事

業に力を注いでいます。しかし、もうひとつ対象と施策と評価がかみ合わない部分もあるように見えます。どうしてもクラブの「メンバー増強」、「若返り」への願いと結びついて、ややこしくしてしまっています。

その後、前述の大学院生のお嬢さんに東京西クラブの例会の卓話をお願いしました。ユースコンボケーションで学んだことは、「自己主張」と「協調性」だったそうです。卓話では自ら選んだ進路で、海洋調査船に乗り組んでの研究活動と将来の抱負を自信を持って語り、参加者に感動を与えました。

ワイズメンのユース事業は、やりっぱなしではないのではないのでしょうか。ワイズメンやYMCAに接触した若者が、そこでさまざまな出会いや感激や驚きを体験して、自分の方向性を見出し、幅広い仲間と、社交性を身につけ、そのことが、彼らの生活や将来に少しでも良い影響があれば。ましてちょっとでも、ワイズメンズクラブによる影響とってもらえるなら、それ以上望むことはないと思います。

種を播くことが大切です。けれども、元気のよい種がどこにはじけて、どこで芽を出すかは、私達には予測できません。ワイズメン活動の中で育った若者が、将来、他の団体で活躍してくれたら、私達にとって誇らしいことです。同時に、他の奉仕クラブで育った人を、私達の活動に自信をもって迎え入れる受け皿を磨くことを工夫したいと思います。

## プロフィール

### 吉田 明弘(よしだ あきひろ)

1967年 東京目黒クラブチャーターメンバーとして入会  
 1977年 東京西クラブチャーターメンバーとして移籍  
 1981年 日本区書記  
 1983年 日本区文献事業主任  
 1987年 日本区IBC・YEETP事業主任  
 1988年 アジア地域YEETP事業主任  
 1997年 東日本区文献委員長  
 1998年～ 東日本区ヒストリアン  
 2000年 あずさ部部長

日本のYMCA、世界のYMCAの成り立ち。

## 26 アジア・世界のYMCAの組織と日本のYMCA

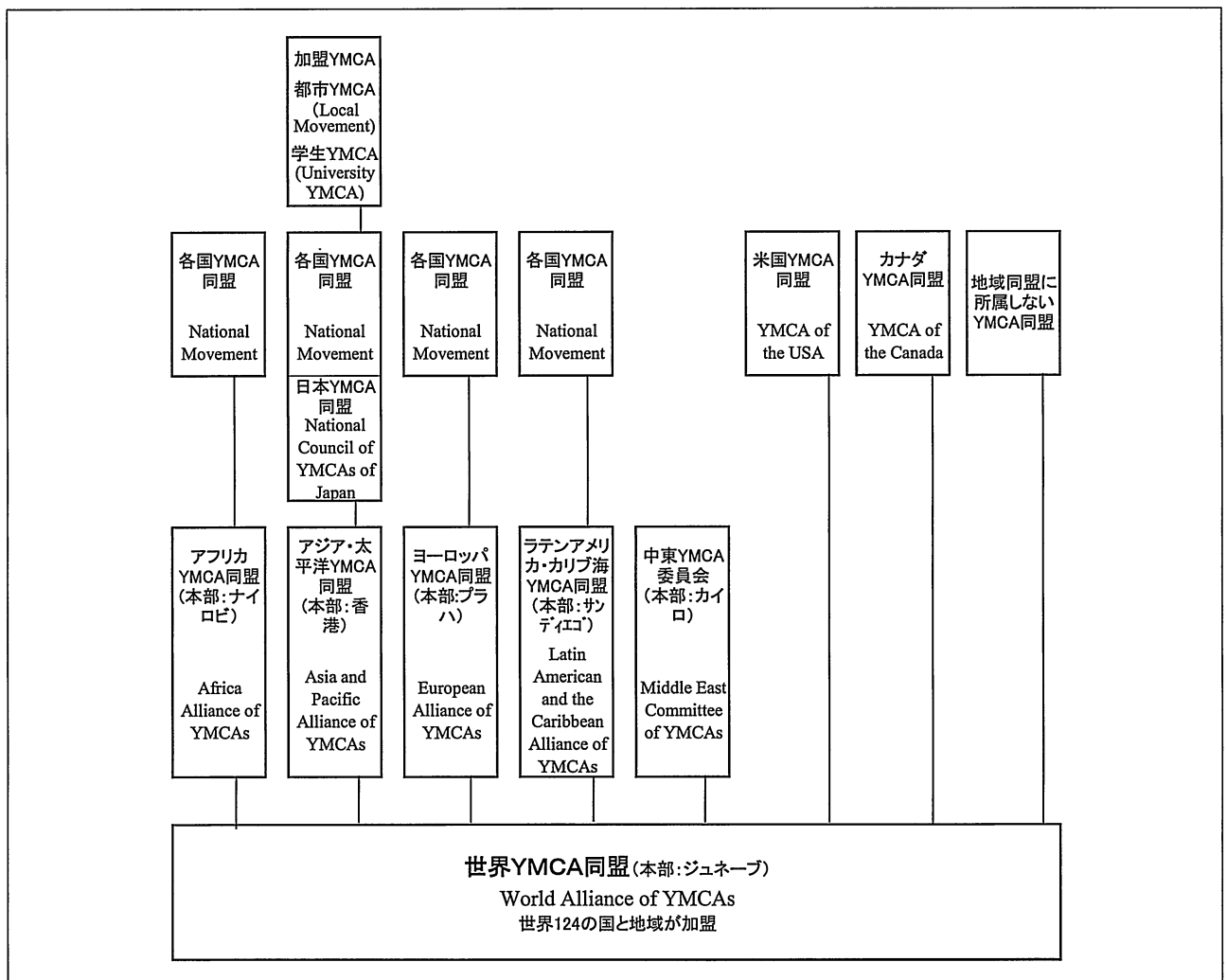
日本YMCA同盟

YMCAを世界規模で捉えるとき、その働きの内容は、国によってさまざまですし、日本のYMCAも同盟・加盟YMCAレベルでさまざまな国のYMCAと関係を保っています。ここでは、その組織とミッションを把握していただき、世界のYMCAがどのような方向に進んでいるのかを知っていただければと思います。

### 1. 組織：

#### 「世界YMCA同盟と地域YMCA同盟・日本YMCA同盟との関係」

各国YMCA同盟は、地域同盟に所属すると同時に、世界同盟にも直接加盟しています。そして、両方に分担金を払っています。すなわち、日本YMCA同盟同様、世界同盟も地域同盟も加盟する組織か



らの負担金によって支えられる組織です。また、アメリカ、カナダなどの一部の国々のYMCAは、地域同盟を構成しないか、または、所属せずに直接世界同盟に加盟しているケースもあります。

下の図を用いて説明すると、日本の各地にあるYMCA(都市YMCA・学生YMCA)は日本YMCA同盟→アジア・太平洋YMCA同盟→世界YMCA同盟という構造の中で、世界のYMCAと繋がっていることが判ります。

2007年10月現在で、世界の124の国と地域にYMCAがあり、約4,500万人のメンバーが参加しています。

世界各国YMCAの情報を調べるには、世界YMCA同盟のホームページを確認してください。最新の情報が掲載されています。

<http://www.ymca.int/index.php?id=6>

こちらから、地域ごとのYMCAの所在国、各国YMCAの情報などを確認していただくことができます。

## 2. ミッション：

1844年にロンドンで誕生したYMCAは、常に、世界共通のミッションを掲げて、世界各国でその

活動を広げてきました。国によってYMCAの事業のあり方が違うのは、ミッションに基づいて国やコミュニティの課題を考える時、その対応策は決して一辺倒ではなく、むしろ各々の実情に沿ったユニークな対応策であることを意味します。

そのミッションである1855年「パリ基準」の制定にあたっては、赤十字社の創始者であるアンリ・デュナンも参加をしています。

その後、1973年には「カンパラ原則」、1998年には「チャレンジ21」が採択され、各時代の社会環境や法制度にあわせたミッションの再確認がされています。YMCAは常にYMCAミッションに立ち返ることによって力を得、世界各地の固有の社会情勢に対応しながら、各時代における方向性を見出してきたのです。

ここでは、私達の「今」の社会の実情に応答したミッションである「チャレンジ21」を紹介します。

「パリ基準」・「カンパラ原則」・「チャレンジ21」の全文は日本YMCA同盟のホームページで確認いただけます。

[http://www.ymcajapan.org/02\\_01.html](http://www.ymcajapan.org/02_01.html)

### 「チャレンジ21(Challenge 21)一部抜粋」

YMCAはイエス・キリストのもとに立ち、宗教宗派の違いを超えて協働する、自由意志で参画するボランティアの運動であって、老若男女を問わずすべての人に開かれた、特に青年の参画を強調する、世界に広がるキリスト教運動である。またYMCAは、すべて被造物のいのちが豊かに守り育てられ、愛に基づく正義と平和と和解に満ちた人間性溢れる社会を建設する、キリスト者の理想を人びとと分かちあうことを追求する。

それゆえ、すべての加盟各国YMCAは、それぞれの現実状況のなかで選択される固有のさまざまな課題解決に向けて努力を集中するようにと招かれている。これらの課題は、カンパラ原則の新しい展開として、つぎの事柄を含むものである。

- ・イエス・キリストの福音を分かちあい、個々人が霊的にも知的にも身体的にも良好であり、調和のなかに人間性が豊かに保持される有機的総体としての地域社会の創出に努める。
- ・すべての人びと、とくに青年と女性がより大きな責任をもち、あらゆるレベルで指導的役割を果たし、公正な社会をめざす働きに共に参画するよう、その

- 指導力を高め、必要な権限を持つ。
- ・女性の権利を唱導してその向上をめざし、また子どもの権利を支持する。
- ・信仰や思想信条を異にする人びととの対話・協力を推進し、人びとの文化的アイデンティティを認め、また、文化の革新にむけて努力する。
- ・貧しい人びと、奪い取られた人びと、追い立てられた人びと、また人種的・民族的少数者ゆえに抑圧のもとにある人びとと連帯し、行動する。
- ・紛争状態にあるところで調停者、和解の仲保者(編集委員会註 仲介者の意)となることに努め、また、人びとが自己決定のできる状況を創り出す運動に効果的に参画し、そのことによって彼ら自身が高められるように働く。
- ・神の被造物をあらゆる破壊から守り、きたるべき世代のため、地球資源の保持・保護に努める。

これらの挑戦に立ち向かうため、YMCAは、自己自身を持続し、また自己決定を可能ならしめる、あらゆるレベルでの協力の形態を開発・強化する。

(第14回世界YMCA同盟委員会 採択)

## 3. グローバル・オペレーティング・プラン

各国のYはどのように協力・連携し合っているのでしょうか。その代表的な例が、世界YMCA同盟の

主導で行われている「グローバル・オペレーティング・プラン」(以下、GOP)です。

過去、開発途上国にあるYMCAへの支援は、「支援される国のYMCA」と「支援する国のYMCA」

が1対1の関係(バイ・ラテラル=2国間)を結んで行われてきました。しかし、それでは世界124カ国のYMCAが蓄積してきた膨大な資源(人材・経験・技術・資金)を十分に活用することができず、また、活動の透明性にも欠くことがありました。

そこで、2002年の世界同盟メキシコ総会を機に、世界のさまざまな資源を十分に活用できるように世界YMCA同盟が計画やモニタリングに関与し、複数の国(マルチ・ラテラル=多国間)からの支援をコーディネートすることが決議され、GOPが開始されました。2006年からはGOPフェーズIIとなり、フェーズIの評価を踏まえて、世界中のYMCAの人材・経験・技術・資金という資源をより一層効果的に用いながらYMCAを組織的に強化することで、社会のニーズに応えようとして取り組んでいます。日本のYMCAは主として、東ティモールとスリランカの支援に関与しています。

各国のYMCAによって、その強みは違います。日本は長い間、キャンプやスポーツなどのレクリエーション活動を通して子ども達に働きかけ、優秀なボランティアリーダーが育っています。このボランティアリーダーこそが、日本のYMCAにとって最も大切な資源であるとも言えます。従ってこの人材を、国際協力募金などを用いて積極的に海外に派遣し、世界の子ども達へプログラムを提供したり、国際理解教育や平和教育の場をボランティアリーダーに提供し、「世界の平和を作り出す人材」として社会に送り出すことが日本のYMCAにとって重要な働きであると考えています。

#### 4. これからのYMCAが目指すもの

日本YMCA同盟が掲げる2008年度からの中期計

画('08年~'11年)では、公益法人制度改革への取り組み、キリスト教基盤の確認、主体的な青年の参画などが達成されることを目指し、そのことを通して加盟YMCAの働きを強化しようとしています。

##### (1) 公益法人改革への取り組み

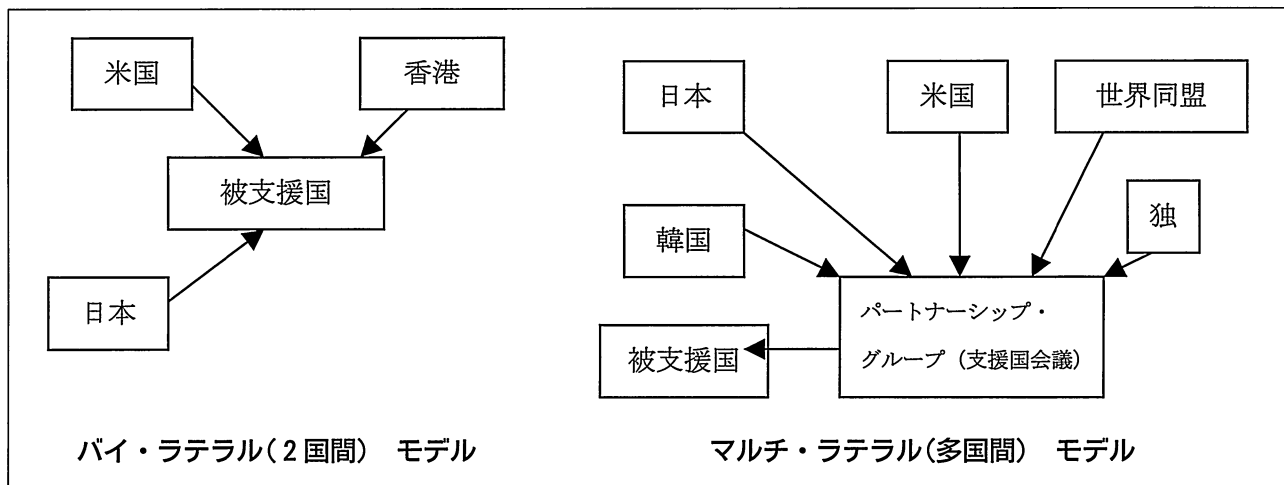
2008年度中に施行される公益法人改革関連新法は、財団法人格をもつ加盟YMCAにとって、大きなチャレンジとなります。同盟としては年度内に公益財団法人への移行申請をすべく、公益法人新法に基づく体制を整えていきます。同時に全国YMCAの制度改革については、スタッフレベルで検討を進め、YMCA諸規程のモデルを提案していきます。

##### (2) キリスト教基盤の確認

キリスト教基盤については、さまざまなYMCA活動の基点となるものです。同時にYMCAは、常に宗教宗派にこだわらず、すべての人々を迎え、その運営に当たってきています。ですから、キリスト教基盤への理解を、YMCA運動を担うスタッフ、推進するボランティアの中でしっかりと受け止めてもらえるよう、環境を整えてきます。

##### (3) 主体的な青年の参画

2004年からの4年間、2回にわたる日本YMCA大会、そしてリーダーシップ育成をテーマにした大会が行われ、全国のボランティアリーダーや学生YMCAメンバー、高校生などが集まり、育成世代の会員との融合の中ですばらしいエネルギーと可能性を感じることができました。加盟YMCAで



は、ユースボランティアの育成が強化され、またユースを主体に据えたグループや活動が生まれてきています。同盟では、ユースファンドを積極的

に展開し、全国のYMCAで活躍する若者がより広い視点でYMCAを捉え、担い手会員として成長できるように働きかけをしていきます。

日本のYMCAは、今、法人として公益性が求められている。

## 27 日本のYMCAと、そのチャレンジ

日本YMCA同盟

### 1. 日本のYMCAの成り立ち

日本のYMCAは、2つの異なる性質のYMCAから成り立っています。一つはワイズメンズクラブなどとも日常的に連携をしている「都市YMCA」。もう一つは大学の中に存在する、大学生達によって運営される「学生YMCA」です。また、これらYMCAが加盟する組織として、「日本YMCA同盟」があります。

### 2. 都市YMCAの性格

日本には、188の拠点と38カ所の研修センター・キャンプ場があり、これは34の独立したYMCAとして運営されています。

YMCAは日本でもっとも古い公益法人の一つですが、これらのほとんどは、都道府県単位で財団法人を組織しています。中には福岡YMCAと北九州YMCAのように1つの県に2つの独立したYMCAがあるところもあります。また、事業内容により

#### 「都市YMCA」 34都市 約10万人

日本では、1880年に東京YMCAが創立され、その後大阪YMCA、横浜YMCA、神戸YMCAが創立されました。日本でもまずYMCA運動を興したのは、20歳代の青年達。その中には、内村鑑三、新渡戸稲造、新島襄など当時の社会を代表する青年、青年牧師もいました。それから120余年、現在では34都市で9万人以上の会員組織に成長しています。活動の範囲も、社会福祉、教育、地域活動、ウェルネス&キャンプ、国際と多岐にわたり、全国のネットワークを活かしながら、各地域の課題に取り組んでいます。また都市YMCAのほとんどが、財団法人格を持ち、非営利公益団体として、社会の中での役割を果たしています。

#### 「学生YMCA」 33校 約300人

都市YMCAと同じく日本のYMCAの基盤となった学生YMCAは、1960年代には147大学に組織され、3000人の会員によって活発に活動していました。現在、YMCAを支える会員の中には、学生YMCA出身の方も多くいます。青年期に聖書のイエスに触れ、人との出会いをおして生き方を問い直し、ワークキャンプなどを行ってきました。70年代の学生運動の時期に急速に減少、2007年には、11大学の寮の運営と、サークル形式の大学も含め33大学で約300人が活動しています。それぞれの大学において聖書研究や読書会を行い、地域レベル(夏期学校)、全国規模(全国夏期セミナー、日韓学生YMCA交流、ジェンダーグループ)で活動し、海外派遣(WSCF・インドなど)も行い、次代の社会、YMCAを担う人材を育成しています。

#### 「日本YMCA同盟」

これら、都市YMCAと学生YMCAが加盟する日本YMCA同盟は、全国レベルでのYMCA運動の推進、加盟YMCA間の協力の推進、世界同盟をはじめ海外YMCAとの連絡、スタッフ研修、東山荘の運営などをその役割としています。日本YMCA同盟には、各地のYMCAの常議員・理事から同盟委員が選ばれて、同盟委員会が組織されています。毎年1回6月に同盟委員会が開催され、会員組織としてのYMCAの方針・予算その他重要事項が審議されます。日本YMCA同盟も、各地域のYMCAと同様に一つの独立した財団法人格をもって活動しています。日本YMCA同盟としての方針の決定・資産管理は、ボランティアの理事による理事会で行われ、各地域のYMCAと同様に、日本YMCA同盟にも全体の執行責任を負う常務理事としての総主事があります。

学校法人格や社会福祉法人格をもって活動しているYMCAも多くあります。

都市YMCAの規模は、YMCAの歴史と活動内容によって違いがあります。たとえば東京YMCAは125年の歴史をもち、15の施設があります。最も新しい茨城YMCAは設立11年目で、1つの施設で運営されています。

YMCAの活動は自前の会館であったり、施設を借りたり、あるいは公の施設を借りて活動しています。また、行政や企業などの委託を受けて運営を行っている事業もあります。

YMCAは全国で相互協力していますが、具体的には大きく東日本地域・中日本地域・西日本地域の3つの地域に別れて、相互の協力関係を結んでいます。これらの各地域では、ボランティアの研修やスタッフの研修を定期的に行っています。

また、事業ごとに推進会議があり、各事業の情報交換を行い、事業の理念やYMCAとしての方向性を協議しています。

YMCAの組織、歴史、現勢については、YMCA同盟のHPでも紹介しています。

<http://www.ymcajapan.org/02.html>

### 3. 公益法人改革へのチャレンジ

公益法人として社会の中に働き場を得ているYMCAは、2008年に施行される新しい公益法人法によって「YMCAの活動が公益に資するか否か」をあらためて問われることとなります。YMCAでは、この制度改革を積極的に受け止め、YMCAの事業のあり方を点検し、より質の高い公益事業を行う団体へと変容する機会として受け止めています。

国では1896年制定以来、特別法による法人制度を除き抜本的な見直しが行われず、一般的な非営利法人制度がありませんでした。公益性の判断基準が不明確なこと、主務大臣によって許可設立された法人の中で営利法人類似の法人や共益的法人などが、税制上の優遇措置や行政の委託を受け、補助金や天下りの受け皿などについての指摘・批判を受けたことなどがきっかけとなって、抜本的改革に取り組むことになったことが改革の経緯です。

「公益でない」と判断された法人は、一般企業と同様に課税などが行なわれる一方、「公益である」

と認められた団体は、寄付金に対しての課税控除など、公益団体としてより活発に活動する機会が与えられます。ここでは、これからの日本のYMCAがどのように対応していくのかを、ご紹介します。

#### (1) 「より公益性の高いプログラム」へ

公益法人改革では、各自治体が「公益認定委員会」を設置し、それぞれの法人が行なうプログラムが「公益に資するものであるか」を判断します。何をもって公益と判断するか、そのガイドラインははっきりと定められていませんが、YMCAでは以下のような取り組みを私達のプログラムの特徴として、より強く打ち出していく必要があります。

- すべての人に開かれた活動とし、とくに子どもの健やかな成長と青少年のリーダーシップの養成を進めます。
- 性別、年齢、地位、人種、宗教などに偏見をもつことなく、一人ひとりの人権を尊重し、公正な社会の実現をめざします。
- すべての人々に健康づくりの機会を提供します。
- 災害や紛争、貧困などに苦しむ人々に対して支援活動を行い、平和の実現に努めます。
- 障がい児・者に対する支援をします。
- 地域に根ざしたボランティア活動を推進します。
- 地球環境の保全に努め、すべてのいのちを大切にします。
- キリスト教を基盤とする団体であり、その価値を大切にします。

#### (2) 「メンバーシップ・バイ・デザイン」への取り組み

1990年代、米国のYMCAが日本と同じくタックス・チャレンジ(課税の圧力)を受けました。そこで米国YMCAでは、YMCAが地域にとって有益なコミュニティとなり、YMCAプログラム参加者がそのコミュニティを支える構成員となるために、「一人ひとりの会員のかかわりを、意図的にデザインしていく」取り組みがなされました。日本のYMCAでは、この取り組みから学び、YMCAに集う人々がさまざまなレベルでプログラムへのボランティアな参画ができて、またYMCAの枠から飛び出して地域社会での貢献の機会を提供できるよう、取り組んでいます。



## 28 歴代日本区理事座談会から

2007年2月24日(土)、25日(日)に東山荘にて開催された「ワイズ感謝デー」に参加された歴代日本区理事の方々によって座談会が開催されました。以下、座談会で話された中から、皆さまのご参考となると思われる箇所をピックアップしてご紹介いたします。選択は編集委員会で行い、また、読者にご理解いただきやすくするため、一部編集させていただいた箇所もあります。

### 奈良 信(第19代) 東京山手クラブ

私はワイズにおける一つの歴史の変遷のときに日本区理事をいたしました。つまり旧国際憲法に基づく日本区最後の第19代理事でありました。第20代からは新しい憲法による新しいワイズメンズクラブが発足し、国際の事務所がアメリカからスイスに移りました。そのようなドラスチックな変化がありました。

そういう変わり目において、その変わることそのものにも関与したことによって、ワイズメンズクラブはどのようにあるべきか、ということを経験したことを皆が反省して改めました。その後発展もしたけれど色々問題も出てきました。私は、再出発したときは国際憲法およびそれに基づいて制定した区定款の、根本的な事柄について問われたら、答えるべき責めはあると思っています。

YMCAらしい、ワイズメンズクラブが理想としているようなクリスチャンのタイプがワイズメンのクリスチャニティーです。だからあまり宗教臭い感じのキリスト教は、ワイズメンズクラブにもワイズメンにも向かないと思っています。

パリ基準に表現されているのは、「その信仰の内面的な心において、日常生活でイエス・キリストの弟子らしい、イエス・キリストに従う者らしい、どこかに困っている人がいたら、水が飲みたいという人がいたら水を飲ませるといった心を持った弟子になりなさい、なろうじゃないか」ということです。ワイズメンのキリストの心というのは、イエス・キリストが言う、このような教えに従って生きていくことです。

私が皆さんの話を聞きながら思ったことは、ワイズメンズクラブで学んできたことが、ワイズメ

ンズクラブと違うところで役立ち、その場所で良い影響を与えているのではないかと思います。

### 竹内 敏朗(第25代) 熱海グロリークラブ

今年で59年ワイズメンに関わっています。YMCAは神戸のYMCAに12歳のときから関わっています。そういう意味では古狸です。

私の理事の年度には9クラブが設立されました。福岡中央、京都ウエスト、仙台青葉城、高崎、いまはなくなりましたが高松、小樽ワイズメンズクラブが非常に懐かしい思い出として残っております。

一番残念なことは、当時非常に働いた方で、現在も残っている方が非常に少ないということです。これはリーダーシップの継承という点で、これから新しいクラブを増やしていこうという立場の方が、その辺をもう一度見直して、いかにこのワイズメンズクラブ運動が地域社会に密着して、より魅力のあるクラブになれるかどうかということが、改めて試されている時代じゃないかと思います。

「国際、国際」とよく言うのですが、国際大会に行く人は非常に偏っています。行く人は毎回行っているが、行かない人が多いクラブは「国際なんていうのはあの人に任せておけばいいんじゃないか」というようなことになりがちです。

これは最近よく強調されるIBC月間についても、同じようにいえると思います。それから「Time of Fast、断食の月」なんていっているけれども、当初に紹介された経緯が十分に説明されていないために、「お金さえ出せばいいんじゃないか」というようなことになっています。その辺が非常に便利な社会となり、全てが効率一辺倒で片付けられているせいか、情報の伝達については少しかまけています。

昔は小さいYMCAの屋根にペンキを塗ったり、芝を刈ったり、キャンプサイトに小屋を建てたりと、それぞれに働きの場があり、そのようなことをやることで生活に充実感を感じていたのですが、そのYMCAが大きくなって、それぞれが専門職に頼まないと中途半端にペンキを塗ってもらったのでは、後でもう一度塗り直さなければならなくなることから、だんだんとワイズの活躍場所としての魅力を失ってしまいました。

それから主事側も専門的になり、昔のように歌が上手くてキャンプ指導が上手くて、なおかつ行政手腕がある人は少なくなっているのです。管理職の有能な人を求めている時代に、皆さんが主事を呼んで本音の話を聞いて、YMCAの中での人材活用と行政手腕を発揮できる人材をYMCAのトップに据えないと駄目だと思います。

近い将来静岡YMCAを設立することが夢です。

#### 野村 秋博(第30代) 名古屋東海クラブ

YMCAを支えている多くのメンバーがワイズメンであるケースが多い訳です。多くの場合ワイズメンを強めることはYMCAの会員増強に繋がります。したがって本当にYMCA活動を支えたり、強めたりするにはワイズメンズクラブが強くなければならぬ。少なくともメンバーが万全でなければならぬと考えております。

私は現在、名古屋YMCAの理事長をしておりますが、倒産寸前であった名古屋YMCAは、今は無借金経営を進めております。やはりドラスチックに変わるときには多くのメンバーを失いましたが、中心になって残って支えているのは、ワイズメンズクラブのメンバーであるし、またYMCAがしっかりと育てた人達の、理念です。

YMCAでは「メンバーシップ・バイ・デザイン」とか、人の養成に本格的に取り組んでおりますが、それと同じようにワイズもしっかりしたメンバーを育てることに取り組んでもらわなければならないと思います。

ただ、うっかりすると、しっかりしたメンバーを育てるための仕事の引継ぎとか、次期へ引継ぐためのスムーズな運営をするための組織としての円滑化ということと、しっかりしたメンバーを育てるということは、見かけはよく似ていますがそれでも本質的に違いますから、そここのところを見

極めて欲しいと思うのです。

私のクラブもそうなのですが、いまチャーターメンバーが僅かに残っております。10年毎に見てみますと、一番少ないのがこの10年～30年に入ったメンバーです。入ったメンバーが一番多いし、その中でも、比較的最近に入った若い人を育てられなかったということ、反省しております。

都市YMCAやYMCA同盟としても、国際的な流れとして期待されだしているのが、若い人の参画であり、女性の参画ですが、残念ながら日本の場合はそれを送り出す基盤がないわけです。リソースがない。リソースがないところで、それなりの訓練がなされていない人を出すということは困るわけです。それこそ出さない方がいいということになります。名古屋でもそれではいけないということで、ユースクラブを立ち上げようと思、いま会合を始めつつあります。

それから、女性のための訓練をということで、レディーズクラブの集まりを、いま仮例会を2回持ったような状況ですが着々と進めております。しかし、手を挙げる人がそれなりに相応しい人でなければならないという、現実との狭間で悩んでいるのが実情です。

#### 青木 一芳(第31代) 千葉クラブ

YMCAもどんどん変わっています。古い考え方でYMCAを見ているのでは、ワイズメンとしてはいけないので、今YMCAがどう日本の社会に関わろうとしているのか、世界にどう発信しようとしているかということ、ワイズメンとしては十分理解して、そのYMCAを助けるんだと、そういう意識をもっと持つように、これは新しい人を勧誘するというよりは我々自身の問題であります。EMCの「C」の部分になるのでしょうか。

これから、ワイズが取り組まなければならないひとつの大きなファクターは、ワイズの継承という意味もあるけれども、若い人をどのようにして力づけ、方向づけしていくかということです。我々が持っているタレントというか財産を、若い人達に受け継いでやっていってもらおうかということ、いろんな形で考えないといけません。

YMCAがユースを育成するわけですが、それを

サポートするというのが一番の本筋だとは思いますが、ワイズの特徴を生かしてワイズなりのいろんな形のきっかけを創造して、それを盛んにしていくことを心掛けると良いと思います。

今、ユースには新しい風が吹き始めたかと思えます。横浜のユースクラブは国際協会にチャーターした我々の仲間だけれど、その運営の仕方がとてもユニークです。今の若者向けに毎月例会をするわけではなくて、年に何回かの集まりはするけれども、あとはインターネットで集会するような感じのことをやっていこうというのは、中々面白い試みだと思えます。

横浜でも姫路でも中心になって引っ張ってくれているのが、我々が苦勞して生み出して、なんとかワイズの真髓を少し伝授できたかなという感じの人達なので、その人達がどういうふうに着いて仲間にワイズの良さというか、ワイズが大事だということを広めてくれているかにかかっています。それを我々が側面から援助し、育てていければいいかと思えます。

#### 今村 一之(第34代) 大阪土佐堀クラブ

私は幸せなことに日本にワイズメンズクラブを創った奈良傳さんからYMCAのこと、ワイズメンズクラブのことをいろいろと直接伺う機会がありました。それから日本人として初めて国際会長をされた鈴木謙介さんの自宅近くにおりましたので、いろいろと伺ったり報告をしたりすることができて、少しずつ身に着いたのではないかと思います。

それから奈良傳さんのご息子の奈良信さんが私をIBCのISDに推薦してくださって、国際で仕事をする機会がありました。これからもそういう機会を若い人に与える、仲人のような人が必要ではないかという気がします。

普通はクラブ会長から部長、区理事からICM、ときにはAPと進むのですが、私は反対むきに、ICMから途中でAPをしてRDをしました。

毎月の例会とかワイズの集まりなどで、連絡主事が本当に気持ちよく出てきて、伝えるべきことを本当に、皆に伝えているのかと思います。「かなわんな、これは。YMCAからいわれたからやっている」という人がやっぱりいるのではないか。総

主事から、しっかりやれと主事会議なんかでよく周知徹底して欲しいなと思っています。

Y・Yフォーラムについてですが、ワイズばかりが集まってワイワイやっているような感じがするのです。やはり総主事がどう考えておられるかということをよく調べて、総主事が「出なさい、もっと連絡主事としてしっかりやれ」といえば彼等もやるけれども、なにか引っかかっているような面もないではないと思うのです。「YMCAはどう考えているのか」、「ワイズはお荷物なのか助け手なのか」そこらのところを本音でディスカッションして欲しいと思います。

#### 石井 一也(第35代) 東京セントラルクラブ

区理事は命令をして区を引っ張るのではなくて、部長、また部長は会長、会長はメンバーのために働くということを、理事就任のときにお話しました。したがって、私のときから日本区の組織図を従来のものをひっくり返して、メンバー、会長、部長という形でトップは次位の役職の人に任せ、その人達が如何に働きやすくするという形を作りました。

日本区のクラブ親子関連図も一番先に大阪ワイズメンズクラブがあり、次にその子達、孫、と続くわけですが、そういうものも少し変えさせていただきました。

国際議員、アジア地域会長もさせていただきました。理事のときから中国に注目して、中国へは幾度か訪ねました。中国にはもともとワイズメンズクラブがあって、自分達から国際を脱退するということではなかったのに、新しくワイズメンズクラブを作るのではなくて、リバイブするという意見でしたから、中国のワイズメンズクラブ再生の努力をしました。

このことが発展して、中国デベロップメントコミッテイー(CDC)が結成され、最初から私と当時の中西部部長をなされた豊中クラブの小島規一郎さんが中国YMCA全国協会総主事・李寿葆先生と旧くからの親しい友人であり、大阪YMCAへ研修に来ていた施海国際主任主事を通じて多くの情報を持っていたので委員として参加しました。

1949年までは、中国リジョンにシンガポールと香港を加えて23クラブありましたが、三自愛国運動委員会の下にある中国YMCAでは、新しい団体や組織は許可されず現法律下において、YMCAを

支援する内部の成人部門の様な形で存在しております。現在、上海、北京、武漢、西安、天津の5クラブがリバイブし、例会、コミュニティーサービス活動などを行っております。

私と小島さんは中国デベロップメントコミティーメンバーとして永く関わったので、2005年2月に東山荘で東西日本区交流会と併催されたアジアエリアミッドイヤーミーティングで委員会名をチャイナフレンドシップ委員会に改名することを提案し、承認を得て退任しました。当時中国に関係が深かった大阪高槻クラブの森本榮三さんと大阪YMCAで中国とご縁が特に厚かった現在鎌倉クラブの田中義宣さんのお二人に引継ぎました。小島さんと私は現在も新委員に協力しております。

### 中村 次郎(第36代) 福岡中央クラブ

ワイズメンズクラブのメンバーには、クリスチャンの方とクリスチャンでない方もいます。キリスト教徒でも非常に狭い原理主義的で断定的なことをいわれるクリスチャンと、いい加減とは申しませんが柔軟に適應されている方、社会的にレベルの高い方、政治的に保守的な方とかいろんな方がいると思うのです。それらの方々が全てYMCAやワイズに繋がっていることは素晴らしいと思うのです。

今の時代はミッションスクールでも、キリスト教の中身を前面に出すことで、学校の魅力の特長づけることによって、社会に認知されていくという時代になってきているような気がします。

最近教会でもキリスト教を考えながら、ユダヤ教、イスラム教、仏教、神道などの他宗教を考える。その中で“based on the teachings of Jesus Christ”といものが明らかにされていくということも、大事なことではないかという気がするのです。むしろそういうことをきちんと一緒に考えることを通して、キリスト教の中身が明らかにされていくのではないかということも、一緒に考えていただければありがたいと思います。

ワイズのプログラムも、めりはりのあるクリスチャーニティーの演出が必要だと思います。例えば朝の礼拝、夜のキャンプファイヤーのときなどに、参加者の理解が深まるように配慮をすればよいのですが、それを教会でやっているようなことをワイズでいきなりぶつけるから、イレギュラーを起こします。

女性は妻としての女性の役割のメネット、社会

人としての女性という両方があると思います。その両方がワイズメンズクラブにおいては、それぞれの性格が尊重されながらワイズ運動の中に位置づけるというように考えたらいいと思います。

女性の力をクラブ作りや奉仕の上で活かしている点では、我々は他の奉仕団体より進んでいるのですから、その点を今後も伸ばしていきたいと思えます。

### 加藤 利榮(第37代) 横浜とつかクラブ

クリスチャーニティーというのは、ワイズである限りいつまでもついて回る気がします。私のときにはチャプレンを早稲田教会の上林順一郎先生にお願いしました。彼が日本区報に投稿してくれました。ワイズやYMCAは「縁側」だということです。気軽にそこで下駄を脱ごうが靴を脱ごうが自由にお茶でも飲みながら、将棋でも指しながらそこで話ができる、それがクリスチャンであろうとクリスチャンでなくても、縁側ですのだったらいのではないか。それが奥座敷になるとそれはやはり教会だろうというような内容の文章を書いていただきました。

今でもワイズ、YMCAは縁側ではないかというふうに思っています。そういうことでいかないと、わかってもあまり入会しないとか、確かにEMCのCが大事ですが、クリスチャーニティーのことが退会の原因になりはしないかと思えます。

高齢化の一途を辿っている我々ですが、少なくともまだまだ5年や10年は持つというような方は一杯いらっしゃいます。例えば私の横浜とつかクラブは名古屋グランパスとDBCを持っていますけれども、お互いに切磋琢磨できるクラブ同士の交流で、「頑張ってるよー」「あーそー、うちもそうだよー」というように、付き合いながらワイズをお互いに兄弟で、切磋琢磨できればと思います。EMも大事ですがCもゆるがせにできないですね。

### 森田 恵三(第38代) 京都ウエストクラブ

第36代の中村次郎理事の「なにか一歩でも動くことが今のワイズメンには必要である」という言葉には、私も全く同感でした。その思いを達成したく、'92~'93年に理事を務めたときは「拡げよう社会にワイズの大きな輪 日本区6000への実りを

求めて」を叫んで日本区を走り廻りました。その結果、日本区は3000人を突破することができました。

一方、「日本区はどうあるべきか」ということで副区制度が考えだされ、93年1月から2年半続きました。そして吉田一誠理事のときの第50回記念大会に於いて、劇的な大きな変革として日本区が東西両区に分れたのでした。2つの区に分れて大会も2つやるほうが、地理的にも大勢集まるだろうし、行政の利便性も高まり、両区がたがいに刺激し合うことがワイズダム拡大につながるという期待からでした。

しかし、西日本区はそのとき1,950人でしたが、10年たった現在では1,650人となり増えるどころか300人も減っているのです。

バブル経済崩壊による不況ということも原因になると思うのですが、これまでの10年間の区理事も何十人増やそうと目標をたててこられました。しかし残念ながら低減傾向が続き、日本のワイズは消滅していくような状況にあり本当に心配しています。

そこで、もう一度元理事の皆さんが、「今後のワイズはどうしたらいいのだろうか、このままでいいのだろうか」ということをもっと真剣に語り合い、その方策を練る討議の場をぜひ作ってほしいと思うわけです。

今は時代が変化してワイズの世界でも甘えが目立ちます。例会には出席しなければならない義務がありながら出席をしない。出てきて欲しい人は出てこない。どこのクラブでも古参メンバーが動き、若い人が案外動かない。私達がワイズに入ったときに「どっぷり入っていった」というような喜びや感動を、全く感じてないのではないのでしょうか。

このような人達一人ひとりを強くしていくという努力と、会員増強のためにもワイズ入会に魅力を感じられるクラブ造りに励むことが、先輩ワイズに課せられた大切な責務だと思います。

#### 岡本 尚男(第40代) 京都キャピタルクラブ

私が理事に選出されて思ったことは前の方からの伝承が全くないか、ないに等しいということでした。国内だけのことを思ったらさほど問題はないか、という気がしないでもなかったのです。しかし、国際レベルで考えれば、理事職というのは

外交官なのです。外国からは顔を見られているのに日本のこともあまりよく解からない、国際のこともよく解かっていないということで、理事になってもいいのかということでした。これでは日本のワイズメンズクラブに対して非常に失礼なことになるのではないか、ある意味では日本の国益を背負っているのではないかという思いがございました。

どうしても研修ができるような公の機会を、ワイズメンズクラブの中に組織として定着をさせたいということをも、理事方針の中に明確に挙げました。それがワイズアカデミー委員会の発足のきっかけで、その前段は森田恵三さんが加藤利榮さんから引き継がれる半年ほど前に次期キャビネットの研修をされたことがきっかけでした。

新年度、現理事キャビネットが活動を開始して半年程しか経過していない時点で、次期理事キャビネットの研修会を、しかも次期会長まで枠を拡げることには躊躇しました。しかし1年限りの任期で何の研修もないまま、またしっかりと引継ぎもないままのスタートでは到底責任が果たせないのと、日本区の将来に対する発展が期待できないと決心して、研修会の組織を立ち上げ、次期理事を筆頭に現在のスタイルの研修会を、現理事の責任のもとに開催することで始めました。今となれば早過ぎることでなくて、2年前位からとりかかっても遅くはないと実感しております。

いまとなれば同じ土俵の上で次期のことが話せるオープンな環境が整い、現理事の方も、次期の研修を行うことになんの違和感もなく、次期の方のためにも協力をしないといけないという雰囲気が出てきたのは、非常にありがたいことです。

理事のとき国際聖句を暗記して、この言葉はどのようなことを言っているのかを真剣に考え抜きました。私は「一人ひとりが自分の使命を自覚して、世のため、人のために働かなければならない」と解釈しました。それはキリスト教だけではなく、仏教であってもイスラム教であっても「人のために働け」ということがあるわけです。そのことに気づき自分の出来ることから実行するのが大事なことで、そういう意味の話が出来るリーダーシップのあるワイズメンの方々が多くなるのが「クリスチャニティー理解」に役立つと思いました。

クラブ入会の動機は千差万別。誘うために器を整えるもよい。  
しかし、誘いながら器を磨くこともできる。

## 29 100人に聞いたワイズ入会の動機

凡例 氏名 現在在籍クラブ 入会年

### 1 青木 繁幸 京都めいぶるクラブ 1983年

私の友人がすでに入会しており、新しいクラブを作るのでメンバー募集中とのこと。いろんな職種の社長ばかりでいろいろ勉強になるということで入会しました。阪神・淡路大震災の時、物資を運んだり炊き出しに行ったあたりからハマりだしました。

### 2 足立 長逸 福知山クラブ 1963年

BBS運動(Big brothers & sisters movement)にかかわり、保護観察少年などとの友達活動に全力投球していた頃の入会。世の中には、こんな優雅な奉仕クラブもあるもんだと。爾来45年、異業種交流による資質の向上が社会奉仕の一大要素であることを学んだ。

### 3 有澤 泰伸 京都みやびクラブ 1979年

27歳の時に元会員より熱心に誘いを受け、入会しました。その当時は、奉仕等まったく無頓着でしたが参加する度に楽しく自然にクラブ活動へも積極的になりました。又、会員は一業種二名と多種の職業人の集まりにより私自身視野が広くなりプラスとなりました。現在もワイズメンであるのは原点があればこそです。

### 4 安藤 正武 東京江東クラブ 1978年

当時江東YMCAの青年成人部「山の会」に所属。クラブ幹事会や合同キャンプでワイズを知る。育成部OBも多数在籍し、メンバーのYMCAや地域への熱心な奉仕活動に感銘を受けて入会。これまでのワイズでの諸活動が私の人生の大きな糧となった。

### 5 池田 雪絵 熊本ジェーンズクラブ 1997年

当時の会長に誘われ、みかん狩りやイベントに参加した際、家族を丸ごと温かく迎え入れて頂いたことがきっかけです。入会早々IBC交流で韓国に行き、確信?を得、「おもてなしの心」を諸先輩方から学び、一生の「大切な仲間」をゲットしました。

### 6 池谷 泉 東京西クラブ 1995年

戦前、戦後と木曜午餐会に父が出席していたこともあり、Yについてはそれなりに知っていました。所属先の教会に4人もYの会員がいることから、地理的に一番近いクラブに誘われ、数年のビジター時代を経て入会。

### 7 石井 重男 京都東稜クラブ 1990年

京都エイブルクラブのチャーターメンバーとして入会。厳格な会は肌に合わないと思いつつY'sメンの誇りをもって行う奉仕活動や親睦を通じて、メンバーの熱い思いと苦しい時に受ける励ましはクラブライフを楽しむ方向に移り、もはや18年の歳月が経過していました。

### 8 石倉 尚 京都キャピタルクラブ 1995年

「異業種交流や、まあいっぺん来てみいな」と、お断りする理由もなくゲスト参加。笑顔と握手の嵐に誰が誰かもわからないままに入会。以来、友との交流に楽しみを、役割の使命感に充実を、後輩の成長に喜びを感じています。スポンサーの堀一行さんに感謝、感謝。

### 9 伊丹 一之 東京むかでクラブ 1975年

むかでがホストした高輪プリンスでの日本区大会のために、写真記録要員としてYMCA少年部の先輩に誘われて26歳で入会。以来、良き先輩方に導かれ、視野の広い人生を送ることが出来た。「人が育つワイズ」を実感している。

### 10 井上 修三 もりおかクラブ 1989年

入会動機は社長の代理参加。メネットは続かないだろうと思っていたようだが、肉体労働の提供が大歓迎を受け、また、良き出合いに恵まれ、今日に至る。熟年離婚は免れそうである。自然体が一番。

### 11 今村 讚 横浜クラブ 1993年

1993年に横浜クラブの大藤啓矩兄の「ハワイでウクレレを弾かないか」の一言が入会を即決させた。カイクラブの30周年記念ツアーはウクレレ弾きにとっては最高の出来事であった。以後カイクラブの会員にもなり、毎夏のウクレレ大会に出場し親交を続けている。ワイズに感謝。

### 12 岩間 哲郎 四日市クラブ 1977年

1977年、当時英会話の生徒であった私は、教師の館清氏(後の三重YMCAの総主事)に誘われ何の知識もないままチャーターメンバーで入会しました。年を増すごとに全国に知人が増えましたことは私の大切な宝です。今ではドブプリとY'sに漬かっています。

### 13 岩本 敬子 京都ウエストクラブ 1996年

私は東京出身です。京都へ来て10年。非日常的なことを望んでいた時、ワイズに未入会の方からお誘いがあり、納涼例会へ参加しました。京都好きの私には、色々な意味でよい広がりを感じました。何も考えずに、紹介者が入会した1ヶ月後に入会致しました。

### 14 太田 義徳 東京江東クラブ 1988年

娘がYMCA幼稚園に入園、通園中同じ町会の白坂鐘蔵君の誘いによって、訳も分からず家族で出席したクリスマス例会に魅かれて入会。よき友に恵まれいつの間にか後期高齢者直前、余命いくばくか、最後まで楽しませてもらいます。

**15 大塚 篤郎** 甲府クラブ 1953年

山梨YMCA初代理事長、甲府クラブの初代会長の市川規一先生(歯科医)に歯を治療して頂いている時に、虫歯を削るグラインダー片手に入会を勧められた。先生の奥様のご実家のお隣の娘と先生のお宅で見合い、先生の証人で結婚。それ以来抜けることができません。

**16 大槻 信二** 京都センチュリークラブ 1979年

当時銀行員として担当していた取引先の医師から誘われて設立準備会から出席していたが、在職中は利害関係などがあり踏ん切りがつかず、退職独立を契機に入会。それ以来、人生の大半をワイズメンとして過ごし、多くの人と出会えたことに感謝している。

**17 オードリ・ギルグ** 大阪なかのしまクラブ 1997年

退職の時、長年学校が中心になっていた世界と違う味の世界、たとえばボランティア活動に飛び込みたかった。友人が「女性のみの新しいクラブに入会するが一緒に行かない？」と設立総会に誘ってくれた。お互いを“さん”付けて呼びあう「一味違う」場を発見した！

**18 岡崎 源次** 熊本クラブ 1959年

YMCAが古城町(現 県立第一高校正門前)の旧紫苑会館跡にあり簿記、珠算を佐藤、広石、山口の諸氏で担当の頃、私は生徒だった。Y理事長は福田令寿先生、Y'sには故藤井計吾、渡辺正一氏の大先輩がいて、自然入会。

**19 岡本 就介** 京都トゥービークラブ 1997年

詳しい説明もなしに誘われて行ったメンバーのお宅。スポンサー以外は面識がなく少々緊張気味に参加したのですが、そこに集っていた人達の博識で、陽気で、オシャレで、そして親切だったこと！「自分もこんな風になりたい」と強烈に思いました。

**20 小川 圭一** 東京世田谷クラブ 1995年

明治学院東村山の生徒は、震災ボランティアとして、多額の義援金を集めた。その姿に打たれて、生涯PTAを誓う。主催するチャリティコンサートに協力して下さったのが小原武夫ワイズの世田谷クラブ。その年に入会。夫婦で趣味の音楽ボランティアを、地域で生かしてくれるワイズに感謝。

**21 押谷 友之** 長浜クラブ 1987年

ただ漫然と地域社会に奉仕する方策はないものかと考えていた頃、以前からその存在を知っていたYMCAに関係する社会奉仕クラブが地域にできることを知って、チャーターメンバーとして参加しました。日々、面白可笑しく活動しています。

**22 乙坂 優次** 京都トップスクラブ 1996年

「楽しいところがあるよ」と友人に言われ参加したのがクリスマス例会と新年会。「これは良い」と即入会。「騙された！」と思ったが、次の長老の言葉が私をその気にさせてくれました。「ワイズは人と人との交流の場、その出会いが自分の宝物になるんだよ」と。

**23 小山 憲彦** 東京サンライズクラブ 1989年

父親の東京山手クラブが設立35周年に子クラブを作ることになり、強く勧められチャーターメンバーとして入会。チャーター1周年記念の山中ワークに参加し、東京サンライズにのめりこむ。小原理事のもと会計を拝命、ワイズに目覚め今に至る。ワイズは私の人生です。

**24 柏原 佳子** 芦屋クラブ 1993年

当時、日本区は森田恵三区理事のご推進の「ワイズ6000人」に熱く燃えていました。ワイズとYMCAに若き情熱を傾けワイズライフを楽しんでいた主人に置いていかれないように出来れば同じ立場で共に喜び悲しみを理解したいと思ったからです。

**25 片山 巖** 京都クラブ 1952年

成人青年部のリーダー会にいた頃、1952年5月第7回日本区大会が京都YMCAと「ますや」(嵯峨清海)で開催。当時の荒木泰次京都クラブ会長に、数人のリーダーと共に大会裏方の手伝いを頼まれ参加。YMCAの違った面を知り、同年、会長の勧めで入会した。

**26 神谷 幸男** 東京西クラブ 1985年

山田利三郎さん(東京西クラブメンバー、元日本区理事)の訪問を受けて、初めてワイズメンズクラブの存在を知りました(YMCAのことは知っていました)。会員名簿持参でワイズなるものの詳細な説明を聞き、誘われました。直感的にワイズの「水」は私の生き方に合うなと思いました。その思いは今でも変わっておらず、ワイズライフを楽しんでいます。

**27 亀井 剛** 京都ウイングクラブ 1983年

業界の知人に何度も誘われ続け、断りきれなくなった。入会予定の京都めいぶるが設立前だったので、スポンサークラブの例会に出席した。その例会で、自分には社会性というか社会との連帯感が欠けていたことに気付かされ、全身が洗われるような感動を体感した。

**28 亀浦 正行** 熊本ジェーンズクラブ 2000年

博多オーシャンの青木徹也ワイズ(当時、支店と職種は異なるが同じ組織に属し、工作上、尊敬していた)から、勧められた。組織だけの人間と関るだけでは人としての幅がひろがらん、ワイズに入れ！と。今では、まったく異なる目盛りの入った、物指を手にしてしていると実感できる。

**29 河合久美子** 京都ウエストクラブ 1998年

仕事で独立開業しようとした丁度その時、タイミングよく誘われ、広い視野や人脈が得られればと思い入会した。入会時、年齢も若く戸惑うことが多かったが、諸先輩方に教え導かれ、様々な役職を経て、30歳代で会長を経験できたことは、大いなる成長の機会となった。

**30 河合 重三** 富士クラブ 1988年

JC卒業後、そろそろと思っているときに「夜の月1回例会」が魅力で入会しました。それにしても設立総会近くまで「ワイズとは賢人会なり」と思いこんでいたのは、われながらお恥ずかしい限りです。

**31 北村久美子** 大阪西クラブ 1993年

1986年主人がチャーター入会。メネットとして参加。同じ活動をするならやりがいのあるメンバーになろうと決意。クラブ書記、副会長、会長、部主査を経験。主人亡き後、西日本区発足と共に事務職員として勤務。ICやAC、RCでの交流を満喫し、人生の糧にしています。

**32 北村 文雄** 湯河原クラブ 1975年

大学時代からやっていた乗馬仲間が湯河原でホテルを営んでおり、そこがワイズの例会場になったのが縁で誘われ入会。25歳、日本区最年少メンバーだった。日本区・東日本区大会開催

地の盛り場巡りが楽しみであり、楽しい思い出でもある。目指すは東日本区最高齢メンバー。

### 33 栗林由美子 熊本ジェーンズクラブ 1993年

「とにかく、1回来ませんか……」とのお誘いが、最初の言葉であった。よく分らないまま数年が過ぎた。行事に参加出来なかったり、メンバーに会えない月日が暫くあっても、ワイズの仲間はいつも近い存在であり、今はかけがえのない友人達である。

### 34 栗原 正明 四日市クラブ 1986年

三重のご縁で入会しました。信仰告白に至る種は学生時代通った東京YMCAでした。その縁で三重Yの常議員を受けていたことや、当時四日市JC仲間の岩間君から誘われたこと。主に同志社卒岩間君の影響ですね。現在も「彼の誘いは断わらない」のフォームが生きています。

### 35 栗本 治郎 熱海クラブ 1978年

ローターアクトを28歳で卒業と同時に、誘われるままにワイズが何たるかも知らぬまま入会しました。当時、会員は80数人で多くの友人を得ることが出来、キャンプやスキー教室に携わる中で、責任ある役も経験し、いつの間にかドブプリとはまっていた。

### 36 小林 滋記 名古屋南山クラブ 1981年

YMCAの少年活動のメンバー、リーダーと続けていて、その当時の主事さんに誘われ、YMCAとのかかわりが持てると入会。ワイズ用語に戸惑いながらも例会出席を心がけ、現在まで100%の出席を継続中。

### 37 駒田 勝彦 甲府21クラブ 1990年

甲府に新クラブを作るといって設立準備メンバーに誘われたのが始まりです。それから、甲府21二代目の会長をし、他クラブの方々と交流を通しワイズの働き、奉仕等多くのことを教えていただきました。今は私を用いてくださって良き交わりをさせて頂いていることです。家では「またワイズなの！」とされています。

### 38 小松 重雄 東京江東クラブ 1979年

近くのワイズのメンバーに誘われて入会しました。当時は、江東区に移って間もなく、近所に知人も少なく大変心細い状況でしたが、ワイズの方々の暖かいご指導のお陰で今日に至っております。年齢・職業に関係なく“本音”で語り合えることがはまった要因だと思います。

### 39 権藤 徳彦 東京コスモスクラブ 1995年

定年退職の1年前、職場に、面識のない方(実はワイズメン)から電話があり、住居も職場も近いので会って昼食を共にしたのが発端。大学時代は学Y寮に住み、都市Yリーダーでもあったし定年後も国際的なかわりが必要と思っていたので入会。

### 40 坂井 昇 京都洛中クラブ 1988年

私がワイズを知ったのは、もう20年も前になります。あるメンバーが「君は世間との関りが少ないから」と入会を勧められ、その彼の言葉と私自身、世の中に何かお返しのボランティアをしたいとの気持ちが合致して入会させていただきました。

### 41 阪上 照明 東京南クラブ 1998年

初めて例会に出席したときに年配の方が多かったので緊張していたが、みんな笑顔で迎えてくれてリラックスすることができた。

また、尊敬できる人達に出会えたことが、今の自分の宝になっている。

### 42 櫻井 浩行 東京むかでクラブ 1983年

友人に誘われ障がい者と共にダンスをするユニークダンスパーティーへ参加。何の説明もなく友人と共に47歳の誕生日に入会。狐に化かされた如くワイズマンとなる。誘った友人は即退会、居心地が良いのかそのまま残って25年。座右の銘は「人にしてもらいたいことを 人にしよう」

### 43 佐々木集子 東広島クラブ 2001年

主人が例会でどんなことをしているのか興味を持ち、それ以来例会・会合にメネットとして参加。主人が会長になったときメンバー減少のためメンになる。メンバーの少ないクラブなので、入会するなり役付き。大会等に参加することで、たくさんの方々と知り合いになり、今ではワイズどっぷりの毎日。

### 44 佐藤 節子 厚木クラブ 2004年

平成7年4月から、厚木YMCA健康福祉専門学校にて非常勤講師と運営委員です。運営委員会「そば打ち体験 舌鼓を打つ会」に田口堅吉さんが参加。ワイズを知る。入会した翌月に湘南・沖縄部会に参加。当時、コスモスクラブ林理子さんと同室だったことが「はまる」基です。ちょっとキザですが、入会して私の人生はバラ色です！

### 45 佐藤 典子 熊本ジェーンズクラブ 1993年

YMCAの野外リーダーとしてボランティアの楽しさを学びました。それから20数年後ワイズメンの友達から誘われ入会し、リーダー時代のYMCAスタッフとも出会うことができました。翌年、第1回西副区大会のホストクラブとして熱く燃え、ワイズのすばらしい人間関係に惚れました。

### 46 佐藤 通彦 熊本むさしクラブ 2000年

飲み屋のカウンターで声を掛けられたのがキッカケ。数年はあまり深く考えていなかったが、ワイズ活動で妻ができた。仲人ができた。娘もできた。仲間もできた。私にとって、今一番大切な物すべてがワイズからできた。ワイズはそういう心と心の集団だと思う。

### 47 里吉 時夫 横浜ノースクラブ 1966年

40年ほど前に会社の同僚に誘われ、横浜クラブの特別例会に出席して、海外からのゲストやビジターを交えた今までに経験したことのない魅力的な例会を目の当たりにして、早速入会しました。以来多くの方々ととの交わりが楽しく、今日に至っています。

### 48 四之宮武征 下田クラブ 1985年

私の入会のきっかけは友の付録でしたが、国際組織という視野の広さと素晴らしい人間関係の広がり、そして、YMCAを通じての青少年育成活動にたちまちワイキチとなり今もワイキチです。ただ、全体に初心を忘れマンネリ化してきているかな？

### 49 澁谷洋太郎 金沢クラブ 1988年

京都で国際大会(第58回)が開催された年でインターナショナルなところが気に入りました。新人のためか、金沢で留守番をしました。



**50 清水 弘一** 仙台青葉城クラブ 1981年

バリバリの現役のころ、学生時代の恩人ともいえる熱心なクリスチャンのワイズメンに誘われ、会長宅で行われた移動例会がきっかけとなり入会、メネットと共に多くのワイズメン、YMCAを知る。楽しいこと苦しいことも自己研鑽、人生の糧としてワイズライフをエンジョイしている。

**51 清水 汎** 大阪クラブ 1987年

私の妹の嫁ぎ先が前橋YMCAに赤城山キャンプ場を寄付し、長女がYMCAのリーダーとなりリーダー同志で結婚し、YMCAに関心を持っていたところ、町内会の三井満寿夫メンよりワイズへの入会を勧誘された次第です。メネットとともに、20余年いろいろ経験しましたが、ワイズ運動にのめり込んでいます。

**52 調 博子** 東京八王子クラブ 1994年

夫が亡くなって意気消沈している時、夫の友人から「月に2回の食事会に出ておいで」と誘われた。初めは興味がなかったので退会しようと思っていた時に、阿寒での東副区大会に出席して目からウロコの状態！そこから再出発して現在に至り感謝している。

**53 管井 恵子** 滋賀蒲生野クラブ 1995年

何といってもワイズの魅力は、楽しく温かい人間関係です。還暦を過ぎた私にとってこんなに底ぬけに明るく楽しい仲間と共にYMCAに関わり若者のエキスをいただき、地域への奉仕に汗を流せることは「生きがい」にほかなりません。

**54 杉野 茂人** 熊本みなみクラブ 2002年

元々近くのYMCAセンターの運営委員だったのでYMCAの活動は知っていた。YMCAの活動に共感することは多かったので、新しくクラブが出来る時に、誘われてチャーターメンバーとして入会した。仕事柄異業種の人の付き合いは少ないのでクラブの活動は楽しい。それぞれ、できる範囲での活動参加が良いのではないかな。

**55 鈴木 健之** 熱海グローリークラブ 1972年

長女の同級生が同じ私立の女子中学校を受験し、入学式、父兄会など学校行事と一緒に同席した、その近所の同級生の父親と学校への往復2時間余の車の中での話。また長女もワイズのプログラムに参加するようになり、入会し、多くの友が出来たことに感謝。

**56 鈴木 良洋** 大阪サウスクラブ 1977年

大阪YMCAの青年のための指導性開発講座を受講したことがYMCAとの出会いとなり、その後話し方研究会に入会し、YMCA司会者グループで活動している時に、ワイズへのお誘いを受け、YMCA運動に長くかかわりをもてる場所として入会しました。

**57 須田 哲史** 東京ひがしクラブ 1994年

学生時代、山手学舎で生活し、YMCAのボランティアリーダーをやっていた。YMCAの委員会活動を行っていた際に、5つのクラブの方に強力にお誘いを受け、充実したボランティア活動内容と自宅から最も近いという理由で、当クラブに入会した。先輩ワイズメンの人徳と生き方に感銘を覚え、はまっている。

**58 大門 和彦** 京都キャピタルクラブ 1995年

“野球人”として30歳まで現役を続け引退！一般社会のことを何も知らない私に、友人の先輩から「クラブに入って社会のことを勉強したら？」と言われ「入会します」と即答。今、思

えば“野球バカ”と言われないのは、クラブに入会し、色々なことを教えて頂いたメンバーのお陰だと感謝している。

**59 高瀬 稔彦** 岩国クラブ 2000年

チャーター準備にかかわる友人から「高瀬のほうがかうと思うよ」と強引に押し付けられた。全国のワイズメンとかかわるうち、気の置けない仲間が全国各地にできた。ロータリーにも入会しているが、家族ぐるみでのアットホームさは真似ができない。

**60 高橋 辰夫** 奈良クラブ 1992年

学生時代にYMCAの専事に勤められた留学で外国のワイズメンのご家庭にお世話になりました。ご縁があってお誘いを受けワイズに入会し、諸先輩の熱い心に触れ、活動を共にして自己研鑽した感謝と共に次世代の為にワイズ人生を歩んで行きたいと思っています。

**61 高橋 辰吉** 彦根クラブ 1996年

転勤で移った彦根の教会に何人かのワイズメンがおり、何度も入会を勧められたが固辞していました。阪神大震災に際し、それらワイズメンが長期にわたり復旧支援に立ち上がる姿を見、インドのクラブとの交流を知ったのが入会のきっかけで、美酒による供給の応援も実に有効でした。

**62 田中 一馬** 京都パレスクラブ 1996年

取引先から誘われてお付き合いのつもりで入会した。当時は今の仕事に就いて間がなくワイズ活動と仕事の両立に苦勞し入会を後悔した。しかし徐々にその環境にも慣れ友人も増えてくるに従って時間のやり繰りが気にならなくなった。今年はずいにクラブ会長になる。

**63 田中 博之** 東京クラブ 2000年

小学校、中学校時代は、夏は神戸YMCAの余島の長期少年キャンプで過ごし、高校、大学時代は大阪YMCAで活動していました。20数年のブランクを経てある人に見つかった東京Yにかかわるようになり、そしてワイズ入会。人の縁って不思議ですね。

**64 田邊 寛司** 伊東クラブ 1982年

友人から半ば強制的に入会させられたが、クラブの事業に参加するうち、利害関係の伴わない多くの友人が地域を越えて増えた。ワイズ活動をする中で奉仕のみを考えると肩が張るが、自己研鑽の場であると自分の心に言い聞かせている。

**65 辻 剛** 横浜つづきクラブ 2006年

今思えばヘビ(?)に睨まれたカエルのようなものだった。区事務副所長のA氏、労作「10年史」を手掛けたB氏、次々期理事のC氏らがヘビさん達だった。同じ教会のA氏からは地元でワイズメンズクラブというものを設立したいので参加しないかとお誘いが掛かった。少しは奉仕活動なども考えていたし、Bさん、Cさんからも「面白いからやってみれば」と。何も解らずOKした。

**66 中原 一晃** 京都ウエストクラブ 1998年

社長就任後、すぐに税理士の元メンバーからお誘いをいただき訳もわからず、自分の仕事だけじゃなく、自分を一人前にするために、他にも目を向ける必要があると思い入会。たくさんいい人にめぐり合えたことが今の財産であり感謝しています。

**67 中松 禎夫** 鹿児島クラブ 1990年

鹿児島にYMCAをつくらう。そのためには、先ずワイズメンズクラブからと誘われてチャーターの時から参加しました。あれ

から18年、チャーターメンバーは3人だけになり、まだYMCAはできていませんが、でも鹿児島YMCA設立の夢は捨てていません。

**68 中村 邦雄** 熊本みなみクラブ 2006年

以前からYMCAの会員だがワイズへの興味はなかった。ボランティアグッズの売り子として西日本区の大会(名古屋)に行き、メネットの会に座らされて女性パワーを体験、他方会員諸氏の気軽な打ち解けた対応に暖かさを感じ、気づけば2ヶ月後には入会していた。

**69 中本 義宣** 北九州クラブ 1989年

少年ラグビーをはじめ、さまざまなプログラムに参加していた時のYの主事に「そろそろ恩返しをせんか」と声をかけられて、何かできればと思い入会しました。多くの、熱意のあるワイズメンに出会えたことが私の宝です。

**70 仁科 保雄** 京都キャピタルクラブ 1985年

当初、アマチュア無線を始めた時、交信会話の中で国際交流を楽しんでしていると聞き面白そうだなというのが、クラブというものに興味を持つことの始めでした。厳しい中にやさしいクラブの体質に溶け込み、今では自分自身の身体の一部になっています。

**71 西山 瑞彦** 大阪長野クラブ 1977年

1959年大阪YMCAに育成会員として入会。成人して少年活動委員になり、その後運営委員も勤めた。結婚して堺に住み、堺YMCA運営委員に配属された。その後千早赤阪村に転宅した頃、木下百太郎さんが長野にワイズを～と言うことで加った。何の迷いもなく入会した。

**72 布上征一郎** 東京グリーンクラブ 2001年

ワイズで活躍中の学生時代の友人に誘われた。当時、東京YMCAは自宅があった同じ町内であり小学生時代から遊んでいた場所。定年後でもあり違和感なく、即入会。その後は日々クラブの皆さんから感謝され家内共々生き甲斐になっています。

**73 橋爪 良和** 名古屋東海クラブ 1975年

食事をおごると職場の先輩に、例会会場に連れていかれました。そこは不思議な人間関係でした。職業も年齢も違う男達がなんだか楽しそう。いい人ばかりでした。他人のことをまず考えること。そうした価値観をもつ仲間を生かされてワイズを抜け出せなくなりました。

**74 服部 庄三** 名古屋グランパスクラブ 1993年

友人の誘いで入会。3年半後には日本区最後の吉田一誠理事のキャビネットに指名されました。自分の意思で入った会には、とことん入り込む性格から、大いに役職を楽しむことができました。活動を通してこの時以来の友人がクラブ以外に全国にたくさん出来ました。先輩後輩の垣根を越えて、親しくしていただいています。今年も区大会での再会が楽しみです。

**75 濱田 勉** 奈良クラブ 1988年

大学時代に奈良YMCAのリーダーで、クリスマスに招待されたりしてワイズ存在は知っていましたが、まさか自分がメンバーになるなど想像もしませんでした。卒業後もYとのかかわりは続いていました。奈良への転居をきっかけで後輩から入会を誘われ観念しました。

**76 林 良廣** 京都エイブルクラブ 1983年

当時私は36歳、電気通信関係の技術畑の仕事に長年携わっておりました、限られた人との付き合い、何かいい同好会のような集まりは無いかと思い、友人や上司に相談していました。ちょうどキャピタルクラブが出来るので入ってみたらどうですか、といわれ即お願ひしました。

**77 原 俊彦** 東京サンライズクラブ 1983年

学Yに在籍していた関係で先輩から声をかけられ入会しましたが、最初の4~5年はほとんど幽霊会員でした。奈良昭彦氏より新クラブ立ち上げの話があり、東京サンライズのチャーターメンバーとして再出発、その一年目に慶州でのアジア地域大会に出席し弾けました。

**78 人見 茂幸** 横浜つづきクラブ 1985年

神田のYMCAに通い、影絵芝居を学んでいた頃、一色俊一主事にワイズを紹介され入会した。初めて例会に出て度肝を抜かれた。テーブルに座る方々は大企業の社長さん方、また耳にする有名人ばかりだ。月1回の例会とはいえ、これら先輩方から受ける薫陶の賜物で今日自分のあるところを覚え感謝あるのみです。

**79 平野 実郎** 名古屋クラブ 1993年

YMCAと仕事上の関係でY'sのことを全く知らず26才の時に入会しました。世間知らずな若輩者でしたが、クラブ内外の仲間や先輩に支えられ多くの知識を身につけることが出来ました。若い方が入会されて、素敵なワイズメンから多くのことを学んで欲しい。

**80 平山 俊生** 熊本ひがしクラブ 2004年

ながみね・けんぐんYMCAの運営委員の時、けんぐんセンター閉鎖を経験する。その時、自分の無力感を知り、何かできないかと探していたところ、ジェーンズクラブからひがしクラブ設立の話があがった。その時、常議員でもあり運営委員長をしていた関係でチャーター会長を引き受け、現在に至る。今では、どっぷりワイズ温泉につかっています。

**81 廣澤 恭子** 京都グローバルクラブ 1993年

最初は、友人に月2回フランス料理を食べ、会費20,000円のクラブに入らないか、と誘われ京都パレスクラブの大野嘉宏氏のスピーチを聞き、入会を決意しました。いろいろお役をいただくうちに、やりがいや仲間が出来、楽しくなってきました。

**82 福山 哲郎** 京都めいぶるクラブ 1995年

ずっとお世話になっていたワイズメンから誘われ入会。最初はドライバー委員会で、例会運営の楽しさを味わい、YMCAの活動に共感し、大好きになる。クリスマス例会は、毎年の楽しみな行事に！ワイズメン同士のつながりの強さと温かさに、日々とっても感謝。

**83 藤井 久子** 神戸学園都市クラブ 2004年

YMCAのワイワイ祭りで、『お餅つき』のボランティアをしたのがきっかけで入会した。入会した年にLD委員となり、研修会や西日本区大会に参加した。自分の知っている世界の狭さを感じたので、これからも例会に参加し謙虚に向上し続けたいと思っている。

**84 藤川 洋** 広島クラブ 1986年

先輩の定年退職を機に多くを語られないまま、私は広島YMCAとワイズをも引き継ぐこととなりました。当時からYMCA職員

のスキルの高さ、豊かな人間性に惹かれていました。ワイズでは、各方面で活躍の専門家が親しく接しられている姿に憧れと感動をしたものです。

#### 85 藤好 基子 大阪なかのしまクラブ 1996年

ワイズメンの家庭に育ち、子ども達の手も離れた時期に両親の勤めで日本初の女性クラブに入会し社会参加の一步をワイズ活動で踏み出した。クラブ内外の交流の中で驚き戸惑いもあるが、喜びも大きく人生後半が豊かになった。

#### 86 藤原 正巳 大阪センテニアルクラブ 1988年

谷川寛さんに誘われて入会したワイズは、現役時代に海外業務の多かった小生にとり海外との絆を保つ窓であり、第二の人生での夢を実現する場となりました。転勤による金沢、香港、大阪でのワイズライフはそれぞれに刺激的で、人生を豊かに彩ってくれたと思います。

#### 87 堀江 宏 近江八幡クラブ 1967年

大阪に行かれたら心齋橋大丸中二階喫茶ヴォーリスに立ち寄って、そのアプローチを眺め、ゆったりお茶を飲んで下さい。このクリスチャン設計者・社会教育者・病院製薬会社設立者が近江八幡に来られなかったら、人口6万人と周辺地域にYMCAと2つのワイズは出来なかったと思います。私はこの環境にはまっただと思います。この特殊な事情を越えて、西日本区の皆様とごく普通のワイズとしてクラブライフを楽しみたいです。

#### 88 松田 俊彦 東京クラブ 1966年

学Yと相馬Yでの活動後、東京Y青年成人活動に参加(1961~1965)。その後、福岡へ転勤、福岡Yは休会中でしたので復活させるため、止む無く福岡ワイズメンズクラブに入会。その後東京クラブへ。ワイズとの出会いで奉仕の喜びを見出すことが出来た。

#### 89 松田 喜弘 草津クラブ 1988年

高校時代の友人に、草津にYMCAをサポートする団体を作らないかと声をかけてもらって入会致しました。お互いが学び合い、助け合いのできるクラブの中で望まれればどんな仕事や役割でも無理をせず出来る限りのことをまじめにこなしていきたいと思っています。

#### 90 丸尾 欽造 大阪河内クラブ 1975年

YMCA英語学校同窓会のある先輩の言葉が脳裏にあった。「今後もYMCAとのかかわりをもつにはワイズメンズクラブに入れればいい」と。数年後、チャーターされるクラブへ推薦され躊躇なく入会した。すごい人達との出会いに感動、われを潤し導く世界となった。

#### 91 村杉 克己 東京北クラブ 1974年

自営業であったので交友関係の少なかった29歳後半に、区理事も務めた叔父(抱井五郎)より、友達が大量出来るぞ、社会勉強出来るぞ、ちょっとお金がかかるけれど、との誘いで35年。その通り、友達が出来ました、YMCAを知りました、知識が増えました、全国への旅が出来ました。

#### 92 森 伸二郎 京都プリンスクラブ 1990年

青春期をプロテスタント系の学校で学び、クリスチャニティーを善しとする私にとって、YMCAと一緒に青少年の育成に関われることは、自分の人生にとって良きことだと思えたので、ワイズへのお誘いに二つ返事で応じました。そして今、人生が楽

しく心穏やかでいられるのは、ワイズのお陰だと感謝しています。

#### 93 森川 禎子 熊本クラブ 1997年

1回目の参加が12月の定例会でした。聞こうと思って聞く歌声は耳に入りますが、感動もなく、2時間が針のムシロに坐っていたのを覚えています。何を求めて会を運営されるのか分りもせず、5年間が経過しました。それでもYMCAには組織力が必要というのが、やっと理解出来ました。

#### 94 守田 涼子 八代クラブ 2004年

主人が2000年に九州部長を仰せつかり、私は何もわからずメネット事業主査に……。なぜ私かと、反発しながらも、主人とあちこちクラブ訪問や大会に参加しました。その中で沢山の方と出会い活動の楽しさを知りました。今はメンとして活動し、2006年には会長もさせていただきました。

#### 95 谷治 英俊 東京セントラルクラブ 1974年

東京YMCA英語学校のキャンプ仲間OBが、沢山入会しているのを知って、設立から3年目の東京グリーンクラブに入会しました。楽しみながら奉仕活動ができることが面白く、国際大会・アジア地域大会に積極的に参加して友人も沢山増え、仕事以外の仲間をもつ良さと、目的のある人生観を自作していくことが生きがいになっている。

#### 96 山田 孝彦 大阪センテニアルクラブ 1982年

当時鈴木謙介氏は、大阪の地で自分が元国際会長であったことなどおくびにも出さず、一書記として新クラブ設立を図られた。私は謙介さんとは同じ会社の「大学の先輩」と言うくらいの気持ちでお誘いに乗って参加した。それがワイズどっぷりの人生になろうとは……。

#### 97 山根 貞夫 神戸クラブ 1964年

大阪サウスYMCAで育成部委員、予備校チャレンであった頃、YMCAスタッフやワイズ役員から入会を勧められ入会した。多分「EMC月間」だったかも。年齢、宗教、職業の違いを超えての楽しいクラブ例会、種々の学び、YMCA支援、牧師である私にとってワイズは視野を広げるすばらしい場であると今も思っている。

#### 98 山本 雅之 十勝クラブ 1993年

父がとてもお世話になった方の強い勧めにより入会。教会に戻るきっかけにもなりました。その後の人生の節目には必ずワイズあり。私は救われていますよ。多分。

#### 99 横倉 純 仙台クラブ 1992年

「職種の違い人達が集まって酒を飲むんです」と、ワイズ先輩で娘のPTA仲間の方から声がけされ、最初に参加したのは役員会、そこそこに場所を移し杯を、何度か繰り返し気付いたときにはどっぷりでした。何故声がけを?といまでも謎に思ったり……。

#### 100 渡邊 公生 京都プリンスクラブ 1980年

元の勤務先の上司の誘いで京都パレスクラブに84番目の会員として入会し、当時のパレスから学んだことは自己研鑽という言葉、その言葉を心に刻み、日々新たな挑戦に励んでまいりました。もしも私がワイズに入会していなければ、ごく普通の大工職人だったでしょう。

# 「ワイズ必携」2001年版 総目次

所属・役名は当時のもの

地域奉仕とボランティア ..... 5 阿部 士郎(横須賀基督教社会館館長) 人間は本来、互いに助け合うように創造されている。それではどのような心情に基づいて、助け合うのか、多くの事例を挙げて示す。(講演抄録)	ワイズメンズクラブの在り方 ..... 42 岡本 尚男(京都キャピタルクラブ) クラブに新しくメンバーを加えるために、クラブが常に磨いていなくてはならないもの、新メンバー自身に求められるものを18項目にまとめて提案する。
生きる意味 -21世紀における新しい福祉社会をつくりだすために- ..... 13 阿部 士郎(横須賀基督教社会館館長) 新しい時代の社会は、心にやさしさを持つ人が担わなくてはならない。YMCAはその人間が持つ、温かさ、やさしさを育てていく団体である。(講演抄録)	“LT(リーダーシップトレーニング)”についての考察 ..... 44 抱井 五郎(東京北クラブ) ワイズメンズクラブで行うリーダーシップ・トレーニングについての提言。
分かち合う姿こそボランティア ..... 22 井口 延(東京YMCA総主事・東京多摩クラブ) あえて、自分自身を冒険と思われる危うい立場においてこそ、初めて発見できる大切なものがあるのではないか。(クラブブリテン)	YMCAとワイズメンズクラブを考える ..... 45 抱井 五郎(東京北クラブ) YMCA、ワイズメンズクラブの設立と働き、ワイズメンズクラブの国際と地域における活動領域についての解説。(クラブブリテン)
クラブ・ライフは誰の為にあるのか ..... 23 一瀬 齋男(横浜とつかクラブ) 例会や役員会の持ち方、ワイズメンとしてのクラブとの関わり方など、自己研鑽の視点からの提案。(クラブブリテン)	ワイズメンズクラブにおける宗教の扱いについて ..... 51 加藤 寅尾(大阪茨木クラブ) ワイズ、YMCAにおいて、会員すべてが互いに学びあい、「隣人を愛する」ということの実践において一致したい。(クラブブリテン)
やあ、やあ ワイズの良き仲間 ..... 25 一瀬 齋男(横浜とつかクラブ) 会長の役割とコミュニケーションの大切さとストレス対策。「クラブ・ライフは誰の為にあるのか」に続くもの。(クラブブリテン)	ワイズメンズクラブは人を変える ..... 52 菅 正康(熊本ジェーンズクラブ) ワイズの仲間は、普通ならマイナス点となるものもプラス点に変えていってくれる。それが不思議な魅力であり、最大の存在価値だと思う。
ワイズの変革の時、EMCは? ..... 27 一瀬 齋男(横浜とつかクラブ) 常に変革することの大切さを説く。それがEMCに貢献する。(クラブブリテン)	組み合わせが秘訣 ..... 53 上林順一郎(日本キリスト教団早稲田教会牧師・東京山手クラブ) 木造建築の基本は木のくせを生かした『木組み』である。クラブにおいても、さまざまなくせをもつ人を生かした『人組み』、『人の心組み』が大切である。(クラブブリテン)
生涯学習とEMC-YMCAとの関係 ..... 29 一瀬 齋男(横浜とつかクラブ) 5クラブに在籍経験のある筆者が、新設された自クラブのメンバーのワイズ理解のためにブリテンに連載した解説。(クラブブリテン)	YMCAのミッションとワイズメン ..... 53 上林順一郎(日本キリスト教団早稲田教会牧師・東京山手クラブ) ワイズメンズクラブにおけるリーダーシップ、ビジョンとミッション。楽しくて、喜びを感じ、自分の命をそのために使っても良いということを、皆で見出そう。(講演抄録)
ビジョンを共有し、共に進もう ..... 30 今井 鎮雄(神戸YMCA名誉顧問) 進むべき道を見失っている青少年が「大事なことはこれなんだ」と確認し合える場をつくる、そのことによって世界を変えていく。その日の当たる産業を専門職のスタッフとボランティアが共に担うのがYMCAなのである。(講演抄録)	奉仕クラブとしてのワイズのあり方 ..... 61 小堀 憲助(中央大学法学部教授) 「奉仕クラブ」論の第一人者がワイズメンズクラブの思想性、倫理性を評価し、ワイズメンが自信をもった活動を発展させことを勧める。(講演抄録)
次の時代を担うワイズの働き ..... 35 今井 鎮雄(神戸YMCA名誉顧問) お互いに友情と信頼を持ち合う、私とあなたの関係をしっかりもち、お互いに夢、幻をもつのがワイズメンズクラブである。それは青少年のために自分達の時間、労力、知恵を捧げるボランティアの集いである。(講演抄録)	ワイズメンの賢い話 ..... 64 澤 正弘(名古屋クラブ) 組織は、結局は『人』に尽きる。『賢い人』の定義と心構えを『五訓』『五練』にまとめた。(クラブブリテン)
	クラブ強化への歩み ワイキチを育てよう ..... 64 穴戸 良美(奈良クラブ) 先輩の言葉を引きながら、単なるワイズメンではなく、体を張った『ワイキチ』への勧め。(クラブブリテン)

LEADERSHIP IN Y'SDOM .....65 鈴木 功男(東京クラブ) 理想のワイズメン、理想のクラブ、理想のリーダーはいかにあるべきか、良いクラブの運営とその評価方法を説く。(講演抄録)	Y'sとYMCAとキリスト教 .....97 西村 清(名古屋クラブ) 自分をありのまま受け入れてくれる、生きる喜びを与えてくれるというのがYMCAの出発点。神を崇めることは隣人を愛することにつながる。
THE INDUCTION CHARTERは語り続けています .....69 鈴木 功男(東京クラブ) 世界中のワイズメンに共通するものは、同じ『入会式式文』によって入会の決意を表明したことである。『入会式式文』『国際加盟認証状伝達式式文』の精神と文意を語る。	ウエルネス10則 .....99 堀内 浩二(東京西クラブ) 詠み人知らずとされる『健康十則』をデンマーク体操指導歴の長い筆者がウエルネスの思想を加えて改変して、解説を加えた。
バランス感覚 .....77 鈴木 功男(東京クラブ) 「しゃべる」「だべる」「うごかす」のバランスがとれたクラブは運営が上手いという理論。(クラブブリテン)	クラブとコーヒー .....101 堀江 宏(草津クラブ) 『クラブ』は、トルコのコーヒーハウスから始まった。20世紀初頭、米国に奉仕クラブが誕生したが、それ以前にあった『クラブ』のコンセプトと誕生の経緯。
新しい年、1989年の初めに強く感じる事ども .....77 鈴木 謙介(名誉理事・大阪センテナリアルクラブ) 原点に戻り、新しい価値観に基づいて、新しいクラブのありようを具体的に考える。(クラブブリテン)	クリスチャン・エンファシス .....103 堀江 宏(草津クラブ) クリスチャン・エンファシスは、信仰の押し付けではなく、ワイズダムとキリスト教文化としての側面をわれわれのライフスタイルに合わせながら強調していくもの。(日本区報)
新しい年、1989年の初めに強く感じる事ども(つづき) ...78 鈴木 謙介(名誉理事・大阪センテナリアルクラブ) ワイズメンズクラブは、あらゆる人々が、その差異を超えて集い、自主的に、長い行程の中でよき友を見出す旅のようなもの。(講演抄録)	ワイズ温泉どっぷり論 .....104 森田 恵一(京都ウエストクラブ) ワイズメンズクラブを温泉に喩えて、クラブの特性、事業、運営、役割などをやさしく解説し連載したもの。(クラブブリテン)
ワイズあれこれ ーワイズっぷりがいいワイズメンを願ってー .....79 鈴木 謙介(名誉理事・大阪センテナリアルクラブ) 戦前のワイズメンを識る者として、時代の背景の中での日本のワイズメン運動の創始者・奈良傳の働きを語る。(講演抄録)	ワイズを学ぼうーその歴史と活動分野 .....117 山川 一郎(姫路グローバルクラブ) ワイズメンズクラブの前身、トリムカクラブの設立経過、他の奉仕団体の比較、戦時中の日本区と国際協会の関係。(クラブブリテン)
21世紀に向けてのYMCAミッション ーキリスト教使命とその働きー .....87 隅谷三喜男(東京大学名誉教授) 成田三里塚問題で対立するものの対話を成り立たせた学者が、現代社会にあって若者が人として育つ『訓練の場』とそれを支える『理念』を構築していくところに、YMCAの使命があると語る。(THE YMCA)	世界YMCA同盟について .....124 世界YMCA同盟とは何か、日本のYMCAとの関係はどうなっているのか、Q & A形式で答える。
八十五歳のウエルネス .....89 鳥居 一良(名古屋クラブ) 「ことば遊びの達人」といわれた筆者流のウエルネスを五七五文字にまとめた。(年賀状)	YMCAをつくるために・始めるために .....127 イングヴァー・ワリン(国際書記長) YMCAのないところにYMCAをどのように設立し、運営するのか、Q & A形式で答える。
YMCAとワイズをもっと知るために ーYMCAとワイズ設立の精神をいま一度再確認するー .....90 長井 潤(名古屋クラブ) 産業革命後の英国の社会と若者、その時代にYMCAを設立したジョージ・ウィリアムズの『心』。YMCAとワイズメンズクラブの特性。	クラブ設立の方法 .....131 イングヴァー・ワリン(国際書記長) 新たなクラブを設立する場合の留意点。
心当たりはありませんか? ワイズ自滅の十カ条 .....93 長島 精吉(埼玉クラブ) そのとおりやったらクラブが必ず発展する方法はないが、そのとおりやれば、かならず自滅する方法がある。(部長通信)	MC FISHBONE .....133 会員増強のためのさまざまな要素の関連解説図
今、ワイズダムとはーそのアイデンティティを問うー .....93 奈良 信(東京山手クラブ) ワイズメンは変わっている。その変わっているところの全部がワイズメンズクラブのアイデンティティであると確信する。(講演抄録)	入会式(加盟認証状伝達式)式文 .....134
今、ワイズダムとはーそのアイデンティティを問うー .....95 西崎 照一(京都めいぶるクラブ) ワイズの基本理念とクラブづくり、メンバーとしての考え方や果たす役割。	役員就任式式文 .....136
	若き日のジョージ・ウィリアムズ .....137 奈良 傳(日本区名誉理事) 英国・ビクトリア女王から「人道のために貢献した」と栄誉が与えられたYMCA創始者・ジョージ・ウィリアムズが、1844年にYMCAを設立するまでの伝記。
	付録 世界協議会はワイズメンに何を意味するか .....151 奈良 傳(日本区名誉理事) 米国中心だったワイズダムを世界的に拡大する目的で1955年バリーで開催された世界ワイズメン協議会で行った奈良傳の特別講演の英文草稿を邦訳したもの。

## 編集後記

この『ワイズ読本』は東西両区・YMCAと合同の編集委員会によって出来上がったものです。発端は西日本区の佐野文彦理事から『ワイズ必携』改訂版の編集委員長に私が任命され、西日本区でチームを作り、LD委員から『ワイズ必携』に対する意見を聞くことを始めましたが、委員会規則の作成が先決であるということで、その作業が組織検討委員会に付託されました。

その後、規則の原案作成が私に依頼され、東日本区とYMCAと共にこの事業に取り組むことで相互理解が進み、さまざまな場面の研修に役立つものを目的とした「ワイズ必携編集特別小委員会」規則案を作成しましたが、その承認に時間がかかり、実質的な作業は一年後からでした。

『ワイズ必携』は、日本区時代にワイズアカデミー委員会が主管して「次期役員・次期会長研修会」を開催していた中から、さまざまな変遷を経て西日本区で発行された経緯がありますので、合同編集委員会では『ワイズ必携』の検証に多くの時間を割きました。

その結果、編集方針を、5年間は活用してもらうことを目途として、従来の『ワイズ必携』は資料として残し、改訂版にはその索引をつけることにしました。その上で、リニューアルしたのも一部掲載しましたが、大半はテーマを決めて新しく書き直すことにして委員会で選んだ方々に執筆を依頼しました。

内容は、現在の日本のワイズメンズクラブが直面している問題解決のヒントになるものを中心に編集し、それぞれの原稿の冒頭に簡単な内容の説明を加え、読者の便宜を計るようにしました。また、広域に亘ってランダムに選んだ100人の方から「入会の動機」を聞き取り、ワイズメンズクラブの存在価値を浮彫りにしました。

最後まで議論の対象になったのは、本のタイトルでした。最終的に「必携」は「必ず持たなければならないもの」という意味があり、要らない人に持つことを強制するものでもあるまい。むしろ、どうしても読みたくなるものであるべきだろうということになり、「種々の問題について、やさしく解説したよみものにつける名称」という意味の『ワイズ読本』に落ち着きました。

クラブ運営やワイズメンズクラブに疑問が湧いたときや、「ワイズメン」、「クラブ」、「YMCA」という箇所を、「私」、「私の会社」、「私の地域」、「私の家庭」、「私が関っている組織」などと読み替えていただくことで、新たな気付きと発見があれば幸いです。さまざまな場所での研修会などで活用されることを願っています。

ご協力いただいた皆様に心からの感謝を捧げます。ありがとうございました。

2008年10月

ワイズ必携編集特別小委員会委員長 岡本尚男

当初『ワイズ理解の手引き』が発行され、その改訂版が『ワイズ必携』と名称を変えて7年、今回の『ワイズ読本』の発行が、2年間に亘る東西両区の共同作業で完成しました。改めて読み返しますと、ワイズメンズクラブやYMCAの歴史の重み、先達の偉大さ、そしてワイズの素晴らしい先輩やたくさんの仲間がいることを知りました。組織には、常に新しい栄養が必要です。この『ワイズ読本』も定期的に栄養を与えられ、全てのメンバーに読まれ、そしてワイズの新たな進化へと繋がることを願っています。

仙台青葉城クラブ 清水弘一

今までの『ワイズ必携』は、ワイズを幅広く理解するために、多くのワイズメンのリーダーシップ開発のために役立ってきました。そこに書かれている先輩達の熱い思いは確実に引き継がれてきています。この度の『ワイズ読本』の多くの文章は、リアルタイムに、今この時に感じていることを書いていただいています。それだけに読まれる皆様に訴えるものが多くあると思います。皆様の反応が楽しみです。

東京ひがしクラブ 鈴木健次

編集、校正作業に携わり、何度も読み返しましたが、そのたびに新たな感動を覚えました。日本のワイズがもっと元気になるようにとの思いで制作いたしました。その目的に適ったものができたと思います。どうかこの読本を読まれたみなさんは、まだ読んでいない方々にお奨め下さい。日本のワイズメンが全員読まれたら、きっと日本のワイズは変わると信じます。

東京クラブ 田中博之

組織には固有の文化や伝統と、それを生み出した本質や経緯があります。これを知ること、今日の活力、明日の理念が生まれると思います。現在のワイズが発行する印刷物は、役員の挨拶と報告に終始しており、そこまで踏み込んでいません。そういう意味では、個人が率直に書き、語っている論文集『ワイズ読本』の価値は高く、今後、もっと簡素な仕立てで、定期的に発行されればと願います。

東京西クラブ 吉田明弘

1995年の第1回次期役員研修会当時に抱いた、ワイズメンの資質向上にはワイズ理解に役立つ参考本が絶対必要との思いを、1996年に実現させたのが『ワイズ理解の手引き書』でした。その後2001年、全会員に配本のため『ワイズ必携』へと衣替え。今般の『ワイズ読本』が初版から見て見事に成長したことは誠に喜ばしいことであります。ワイズメンは理想主義者でなければなりません。ワイズの理想をイメージ化するために大いに活用されることを心から願う次第です。

京都ウエストクラブ 森田恵三

クラブブリテンを拝見するとワイズ思想の厚みを感じます。この『ワイズ読本』も同様にメンバーの思いにあふれています。何を残し守り伝え、何を变えていくのか。普遍の定義、思想の絶対価値を求める時、時代を越えて時によって洗練されたワイズの思考に出会います。読者の皆様に時代を越えたワイズスピリットを感じていただければ幸いです。

私は西日本区との調整を主に行いました。内容について特段の協力ができなかったことをお詫びし、作成に携わっていただきました皆様へ感謝申し上げます。

熊本クラブ 吉本貞一郎

今回、ワイズ必携改訂作業にかかわらせていただき、大きな恵みをいただきました。ワイズメンの先達から引き継がれている活動への熱き思いを感じ、また、YMCAとの関係をいかに大事にされているのかを感じることができました。ワイズメンの一人として、またYMCAスタッフの一人として隣人のために、地域のためにこれからも活動を続けていこうというパワーをもらいました。この『ワイズ読本』がワイズのみならずYMCAのスタッフにも活用されることを願っています。

日本YMCA同盟 山添 訓  
山根 一毅

ワイズ必携編集特別小委員会(合同委員会)

委員長 岡本 尚男(京都キャピタル)

副委員長 田中 博之(東京)

委員 清水 弘一(仙台青葉城)

森田 恵三(京都ウエスト)

山根 一毅(東京北・日本YMCA同盟)

吉本貞一郎(熊本)

鈴木 健次(東京ひがし)

山添 訓(横浜・日本YMCA同盟)

吉田 明弘(東京西)

---

---

## 表紙の言葉

---

---

水を遣り続けないと木は育ちません。

大きく繁った大木の影には多くの人が集り小鳥や動物が宿ります。

ワイズメンも栄養を与え続けられないと本物のワイズメンにはなれません。

YMCAの「Y」という大樹は、ひっくり返せば「人」となります。

人の集うところに道がひらけます。ワイズメンは育ちます。



2008年11月1日 発行

発行 ワイズメンズクラブ国際協会  
東日本区 理事 清水 弘一  
〒160-0003 東京都新宿区本塩町7  
TEL・FAX 03-5367-6652

ワイズメンズクラブ国際協会  
西日本区 理事 佐藤 典子  
〒532-0012 大阪市淀川区木川東4-5-2  
(榊上野ビル2F)  
TEL 06-4805-0570 FAX 06-4805-0571

印刷 株式会社 洛陽  
〒612-0018 京都市伏見区深草フケノ内町3-2  
TEL 075-641-4339 FAX 075-641-4607

4,000部